

---

**機械録** ~ The Legend of Facters ~

黒神王輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機械録 The Legend of Factors

### 【Nコード】

N6678N

### 【作者名】

黒神王輝

### 【あらすじ】

ヒロインってのが、アニメや漫画の中で一番ウザくないか？主人公の足を引っ張り、結局ヒステリックだの不運だのに人を巻き込み、最後にはのうのうと結ばれる。

愛だの、勇気だの、友情だの、信じるだの。

どこその宗教じゃあるまいし、そんなんでロボットが本来のスペック発揮するわけねえだろうが。

圧倒的な火力、圧倒的な機動力、圧倒的な防御力。

ロボットで戦争に勝つには、それしかないだろ。つか、それ以外

を夢想する奴は大概死ぬか、自分の無能さに後に気付くかだけだ。

そんなわけで、リアルなロボットを自分で設計してみたいと思  
ったのが三年前。

今日がその完成日で、急いで帰ってみれば設計図は無くなっている  
わクラッキングに遭ってるわけで、散々だったの。

それに、何だか訳の分からん光まで……何なんだっつーの。

北欧神話？ 日本神話？ 拳句にクトゥルフ？

名前だけって紛らわしいんだよ！

ったく。俺の人生 - どこで狂ったよ？

「嗚呼……」

この丘から、

森から、

川から、

海から、

空から、

青い星から、

宇宙から。

生命の断末魔が聞こえる。

物理的には聞こえない声が、少女の脳裏に木霊している。

醜悪な怨嗟の声、無念だと悔しがる声、理不尽さに嘆く声、失うこととの悲しみを知った者の声、焼かれていく大地の声。

混ざりながら、それはノイズにならず……悲劇を謳う。

「助けて……」

華奢な少女の小さな口から、声にならない声が零れる。

億にも及ぶ願いが、星空に見守られる丘の上で悲痛に響く。

少女の細い手が虚空を撫で、慈悲を手繰らんとおぼつかない足取りで探っていく。

「お願い……」

星が一筋、彼女の為に流れ落ちる。

「停めて……戦争を……」

燃え尽きていった星。

少女は、一億五千八百六十二万回にも及ぶ祈りを捧げ  
倒れた。

「あり……がとう……」

星の導きは、真摯な彼女の願いを 聞き届けた。

願いは、その世界を超えて、一人の青年へと 鍵を乗せて。

けれども、彼女は知らない。

鍵を渡された者が、どんなに酷い茨の道を歩むのかを。

それは、今 充足している生活を送っていた青年にとって、どれだけの理不尽であるのかを。

## 第一部 機械録 〈The Legend of Factors

〉 開幕

### 序章 異世界からの遭遇者

太陽圏唯一の大气がある星、地球。

独自の文化と高度な機械技術で世界有数の大国に申し上がった国

日本では、十月を迎えていた。

そのとある都心に、ご機嫌な鼻歌が雑踏に紛れて聞こえる。

都会のビルの森。その間を行き交う風と人の波。

スーツ姿の男女が忙しなく歩いているその中を、上機嫌なスキップにより高速で駆け抜けている一人の青年がいた。

周囲は彼に奇異な視線を向けているが、彼は構わなかった。注目されているのは慣れているし、他人がどうしようと、自分に干渉しなければどうでも良い。

それよりも、高揚する気分思わず言葉が零れ出た。

「ああ、待ち焦がれてた完成の日よ！ ひゃっほう！ 帰ったから早速カラーリングしてやるぜえ……！」

正直、気色が悪いこの少年。

名前は高宮時雨。私立の高校に通う、三年生。

気色悪いとは言ったが、見てくれは決して悪くない。

整った凛々しい顔立ちに、バレエダンサーでも志しているかのような美しい肉体。身長も高めで、見た目はかなりの好青年だ。

だが、コンビニの商品の袋を手にした彼は、凜々しい顔立ちを崩し、美しい肉体をくねらせている。まさに骨抜き状態である。傍から見れば、これは通報して良いレベルだ。

そんな時雨は、推薦でその服属している大学に早々とエスカレーター式の進学を決め、趣味に没頭する毎日を送っていた。

彼の趣味とは、機械弄り、メカアニメ鑑賞など。

一般的　　と言うより、世間で見れば、時雨はオタクと呼ばれる者の一人になる。分類別に呼称するならば、メカオタクなのだ。

ただし、オタクが一般的に好む『萌え』と言う単語は要せず、『燃え』と呼ばれるその言葉を重要視していた。

大概の機械モノは、ヒロインが主人公を騒動に巻き込み、勝手にヒステリックになって行って、挙句主人公の足を引っ張り、その後のうのうと結ばれる。

ふざけた内容だと思う。

更に、決まって時雨が好きになるキャラクターは、主人公とは絶対に結ばれないキャラクター　俗に言う、サブキャラなのだ。

何故なら、彼女達の方がよっぽど健気だからだ。登場シーンが少なく、心の闇が垣間見えていないだけなのかもしれないが、それでも十分に魅力的である。

だが、主人公は目が腐っているらしい。目の前で頑張っているサブキャラをうつちゃって、ただ事態を引つ掻き回しているだけのヒロインをどうにかしようと、哀れに奔走するのである。

そして、そんな作品のお決まりのパターンは、喚くヒロインに主人公が手を差し伸べ、都合良く友情パワーとかラブパワーとかを発揮し、悪の親玉を討ち滅ぼす。

下らない。ご都合主義が、そんなロボットを動かせる時代に蔓延るものか。

ファンタジー世界ならいざ知らず、燃料が切れたロボットが愛で動くわけが無く、友情も然りだ。

リアルを追求していけば、合理性、確率性だけが残り、そこに感情

の入る余地など、残されてはいないはずなのだ。  
ところで、彼は今、設計図をパソコンで組み立てている。

戦闘機と人型の可変を備える兵器で、かなりリアルな設計がなされている。上手く行けばアニメの白い化け物よりも強くなるかもしれない。

武装に関しては、古臭いものから最新の兵器まで、ありとあらゆる武器に対応できる、汎用モデルとなっている。

武器の設計はもただが、エネルギーに関しては全てに対応可能。電気から正体不明のエネルギーまでもを想定した変換機とエンジンコアは、会心の出来だと自負している。

機体名は 『Aiguils』。

実家に一人暮らしをしている時雨は、意気揚々と鍵を開けると、さつそく玄関を施錠し、自分の部屋に籠る。

部屋には、プラモデルや雑誌が整然と並べられている中、モデルガンや木刀、模造刀などの武器も並んでいた。

本物志向の設計をする為には、自分で使い勝手のよさなどを調べる必要がある。

剣術を道場で学び、射撃場で銃の腕を磨いて、どうすれば動きやすいか、どうすればあらゆる物に対応出来るかを研究したのだ。

時雨はパソコンを立ち上げながら、買ってきたジューズなどを開けて、宴会（一人）の準備を整えていく。

六十二文字のパスワードを数秒掛からず打ち込んで、起動。少し時間が掛かる。

その時間がいつもなら苛立ちを誘発するのだが、今日に至ってはどこと無く心地よい。事実、時雨の顔は達成感に満ち溢れている。

陳腐な起動音と共に、パソコンの完全起動が完了。その刹那に、聞くだけで不快感が三割増しになるあのエラー音が室内に響いた。

「……………おいおい」

真ん中に表示された文字。

『調停者よ』

その言葉に、思わず鳥肌が立った。

「って、厨二クセえなあ。つーか、クラッキングされたのかよ……マジウゼえな」

一人暮らしになると、独り言が多くなる。これは寂しさかららしいが、普段特に感じない。無意識の深層に多分あるものだろう。

とりあえず、データ内部に残されているはずの形跡を探したのだが、それらしい跡も見当たらない。

変だ。

情報を完全に消し去ることは出来ない。こちらはファイルに個別口ツクまで掛けている、ハイスペックのパソコン。セキュリティも万全だし、クラッキングすれば何重にも跡が残るはずなのだ。

「逆探知も出来やしねえ……何なんだこりゃ」

忌々しげに呟き、時雨は開けたペットボトルのコーラを一口含んだ。と、画面の文字が変わる。今度は英語だ。

『Please, you typed "SAVE"』

「は？ 助けてくれって打つのか？ いや……向こうが助けて欲しいのか？ 頭沸いてんじゃねえのか？」

やけに丁寧語だが、どうしたものだろうか。と言うより、この状況を何とかして欲しい。こつちを助ける。

この異常事態に、最新のセキュリティソフトは全く反応していない。この野郎、金払ってんだぞ。

内心で愚痴りながらもその表示を無視し、設計図を開いて  
って、

「無い！ 設計図が無くなってやがる！ 高校一年の頃から案を練ってたあれが無い！ 俺のアイギスが……！ クソツ、クラッキング野郎か。……あの芸術作品をよくも！」

燃え滾る怒り。およそ二年半の努力が全て水泡と帰したのだ。それが正常の反応だろう。

「これで良いんだろうが！」

尻尾を掴む為にも、手掛かりがある。ウイルスでも何でも、発信源

を辿らなければ。

高速で、表示されていた単語のキータイプを終えた。

次に、また違う画面が現れる。

今度は日本語だった。それも、一単語。日本人なら誰でも知っている、子どもの頃によく使う言葉。

『ごめんなさい……』

「あ？」

画面に表示された言葉は、時雨を呆気に取らされるのは十分だった。と、

「おいおい、冗談だろ……？」

画面が徐々に輝きだす。

電源を切ろうとも、それはまるで太陽のように輝き、更にそれは強くなる。

馬鹿な、リアルでこんなのは在り得ない！ 確率的にも全く無

い！ 何なんだこれは！！

混乱していく脳。

咄嗟に壊してやろうと、改造モデルガンを取り出して空になるまで連射するが、効果は全く無い。

「ざけんな！ 何なんだよこりゃあ！」

苛立たしさと共にマガジンを装填したところで、脳裏に響く声。

『停めて……』

「テメエが止めるボケ！ くっそ……んだよ、これ……！」

急に眠気が襲い、時雨はモデルガンを握り締めたまま、意識を失った。

「かつて、この国には戦争が起きていました」

明朗とした少女の声。

淀みを知らず、ただ真つ直ぐな声は、悪意を知らぬ無垢なものである。

シンプルなステンレスの机とリノリウムの床、大きな電子ボードを眺めているのは、何かを朗読している少女と同じ年頃の少女少女達。壁に埋め込まれてあるボードの前には、一人の成年女性が立っている。教師だろう。

「過去の栄光を取り戻さんとする、ここアースガルド帝国の属国であるグランディア王国の反乱によって、大規模な戦線が敷かれました。我らは機械 『神機』 を使い、中でも随一の腕を持った英雄ローランや戦乙女の活躍によって、また打ち滅ぼすことに成功しました」

「……続けて」

「はい。その後、アースガルド帝国は二つに別れ、シュバルツガルド王国が生まれました。しかし、シュバルツガルド王国はグランディア王国の残党と手を組み、再びこの地へと攻めてきたのです」

「結構です。流石ね、アニーさん」

「えへへ……」

寝められた少女は、照れたような仕草をして、その白く柔らかそうな頬を染めた。

他の生徒が微笑笑する中、教師である茶髪の女性が指揮棒を片手に説明を開始する。

「そう。人型や可変型などの、我が国の機械兵器シリーズは『神機』と呼ばれているわ。ちなみに、シュバルツガルドの機械を『黒機』、グランディアの機械を『土機』と呼ぶの。仰々しいけどね」

そう言い終えた瞬間、鐘の音が巨大な建物の全域を駆け巡る。授業終了の合図だ。

合図と共に、遊びたい盛りである少年少女達は一斉に教室から飛び出していく。

止めても無駄だと分かっているのか、教師の女性は何も言わずに、

苦笑するだけ。

と、電子ボードが一瞬揺らめき、また刹那にオレンジ色をした長髪の少女の姿が映し出される。

白を基調とした軍服で、小さな身を包んでいる少女。ロングスカートは動き易くする為か、前の部分が膝の上辺りまでしかない。代わりに、膝までは白いニーソックスと黒いブーツが覆っていた。長い睫毛に閉ざされた瞳が開いていく。

ラピスラズリのような美しいブルーの瞳。

幼い容姿とは裏腹に、その双眸からは年季を感じる。その所為か、雰囲気がとても落ち着いており、軍人に相応しい厳格さまでもが滲み出ていた。

グラスに注がれた赤紫色の液体を呷り、少女は顔色を変えずに足を組んだ。

『元気か？』

その光景を見て教師の女性は溜息を吐き、グラスを指差す。

「……昼間から葡萄酒を飲むのは」

『これはただの葡萄ジュースだ、心配するな。それより、使えそうな人材はいるか？』

「いないわ。これといった才覚が現れた子も、ノストラダムスの啓示を受けたと言う子もない。やはり、彼女の気のせいだったよね」

『まあいい。どこからかは知らないが、新しい設計図も流れてきた。差出人不明、設計者は相馬五月雨。グランディアの文字だが、これは名前も外見も『神機』だった』

「何なの？ それは」

聞くと、少女は口の両端を釣り上げる。

『オールウエポンマスター、と言った感じだな』

「は？」

『ほぼ全ての武装が装備出来る。その上、装備に関して言えば、高出力のスラスターにバーニア、燃費の良い新型動力も考案されてい

た。上手く使えば、海の中でも陸でも空でも、潜在能力を存分に発揮できるだろうな』

「それって、凄いいんじゃない？ 海中戦が出来るのは大きいわね」

『ああ。多分、設計した奴は頭のネジが飛んでるよ、こんなの常人が作れるはずが無い。全てが眩暈がするような正確な数値で打ち込まれていて、専用のOSや合金の配合率まで徹底的に作られている。正気なのかを問いたくなるよ。それでいて、同じ数値で設定したシミュレーターでちゃんと動いたのだから、尊敬するしかない。だが、複雑過ぎて誰も乗れはしなかったがな』

「意味が無いじゃないの」

『だから素養のある奴を探せと言っている。多分、エリートでも無理だろうな。恐らくは、これを設計した人物なら動かせるだろうが』

……』

そう言い終わると、少女は執務椅子から降りた。

「お出掛けですか？」

『ああ。今日は空が綺麗だからな。この空が赤と黒で染まる前に、眺めておきたいのだ。じゃあ、また連絡する』

画面が切り替わり、先程の授業内容が映し出された電子ボードへと表示が変わる。

刹那に予鈴代わりの鐘が鳴り、鳥達が一斉に羽ばたいていった。

その軌跡を見上げ、目線で追いかけるながら、教師の女性は溜息を吐いた。

## 一章 人殺しの烙印

風が、吹いている。

流れていく空気に意識を呼び戻されて、時雨は閉じていた瞳を開けた。

「あー……」

心底から疲れきった声。

小一時間ほど、『自室から急に知らない丘に飛ばされて寝転がっている』と言うシチュエーションが発生する可能性の模索を繰り返していたのだが、濡れ手で泡を掴み切ってしまった。

収穫の無い労働ほど、意味のないことは無く、ただひたすらに気だるさと虚無感に支配され、愚痴のような言葉しか口に出せなくなる。

「有り得ねえだろ……」

頭の中にアニメではない的な音楽が流れたような気がしたが、それを振り払い、自室から唯一持ち出していた改造モデルガンを空へ向けてみる。

澄み渡る青空に影を生むそのフォルムは、さながら鳥のようだ。

携帯は圏外。眼下に広がっている街は、文明の規模とシステムが分からないので、行っても事態が悪化しかねない。住民証明などがあるなら、最悪殺される可能性も懸念出来る。

武器は 殺傷能力ゼロのモデルガン。当たったら痛い。

「八方塞、つてか？」

とは言え、ジツとしていても始まらない。

身を起こし、モデルガンを懐に隠して、自分の服装をチェックする。金色で縁取られた学生服。その上着の下には、深紅の襟付きシャツ。室内だったので靴下だったのだが、汚れるのが嫌で今は素足になっていた。

「……靴、奪うか？」

さしずめ、靴強盗。

凄まじく間抜けなフレーズに、時雨は溜息を吐いた。

刹那、背後から花のようなフレグランスが香る。女性用だがくどい臭いではなく、薄っすらと匂うだけ。香水を臭い消しと間違っ馬鹿女では無いらしい。

顔だけ振り返ると、香りの主が判明し、時雨は少々だが驚いた。

見たことも無いような純粋なオレンジ色の髪を持つ、それこそ画面の向こうから飛び出してきたような少女だった。

白く柔らかそうな頬、淡く形の良い桜色の唇、ラピスラズリを髭髯させる大きな碧眼、整った眉。それらが一番可愛らしくなるように配置された、表情さえ変えなければ高級人形のような少女だ。

しかし、背は低い。目算して、百四十センチあるか無いか。体重もすぐぶる軽そうだ。

童女のような外見だが、纏っている服　白い軍服を見て、時雨は内心で警戒を開始する。

見た目と釣り合わない深みのある声と笑みで、こちらを見てくる。その瞳は、確実にこちらを探ってきていた。

「こんにちは、少年。今は学園ではないのか？」

「人生と言っ道に迷ったのさ」

「靴も無しにか？」

足元を見ながら言う彼女の隙を突いて、秒も掛からずにモデルガンの銃口を突き付ける。

少女が怯んだ隙に、彼女の軍服の僅かな膨らみを掠め、ガンホルスターに刺さっていた拳銃を引き抜き、彼女を芝の上へと蹴り倒した。そこからモデルガンを破棄し、空いた片手で彼女の華奢な細腕を締め上げ、後頭部へと銃口を突き付ける。

「……いたいけな少女に何をするんだ」

「いたいけな少女は拳銃なんか持つのか？　ミリオタかよ」

「みりおた？」

「ミリタリー……要は軍部の戦闘機やらに心酔してる連中さ。こいつも重量的には本物だろうし」

奪った銃をちらつかせると、少女は溜息を吐いてこちらを見上げてきた。

「その肌の色　グランディアの諜報員か？」

「あ？　何だそりゃ。念の為に確認するけどよ、ここは太陽系の第三惑星である地球。その国の一つ、日本だろ？」

「……寝惚けているのか？　ここはシャルオン系の第二惑星、アヴァロン。現在戦争中の三国の一つである、アースガルド帝国だが……」

何だ、このカオス。

聞いただけならば北欧神話だ。アニメや小説などでよく齧っていたし、ある程度の知識は持っているので、間違いない。

もう、深くは考えないでおこう。異世界トリップで全て説明がついてしまう。

頭痛を堪えながら、時雨は少女の拘束を解いた。服に付いた芝や土を払い、威勢良くこちらを睨んでくる。

「グランディアからの刺客ではない、か。君、名前は？」

「あ……？　名乗る意味あんのか？」

「では、蹴倒してくれた罪を名乗ることで許そう」

「そりゃいいな。俺は高宮時雨、見ての通りのイケメンだよ」

「私はフランだ。フラン・ド・アルテミス。見た目通りの美人だ」  
そう言い、小柄な彼女にしてはそこそこ発達している胸を張る。

時雨は彼女の頭に手のひらを乗せて、軍帽の上からわしゃわしゃと撫でた。

「あんだ、どつちかつつーと可愛いよな。俺が今まで見てきた奴らより、それこそ抜群に」

「なっ！？　し、失礼だぞ！　年上に向かって！」

顔を赤くして食って掛るフランだが、時雨にはそれが子どもの照れ隠しにしか見えなくて、苦笑する。

「でも、満更でもないってか？」

「うっ……そ、そこは見て見ぬ振りをするのが紳士だろう」

顔を赤くしてそっぽを向く様は、何と云うか、凄まじい破壊力だった。メ 粒子砲超えるんじゃないか。

フランは踵を返すと、こちらの足元を見ながら苦笑した。

「まあ良い。靴くらいなら提供してやる。それに先程の口振りからして、異世界の住人なのだろう？ 情報を提供しようではないか」

「……適応早いな、あんた」

「嘘を吐いているわけではなさそうだからな。君からの情報を鵜呑みにするなら、そういうことになるだろう」

「あつそ。んじゃ、行こうぜ。正直、裸足は勘弁だ」  
「だな」

苦笑し、フランは淀みなく歩き始める。

時雨はその小さな背中を追って、駆け出した。

新たなる大地への好奇心を密かに胸に抱いて。

「ありがとうございました。五千八百円です」

円相場かよ……。

街まで行って、大型のショッピングモールへと向かった。どうやら、日本とそこまで物は変わらないらしく、ただ……ロゴがレプリカにしか見えないのがご愛嬌だ。

先程見た『アシダセ』はまだしも、『ラムハード』やら『空魔』やら、スポーツ商品メーカーを侮辱しているようにしか思えないライオンナップだが、向こうから見ればこちらが侮辱しているように感じるのだろう。ああ、ややこしい。

とりあえず、真つ先に靴を買って貰い、適当な布で汚れを拭いた足に靴下を通して、近未来的なラインが奔っているセンスの良い靴を履く。新品なので少し硬いが、底のゴムが厚いので、履き心地は悪くないし、運動にも最適だ。

しばらくそれを慣らしていると、フランは紳士服に金の腕時計、それとレモン色のマフラーを片手に持ち、満足そうに歩いてくる。ちなみに、購入済みらしく、タグは全て取られていた。

「これを着てくれ」

「あー……何だこりゃ」

分かつてはいたのだが、一応聞いてみる。

「服もないのだろうか？ 私が見繕ってきた。感謝すると良い」

何故か自慢げに、その一式をフランは差し出してきた。

「君の赤いシャツはそのまま良いんだ。それを胸元まで開けて、これを上から着るんだ。どうだ？ 最高にセンスが良いだろうか？」

「趣味悪すぎるわボケ！ そりゃホストだろうか！」

その上から、豪華すぎて下品な金色のネックレスに鼻につくオーデコロン、それとワックスで髪を固めてしまえば完全なそれである。

「な、何だと！？ 君のプロポーションならバッチリだろう！ ジェントルマンになりたくないのか！」

どうやら本気らしい。

頭痛を覚えながらも、時雨は捲くし立てた。

「確かに俺は美形でイケメンだがそれを着るのはアホだけだ！ それと紳士つーのは外見じゃねえ、心だ！ てかこれ着た奴が紳士語れるのか！？」

「うっ……」

だがしかし、選んできたのは嬉しい。

溜息を吐きながら試着室に入り、その紳士服を言われた通りに着て、時雨は堂々と姿を現す。こういう場合は、恥ずかしがったら余計に人目を惹くのだ。

周りからはどよめきと感嘆の聲が響いてくる。猛烈に気恥ずかしいが、もう仕方ないだろう。

顔に不敵な笑みを貼り付け、髪を撫で付けながら、フランへとしゃがみ込み、目線を合わせる。

「どうかな？ お嬢さん」

「……あ、ああ。よく、その……に、似合ってる」

「ありがとう。では、そろそろランチでも如何かな？」

「う、うん……」

『うん』って……オイオイ。マジにすんなよ。

再度脳を襲う頭痛を堪えながら、時雨はフランの手を取って歩き出す。

「……普通の私服、何でも良いから後で買ってくれ」

「は、はい……」

「……目え覚ませっつーの」

影から首を突くと、熱に浮かされていたような表情でこちらを見ていたフランが元に戻った。

「な、何をする！」

「アホ。演技にマジになんな。っーか、あんたもドレスアップすりゃ良いじゃねえか。似合いだぜ、多分」

冗談半分で笑いかけたのだが、フランは表情を引き締めて、使命感を帯びた瞳で言い放ってくる。

「いや、ならん。私は軍人であり、戦艦を任される司令でもある。

浮ついた格好は……」

「したいが、出来ないってか。ハッ、馬鹿か。そんなんでどうするよ？ 一生を国に捧げて？ 何が貰えるよ」

「何だと……！」

「名誉の為？ 世界平和の為？ そりゃ自分を殺す為の良い口実だわな、実に結構じゃねえか馬鹿クセえ。国の駒だろうが、このパンプーだろうが、世界を滅ぼす連中だろうが、みんな人間だろ？」

「……何が言いたい」

鋭く睨むフランの威圧は、周りの人間が後退するほどのものではあったが、時雨はせせら笑うように飄々とした笑みを浮かべるだけ。

「あんたも人間だろうが。服くらい好きな着て良いに決まってるじゃねえか。国を守ってれば、最悪全裸でもOKだろうぜ。そんなもんだろ」

「だが……」

「じゃ聞くが、プライベートにまで仕事を持つてくる奴、どう思う？」

「……鬱陶しいな」

「それだ、今のあんたは凄まじくウゼえ。こんな色男と歩いてるんだ、着飾れよ。無愛想面した軍人ルックのお嬢ちゃんなんて、コスプレにしか見えねえだろうが」

「だが……いいのだろうか」

「何か言つて来る奴がいたら、絞めてやるよ。人の女に何ヶチ付けてんだ！……つてな」

茶化すように笑う時雨に、負けたと言わんばかりに肩を竦め、苦笑するフラン。

「………分かった。実を言うと、お洒落はしたかったんだ。二十歳を超えるというのに……情けない話だが」

「オイオイ、二十歳つて……」  
思わず口を開閉してしまう。

外見は十三歳程度の少女にしか見えなかったのだが、態度は落ち着いていたので最高でも十七程度を想定していたのだ。それを上回るとは……世の中は広い。

一度決めてしまえば早いもので、フランは満面の笑みを浮かべて先へといつてしまう。

「まあ、私も今日はオフだからな！ デートしてもいいだろう！」

「変わり身早えな。ま、そっちの方が得だろ。人間的にもな」

鼻歌まで歌い始めているフランを見て、時雨はふと思い出す。

この場所の情報、聞くの忘れてるな。

しかし、上機嫌なフランを見てみると、何だかどうでも良くなる。異世界に来た無意識の緊張が、きつと解れているのだろう。

先程の店で、オーソドックスな白いワンピースと白い帽子、白いサングラスといった避暑地での令嬢を髣髴させるような服を纏い、フランは再び時雨の前に現れた。持っている紙袋には軍服を入れている

のだろう。

彼女の雰囲気も若干だが柔らかくなり、その服は小柄な彼女にとっても似合っていた。

小柄ではあるが、腰の位置が高く、脚線が綺麗だ。身長以外の発育もそこそこで、出ているところは出ているし、ウエストはちゃんと女性らしい曲線を描いている。思わず、溜息を漏らしそうになった。黙っていることを不安がってか、フランはスカートの裾を握って子犬のように見上げてくる。

「……………ど、どうだ？」

我に返った時雨は、すぐさま不敵な笑みを作り直し、そこから歯を剥いて笑ってみせた。

「いんじゃない？ てか、俺が霞みそうだ。すっげえ可愛い」「なーっ！？」

真っ赤になつてしまうフランの頭をぽんぽんと叩き、先に歩き出す。あてがあるわけではないのだが、止まっても仕方が無い。

目論見通りにフランは追いついて来て、律儀にも咳払いをかましてくれながら会話の火蓋を切ってくる。

「それにしても……………君はヤンキーとか、不良と呼ばれる部類なのか？」

「んー？ 何だよ」

「喋り方と態度、物腰。先程の演技では微塵も感じなかったが、地が粗暴すぎるぞ」

「不良つつつてもなあ……………。俺は欲求に素直なだけだけだぜ？ ヤンキーってのは、気に入らない奴がいたら、潰して、それでも抵抗してくるなら、更に潰して、欲しいものがあつたら、奪うか掠め取る連中だろ。ただ俺がヤンキーと違うのは、欲しいものがあつたら作るか勝ち取るか、つてところだ。簡単に奪えるものに、価値なんかあるわけねえし。だから平和なのはすげえ難しいんだろうが」

時雨は遠くを　どこと言うわけはないが、ただ遠くを眺めている。

平凡な一般家庭に、時雨は誕生した。

父親は冴えないサラリーマン、母親は若くはない専業主婦。

凄まじく容姿がよく、物事をスポンジのように吸収し、一家の中ではその成長を恐れたこともあったらしい。

時雨が神童と呼ばれていたのは小学生までで、その頃からだが良いことも悪いことも含めて様々な経験し、高校生になる。

進学してからは趣味に没頭するようになったが、昔は近所では最悪の不良と呼ばれていたこともある。父親はそのショックからか、わざわざ転勤し、それを母親が追いかけて、一人暮らしをしていたのだが、流石に必要ななくなったので、金髪もピアスも戻し、黒髪に染め直したが、その事実を両親は知らないだろう。何せ、数年も会っていないのだから。

フランは、どこか遠くを眺めている時雨を見て、苦笑する。

「……君は、どこか達観しているな」

そんな感想を述べるフランに、時雨はその頭を撫でながら答える。嫌がっていたが無理矢理、ぐりぐりと。

「別に？ ただ……いろんなことをやりすぎた感はあるけどな。ま、それは置いといてだ。国の情勢とか知りたいんだが、国はこの他にもあるんだろ？」

「ああ。……そのファーストフード店で良いか？」

「問題無し。コーラとかあるよな」

「止めておけ。骨が溶けるぞ」

「馬鹿かよ。そりゃ直接触れた歯とかは溶けるだろうが、体の中は別だろ。それに、炭酸は疲れを取るし、甘いから気分も変えられるし、カフェインもコーヒーより入ってるから作業にも合うんだぜ？」

「……そう、なのか？」

「発癌性を除きや、最高だな」

「な！？ じ、じゃあ、葡萄サイダーで代用は利くか？」

「カフェインが消えるな。作業には向かねえ。それどころか、青一号とか赤一号って着色料が入る。ちなみに元は原油な、それ。よかつたなー、発癌コースまっしぐらだ」

「そうだったのか!? 缶の葡萄サイダーが好きだったのに……  
というか、何故知ってる!」

「自分が飲むモンだろ? ヘンなの飲まされちゃ、堪ったもんじゃ  
ねえからな。知っというて損はねえし」

「……何か、そのテのジュースを飲む気がしないぞ」

「でも人間ってのは図々しいから、結局はまた飲んでるんだって。  
その効果を目の当たりにしなきゃ、何も信じねえし。『ふーん、そ  
れで?』程度のモンだよ。事実、俺もそうだしな」

取り留めのない会話を紡いで歩きながら、周囲の様子を探っていく。  
戦時中らしいのだが、食糧難や物資難は無いらしい。人々はそんな  
ことを知らないような幸せそうな表情で、モール内を歩き交ってい  
る。

「オイ、戦時中ってのはこの平和ボケしてそうな連中は分かって  
んのか?」

「ああ。この笑顔を守る為に私達は頑張っている。この平和さも、  
軍があつてこそだ」

満足そうなフランに、時雨は鼻で笑ってみせる。凄まじい眼光が飛  
んできたが、時雨の瞳は揺るいではいない。

「そりゃ違うね。多分、連中には戦争って意識が無いんだろうさ。  
どっちが勝つただの負けただの、自分に実質的な被害が及ばない限  
りは干渉もしてこねえ。んで、やられた後はぎゃあぎゃああと文句を  
徒党を組んでほざくのがパンピーの連中だろ。目の前で何かがぶつ  
壊されないと分かんないかねえ……」

「……君なら、どうする?」

「あ? 決まってるんだろ。戦況が動くのを見極めて物を買ひ、一番  
安全そうな国に保護してもらつ。あわよくば、そこで甘い汁でも啜  
る。戦後は買い集めたものを高額で売りつけ、金を巻き上げる。ん  
なモンじゃね?」

「それが君の国だったとして、愛国心は無いのか?」

「国愛してるからここで死んで下さい、って? 馬鹿ぬかせよ。俺

は自分より大切なものなんて無いんでね。この人生の主役は俺、主役が消えたらどうにもならんだろ。それこそ、職に殉じる気は無いぜ」

「……自由なんだな」

「そう見えるなら、そう思えば良いだろ」

投げやりな返事にフランの眉が顰められるが、時雨は気にせず歩を進めていく。

と、黒い軍服を纏った黒髪の少年がこちらに　フランに向かって、敬礼をした。もしかしなくても、フランの部下だろう。

「艦長！　こんにちは！」

「うむ、ローランか。君もオフだったのだな」

「ええ。艦長こそ、デートですか？　その人は……」

少年の興味がこちらへ寄せられるのを知り、時雨は不敵な笑みを浮かべ続けた。

「どーも、グランディアからの刺客です」

「何っ！？　貴様アツ！！」

フランの言葉を転用してみたのだが、少年に対して想像以上の効果があった。

炎を秘めたような赤い瞳の中に揺らめくのは、憎悪、悲しみ、怒り。そして、それを塗り潰すように占めているのが　復讐心。

何だか面白くなって、フランの背後に回り、銃を突きつけてみる。

流石に少年は思い留まり、しかし怒りは忘れず、拳を握り締め、歯を食いしばっていた。

察しがついたのか、フランは大きな溜息を一つ零す。……ユーモアの通じない連中だ。

「……リアクションが大きくて楽しいのかもしれないが、止める。趣味が悪い」

「頭固いねえ。意味不明な所に来たんだし？　何か面白えことがなければ死んじまうだろ？」

「あ……え、演技だったのか！？」

ガーネットのような瞳をパチクリさせながら、少年はフランに向けていた視線を時雨へと配る。

時雨はそれを見て、銃を収めてひらひらと手を振って見せた。

「俺は地球の日本ってところの出身でね。かなり端折ってぶっちゃけると、俺にとっちゃここは異世界だし？ さっきまでガチに途方に暮れてたってワケ」

「ってことは、異星人ですか？ それにしちゃ、オレらと遜色ないですね」

「悪いねー、紫色の軟体生物とかじゃなくて」

「や、むしろ近くて安心しましたよ。オレはローラン・ガーレットと言います」

性根は勝気そうだが、思い詰めて暴走するタイプだな。

そんなことを思いながら、時雨は差し出された手を握った。

「高宮時雨だ。お前もそうだけど、俺も見ての通りのイケメンだよ」

「……オレ、顔良いんですか？」

「まあな。身長も伸びてきてるだろ？ 百七十はありそうだが、もう五センチ伸びるぜ。後、俺とはタメで話せよ。そんなに年変らねえだろうが」

「けど……オレ、軍人だし……」

「敬語に馴れてないのが丸分かりなんだよ。それに、俺は軍人じゃないし」

「……じゃ、よろしくな。で、本当なのか？ 異世界から来たって普通はそんなリアクションだろう。疑わない方がどうかしている。

しかし少し考えれば分かるものだろうに。

時雨は肩を竦めて、溜息を吐いた。

「こんなところで嘔吐いたってしゃあねえだろ。それじゃ聞くが？ 俺がここで嘘を吐くメリットは？ こちらの常識が通じないという仮定において、俺への信用度を嘘により更に低下させることにより得られる何かがあるのか？」

「あ……や、その……ゴメン」

「いや、悪イな。俺もイマイチ実感沸かねえんだが……当たつちま  
ったな」

謝っている時雨の態度は非常に舐めくさったものに映ったのか、ロ  
ーランは眉を顰めた。

フランは苦笑すると、ローランを見ながらこちらの肘をぽんぽんと  
叩いてくる。

「まあ、態度は最悪だが……根は悪くないんだ」

「オイオイ……。俺みたいなスツキリ爽やか青少年を最悪呼ばわり  
するかあ？」

「爽やかならその不良みたいな口調を何とかしたらどうだ？ つい  
でに敬語つてのを見せてくれよ。上手いんだろ？」

「いいぜ、望むならやってやるよ。ビックリしてちびんなよ？」

ローランの挑発に乗って、時雨は急に表情を真剣なものへと変えた。  
突然の出来事に二人は動揺するが、時雨は実に典雅な一礼をしてみ  
せる。

「ローラン殿、フラン殿。どうか、先程の無礼の程を御詫び申した  
く存じ上げます。私は若輩者の身で在るが故、数々の身と分を弁え  
ない発言を致しておりました。誠に、申し訳御座いません」

「え……え？」

「お、おい……？」

「何で御座いましょうか」

平然と毅然とした雰囲気を纏った時雨が答える。

流石は艦長と言うべきか、真っ先に落ち着きを取り戻したフランが、  
質問を投げかけた。

「それは何の口調だ？」

「敬語です。イメージは執事を基調としておりますが、御気に召し  
ませんでしたか？」

「そ、その……あれだ。……お」

「お？」

二人して首を傾げると、真っ赤な顔をしてもじもじしながら、フラ



らからともなく頷いた。

「ダサイよな」「ダサイです」

「裏切ったな！？ ローラン、貴様の任給だけ八割カットだ！」

「職権乱用じゃないですか！」

「その八割、俺に回してくれ」

「鬼かよ！ 助けるよ！」

悲痛にローランが叫んだ、その時だった。

耳に障るような、甲高い音の警報が鳴り響く。

次いで、女性の声がそこかしこにあるスピーカーから流れてきた。

『え、えーっと……ひ、ひにゃん！ 痛っ……！ ふえ……えうっ

……』

いきなり嘔みやがった！ しかも何か泣いてる！

「……優秀な人材だなー、軍つてのは。エリート部隊に（笑）を付けた方が良いんじゃない？」

皮肉気に笑う時雨にローランは怒鳴り返し、フランは拳を戦慄かせスピーカーの一つを凄まじい形相で睨み付けていた。

「あんなのと一緒にするな！」

「あの馬鹿者が……！」

給料半分カット半年だな、とか物騒なことをフランが呟いている内に、代わりの人物が入ったようだ。

『失礼。避難推奨。よろしく。てかしろ。戦争だからjk。では、ノシ』

「口で言うか、それ……」

例の掲示板を髣髴させる言葉だった。この世界にもあるのだろうか。ちなみに、jkは常考と読み、常識的に考えての略語。ノシは手を振っているように見える為、ブログ何かでも使われている。チャットの去り際に使ったりもするが。

「……軍がこんなじゃ、戦争の意識が低いのもしゃあないだろ」「うっ……」

軍の連中も総じて呑気に違いない。

まあ、個人的にはこの世界で関わりは持ちたくないのだ。軍だと尚更に面倒な事態になるに違いない。

が、情報を集めるには集団に所属した方が早い。それも、ここは正規軍らしい。情報の質はそこいらの酒場と雲泥の差であるだろう。

逡巡し、時雨は頷いた。

「なあフラン。俺も軍に連れてってくれよ」

「……そうだな。放り出すわけにもいかん」

あっさり承諾したフランだったが、どこか真面目なのか、ローランは疑問を口にする。

「いいんですか？ 部外者を入れて……」

「何、構わんさ。今この世界の情報を知るには、最高の場所だからな。何なら、適正訓練も受けてもらって、オペレーターに登用してもいい。度胸があつて声の張りも良いから、やれるだろう」

「おつ、優遇してくれるねえ」

「人手不足なのも事実だからな。この際、どうだ？」

「そうさな、前向きに検討してみるぜ」

ひらひらと手を振りながら、既に駆け出していたローランを二人は追いかけて始めた。

街の地下に木の根の如く張り巡らされた通路。

そこを通って、軍本部の基地まで行き、各戦艦への転移装置から艦内に跳ぶのだ。

ローランは先に行き、フランは更衣室の奥を漁って、黒くかなり大きな軍服をこちらに投げて寄越した。

「それを着てくれ」

まあ、それしかないのだろうが。

インナーまでご丁寧に用意されてある。軍服としては良いデザイン

で、素材も柔軟且つ丈夫な物だろう。この世界の物質とかは知らないが。

手早く袖を通し、軍靴を履いて、着崩しながら外に出る。

「に、似合うな。驚いた」

驚かれてしまった。

「アホ言ってるなよ。で、行くんじゃないのか？」

「ああ。こつちだ」

白い軍服を再び身に纏ったフランが駆け出し、それに時雨も続く。歩幅の差が大きすぎるので、時雨は早歩き程度にしか歩いておらず、フランはそれに眉を顰めた。

「何だか不公平な気がしないか？ もう少し必死に走ってくれ」

「あー……必死とかキャラじゃねえし？」

「くそっ……この身長、後二メートル伸びないか……」

「そりゃホラーだろ……」

二メートルになったフランを想像しながら、更に走っていく。

「んで、どうやって戦うんだ？」

「戦闘機で、だ。我々の使用する機械兵器を神機と呼び、人型をはじめ、様々な形態がある。中でも、流れてきたデータから最新鋭の機体が作成されてな。作者の名前自体はグランディアのものだが、機体名はアースガルドのものだった」

「……へえ」

一発で察せた。

ずっと気にはなっていたのだ。流れた『アイギス』のデータが、どこにいったのか。

「神の盾 『アイギス』と呼ぶのだが。その作者もヘンな名前だな、相馬五月雨と言う人物だ。知ってるか？」

「……ああ。よく知ってるよ」

ふつつつと込み上げて来る何かを抑圧し、時雨は足を速めた。

「おい、格納庫はどこだ？」

「この通路を右 っつて、おい！」

柄にもなく慣れない軍靴で全力疾走し、その扉を開けて驚いた。様々なロボットが並んでいる。

どこかで見たことのあるようなものから、独特のデザインを持つ機体まで。カラーリングも多種多様に渡り、統一感の無さが浮き彫りである。

「設計者出て来いよ……」  
もう溜息しか出てこない。

様々な人員が慌しく駆け抜けていく中で、その機体は見つかった。スケールもちゃんと設計されてある、後はカラーリングを残すのみであった『アイギス』。

三十メートル弱の、人型兵器としては小型に入る部類。それは機動性とエネルギー効率、総重量の都合の上、徹底的に計算された数値だ。

スタイリッシュだが、神の盾と称されるだけあって、機体を隠すほどの大きな盾を所持している。そこから物理振動波、重力波、拡散ビーム、ビームシールド、ビームビットを射出可能。特に物理振動波や重力波は、無線妨害や敵艦の機能破壊にも使え、尚且つ応用すればホバリングも可能である。

武装はそれ一つ。しかし、他の機体の装備を持つてくることが出来て、汎用性はずば抜けている。

元が海での運用を考えていただけあってか、宇宙や海、空などでは高機動力を発揮する。脚部のギミックを使えば陸上でもすばやく動け、固定砲台用の装備もあるので、実弾大口径ライフルやロングレンジビームライフルで狙撃も可能。隙が無い。

その再現度は、百パーセントと言っても遜色ない出来映えだった。内部は分からないが、細かいところまでよく作られている。

しかし。

それはどの機体よりも異彩を放っていた。

右を見れば、白、黒、赤。



ろう。

そうである部分とそうでない部分を添削しながら、高速で打ち込まれていく数字とアルファベットの羅列。

幻想的に画面のブルーが暗い機体内を照らす中を、時雨は手と脳をフル稼働させて作業を片っ端から終えていく。

と、急に光が差し込んだ。時雨は目を顰めながらも手は止めない。

「何をやっているんだ！」

「機械つてのは、プログラムがなきゃ動かんだろ」

「君は……機械技術者なのか!？」

「俺はしがな学生だったよ。三年掛かって一つの架空兵器を作り上げ、完成間際にそれが消えちまってな。へんな言葉がモニターに出るから押してみたらこの世界にいた」

言葉を切り、時雨は逆光でシルエットしか見えないフランへと真顔を向けた。

「この機体は、俺が設計した兵器だ。相馬五月雨は俺のペンネーム偽名ってヤツだ。んで、何故かここで運用されようとしてる。ゴールドカラーなんてふざけたカラーリングも許せねえが、これを他人が乗るのはもつと許せねえ。これは俺専用に限らねえんだつこのEnterキーを押すと、ディスプレイの全ての機械類が稼働を始める。」

その瞬間、フランの表情が変わった。

有り得ない。

あんな複雑な機構を動かせるはずがない。あんなものを動かせる人間は脳がいかにしている。

専用のOSステイックがなければ動かないよう、あの紙面を慎重に書き直させたと言うのに、それすらもクリアして動かしているのか。

肌が粟立つ。

悪魔のような才能だ。常人の出来る術ではない。

機動を確認して満足そうな時雨は、コックピットの座席をスライドさせ、寝転がった。

モニターを表示させ、外の状況を傍受し、眺めている。

「良い眺めだな。こんな良い画質のモニター、初めてだぜ」

「た、戦わないのか？」

「何で。俺、一般人だし？ 傍観と洒落込むのが普通だろ」

時雨を苛立たしそうに見ていたフランだったが、自分も動かせない以上、機体から下ろさせても仕方が無い。

「そこにいろ！」

「言われなくとも」

キツイ視線を時雨にぶつけるが、当の本人は不敵な笑みを浮かべたまま画面を眺めるだけ。

ハッチを閉め、フランは駆け出していく。

「おい、私の『オリオン』は出れるか！」

「ええ。……つて、艦長！？ こ、ここは神機隊にお任せ下さい！」

「艦の指揮はノストラダムスに任せろ。伝令、急げ！」

「は、はい！」

強引に整備員へ伝令を任せ、自分は神機 『オリオン』 に乗り込む。

白のカラーリングの人型神機で、金色の弓から銀色の微振動レーザー矢を放つことができる。

ミサイルポッドや腰部の両刃剣の他に、巨大な二丁銃を所持しており、中距離からのヒット&アウェイを得意としている。その上、緊急時には自らと感応し、脳内でイメージした動きをトレースできるシステムを積んであるのだ。これにより、人間的な動きができる。

機体を動かし、神機発射用のシューターに脚部を乗せる。後は撃ち出す要領で一気に加速することが出来るのだ。

接続を確認した後、通信を開き、ローランと戦艦に繋ぐ。

「フラン・ド・アルテミス。『オリオン』 が出るぞ！ ローラン、以下隊員は私に続け！」

『了解です！』

ローランを皮切りに、次々と了解の声が上がっていく。

と、カメラの一つからポップアップが浮かび、時雨の顔が映った。通信を繋いだのだろう。

『御手並み拝見だな』

「フン、しかと見ている。我らの勇士をな」

『手、震えてるぜ』

「嘘っ!？」

『嘘だ』

「……このっ!」

『氣い付けてな。お土産、よろしく〜』

「あるかッ!！」

怒鳴りつけ、フランはスラスターを起動させて、シューターを使わず自力で飛び出していく。

リーダーのジャミングはなく、感度も良好だ。既に機影を前方五百メートルに捉えている。

「よし。アルテミスの子! オリオンの矢!」

叫んで、足元のレバーを引いた。

音声認識とレバー操作を分割することで、少ないスイッチでも容易に操作できるようにしている。噛んでしまうと発動できないが、そういった訓練もしているの、そうそうミスはない。

銀色の弓が展開し、弦を引く挙動をする。

ロックオン・グラスが右目に展開する。眼球が敵の点を捉えることで、矢の追尾機能がオンになるのだ。若干、威力は下がるが。

金色に輝く光が収束し、矢の形をとった刹那、

「行けッ!！」

フランの鋭い声により、矢が一筋の光となって中空を駆け抜けていった。

黒い機体が次々と撃ち落される。その光景を見、フランは薄い笑みを浮かべた。

そして、その光景を眺めながら時雨は頭を抱えていた。

アホだ。

前方だけに敵が展開していると思っっているのだろうか。

正面にいたら、潜水部隊を目立たなくする為か、左右へ広がる時間を稼ぐ為の囷かくらいは考えられるだろうに。

「無能だねえ、この指揮官は。戦いつてモンを知ってんのか？」  
呟きながらも、戦況を眺めていく。

海中から三機が飛び出し、格納庫の中で多数を占めている飛行戦闘機を撃墜して、更に炎のようなカラーリングが施されたローランの神機とフランの神機 『オリオン』 がそれに惑わされる。

となれば、左右の敵がこの艦を叩きにくるだろう。

「……じゃあねえか」

回線を戦艦へと繋いで、笑みを浮かべた。

「どーも。通りすがりのイケメンだが、元気かよ？」

『だ、誰だ貴様ツ！？』

「いや、だからイケメンだって」

あからさまに狼狽している声に、時雨は思わず溜息を吐いてしまう。これでは不合格だ。柔軟性に大きく欠ける相手は、対談に望ましくない。

「ああ、面倒だ。あんたもういいわ。司令官出せよ、臨時司令官」

『何っ！？』

気難しそうな眼鏡の女性が応対してきたので、即刻立ち退きを要求したのだが、それが彼女の期限を逆撫でたらしい。烈火の如く怒ってくる。

『ぶ、無礼な！ この誇り高きインマーリン家の当主である私に何と言う言葉遣い！ 下民如きが、恥を知れ！』

「ほー。んじゃ、貴族様よ。税金払ってんだからさ、とつとこの戦争終わらせるよ」

『そ、それは……』

怯んだのを良いことに、時雨は適当に捲くし立てた。まずは、プラ

イドだけの無能を排除するのが先決である。

「ははっ、馬鹿か。何の冗談だよ。貴族が何してくれるんだ？ 無能な貴族ほど要らんものはないね。お前ら、アレだろ？ 悩みなんて、『明日の舞踏会は？』、『家をどう存続させましょうか』、『戦争なんて金をつぎ込めばどうとでもなる、他に任せよう』的な感じだよな。悩みは自分ばかりで、無駄に金を浪費し、人を無駄に使うことだけが上手くなっちまう。だから人材が育たない。すっかり慢性化しちまってやがるぜ。戦時中なのにヘンだとは思ってたんだ。

…… テメエ、今すぐ降りろ。他の貴族にも伝えとけ。『軍は力無き一般市民のみを守ります』ってな。金があるなら自分で何とかしろよ。偉ぶってんだろが。良い気味だぜ。滅びろよ」

『……くっ』

通信が一瞬途絶え、すぐに他と繋がる。

次に映ったのは、素朴なワンピースを纏った、長い碧海のように色鮮やかで美しい髪の少女だった。

可愛らしくお辞儀をすると、こちらに話しかけてくる。

『こんにちは！』

「おう。んで、あんたが臨時指令さん？」

『ええ。一応この艦の管理をフランから任されております、アイリス・ノエル・ノストラダムスです』

どうやら、人材不足は深刻らしい。

口調はませてはいるが、容姿的には十三程度の少女だ。艦長代理を務めるには、幼すぎる。

頭痛をもたらす疑問ではあったが、それは幸いにもすぐに霧散した。

『左右から敵が来ますね。えっと……五キロほどでしょうか』

「？ わかるのか？」

『ええ、感じるんです』

なるほど、ニュータプ的な何かだろう。第六感所持者としておくが。

感応さが人一倍 いや、それ以上に良いのだろう。危機を察知で

きるので、重要拠点を落とされないようにするならば是非とも欲しい人材である。

「んじゃ、左右の敵を潰してくるわ。あんたは俺とマンツーマンで敵をどこに感じるかを教えてくれ」

『はい!』

「良い返事だ」

『ところで……えっと、どなたですか?』

「時雨だ。高宮時雨。このアイギスの設計者で、イケメンだよ」  
『……?』

「いや、何か反応してくれよ。何か俺寒いヤツじゃん? 今、凍えただぜ」

「純粹な子のようなだ。」

ともあれ、時雨はアイギスを動かしてみる。

ペダルと慣性制御システムで一歩、一歩。やがてそれは早足から走りへと。

背中のブースターを起動させ、発射口の縁のギリギリまで駆け助走をつけた後、出力を最大にする。

イメージ通りに機体は舞い上がる。想定内の重力負荷が自分に掛かるが、この程度はと言うことは無い。

「味方データと敵データは区別できてんな」

赤い点が敵と、まあなんというか、お約束な色合いだ。

空中に漂いながらそんなことを考えていたのだが、甲高い怒鳴り声に意識を戻される。

『おい、時雨! 援護しに出てきたんじゃないのか!?』

「あー? 助けて欲しいのか?」

『素人が出張るなど言いたかったんだ! 戻れ、落とされるぞ!』

「んじゃ、援護するわ」

『話を聞いていたのか!? 初めての操縦で上手くいく奴なんていないんだ!』

「うるせえよ。きゃんきゃん吠えんなよ、わんちゃん」

『わ、わんちゃん！？』

盾のビームビットを起動させ、左右合計八個のビットを飛ばした。頭の中でコースと射撃軸を描きながら動かし、自らもアイギスを艦の上空へと退避させた。

援軍までには、ビットの使い方を学ぶ必要があったからだ。いきなり、ビットと機体の同時行使は流石に無理だろうと考えた故の行動である。

気付いた敵が実弾の銃で撃墜しに掛かるが、お見通し。散会し、収束。また花のように分かれ、それぞれのポジションに着かせてから、砲撃を開始した。

「ジ・エンドってか？」

八方からの一斉射撃。

一機は駆動部を損傷したのか墮ち、避けた機体はその先の味方にビームが当たるのを間近で見て、一瞬動きが止まる。

『もらった！』

鮮やかなレッドカラーリングの人型神機に乗ったローランが、携えていた剣を振り下ろす。

派手な爆発と共に、一つの命が散った。

……自分も、この手で殺してしまった。

心が痛まないわけではないが、そうしないことで自分に影響が出るなら、容赦なく引金を引ける。理屈ではないのだ。

やらなければ、ならないのだ。

ビットを意のままに操る時雨を見て、ローランは疑惑の声を投げかける。

『時雨、あんたホントに初心者なのか？ やけに様になってるけどさ……』

「イケメンつてのは大抵何でも出来るんだよ。つて、そうだ。東西から敵が来てるぜ。俺は西側を潰すから、頼んだ」

『あ、ああ』

時雨はローランの返事を聞いて、満足そうに笑みを浮かべた。

ビットの収納スイッチを押し、飛び上がりながら回収。飛来してくるらしいミサイルを感知したレーダーを見、時雨は真正面に突っ込んだ。

（……こつちが狙われてねえなら）

ミサイルの手前まで来たところで、急速に後退していく。

海面すれすれを背面飛行しながら、シールドを手前に向けた。

（ミサイル破壊と目眩ましを両立させ、潜伏。そこからの奇襲がベターだろうな）

シールドを展開させ、物理振動波を海面にぶつける。

海面が振動波に打たれ、その反動から高くそびえる水の柱に化けた。

柱はミサイルを巻き込み、爆発を水の爆散のみに抑えてしまう。

もうもうと水蒸気が辺りを覆う中、物理振動波から拡散ビームに切り替え、海の中に潜る。ビームの出力上、海の中でも問題ない。

黒い機影が靄の中に見えた瞬間、引金を引いた。

淡い紫の光芒が放たれ、六つに分かれていく。一機を掠め、二機を撃墜するという結果に終わった。

と、通信が入ってくる。向こうの兵士だろう。

『き、貴様……っ！』

「死にたいのか？」

『……ここで戻っても、恥になるだけだ。大和魂がここで腹を切るよう、言っている』

「あーいるんだよな。テメエみたいに勘違いした馬鹿」

『な、何だと！』

「まあ、俺そんなに御人好しじゃねえし？ 時間の無駄だな。あばよ」

再び放たれたビームで、黒い機体が木っ端微塵に吹っ飛んでしまう。爆発と轟音の中、ノイズしかない画面へ、時雨は呟く。

「……その生き方は綺麗だが、馬鹿しかしねえよ。自分で失敗したから死ぬって、どこのアホだったの。失敗したなら、次で名誉を取り返せば良い。殺されねえだけましだろうが」

呆れたように溜息を吐き、時雨はスラスターを起動させ、艦に戻って行くのだった。

人殺しの烙印を、痛いほどに感じながら。

## 二章 感情

### 二章 感情

「えー……軍部の方から、軍属ではないが技術者とパイロットとして協力を要請した、高宮時雨だ。時雨、挨拶を頼む」

初の戦闘から二日経って、時雨は今ブリーフィングルームに立っていた。

その二日は、ここでの世界情勢と歴史学、それと常識を学ばされていたのだ。

軍の適正試験は問題なく、射撃に格闘、反応速度と瞬間的な計算、指揮能力、どれをとっても一級品と称され、軍から請われる形になり、今に至る。

様々な視線が集中するのを感じ、時雨は自然と瞳が細くなった。盛大な溜息を零し、時雨は欠伸をしながら自己紹介を行うことにする。

「あー……、高宮時雨だ。頑張って死に急いでくれ」

「なっ……!？」

無礼極まりないその態度に、艦内の空気は一気に殺気だってしまった。

隣で頭を抱えるフランに、時雨は肩を叩くと、良い笑顔を浮かべて親指を立てる。

訝しむフランへと、時雨は舐めくさった言葉を吐いた。

「ま、ドンマイ」

「貴様の所為だろうが！ 何故言った！ と言うかどうしてくれるんだこの空気！ 折角歓待の場を設けたと言うのに！ 苦労したんだぞ！」

「あーあー、うるせえな……」

中腰になり、フランの整った顔立ちに頬を添え、時雨は彼女へと妖

しい笑みを浮かる。更に真正面から見据え、顔を近づけながら耳元で。

「喰っちまうぜ？」

「……っ！？」

憐れ、処女雪のように白く柔らかな頬を真っ赤に染め、ぐるぐると視線を回しながら気絶するフラン。

苦笑しながら時雨は軍の連中に向き直り、堂々と宣言する。

「俺は異世界から来た。で、俺は俺を呼んだ奴を探して、真意を問いただしたいだけなんだよ。ぶっちゃけ、テメエらの国が滅ぼすと滅ぶまいと関係ねえし？ 他の国が情報流してくれんならその国に味方してもいいんだけどよ、まあそこで気絶してる馬鹿には世話になつたし？ 見極めさせてもらうぜ。それで、俺の眼鏡に適えば、戦争の手伝いしてやるよ」

その高圧的で軽薄な態度に、一人の女性が前に出る。

「貴様などの技術を使わずとも！ 我らが必ず……！」

「無理だな。そのローランが千五百人いれば勝てるんだろうけどよ、お前らド下手だからな。この間の戦争を見ていたが、殆ど敵の過失からできた隙を突いて落としていただけだし、きっとハイエナの方がよっぽど上手く狩をするぜ。それに、俺の偽名は相馬五月雨。趣味の悪いカラーリングの、アイギスの設計者でパイロットだよ」それを聞くと、技術者達が瞠目し、興奮した面持ちでこちらに駆け寄ってきた。一瞬で囲まれ、パイロットの面々も目を丸くしている。代表格の若い男が、こちらを子どものように輝いた眼差しで見上げてくる。

「あ、アンタが相馬さんかい！？」

「おう」

「あれは凄い発明だな！ マシンに対する愛が詰まっている！ それでいて実用的であり、一機で戦況を左右できる機体だった。わ、我々の再現率はとうだった！？」

「お前らの技術にも感動したぜ。あれは良いものだ」

両者、無言で拳を交わす。メカマニア同士の友情結成だ。

技術者には受け入れられたようであったが、プライドの高いパイロット連中の敵意を感じる。時雨はそちらを睨んで牽制しながら、その筆頭である金髪の女性へと挑発的な笑みを浮かべた。

「ってなワケで、だ。俺が手を貸すのは、技術者、ローラン、フランだけ。自分らで何とかできるんだろ？」

「貴様こそ、私達を頼ったりするなよ」

「お前らはいらねえ。俺が挙げた人物以外は興味ねえし」

「……クツ、そうやって吠えていられるのも今のうちだ」

「あつそ」

悔しそうな顔を愉快的な気分で見ながら部屋を出る。

行く充てもないのだが、はてさて、どうしたものやら。

悩んで辺りを見渡すと、一つ目に止まった光景がある。

「……ん？」

窓から見える城。

巨大で、見るものを圧倒するそれは、無論時雨にも興味を示させたけれども、遠い。見る限り二十キロはある。

実家にはバイクがあったのだが、ここにもあるだろうか。丁度部屋から出てきたローランを捕まえて、聞いてみる。

「なあ、バイク……自動二輪車ってあるか？」

「ん？ ああ……。って、免許持ってるのか？」

「軍服着てりやいいだろ」

「まあ、そういった技能を持つてる証拠にはなるけどな。わかった、来いよ。軍のヤツ貸してやるから」

「マジで？」

「マジだよ。その代わりに、オレを街まで乗せてってくれな」

「行きだけで良いか？」

「ああ」

「ならお安い御用だ」

近未来的な外観の廊下を歩き、格納庫へと向かう。

沈黙に耐え切れなかったのか、ローランが口を開いた。

「なあ、時雨」

「あ？」

「軍の適正テスト、トップだったんだろ？ 何で軍属にならなかったんだ？ 援助金も莫大に出てたろ？」

今更なローランの問いに、時雨は溜息を吐く。

「軍属だと縛りが大きいんだよ。だから、軍に係わっていて、それでいて地位の高い役を選んだってワケ」

「なるほどな。格好の情報の収入源だからな」

「ああ。でも、軍だと情報が偏るからな。いずれ街には行かなきゃならなかったのさ」

「……お前らしいな」

「まーな」

「で、目処は付いてるのか？」

「城」

単語だけが明瞭な場所を告げた時雨に、ローランは顔を蒼くする。

「……城？ あの、でっかいヤツ？」

「おう。面白エ気がするんだよなあ。アニメとか映画で見たことあるけどよ、実際近くにあつたら行ってみたいと思うだろ？」

ニヤついた顔をローランへ向けると、彼は慌てた様子で捲くし立てくる。

「ば、馬鹿か！ あそこはな、身分の高い者しか入れないんだぞ！？」

「なら衛兵全員ブン殴ればいいだろうが」

「んな非常識なことさせられるか！ どこまで規定外なんだお前は！」

激昂するローランを見て、ふと疑問が浮上する。

「んじゃ心理テストしよう」

「唐突になんだよ」

訝しげな表情をするローランは無視して、その先を続ける。

「目の前に壁がある。お前はその向こうにどうしても行きたい。他の入り口を探そうにも、壁は果てなく続いていそうだ。どうする？」

「……入り口を探す、かな」

「ヘタレ&M野郎&真面目ちゃんが。延々と探してる」

「どうしろってんだよ！」

「明確な正解ってのはないが、分類すればこうなる。爆弾でも何でもを使って壁を破壊するヤツは、我俣で自分に相当の自信がある。

昇ろうとするヤツは適度に常識踏まえた馬鹿で、梯子とかを掛けるヤツは妙に現実的で頭が若干固い。トンネルを掘るヤツは馬鹿だが頭が柔らかいし、行動力に溢れてるな」

「……お前は？」

「人を焚き付けて壊させるか、次の壁があつたと仮定して他の壁をも越えるような何かを作る。模範例にはなかつたけどな」

意地の悪い笑みを浮かべる時雨を見て、ローランはこめかみを押さえた。

「どうしたよ」

「……眩暈がしたんだ」

「ま、ドンマイ」

「だから何で笑顔なんだよ！」

だが、ローランは決してその時間が不愉快ではなかつた。

どこか安心できている自分がいるのに気付かせてくれるほど、時雨の存在は心強い。

何故だかは分からないが。

格納庫に到着し、端に避けられている二輪車から比較的新しく大型のものを引っ張り出し、IDカードを差し込んでパスワードを打ち込む。

すると起動し、何を動力にしているのかは分からないが比較的静かなアイドリング音が倉庫内に響いた。

「やり方は分かったか？」

「おう。操縦も……ああ、これなら問題ないな」

何せ、地球のバイクとなんら遜色ない。

跨り、専用のヘルメットを被る。

「よっし、飛ばすぜ！」

「……法廷速度、どこも五十キロだからな。人通りが多い道は三十」

「うわ、萎えるわあ……」

「いや走れよ！ 起動までしといてだれるな！」

「二百とか出してえ」

「往来でそんな速度出してどうするんだよ！」

「わーったよ。しゃあねえなあ……」

「何で偉そうなんだよ」

突っ込まれながらも時雨はアクセルを吹かし、喧騒漂う城下町へとバイクを走らせていった。

窓の外の景色を、眺めることしかできなかった。

外では何が起こっているんだろう。

この外壁の向こうには、きっと楽しいことが待っている。

お兄様は、私を連れて行ってくれない。

それはきつと、外には辛いことも待っているから。

私は子ども過ぎて、役に立てそうにもないけれど。

それでも、私は外を見たかった。

雄大な大地と、人々の暮らしと言うものを。

公務や業務に慣れるまでに、一週間掛かってしまった。

俺はまだ未熟で、妹を外に連れ出せるにはまだ早い。

アーサー王の名を襲名したところで、実力が付いていない今ではた

だの看板だ。

有能な仲間を集めなければ。

妹を託すことのできる有能且つ強い仲間が、今の俺には必要だ。軍部の連中は貴族派で信用ならないし鼻持ちならない。かといって酒場の冒険者達は荒過ぎる。一般市民は凡俗過ぎて問題外。城の連中も信用ならない。側近もそろそろ変えるべきか。

「……………」

金持ちを誇張するような悪趣味極まりない廊下を歩いていると、衛兵と一人の 俺と同じ年くらいの男が揉めていた。

「貴様、これより立ち入り禁止だと言っているだろう！」

「見られて困るモンでもあんのかよ」

「軍属の貴様に答える筋合いは」

「俺、こんな服着てるけど軍じゃないのさ。軍に協力してやってる身分でねえ…………。良いじゃん、減るもんじゃないし。見物くらいさせるよ」

「絶対にならん！」

「へー。なら…………荒っぽい手段でいくぜ」

男がズボンのポケットから手を出して、適当に構えを取る。

衛兵も剣を抜いて、それを中段に構えた。

「丸腰で挑むとは…………正気か？」

「雑魚相手に刃物持ってたら可哀相だろ？ いいから来いよ。俺が勝ったら、通らせてもらう。そして、通報すんな。通報したら殺す…………舐めくさりおつて！」

馬鹿だ、と思う。

幼少より剣を習い続けてきた衛兵とただの男。勝負になるはずがない。

刹那、予想通り勝敗は決した。

ただ…………予想外だったのは、男の方が強かったからだ。

正面に振るった神速の剣を男は避け、一瞬で間合いを詰めたかと思ったら、鎧と鎧のつなぎ目に手刀を繰り出し、一撃で衛兵を下して

しまった。

「ば、かな……！」

崩れ落ち、気絶する衛兵をその男は欠伸をしながら眺め、こう呟いた。

「……この警備ってザルだな、マジで」

そして、こちらへと向き直り、おもむろに懐から銃を掲げてきた。

「で？ その兄ちゃんよ、俺を通報するか？」

一瞬怯みかけたが、男の真意を眼光から読めたので、存分に睨み返す。

「どうせ撃つ気はないのだろう？ それに、通報したところで衛兵が君に敵うわけがない」

「何でそう思うよ」

「この国を敵に回すと面倒だろう。観光が目的なら、発砲音を鳴らしてこの場を騒がせたくはないはずだ」

「……へえ。頭でつかちだな、お前」

男の言葉に、思わずこけそうになる。

何だ、この男は。

態度、風格、度胸、行動力。何もかもが突出し過ぎている。

そのくせワザと間抜けな発言をし、こちらの反応を見て面白がっているを見た。こんな人間と遭遇するのは初めてだ。

こちらが頭を整理していると、その男はいつの間にか近寄っており、こちらから懸念していた問題の載っている書類を取り上げ、眺めた。

「……ふうん。街狭間の犯罪組織ねえ。悩んでんのか？」

「ああ。こちらから討伐しようにも、知っての通り隣街のノースガルドとは仲が宜しくない。同じ国だというのに難だがな。しかし、犯罪組織が肥大化しつつあるのは問題だ。軍を向かわせようにも、隣街が勘違いして襲うかも知れん」

「アホか」

「何？」

その男は飄々とした笑みを崩さず、流暢に語ってみせる。

「まず、冒険者がいるだろ。ああ言う輩に立て札かなんかで国公認の討伐令を出し、賞金をいくら出す。そうすれば馬鹿な輩が突付いて騒ぎになり、組織もどちらかの領土に逃げ込む。そこを囲んじまえば済む話で、上手くすれば賞金すら払わずに事が終わるな」

「……しかし、どうやって移動した犯罪組織の足跡を追うのだ？」

「国から密偵を一人だけ冒険者に紛れ込ませれば良いだろうが。軍隊の諜報部でもいいかもな。しかしこの場合、勢い付いている犯罪組織なら人員を募集してるはずだから、犯罪組織に直接送り込むのも悪くない。もしかしたら、隣街とその犯罪組織、繋がってるかも知れねえしな」

一瞬だけ首を突っ込んだだけの人間が、ものの数秒で打開案を見つけてしまった。しかも、その裏にある可能性まで一瞬で手繰り寄せて。

最近複雑な雑務に掛かりきりだったので頭が回らなくなっていたのは認めるが、それにしても早い。そして、先程のあの強さ。

有能な、仲間に相応しい人材だ。

気付くと、その言葉は自ずと出ていた。

「……お前、俺の仲間にならないか？」

長身瘦躯の銀髪の男がそう言い、時雨は肩を竦めた。

男の顔からは疲労が濃く滲み出ている。それも、精神面と肉体面の両方。恐らくは、ここの城の高官か主か。

どちらにせよ、友好の幅が広がるに越したことはない。

「仲間にはならないね。縛られんのはゴメンだ」

「……そうか」

「だがまあ、俺もそろそろ友人が欲しいわけよ。利害関係なく、互いを励まし支えあう。損得なんて二の次。俺は異世界から飛ばされ

てね、頼れたり頼られたりする人間がいないんだな、これが」

「異世界？　では、軍部が言っていた技術協力者か？」

頭の回転は悪くなさそうだ。知的な外見からもそれは覗える。質の高い黒い服を身に纏い、全体的に白く線の細いボディーラインが良く映える。削げたような頬と鋭利なブルーの瞳、後ろの方で結ばれた長い銀髪に、フレームのない眼鏡が特徴的だ。顔立ちも端麗で、それが高貴さを匂わせているのだろう。

適当に値踏みしながら、時雨は首肯を返し、言葉を続けた。

「正解。噂のイケメン、高宮時雨だ」

「……まあ、友人の件なら構わん。俺はロツテンシャルル・ド・アーサー。ロツテでいい」

「じゃ、決まりだな。ロツテ、今から俺が組織潰してきてやるよ」  
「……何？」

怪訝そうに眉を顰めるロツテだったが、どうもこうもない。

「次、俺の立ち入りを全面的に許しといてくれると助かる。んじやな」

「そこまでの理由を述べてから行け！」

「友人が困ってたんだ。手を貸すのが筋ってモンさ。それに、残りの書類の問題も片付けとくから、さっさと寝ろよ。疲れてんだろ？」

「！？　……お前」

「んじやな。王様だかなんだか知らないけど、そう言うのは無理するこたあないんだぜ。ま、友人に任せとけよ」

「……お手並み拝見だな」

「全部解決してたら、労ってくれや」

「まあ、俺の友人になるなら当然だがな」

「……言ってくれるねえ」

そう言われた方が、張り合いがあるというものだ。

城門まで乗り付けていたバイクに跨って、さっそくその現場へと向かうのだった。

夜。

あれから素直に寝台で横になっていたロツテだったが、あの友人になりたいと言っていた技術協力者 高宮時雨を思い出し、まどろみから目を覚ます。

まさか、あれから全ての事件を解決しているはずはないだろうと思う。

何せ、あの事件の他に、『グランディアの隠し土機生産ラインを暴く』、『新量産型神機の設計図』がある。幾らなんでも、早々に片が付く話ではない。

身を起こし、眠気で緩む表情を引き締めながら執務室に向かうと、慌てて従者の一人が駆け寄ってきた。

「王！ 高宮時雨と名乗る男性から、例の犯罪組織を軍が一網打尽にしたとの報告書とグランディアの生産ラインを押さえ且つ奪取したとの報告書、それと従来に無い量産型神機の設計図が届けられています」

眠気が、一気にどこかへ飛んでいった。

「……本当なのか？」

「え、ええ。確証は取れております。こちらが犯罪組織のメンバーとリーダーの拘束写真、次に工場の写真、最後に設計図で御座います。いやはや、よく出来ていますなあこの設計図は。何でも、あのアイギスを企画したのも時雨殿であるとか」

「……そうか。おい、高宮時雨は内密に国宝として扱え。私の友人だ。何かあったらただではすまさないぞ」

「か、畏まりました！」

慌てて出て行く従者を視線だけで見送り、ロツテは設計図を画面に浮かべる。

量産型の最低基準として、コストと武器の比重、操縦マニュアルの安定、経験の浅い兵士でも手足として扱えるOSプログラムが要る。装甲を従来より薄くし、機動性を上げて扱いやすくしたのは正解だ。OSの改善によって小回りがより利くようになったのに、軽量化を図らないのは無駄だろう。

武器も燃料の掛かるビーム兵器はマシンガンしかなく、他は回収可能な兵装が生まれ、コスト的にもパワータ的にも申し分ない。

「有線巻き取り式の中近距離型ソードか。内部爆発カートリッジでも装着できれば、威力は増すか。隊長機に積ませるとして……ふむ」特に欠点といった欠点は見当たらない。

他にも、屈折機構搭載の遠距離用狙撃ライフルや水中推進バーニア、宇宙用重兵装パックが考案されており、汎用性もある。

「……眩暈がするな」

書き込まれた膨大なOSの内容を見て、苦笑する。

「いるのだろうか？ 時雨」

虚空へと声を投げてみる。

すると、玉座の裏からその人物が顔を出した。軍帽を目深に被っていたのだが、それを取り払うことで、端正だがニヤついた笑みで台無しになっている顔が露になる。

「八時間振りだな。どうだい、俺の手際ってのは」

「お前が十人いてくれれば、他の国を完全に潰すのに一日も掛からないだろう」

「その後、多分十人の俺は殺しあうだろうけどな」

「物騒だな」

「平和ボケしたこの国にはそう思う人間しかないわな」

「……平和ボケ？」

「ああ。この街の連中、全員暢気な面してやがる。胸糞悪イ」

「民を不安にさせぬように配慮してあるからな。汚れるのは俺たちだけでいい」

「そういった選民思想が気に食わねえ。この国の法は厳しいが、国

を抜けてはいけないとは無かった。ってことは、だ。連中好きでここにいるんだろ？ だったら遠慮はしなくていいんじゃないか？」「ここでの暮らしというものがある」

「確固たる意思がありやな、暮らしたなんて簡単に捨てられる。守りたい、好きだから、世迷言だろうけど、何せ勢いがあるからな。それに人間ってのは凶太い生き物で、大体どんなところにだって定住しちまうもんさ」

何故か、そのニュアンスには「苦勞したよ」という意味合いが含まれているように思った。

「経験論のようだが」

そう返してみると、時雨は一瞬だけ視線をそらし、苦虫でも噛んだかのような表情を残したまま、器用に笑った。

「ま、俺にも若い頃があったってワケよ」

「今も若いだろうが」

「心だよ心」

「……まあいい。で？ 俺の信用を勝ち得て、何をする気だ？」

「別に」

「……何？」

「いや、なーんも考えてねえなあ。……そうだなあ、この後、城出ないか？ 美味しいラーメンがあるんだよ」

「ら、らーめん？」

「おう、決まりだな。んじゃ、行こうぜ」

「ま、待て！ まだ行くとは言って」

「が、言うだけ無駄だった。気が付けば、目の前には、湯気と美味そうな醤油の匂いが漂う丼が置かれていた。

木製のテーブル。瀟洒さの欠片も無い、無骨なデザイン。

酒やタバコ、他の臭いまで入り混じる中、その醤油の匂いが抜きん出て強く、それが何とも言い難い空腹感を覚えさせてくる。

「……何だこれは」

「醤油ラーメンだ。俺の世界じゃ、知らないヤツなんていないぜ」  
「こつちじゃ、知ってる方が珍しいがな」

無駄に良い体格の男　店長だろ。糸目にスキンヘッドといった、よく分からないスタイルをし、威圧感に満ちている。店内の柄の悪そうな連中が大人しく麺を嚙っているのも彼の存在の所為か。

「違うね」

「……？」

「心を読んだのさ」

「読むな！」

「ま、一口食ってみりゃ分かるさ」

そついい、時雨は麺を豪快に嚙りこむ。

箸は一応使える。時雨のようにはいかないが、自分も嚙ってみた。

「……美味しい」

口から自然に零れたその言葉に、時雨と店長は歯を剥いて笑う。

「外に出て見ねえと、分からないことつてあるだろ？　何でも、自分一人でやろうとすんな」

「あ……」

父を思い出す。

神出鬼没で、大概は外出していた。雑務は下っ端に押し付けるその傲慢さが気に入らなかつた。

だから、こなしで見せようと思った。一人で全て片付けて、『アーサー』の家名に相応しい人物になるのだと。

違ったのだ。

「要は、人を上手く使えつてこつた。お前には地位と権力がある。その言葉に他にない力がある。だからよ、無駄にすんな」

「……ああ。流石、俺の友人一号だ」

「お前……友達、いないのな」

「黙れ」

「嫌だね」

「……」

「こう切り返されたのは初めてか？」

「ああ」

「ならいい。俺ら是对等の関係だ。命令なんてぜってー聞いてやんねえ」

「……ふむ。分かった」

「よし、とりあえず食おうぜ。伸びたラーメンなんざ、焦げた焼肉の次に不味いんだよ」

「……焼肉？」

「あー？ テメエ焼肉も知らねえのか？ ……まいいや。今度から、度々連れてってやるよ」

仕方無さそうに、しかしそれが苦でもないかのように笑っている時雨。

彼が、堪らなく眩しい存在だと、そう思える。

心の中の小さな嫉妬心を粉碎してしまったロツテは、どこか清々しさを覚え、そのラーメンを啜った。

### 三章 敵国との衝突（前書き）

二ヶ月以上放置しましたが、一応続いています。  
気紛れ更新は相変わらませんが、HPを作ったもので……。  
そこでは黒飴 時雨と名乗っております。

### 三章 敵国との衝突

#### 三章 敵国との衝突

現在、ここアースガルド帝国は、シュバルツガルド王国とグランディア王国の攻撃を受けている。

都心部には攻撃は来ていないのだが、前線の真つ只中では今日も多くの人々が犠牲になっており、事態は悪化していく一方。

シュバルツガルドは無骨で巨大な量産型『黒機』 通称、『ナイト・ゴント』を主力に。グランディア王国はシュバルツガルドと協力して仕上げた『八咫鳥』をバックアップに動員し、勢力をじわじわと広めている。

我が国にも、相馬五月雨と言う技術者との協力を得ることに成功し、新たな量産機 『ヴァルキュリア』を開発した。

しかし、感受性の強い女性しか乗れないとの事で、軍は女性パイロットの早急な育成と訓練に熱を入れ始めたようだ。

我が国の勝利を、国民はただ願うしかない。

そこまで読み終え、時雨は鼻を鳴らして新聞を放り投げた。

ベッドに仰向けになって寝転がり、溜息を一つ零す。

「どこに行っても、マスコミってのは屑だな。ジャーナリストってのもこんな卑屈なことしかやらんのかねえ……せめて、何が出来ることは無いだろうかって締め括って欲しかったよ、アホくせえ」  
時雨は、軍から与えられた自室にいた。

スプリングがよく効いたベッドに、PCや携帯端末などが置かれたデスク。最低限のテーブルにソファーだけの、素朴な部屋だ。

クロゼットには、あの趣味の悪い服とここでの私服、それに予備の軍服が収められている。

生活には慣れてきた。何の因果か、あまり日本と文明は変わらず、むしろ機械技術はこちらの方が遙かに進歩している。

軍内部には馴染めないが、それでもフランやローラン達とは上手くやれているし、こここの王子　ロッテとも交友が持てた。これで、大分融通が利くだろう。

そしてようやく、当初の問題に取り掛かれる。

(……俺は、どうやったたら戻れるんだ?)

無機質な天井をぼんやりと眺めながら、思考してみる。

あの時　『停めて』とあった。

『止めて』ではない。『停めて』とあったのだ。

調停、バス停……まあ、咄嗟に思いつく限りではその程度だが、停めると言う文字を使った言葉といえば、大体それが代表格だ。

仮に調停だとして、やはり戦争を調停すれば良いのか。

だとしたら。

「この戦争を終結させる」

これが、一般解答。

前向きでとてくだらない解答。

「もしくは……メッセージ送った張本人見つけて、とりあえずぶちのめす。んで、元に戻してもらおう」

これは、捻くれた解答。

後ろ向きで、しかし人間らしい解答。

「それか……いつその事、全てを受け入れここで暮らす」

言うまでも無く、無気力極まりない解答。

「……ま、とりあえず目先の事だな」

立ち上がって、ソファに投げてあった軍服の上着を肩に引っ掛ける。

今日は、軍と民間の代表が集う会議だ。

会議は、ずっとこんな具合だった。

「今ここで総攻撃を掛ければいい！ そうすれば、裏切ったシュバルツガルドや卑小なグランディアの国の連中なぞ、ゴミのように踏み潰せる！」

「しかし、大丈夫なのでしょうか？ 軍備は進んでおりますが、正面から衝突するほどの力は……」

「役立たずが！ 我々を守るのが軍の仕事だろうが！」

「す、すみません！ 何分、才能ある人材を育てるには時間が……」  
「大体、軍が悪いのさ！ また、こっちにまで敵が来ていたそうじゃないか！ 僕たち市民の安全は軍が保障するんだろ！ 馬鹿かさつさとしろってんだよ！ いつになったら安全に暮らせるんだ！」

「そうですね。全く、軍の魯鈍さもここまでくれば芸術ですわね。私達貴族も、数人軍に加わっていると云うのに、才能を生かしきれていないなんて……ホント、嘆かわしい」

市民の代表が一人、貴族の代表が二人、軍の代表は時雨とフランの二人。

質の良い軽食や飲料が円のテーブルに並んでおり、フランは怒鳴られてひたすら悔しそうに俯いている。

時雨は無遠慮に軽食を口へ運びながら、半眼で全員を見やった。

「どいつもこいつも、馬鹿ばかりで。馬鹿カーニバルでもするつもりなのだろうか。」

「おいアンタ、無関係な顔するなよ！ アンタも軍の代表だろうが！」

時雨はフランの机においてあったレモネードを拝借すると、市民代表とやらの小奇麗な顔にそれをぶっ掛けた。

目に入ったのか、顔面を押さえて、代表さんは惨めに床の埃を巻き取っていく。

「うわあああああああああああ

っ！？ 目、目が……

！ 痛……くそ、なん

それ以上、言葉は続かない。

時雨に全力で踏みつけられ、肺に行こうとした空気を全て吐き出してしまったからだ。

「……何逆上せてんだよ、役立たずが。守られてるだけで戦争が終結すりゃ、そりゃ楽だよな。お前ら、実質ストレス発散する口実が欲しいだけなんじゃねえのか？」

その言葉に、貴族達は鋭い視線を向けてくる。

女性の方がこちらへ近寄り、儀礼用のサーベルを腰から抜いて突きつけてきた。

「あ、貴方！ それは我が家の事を知つての事ですの！ 我々は、この国の為に尽力した者の子孫で、この国を憂い、文句を言うのは当然

時雨はその切っ先を掴む。無論、血が流れ出すが、動揺したのは貴族だけで、時雨はどうでも良さそうに呆れた声を出した。

「あー優生学って奴か？ 賢い者の子は賢い？ ハッ、流行らねえよ、ダセえな。そのパターンはな、代々劣化していくもんなんだよ。親が権力を持ったから、自分も偉いと勘違いしちまつてる。能力は凡でも、多少色の付いた評価をもらえるからな。恵まれた環境で育つたら、そりゃ学力は馬鹿でもそこそこにはなるだろうよ。だから、品質が劣化して行つてる事に誰も気付かねえ。王政が滅んだ理由で、それに当たると思わねえか？」

「愚か者！ 私は違いますわ、己の才能だけでここまで

「愚か者はそつちだろうが、この劣等女。『我が家を知つての事か』って今さっきお前が言ったんだぜ？ 面白え冗談だな、オイ。何が己の才能だ？ 家の後ろ盾がありますよって自己アピールされた後にやられても、見つとも無いだけだぜ？」

そこで、男の貴族がこちらに近付き、胸倉を掴み上げてきた。

「しかし、進展が無いのも事実だろう。どうしてくれるんだ！ 今

「この間にも、死んでいく者がいるのだぞ！」

「じゃお前、次に死んでくれるか？」

「な、何……？」

胸倉を掴み返し、拳句に首を締め上げていく。

「なあ……。今死んでる大半が軍人なんだそう。何でだろうな。

国に一番尽力してる奴らが死んでるのに、何お前らはのうのうと生きて、死ぬかもしれないそいつらを馬鹿に出来るんだ？ ふざけた話だよな。お前らは口を開けば自分の安全か家の事なんだろ？ 貴族の仕事は着飾ってサロンで踊る事か？ ……そうじゃねえだろうってんだよ！ 国が惜しいなら、例え生身でも敵に向かって必死に戦うだろうがッ！ 何デメエらの腐った物差しでこいつを測って馬鹿にしてんだよぶっ殺すぞッ！！ ミサイルに縛り付けて、人間爆弾にでもしてやろうか！？ ああッ！？」

苦しそうな貴族の顔に一発拳を咬まそうと思っただが、腕を引かれた。

フラン。だ。

叱られた子供のようについに俯いたまま、首を横に振る。

「離してくれ、時雨……私が悪いんだ。戦艦を指揮して、固有の『神機』まで持ちながら、まだ打開策が見当たらない。地道な方法しか」

腕を放し、転がる男には見向きもせず、時雨は彼女に向き直り

「ほひゃ！？」

涙の残が残る紅く高潮した頬を掴んで、ぐりんぐりと回し始めた。「ひゃ、ひゃめろ！ ひふれ！ ひゃめろほいつへ……痛っ！？」手を離して、その赤い鼻っ柱にデコピンをくれてやる。

恨めしそうにこちらをみるフランへ、いつもの笑みを浮かべて時雨は笑い掛ける。

「お前は良くやってるよ。あの頼りない部下を統率し、事務処理から新人の育成まで、ほとんど寝ずにやってるのを知ってる。隈なんか作って、こんなに小さな体で頑張ってたろうが。あせらず地道にやる事がどれだけムズいか、このボケどもには一生理解出来ない

「だろうがな」

時雨は転がっている連中に視線を向け、不適な表情を浮かべたまま銃を抜いた。

「……俺はな。親しい連中の事しか眼中にねえんだ。質か数か、どちらを多く救うのか。簡単だよ、質に決まってるだろ？ ぶっちゃけ、他の連中なんてどうでもいいしな。……お前ら、俺の意見に少なからず反発を持ってたろ？ そこが下らないんだよ」  
鼻で笑いながら、続ける。

「人間つてのは、言い変えりや悪魔なんだよ。考える事を与えられてからな。そうだな……善悪の観念的に言えば、法を守る事が善として、法を破りや悪だ。だとしたら、お前ら全員悪だよな。俺も勿論そうだ。だってそうだろ？ 永遠の命を望む事も、法律が可笑しいと否定する事も、長生きしたいと言う事も、愛と言う存在すらも、国によっては悪になっちまう。天使つてのはな、身内にも容赦しねえ。誰でも平等に裁く。人間には絶対に出来ないよな。けど、悪魔は違う。その時々で感情で動く、飽きつばい刹那主義だ」

自分の紅茶を空いた手で引き寄せて、更に続ける。

「下らないって言ったのは、無理して天使のフリをしたがるからさ。こぞつて、馬鹿みたいに正義を主張する裏で、はみ出し者を追放して法を守ろうとする。しかし、それにも裏道があつて、金を渡せばどうのこうの……。そりゃ矛盾だらけにもなるだろ、悪魔が天使の皮被ってるだけなんだからよ」

「……何が、言いたい？」

「分かんねえか？ んじゃストレートに言っわ」

トリガーを引いて、紅茶のカップを粉々に粉碎してみせる。

「……テメエら全員、今すぐ失せろよ。ここは建設的な意見も出さずに愚痴言い合う場所じゃねえだろうがッ！！ 天使の皮被ってたのなら今すぐ反論して見せてみるよこの腰抜けどもがッ！！ そうでなきゃ、他人に迷惑掛けないように、自慰みたいに延々と内輪で粹がつてろ！ 専門の軍にどうこう出来ない問題がここで片付くと

本気で思ってたんなら、今すぐに何か出してみる！ 偉いんだろうがよッ！！ どうなんだっつってんだッ！！」

気まずそうに顔を見合わせる三人だったが、時雨の迫力に押され、逃げるように部屋を出て行った。

と、オペレーターから通信が入る。

携帯端末を取り出しボタンを押すと、立体ホログラフが浮かび、桜色の髪をした無表情な少女と回線が繋がる。

『こちら、アリサ・ブリュンヒルデ。話は聴いてた。時雨、グッジョブ』

「おお。俺マジカッコいいだろうが。もっと誉めてくれていいぜ」

『きゃー素敵。ちょーイケメン。結婚してー』

「棒読みかよ、寒いぜオイ……」

『後でご褒美に金平糖あげる。万歳三唱プリーズ』

「わーい、やったー！ ……これでいいのか？」

『録音した。時雨さんマジ天使』

「いや、そこはマジイケメンにしとけよ。天使だなんて薄ら寒イ…

…」

そこはどうでもいいのか、アリサはフランに向き直った。

『で、フラン艦長。どうする？ 前線からヘルプなう……』

なうって……。

フランは目元を袖で擦ると、意を決した良い表情で、高らかに宣言した。

「無論、救援に行くぞ！ 出撃は少数精鋭で、私と時雨、それと口

ーランだ。ノストラダムスを時雨のアイギスに搭乗させる！」

「おいおい……勝手に決めんなよ」

「すまないが、一番安全なところだ。……頼むぞ、時雨」

「分かったよ。んで、どうした？ もう泣かないのか？ 俺の胸で

泣いていいんだぜ？」

「……馬鹿者が」

苦笑し、フランは通話を切って端末をこちらに寄越してくる。

「……………さあ、一仕事だぞ！」  
「ああ」

時雨は笑みを浮かべながら、走り出したフランの後を追うのだった。

前線では、危機的な状況に陥っていた。

「おい、敵はどうなっている！」

『て、敵……………感知できません！ ステルス信号もまるできか

』

刹那、また一つの命が消える。

爆散した前量産型神機 『フィルギア』の機械片を浴びながら、黒い甲冑のような機体が姿を現し、再び消えた。

「くそ……………！ 何なのだ、あの機体は！ 一機だけで、この艦隊を

」

と、通信にノイズが混じり、仮面を付けた 女性の姿が映された。

「だ、誰だ！？」

その質問に答えず、女性はただ尋ねる。

『何故、争いをするのですか？』

「な、何……………？」

『争いを広げて、どうなるのですか？ 勢力が台頭し、潰し合い、また生まれる。その繰り返しを、なぜ是としているのですか？ 何故、そこから何も学ばないのですか？』

「ええい、今は戦時中だ！ 己の欲しい物が拮抗している以上、争うのは当然だ！」

『……………そうですか』

辛そうな声に驚いたが、相手は敵。

敵は、討つ。

実弾の機関銃を縦横無尽に撃ち、ただ応戦しようとした。  
しかし

『さようなら』

刹那に、その機体も真つ二つになってしまふ。

姿を見せた黒い機体の手には、一振りの無骨な刀が握られていただけだった。

## 四章 磐長姫

### 四章 磐長姫

さて、どうしたものでしょうか。

フランの話によれば、前線まで結構な距離があると言う。そして、敵は未確認。映像を捉える事も出来ずに、前線メンバーは残り五機にまで減らされたらしい。

普段なら一抹の不安を覚えていただろう時雨だが、今はそれよりも気になる事がある。

「……いや、お前さ」

「はい？」

時雨の声に振り向いたのは、小学校にでも通つていそうな年齢の蒼い髪が綺麗な少女。確か アイリス・ノエル・ノストラダムス。名目上の副艦長でもあり、特別な感応能力と『予言』と言う一種の未来予知能力を得ているらしい。頭脳明晰で、運動神経は鈍くさいらしいのだが、軍には無くてはならない人物のようだ。

問題なのは、その未来予知能力。

彼女は未来を見ている。なのにその蒼い瞳は無垢なままなのが、気になって仕方が無い。それと、何故か彼女の目を見ていると、不愉快になる。

普通、未来を見ていると激しい既知感に襲われる。ドラマとかフィクション映画とかでよくある、文字通り『人生に飽きる』状態に人は陥るのだ。

何をしてもその先は見えている。なら、ただ流されるのが楽だ。無理に頑張つて体力を浪費するよりも、その状態の方が人間らしく、選択し易い。

物語的には、大体未来を見て諦めるのはヒロインで、未来を変えようとして奔走するのは熱血系主人公のパターンが多い。

熱血系は大体馬鹿なので、出来なかつた時を想像しない。ヒロインは特有の感受性で深読みをしてしまうから、引き籠もりみたいに同じ駄々を繰り返すだけ。

互いが足を引つ張り合うが、結局、主人公の熱に負けてヒロインが落ち、ハッピーエンド一直線。馬鹿か。ご都合にも程がある。

ともあれ、臨時に設置した前方座席のアイリスへと、目を合わせながら問い掛けた。

「……お前。俺の未来、知ってるんだろ？ 自分がこれから、どうなるのかも」

「はい」

「何で……お前の目は澄んでんだ？ ……いや、違えな。覚えがあるな、その目。なんでこうムカつくのかも……」

それは、全てを悟つたような顔をして、見飽きているにも関わらずそれにそっぽを向いている

「ああ、負け犬か。その目」

現実を受け入れようもしない、負け犬の目だ。

いや、逃げるのが悪い事とは言わない。ただ彼女は、中途半端に逃げているから駄目だ。

求めてくれる、必要とされているから私はここにいる。

そんな理由。

元の世界にいた頃に、そんな連中は腐るほど見ている。

この少女は、軍に飼われている犬。質の良い突発的な異端児だから、首に輪をつけられ、それを喜んでいる変態だ。

「……中途半端だな、お前」

皮肉交じりにその口にすると、彼女は笑って答える。

「はい、分かってます。でも、貴方も私を必要として下さるんですよね？ 敵は視認不可能。なら、私の予知で」

嗚呼、こいつ嫌いだ。

自己犠牲で同情を誘おうとしている。意識してではない。自然にそうしているから、尚腹が立つ。

「俺、攻略本って死ぬほど嫌いなんだわ。要らないね」

その言葉に、アイリスは動揺を隠せず、崩れた笑みを浮かべて再び訊ねてきた。

「あ、あの……私の予知、確かですよ？ 私の予知がないと貴方……死んじゃう可能性の方が、圧倒的に……！」

「だから？ ああそっか。そうだよな。お前も我が身可愛いだよ。だったら、内装してる脱出艇で逃げてろ」

鼻で笑ってやると同時に、フランからの通信が入る。

『私だ。予定通りに行くぞ。ノストラダムスの予言を使い、戦う。』

時雨、予言は

「嫌だね」

『……その返答くらい予想していた。しかしだ、時雨。今は危機的状況に』

「いや？ 俺達は別に危機的な状況じゃないだろ。はい後ろ向いてブースト全開。ほら安全」

『……いい加減にしる。我々の仲間が戦っているんだ』

「は？ ……あのさあ、お前ら何なの？ ちんけな仲間意識でも生まれちゃったのか？ この俺に対して？ 馬鹿かよ。言わなかったか？ 俺はお前らに義理立てしてるだけで、別にこの国裏切ったっていいんだぜ？ 最悪、元の世界に戻れりゃ良いしな。敵さんがお前ら潰せば戻してやるって言うてくれりゃ、喜んで従うぜ」

『……時雨』

「普通、さっさと帰るはずの人間が自らを全部晒すと思うか？ 答えはノーだ。それでも実際、手を貸してやったろ。俺ちよー優しいだろ。ヤベえ、親切すぎて泣けるわ。なのに、健気な俺に入ってくる情報は無いし、積極的に搜索もしてくれてねえだろ。いい加減うんざりしてんだ。と言うか、命令してさっさとこの犬に吐かせるよ。予言で、俺が来るってのも分かってたんだろが」

言うと、今度はノストラダムスが俯いてしまう。

「私は……望めば、少しだけ未来が見えるだけなんです。知らない人の未来は見れません。貴方の未来だって、物理的に距離が近いから、少し遠くまで見れるだけなんですよ」

本当に、中途半端だ。

溜息を吐いて、ニイと時雨は笑みを浮かべる。

「こんな野郎に自分の運命任せて、お前らは本当に満足してんのかよ。未来なんて知らないね。今尚過ぎ去って行ってるだろうがよ、未来が過去にな。……俺は要らないや、こんな機能制限の付いたガイドブックなんてよ。はいお手ごろ価格、今なら三百九十円。お求めやすいだろ？」

バン！ と、コンソールをフランは殴りつけた。

「貴様は存在意義を考えた事があるのか！」

「オイオイ、今度はお説教かい？」

「黙って聞け！」

長い髪を振り乱し、威嚇するように吠えて来るフランを見てると、何だか子犬を思い出してしまう。

零れだしそうになる笑いを堪えながら、時雨はフランの話に耳を傾けた。

「軍人は誰にだって役割がある。アイリスはな、ノストラダムスの血統と言うだけで軍に拘束され、未来視を強制させられたのだ。軍も全員も、未来視を頼りにしている。例外は、お前とローランくらいだ。……お前にはこの辛さは、分かるまい。誰からも等しく頼られる所為で、孤独なんだよ」

時雨はおもむろに長い溜息を吐き出す。長い、長い溜息だ。

馬鹿馬鹿しい。その感情を隠そうともせず、時雨は軽薄に晒いながら、訊き返した。

「……で？」

「何？」

「だからどうしたってんだよ」

アイリスが怯えているのが分かるが、構わない。

時雨はその笑みを維持しつつ、続ける。

「アホかお前。誰もがそいつの事情に共感してくれると思うなよ？ てか、それ以前の問題じゃね？ 抗う事なら出来たのに、そいつはそれをして来なかっただけの話だろ。でたらめ言っておけば、出来損ない扱いでお役御免。晴れて自由。けど、そいつはそうしなかった。頭良いんなら、真っ先に理解出来たろうに。それは何故か？ そりゃ、拘束されてた方が遥かに楽だからだ。こいつは選んでたんだろうが、とつくの昔にな。それを今頃悲劇のヒロイン気取って混ぜっ返しやがって……ヤツべ、感情移入出来なさ過ぎて泣けるわ」

「違う時雨！ 誰もがお前みたいに強くは無いんだ！」

「そつだな、だから言ってるだろ？ 誰もがそいつの事情に共感してくれると思うなつて。そいつの事なんざ俺が知るかよ。つか、知った事が邪魔くせえ」

「……お前には人の気持ち慮る事が出来ないのか？ 何故、そんなに辛辣なんだ！」

「じゃあお前はアレか？ こんな時にそいつを抱きしめて、『頑張ったね……』とか『辛かったね……』とか薄ら寒イ台詞吐いてるつてののか？ ハハッ、ウケるな。どこのドラマだよ、反吐が出るぜ。……俺はな、頑張れば噛み切れる鎖へ、ただの一度も牙を立てなかった野郎なんぞに掛ける言葉なんて持つてねえんだよ。酸素が勿体ねえ」

所詮、人間は感情で動く動物に過ぎない。

理性で制御しようとするから、神経を磨り減らしてしまう。磨耗した神経から欠落が生まれ、欠落が失敗に繋がる。さしずめ、負の連鎖。

その無限ループから、アイリスは抜け出せずにいる。

第三者が共感してしまい、慰めでもすれば、癒着が生まれる。それは彼女自身の成長を阻む事に他ならない。

これは、彼女が気付かなければならない。

彼女を取り込めれば、後の展望が楽になる。何としても、成長してもらわなくては。

その気持ちを汲んでくれない義に熱い軍人様は、憤然と通信を切つてしまい、ポップアップが消えた。

気まずい沈黙が機内を支配する中、アイリスが目には涙を滲ませながら、訊いて来る。

「あ、あの……私、は……要りませんか？」

「ああ。今のお前なんか、要らないね」

「え……？」

「お前、多分受動型だろ。未来視の能力は、大抵見る範囲が決められているか、枝分かれに派生している分岐を見る事が出来るかのどちらかだ。お前は、前者だろ？」

「は、はい……」

「……なら、お前の感情一つでどうにでもなるさ。お前が見ているのは、『お前が傍観者を決め込んだ時の運命』に他ならないんだからよ。だから、今のお前はいらねえ」

笑いながら、時雨は頬の高潮を抑える。恥ずかしくて、蕁麻疹が出そうだ。いくら利益の為とはいえ、言うんじゃないかった。

少々後悔しながらも、時雨は神経を外に張り巡らせる。

順調に飛行を続けていた『アイギス』だが、何やら気流が乱れているらしく、少し目標座標への軸がブレていた。

音声回線を開き、全員に通達する。

「よお。こりや人工物からの風だぜ？ 潮の流れと空の流れじゃ、絶対にこうはならねえ」

『流石だな、時雨。隊長、どうしますか！』

『……各員警戒を怠らず、フォーメーショントライアングルで走行行くぞ』

フランからの通信が切られ、ローランとの間にまたもや沈黙が発生する。

『……お前、地雷踏むの大好きだろ』

「遠くから爆発させんのが面白くてな」  
『オレにも被害が出てくるから止めてくれるか!? また理不尽に給料カットされたらどうするんだよ!』

横暴過ぎだろ、それ。

ローランの溜息がスピーカーの向こうから聞こえてきて、時雨もまた苦笑してしまう。

「悪いな、今度ラーメンでも奢るわ」

『ま、別に良いけどな。お前は何かかんだで優しいから』

「あれ? お前、もしかして俺の貞操狙ってる?」

『何でそうなるんだよ! ……』 『甘い』と『優しい』は違っつて、ちゃんと分かっている奴だからって事さ』

「あー……あれか? 普通の飴は甘くて、特別な存在にくれてやるキャンディーは優しいって、そう言うアレか?」

ブツッ。

あの野郎、無言で切りやがった。折角、ヴェルターズでオリジナルなキャンディーについてこれから熱く語ってやるうかと思っただのに『アイギス』を右翼に配置しながら、時雨はシールドを展開する。いざとなれば、物理振動波を喰らわせて位置を割り出せば良い。そうなれば、後は叩くだけだ。

と、画面にノイズが走り、仮面を被った女性の顔が映し出される。

「あ、あの……!」

「黙ってな。こりゃ、多分だが……俺らにしか通じてねえ」

『ご明察。流石の慧眼です、相馬殿』

刹那、時雨の表情が険しくなる。

しかし一瞬で表情を元の軽薄なものに戻して、更に笑みを重ねた。

「……その仮面、分かっているな。やっぱ、敵のエースパイロットの一人は、仮面付けてねえとな」

『?』

「いや、可愛く小首を傾げられても困るっつーか……」

やはり目に付くのは、鈍色に輝く、黒い岩のような仮面だ。

次に、綺麗な長い緑色の髪。肌は白いが、日本人特有の張りが見られ、何だか落ち着く事が出来た。

『……見れば見るほど、グランディアの民ですね、貴方は』

「アンタも、髪が黒けりや日本人なんだがなあ……。ま、いいや。ほら、用件があるんだろ？」

『攻撃、なさらないのですね』

「ほら、俺イケメンで超紳士じゃん？」

『じゃん？ とか言われましても、その……初対面ですからそりゃそうだ。』

咳払いを一つして、女性が形の良い唇を開いた。

『何故、争いをするのですか？』

「欲しい物があるんじゃないの？ しかもそれは拮抗している。なら、力だろ」

『しかし、いつまでもそれでは埒が明きません。聡明な貴方なら、分かるでしょう？ この愚かな無限ループが』

「んじゃ一つ心理テストでもやろうぜ」

またもや小首を傾げる女性に対して、時雨は無邪気な笑みを浮かべた。

「手の届かない場所にクツキーがある。アンタはそれを食べたくて仕方が無いわけだ。この時、お前はどやって取る？」

『……取ってもらおう、ですか？』

「アンタ、前言撤回しな。自分で行動する前に他人へ声を掛ける奴が、何他人に指図してんだよ。争いを止める？ 言うのは簡単だ。

んで、聞かない奴らを武力制圧するんだろ？ それじゃ何も変わらねえと思わないか？ 戦争を終わらせたいから、敵対する勢力を倒す。あれ？ お前の言う争いって、これじゃん？ あらー」

『なっ……！？』

絶句している女性だったが、動揺している今が好機だ。

「……お前、何で俺の事知ってるの？」

『答える義理は、ありません！ 貴方とは相容れない！ なら、こ

ここで！」

と、通信が切れて、時雨は脳裏に閃く何かを感じて、右にブーストを使って回避した。

そこへ、一陣の鈍色が走る。鋭い一撃だ。これは、叩き潰すような戦いの剣ではない。もっと別の……。

「時雨さん、上空三百メートルから接近です！」

アイリスが叫ぶのを聞くと同時に、時雨は上へ向けてシールドを展開し、物理振動波を発動させた。

周波数を著しく変動させ、どんな通信や電波さえ捻じ曲げる。その振動波は、当て続ければ鉄鋼ですらボロボロにしてしまうものだ。

まあそれは、当て続けければの話で、しばらくなら何の問題も無い。

何故この振動波を出したかと言えば、向こうの居場所を確実に探る為。

異変に気付いたローラン達だったが、敵の姿が見えないので混乱している様子だ。

物理振動波を止め、ビームビットを展開。最後に確認した位置から出力的に動ける場所へ、熱線を発射した。

何かに掠ったのか、煙を上げる透明な機体。

無駄だと悟ったのか、ジャマーを解いたその姿は、漆黒の西洋甲冑だった。しかし、決定的に違うのは、その右手に握られた、柄の長い片刃の武器。

スレンダーな機体だが、駆動部にも申し分の無い装甲でガードがなされており、先程の動きから見て、量産機とは一線を画している。

鑑みるに、やはり、エースパイロットか。

通信が復帰したらしく、ノイズが失せてこちらに通信が入った。ローランの顔とフランの顔がポップアップされる。

「時雨、無事か！」

「あれは……鎧？ しかも、グランディアのものじゃない！ 時雨、どこのか分かるか！？」

「知るか。ただ、ありゃ接近特化型だな。機動性を上げる為、ミサ

イルや実弾銃を捨てやがる。俺の『アイギス』が汎用機なら、ありやタイムマン決戦兵器って奴だな」

質の良いジャマーに高機動とは……鎌でも持っていれば、死神にでもなれそうだ。まあ、あれとコンセプトは似ている気もするが。

と、その妙な剣を『アイギス』へと向け、あからさまな挑発をしてみせる黒鎧。

(……不意打ちしてきやがった癖に、律儀じゃねえか)

不敵な笑みを浮かべ、時雨はローランへと視線を配った。

「なあ、ローラン。その剣貸せよ」

『……持てるのか？ この剣、神機のスペックによつては、腕が千切れるぞ？』

「俺が長い年月掛けて設計したりアルロボットだぜ？ 技術部の連中がへましてなけりや、問題ねえよ」

その剣 確か、対艦用の大剣『デュランダル』を受け取り、黒鎧と対峙する。

と、フランはアルテミスの弓を展開して、弦を引き絞っているのに気付いた。

「フラン……」

『何だ』

「お前、部屋にあるぬいぐるみの数っていくつくらいあるん  
う、うわああああああああああああああああああああ ツ！」

？ な、何故それをお前が知っている！？』

「おい、ローラン聞いたか？ おおきなうさちゃん抱いて寝てるフランをちよつと想像してみろよ」

『ローラン！ 貴様、今月の任給三分の二カットだ！』

『何でオレ！？ 理不尽にも程がありますよ！ てか時雨、空気読んでくれ！ シリアスシーンの真っ只中だろうが！』

「俺、シリアスとか大ツ嫌いだし？ いやいや、お前らがギャグキヤラで助かったわ」

『オレお前より真面目だろうが！』 『違う！ 絶対に違う！』

力強い叫びを聞きながら、アルテミスの弓を畳んだフランに感謝する。横槍は入れて欲しくない。

一騎打ちを目の前にして、どうやら緊張もしていたようだ。深呼吸して気持ちを落ち着けてから、通信を切った。

「……アイリス」

「は、はい……ごめんなさい！ ごめんなさい！ 差し出がましい事をして、本当にごめんなさい！ でも……」

「……お前、俺の役に立ちたいか？」

「え……？」

「……」

彼女の小さな頭に手を乗せて、優しく撫でてやる。

指通りの良い柔らかな髪からは、フローラルな匂いがして、それが何だか心地よい。

「……こうやって、撫でられた事も無かったんだろ。お前は、俺が道を踏み外したと仮定した時の末路と、そっくりなんだよ」

呟き、時雨は彼女の頭から手を退け、操縦桿を握った。

「……俺も、最初は必要とされてたんだ。ガキの頃から天才的だったからな。だから、連中は俺を妬むかなんかして、意図的に無視した。なら、他なんてどうでも良いだろ？ 俺はその頃から、他とつるまなくなった。一人でやっていける強さを、そこで培った。けどお前は、無視されないように献身的になり過ぎた。……今から、俺だけを頼れよ。俺も、お前を頼りにしてやる。薄っぺらい信用じゃねえ。……寂しいなら、ずっと一緒にいてやるよ」

「……！」

落ちたな。

孤独を抱えている者は、温かいものへ過敏になり、警戒を強めてしまう。

しかし、まだ甘えたい盛りの少女だ。少々警戒はするものの、すぐにその温かさの虜になってしまうのだ。

「良い……ん、です……か？ 私……気持ち、悪く……ないんです、

か？」

シートから乗り出して、縋るような目を向けてくるアイリスに、時雨は神妙な顔を向けた。

「お互い様だろ。……俺は超天才イケメン、お前は未来見れます可憐な美少女。良いじゃねえか、堂々としてろ。お前にも人を選ぶ権利があるんだぜ？ なんなら、俺の事もうっちゃってくれていいんだが」

「い、嫌です！ わ、私と……い、一緒に居て下さい！」  
アイリスがそういった瞬間、時雨は口の端を吊り上げて笑みを浮かべた。

「……ほら、未来変わったじゃねえか。お前、損得抜きで一緒にいてくれる誰かが欲しかったんだろ？ ……お前の気持ち一つで、未来なんかいくらでも変動するんだよ」

大きな瞳には、大粒の涙。そして、今までになかった強い光が覗いていた。

「援護、頼むぜ……アイリス！」

「は、はい！ 時雨さん！」

言うと同時に、時雨はアクセルペダルを一気に最大まで踏み込んだ。急速に加速するものの、Gは掛からない。慣性制御システムの他にGレギュレーターを導入したので、内部にほとんど影響は無いのだ。

「……このままだと、敵機はこちらの突撃を避けて、振り向き様に腕のブーストを使って切り伏せてしまいます」

「そりゃそうだろうな。……なら、簡単だろ」

急に機体を停止させ、重量のままに落下させる。

体が逆さまになり、アイリスが泣きそうな顔をして声にならない悲鳴を上げていた。

背中に回していたシールドをそのまま展開させ、重力波を放つ。

海面を叩きつける重力波は勢いを増し、弾け飛んだ水柱を黒鎧は避けるしかない。

その間に海へと潜り重力波を止めて、『デュランダル』を大上段に

構える。

「……ビット、操れるか？」

「はい！ 訓練しました！」

「よし。なら、ビットの権限を一時的にお前に移す。動きが出来ないよう、拘束させるように撃つてくれ」

「は、はい！」

「……行くか！」

フロートペダルとアクセルペダルを同時に踏み込んで、急発進、急浮上させた。

勢いのままに時雨は『デュランダル』を回転を意識して放り投げ、シールドを腕に持ってきた。

「よし、ビームビット射出するぞ。権限委任、パイロット02」すると、彼女の瞳から、感情の機微の何もかもが消え失せる。

ビットは時雨が操作するよりも機敏に動き、払い除けようと振り払った黒鎧の剣を紙一重で避けていた。こう言ったメンタル的な感応さは、彼女の方が勝っているようだ。女性や子供は感受性が強いと昔聞いた事がある。

時雨はシールドへと形態変化のパスワードを打ち込んでいく。それは数秒も掛からず済み、Enterキーを小指で触った。

ディスプレイが浮かび上がり、打ち込んだパスワードが表示され、次いで確認のポップアップ。

『Sure... Master, Did you want』 『Blade Shield Mode』？』

そして、ここからは音声入力。無論、英語で。

「Yes, I did. I fact to enemy. I want to the end of war. That is necessary the shining edge. Trust me!」 『Trust you...』

この間、僅か四秒と少し。

シールドの形状変化が始まる。

楕円を描いていたシールドは、剣のように細く長くなる。幅広のタッチメントソードへと変化した。それだけでは終わらない。

ビームシールド用のビームが縁へと纏わり付き、更に拡散ビーム砲が盾の周囲に移動して、一点を指して光が伸びた。

巨大なビームブレードと言った感じ。無論、ビームなので重量は変わらず、リーチも長くなり、使い易くはなった。

ただ、この形状だと音波系の武器が封印されてしまう。しかもこの形状変化は、エネルギー消費が尋常ではない。

『アイギス』は半永久機関だが、この状態だと消費エネルギーの方が大きく、間に合わなくなる。云わば、諸刃の剣。

その分、ブレードシールドは大抵の物を切断出来てしまう。どんな重装甲だろうが、真つ二つ。

ローランの機体 『Growryknight』。耐レーザー性を持つその重装甲ですら、理論上は蒺藜のように切れてしまうらしいと聞いたので、試そうとしたらローランに滅茶苦茶怒られたの思い出し、苦笑する。

「んじゃ、行きますか！」

加速し、ビームビットの熱線を避け続けている黒鎧に突撃する。

が、あるう事か、そのブレードシールドの攻撃をその剣は受け止めたのだ。

「……何て代物だよ、ありゃ」

眩暈がするものの、仕方が無い。互角なだけ、まだマシだ。

しかも、向こうも超人的な操縦センスを見せてくれる。

四方からのビームを機体を反転させながら避け、その隙にビットを一つ落とし、更にこちらへと牽制を仕掛けてきた。これは素人芸ではなく、またベテランでも出来るわけではない。天性のセンスだろう。

相手の腕と機体の性能を鑑みて戦うも、中々決定打が生まれない。ジリ貧ながら、何とかこちらが競り勝っていると言う具合。まだ到

底、墮とすには至らない。

「……ヤベえな。燃料も後チヨイか」

機能を停止させれば燃料も回復するのだが、帰還が遅れてしまう。

ならば！

動作を急に停止し、突っ込んでくる敵の一撃を『アイギス』の肩で受け止める。

同時に腕を切り離して、その間にブレードシールドで相手の顔面を潰した。

モニターヴィジョンは、大抵頭部にある。なので、もう相手は目が利かないだろう。正直、この機体を傷付けたくは無かったのだが、致し方ない事だ。

が、向こうは距離を取って、通信を繋げて来た。……視界が利かないのに、この余裕は何だ？

「アイリス、ビットを止める」

「……あ、はい！」

不気味に感じて、反射的に呟いていた。

こちらへの攻撃を懸念する暇も無く、向こうが話を仕掛けてくる。

『流石のお手並みですね。……私は、磐長姫と申します』

「へえ……。なあ、妹に咲耶姫っているだろ？」

磐長姫と言えば、古事記だ。

簡略化すると、あまり容姿の良くない磐長媛命が選ばれなかった所為で、人間の寿命が短いんだとか。

花が咲き、散るような速度の寿命。それが、人間の選んだ木花開耶姫だと。勝手な言い草だ。

その磐長姫が若くして実在するとなれば、当然その妹もと考えてしまふ。

考えはバツチリ、当たっていたらしい。

『！？どこでそれを！』

「……俺の事、何で知ってるかを教えてくれたら、別に良いぜ」

『くっ……。な、なら！ お気に入りの下着の色は分からないでし



## 五章 シャルロットと一緒

### 五章 シャルロットと一緒

本に囲まれて、私は過ごしていた。

好奇心を満たすにはそれしか方法がなく、しかし本通りの確固たるヴィジョンを得るには、想像と言う曖昧な手段を使うしかない。

『世界は、こんなにも美しい』

それは、どこかの詩のワンフレーズ。

想像の世界は、現実味がなかった。

みんな笑っていて、みんなが親切にしてくれて、みんなが本当に満足そう。

青空には白い鳩が、草原には羊や馬が、海には魚やイルカが、氷山にはペンギンが。

そんなの、本当じゃない。

分かっている。けれど、分からない。

世界は美しいのか。世界は汚れているのか。世界はどうなっているのか。

私にはそれが分からない。

だから、外に憧れていた。

でも、きつと出られない。

いつかは、この国を出て嫁ぎ、また幽閉にも似た生活を強いられる。それがお飾りである姫の人生で、今も昔も、この身分に生まれたからには仕方の無い事だと片付けられるだろう。

さしずめ、籠の鳥。陳腐な表現だけれども、究極になればなるほど、形容は陳腐になってしまう。

そして、そのケージの外を今日も眺めるだけ。

良く手入れされた、緑が眩しい庭園。煌く噴水は美しく、時間帯に

よって虹が見える。

この刹那とも呼べる時間が好きだった。どれだけ既知に塗れていようと、変わらない美しさがあつたから。変わらないと言う生活にどこか安心を覚えているのも事実だったからかもしれない。噴水の強まった音に虹を期待して、窓まで歩み寄っていく。と、そこで既知感が消え失せてしまう。

「…………え？」

窓の下に視線を向けると、そこには何故か、人の手があつたのだつた。

外見的には子ども同然の女性　フランは嘆息しながら、目の前に腰掛けている容姿の整った男性　時雨に声を掛ける。

「…………なあ、時雨」

「あ？　何だよ、フラン。俺は今ナーバスなんだよ」

物憂げな溜息を零す時雨の表情には、確かに生気が欠けていた。いつも浮かべている軽薄な笑みは陰を潜め、代わりに大切なものを失ったかのような、明らかにテンションの低い表情が浮かんでいた。彼の悩み。それは、『アイギス』の腕の損傷とブレードシールドの爆発力の無さについて。

ああやって腕を犠牲にしなければ、敵は退けられなかった。しかも、ブレードシールドの切れ味も想定したものとは大きく違い　いや、違う。切れ味は想定通りだった。

多分、相手の機体は元の世界に無かつた材質で作られた物だったのだ。シュミレートして、ダイヤモンドすらも両断するように設定していたのだが、それよりも硬い物質で出来た武器と機体だったに違いない。

(こりゃ、本格的に観光してみるっきゃないのかねえ……)

懸念していると、フランは更に訊ねてきた。

「なあ、時雨。今置かれている状況に、何か不純なものを感じないか？」

「は？」

今は会議の前で、ブリーフィングルームの座席に時雨は腰掛けている。先程からオペレーターが揃わず、会議が始まらないのだ。

なので思考の海に身を投じていたのだが、その状況の何が不純なのだろうか。

「フラン、お前……俺に発情しちゃってんの？俺、今から痴女行為でも働かれんのか？所謂、貞操の危機ってヤツ？うわ、やらしー」

「う、うううう撃ち殺すぞ！そうじゃなくて！その……」

「俺の顔に見蕩れてたか？」

「きいゝさあゝまあゝはあゝ！話の腰を尽く押し折るな！」

例の如くキャンキャンと吠えるフランの全体を眺め、時雨はしみじみと呟いた。

「…… Bの七十二、ね。一センチ、デカくなったじゃん。これからも精進しろよ」

「？………ッ!？」

真っ赤になって、何かワケの分からない事を高速で捲くし立ててくるフランはさて置いて、こちらの膝で寝息を立てているアイリスの寝顔を眺めてみる。

普段から軽佻浮薄な態度を取っているにも拘らず、そこが何よりも安全だといわんばかりの安らかな寝顔。見ているこちらまでもが、幸せになってきそうなの。

絶対的な信頼。信仰にも似たそれを、彼女を知る者ならずと理解が可能だろう。その対象となっていている人物としては、何だかむず痒いものがあるのだが、望んだ結果だ。構いはしない。

彼女の寝顔を見ながら、フランはこれが訊きたかったとばかりに眉

根を寄せて、こちらを睨みつけてくる。

「……ノストラダムス。時雨、お前は彼女を要らないと宣言しただろう。言ってはならないタブーに触れ、それでも尚信頼を得た。何故だ？」

「さあねえ……。ま、天才同士さ、理解し会えたって事で良いんじゃないの？」

答える気がないとこの返答で確信したのだろう、フランは苦笑して話題を変えた。

「そう言えば昨日の雑務の書類、提出したか？ 量があったものの、大切な書類だからな」

「ああ、アレか。昨日、焼き芋作るのに使っちゃった。悪いな」

「ちよっ！？ お、お前！ あれは運営支部からの」

「俺の部屋でやったから、灰が残ってるの良いな」

「くっ！」

こちらの手からカードキーを受け取ると、猛スピードで駆け出していくフラン。無論、冗談だ。雑務はちゃんと終わらせて、机の上に置いてある。

入れ違いになって、オペレーター統率員のアリサがようやく姿を現した。

「艦長、どつたの？」

「ドラマチックが止まらなくなったんだよ」

「ふーん。あ、時雨。これ、遅くなった」

相も変わらずやる気のなさそうなトーンに苦笑しながら、差し出されたそれを受け取る。

ビニール包装のそれは、色取り取りで、混じりけのない半透明の固形物。極小の星みたいなのその姿は、昔懐かしいものだった。

「金平糖ねえ……」

「ご褒美。まだあげてなかった。躰には飴も必要」

「何だ？ 逆に俺から飼われたいのか？」

「戦争終わったら自宅警備員まっしぐらの私、それでもいいなら」

「別に良いぜ？ ……その代わり、退屈させんなよ？」

彼女の細い顎筋に手を添えつつ、そう呟いてみる。それに応じるように、アリサもニヒルな笑みを浮かべた。

と、そこへフランが戻ってきた。息を荒げ、手には時雨によって完璧に仕上げられた書類がある。

ずかずかところちらへ大股で近寄ってきたかと思えば、勢い良くこちらを指差して怒声を上げてきた。何なのだ。

「色々問い詰めたい事はあるが貴様らは何をしている！」

「お嬢さんなう」

「お嫁さんなう」

「連携するな！ って、何か知らんが息ピッタリだな！ と言うか時雨は何故アリサの会話の真似が出来る！？」

「そりゃまあ、某掲示板を三年以上眺めてきた者の実力っつーか」

「それと、無論呟きなう」

「自重しろ」

「オマエモナー」

「だあああああああ  
つている！」

ツ！！ 話が一向に進まんから黙

「責任転嫁、テラワロス」

「ぶぎゃー」

「だ・ま・れ！」

書類を机に叩き付け、フランは椅子に座り込む。それを見て、アリサもようやく腰を降ろした。

「で、だ。今回の会議の趣旨は、オペレーターと操縦者の連携を軸として、それを意識した素早い指示展開を  
」  
また面白くない会議が始まる。

アイリスは寝こけているし、ローランは特例でどこかに出かけていた。自分はここにいる歴が浅いからと、フランに連れてこられただけに過ぎない。

アリサは会議を聞きながら携帯端末を高速で弄っている。BGMな



「おう。会議は終わったが、後でマニュアル配布すつから」

「誰がそれを作るんだ？ なあ、時雨」

「その書類の一番下の三枚。それ、マニュアルな」

「……フン！」

悔しかったのか、素早く書類の山から三枚を抜き取り、苛立たしげに去っていくフラン。

その背中を視線で見送りつつ、十秒ほど前から胸で振動していた携帯端末を取り出す。

「よオ、超絶イケメンプリンス」

『止めんか気色悪い！ どうだ、元気か？』

「ああ、久しぶりだな。……あの時、以来か。へっ、変わっちゃまったな、お前も……」

『特に久しぶりでもないし、あの時と意味深に言うが書類交換の時だったろう。それに、人間はそう簡単に変わらない』

「頭でつかちだもんな」

『うるさい、放っておけ』

王子　　ロッテからの着信だった。

相変わらず知的な雰囲気の声から滲んでいるものの、前のような追い詰められたような声音ではない。

どこか余裕と、そして不安が入り混じった声。

「んで、何か頼み事があるんだろ？　ハキハキいこうや」

『……お前には敵わないな。そうだ、折り入って頼みがあるのだが……』

彼らしからぬ口籠り。

ロッテは、内容を胸で認めて言葉にするタイプの人間だ。口数こそ少ないが、そのどれもに無駄がない。

しかし、今はただ動揺だけが伝わってくる。

「んだよ、アレか？　エ口本の隠し場所で悩んでんのか？」

『ち、違う！』

「今ドモったな、このむつつりめ」

だが、返答はない。

訝しげに耳を澄ませていると、搾り出すような声でロツテは言う。

『……じ、実は、だな。い、妹がいるんだ』

「あっそ。で？」

『………か、彼女と、友達になって………くれないか？』

「恋人じゃなく？」

『それは絶対に許さん！ 例えお前であろうとも渡す気は更々ない  
！』

断言するロツテに、苦笑する。まるで過保護な父親だ。

「このシスコン野郎め。で、何で俺なんだ？ お前の妹を毒牙にかける気満々だぜ？」

『……偏見に囚われず、物事を自分の物差しで解釈可能、それを他人に押し付けない。それでいて、尚且つ信用の置ける人物。この条件なら、お前しかいなかったんだ』

「てかお前、友達俺ぐらいしかいねえじゃん。現実的な解釈でカツコ付けんよ」

『う、うるさい黙れ！ とにかく、いいか？ 会うだけでも良いんだ』

「わーったよ。会うだけな。ノリで連れ出しても良いのか？」

『許可する。五時までには戻って来い』

「小学生かよ……」

アイリスの頭を撫でながら、苦笑する。

「ま、興味もあるしな。髪の色と目の色、可愛いかわ可愛くないかだけ口頭で頼むわ」

『金髪碧眼、幼さが抜けてないスタイルに可愛い造作。目に入っても痛くない。背は低いぞ。見た目によらず好奇心が強くてな。城の外に出たがっているのだ。全く、危ないと言つのに……。転んで怪我でもした日には、卒倒するぞオレは………』

「過保護過ぎだろ、それ……」

急に馬鹿馬鹿しくもなったが、興味があるのは嘘ではない。

「分かったよ。お前に挨拶は？」

『いい。今日は執務が溜まっていてな……。また今度、ラーメンを食べに行こう』

「お、良いねえ。んじゃな」

通話を切ると、アイリスが身を起こしてふらふらと立ち上がる。

「じゃ、お部屋で寝るから……。さ、寂しくなったら電話するね」

「おう。良い夢見るよ？」

こちらの動きを邪魔しない。アイリスの良さは多数あるが、それが最たるものだとし時は思っている。

(気を使い過ぎるのも、考えモンだがなあ……)

いつか、精神が磨耗するのではないだろうか。

「ま、いつか」

時雨はそう呟くと、最後の金平糖を放り投げ、それを口で受け止め噛み潰した。

盗んだバイクでなんとやら。昔懐かしいあのフレーズが、今は何となく恋しくなる。

ともあれ、時雨は軍から失敬したバイクを走らせ、城の前までやってきた。自分専用のバイクが欲しくなるのだが、もう少し給料を溜めてから。いざとなった時、蓄えがあるのとないのでは違いが如実に出る。

顔を強張らせる門番にひらひらと通行証を見せ、城の中に入る。

手入れの行き届いた噴水庭園を歩きながら、時雨は毒づいていた。

「……場所くらい言えよあのシスコン野郎が」

聞いていなかった自分の落ち度でもあるのだが。連絡を入れてみたのだが、会議中らしく電源が切られているようだった。

「こりゃ手っ取り早く侵入するしかねえよな」

そうと決まれば、即行動に限る。

「よっ！」

ジャンプ一番、二階の窓の縁に手を掛け、自身を引っ張り上げた。

「ん？」

と、室内にいた、大人しそうな少女と目が合う。

金髪に軽めのウェーブが掛かった髪に、大きな碧眼は驚きで見開かれていたらしい。多分彼女がロツテの妹だろう。良く通った鼻筋や目元が良く似ている。

外見は華奢で、確かに儂そう。ロツテが心配する理由も分からないでもない。

とりあえず、開いていたので窓を開け、簡単に自己紹介を済ませる事にする。

「よっ、機嫌はどうよ。俺、高宮時雨な。お前の兄さんであるあの堅物の友達」

「に、兄様の……？」

「似合わないだろ？ けど、実際はそう言う奴らの方が上手いんだよ。コレ、経験論な。……今、天才と馬鹿だから釣り合うか思っただろ？」

「……そ、そんなことナイデスヨ？」

間があつたぞ。片言だし。

内心で苦笑しながら縁に腰掛けて、ロツテの妹である少女を気付かれないように観察する。

怯えてはいないようだが、物珍しそうにこちらを見つめてくる。居心地は悪い。けれどもまあ、その事に馴れていない訳ではない。

互いが互いを探り合っている、面倒なだけだ。さっさと用件を言っってしまうおつ。

「んで、提案だ。俺と一緒に、外へ行かないか？」

「え？」

驚きで、彼女の目が見開かれる。

特に考えずに発した言葉だが、状況を鑑みるにただの人攫いにしか

見えないし聞こえない。

これは、マズったか。

「いやまあ、安心してくれて良いんだけどよ。俺、あまりにも胡散臭すぎるだろ？ お前さんとしてはどうよ」

が、答えは既に決まっているようなものだった。

彼女のその、キラキラした瞳を見れば、誰でも答えは知れるだろう。

「はいっ！ ぜひ、ご一緒させて下さい！」

ああ、無垢だ。

最近、少女との出会いが多い気がする。それが何を意味するのかは分からないが、とりあえず交友関係は持って置いて損はない。

妙な確信を抱きつつ、その華奢な少女を姫抱きにし、

「ふえ？ はひゃあ！？」

窓から飛び降りた。

衝撃を殺しながら着地し、渡り廊下まで走る。その柱と壁との間で壁キックを行い、高く跳んで城門を脱出した。

何故だか固まっている少女を降ろしてやり、隠していたバイクを引っ張り出した。

「どうよ、外の世界は」

「……広い、です……凄いです！ 大きいです！ 窓縁から切り取られたような空じゃないです！ あ、鳥が飛んでいますよ！ 初めて見ました……！」

その言葉に、時雨は表情にこそ出さなかったが衝撃を受けていた。

初めて……空を見た。

その時は、本当に嬉しかった。

未知の世界に焦がれていたから。

隔離された部屋。封鎖された空間。

異物を押し込めて、最低限の生活を営ませるだけの独房。

寒い。

怖い。

暗い。

もう居たくない。

だから現状と言う名の糸へと、牙を立てよう。

そして、俺は……。

「さん？ 時雨さん！」

その声に、我へと帰る。

気付けば嫌な汗が至るところに滲み、どうしようもない不安に駆られる。

最悪なフラッシュバック。もう唾棄したはずの、あの記憶。

再び封をし、彼女へと笑って見せた。

「おう、どうした？」

「どうしたじゃないです！ 大丈夫ですか？ 風邪ですか！？ ね、

熱は……！」

必死に背伸びして、こちらの額に手を当てようとする少女。だが、身長差は四十センチ近く、到底届かない。

その様が微笑ましくて、愛しく思えた。

(……相当、参ってるなこりゃ)

最近、正体不明な出来事が立て続けに起こっていた所為で、体がおかしくなったのだろう。

設計書の紛失、異世界への旅立ち、入軍、人殺し、友人作り、そして事実上の敗北。

自分だけを気遣っていれば良かった今までは、逆転してきている。その変化に、多分心が追いついていない。だから、こんなヘマをする。

(気を遣いに来たのに、遣われてどうするんだって話だわな。情けねえ……)

優しい少女に感謝しつつ、時雨は彼女の頭をぐしぐしと撫で、バイクに跨った。

用意していたヘルメットを投げて寄越し、後部座席を親指で示す。

「……乗れよ。今日は色んな場所、見せてやるから」

「あの……」

「心配すんなよ。俺、ちょっと腹減ってボーってしてただけだって。ラーメン食いにいこうや」

「らあめん？ えっと……」

「行きや分かるさ。ほら、乗った乗った」

急かすと、少女は意外と素直に跨ってくる。

「振り落とされねえように掴まっときな」

「はい！」

ギョツと腰に手が回され、存在全てを任せてくれる。

その安心感を確認した後に、時雨はアクセルを入れ、街へと驍進していった。

遙か上空からの、男性の笑みに気付く事無く……。

二時間が経過し、時刻は午後二時半を迎える。

「美味しいですねえ〜！」

「そりゃ良かったな」

クレープを片手に嬉しそうな彼女　シャルロット・ラ・アーサーは、スキップしながら歩いていた。

誰の趣味なのか、白くフリルの付いたノースリーブのワンピースに、少しだけヒールのある同じく白いサンダルがよく似合っている。勘だが、多分ロツテの趣味だ。

清楚な外見に言葉遣い。……いや、言葉遣いはロツテのそれと違って砕けているのだが、上品な　　と言うよりも、間延びした声が品の良さを表立たせていた。多分、貴族特有の余裕と酷似しているからだろう。

それなりに視線も飛んで来てはいるが、ただの興味本位。不埒な真似を働こうとしている輩や、暗殺者のような殺気立った視線は感じられない。

(平和だ……)

嵐の前の静けさ。そう予感させるものも無い。

ただの平和。ここの国民なら、ずっと享受していただろう尊ぶべきもの。

けれど、帰りたいたいと思っている。

でも、それでいいのか？

帰ったところで、あの胸糞悪い連中と生きていかなければならない。異世界トリップ系のジャンルが一時期流行したのは、のっぴきならない状況や既知感への逃避、そして超常現象とご都合にも配置された美少女美男子との逢瀬への待望だ。

若い頃は、『もしかしたら』とか安易極まりない不確定な要素で、想像をしてしまう。

自分が言うのもなんだが、これは異常だ。異常を及ぼし、その効果を広げていく癌細胞　　、云わば自滅因子。それが俺だ。

こんな機械設計を出来る奴なんて、危なくて当然だ。その内、淘汰されて、どこかへ追い込まれる。

元の世界に帰りたいのは、きっとその事を恐れているからだろう。だから今まで深く関わろうとはしていなかったのに、いつのまにか物語の中枢にいるかのような違和感を覚えている。それが怖くて堪らない。

(元の世界なら……主人公はアイツだったんだけどな)

この世界では会えない　　本場の親友を思い返して、苦笑する。

(……)　　つとに。今日はどうしちまったんだよ。即決即断の俺が、悩

むなつて話だよな……)

……らしくない。無意識のホームシックか。変化には確かに、今でも戸惑う。

例えば、この路面。

色取り取りのレンガで舗装された街並み。中央には巨大な噴水や市場があり、昼夜を問わず人で賑わっている。

十八世紀のヨーロッパを髣髴とさせる、そんな雰囲気がある。いや、実際のそこはもっと悲惨な状態だったらしいのだが。

軍部へ向かう道すからは、非常に近代的な施設が目立つ。ショッピングモールとか、レジャー施設とか。

継ぎ接ぎの街。しかし、どこか愛着を抱いているのも事実。

中途半端で、情けない。中途半端が人間の本質である事も否めないのだが、何と言うか……。

「美味しいです！ 美味しいですよ、時雨さん！」

彼女を見ていると、そんな気が晴れる。

内心で感謝しながら、苦笑を表に浮かべた。

「あーあー、聞こえてるって。はしゃぎたいのは分かるけどよ、少し落ち着け」

「あはは！ へぶっ!?!」

「うわあ!?!」

言わんこっちゃ無い。誰かとぶつかったらしい。

彼女の元へと走り、そして驚いた。

「よオ、俺のチワワが失礼」

「ち、チワワじゃありません！」

「っ?!?! 時雨!?!」

「ん?」

聞きなれた声が耳を打つ。

艶のある黒い髪に、今は驚きに見開かれている紅玉のような赤い瞳。こちらよりは低いものの、平均的な身長。体型は普通に見えて、中々筋肉質だ。白い七部袖のシャツに赤いインナー、ジーンズにスポ

「ツシューズと言うラフな恰好の上からなら、誰だっかわかる。いつもは軍服を着ているので気付かなかったが、よく知った同僚の顔がそこにある。」

「おお、末期ペドフィリア愛好症候群のローランじゃないか。こんなところで幼女ウオッチングか？」

「うええええ　　っ!?　　そ、そうなんですか!??」

「適当なこと言うな!　オレは別にペドは好きじゃないし、そんな症候群にも掛かってない!　付け加えるなら、そんな行為もしていない!　後、その君、全力で引くのは止めてくれ……!」

拳を震わせながら俯くローラン。いやまあ、素直な反応でよろしい事。

とりあえずクレープが付いた部分を適当に拭ってやり、時雨は彼の背後にいる大人しそうな女性に声を掛けることにした。

「初めまして。俺、高宮時雨つてんだ。アンタ、ローランの姉かい?」

「ええ、そうです。エルルーンと申します。好きな物は……お酒、ですね」

酒好きを公言するこの女性。

髪が長くて、より女性的であること以外、ローランと似通っている。と言うより、ローランが中世的な面立ちをしているので、女性版ローランと言った印象が極めて強い。

「へえー。それなら、知ってるか?　酒造『バツカス』に新しい発泡酒が入ったらしいぜ?」

「まあ!　時雨さん、ありがとう御座います!　ねえ、ローちゃん!　今から買いに行ってもいいかな?」

「ああ、すぐ近くだしな。オレも、ちよっとこいつと話しておきたいし」

「俺との……夜の秘め事とか?」

「え?　トランプですか?」「え?　……ええええええええええええええええええ　　っ!?　　ローちゃん!　不潔です、不潔

！」

「お前は会話する度に爆弾を落とすのは止めてくれ！ 後、君が純真で本当に助かった！」

何か言いたそうだった姉の方も去って、時雨達は最寄の喫茶店に入った。

軽食と紅茶を頼んで待っていると、ローランが会話の火蓋を切ってくる。

「時雨、誰だその子」

「あ、はい。シャルロット　むぐ!？」

そのままホームネームを言わせると、ローランが卒倒しかねない。時雨はシャルロットの口を塞ぎ、小声で伝える。

「ローラン、お前だから話すが……こいつ、ロットの妹。つまり、お姫様なんだよ」

「……マジ、だよな？」

「ああ」

「……眩暈がしてきた」

苦労性なのだろう。こめかみを押さえて懸命に何かを堪える様を見ていると、何だか同情せざるをえない気分になってくる。

「まあ……俺のお冷飲めよ。後三分の一しかねえけど」

「厚意なのか嫌がらせなのか微妙な線だな。別に欲しくない」

「ああ、やっぱりお姉ちゃんの事がチユキでちゆか？ このシスコ　んめ」

「すまん、マジで笑えないから……」

いつにない真面目なトーンでローランは語る。

鬼気迫る彼の表情に、シャルロットは愚か時雨でさえも、息を呑んだ。それ程の剣幕が、彼にはあった。

「ど、どう思う？ 姉貴は義理の姉で……その、オレは幼馴染がいるんだけど、どっちからも迫られてるんだ。オレがたまに外出許可貰ってるの、知ってるだろ？ 姉貴は騎士の正統後継者でオレはその御付き、幼馴染は貴族の一人娘。権力があるから、どっちも断り

辛いんだよ……」

「何だお前。最終的に刺されそうな修羅場してんな。刺されちまえよ、Nice boat的なアレで。つか爆発しろ」

「何か的確なアドバイスをくれて暗に言ってるのにどうして殺されるんだよ!？」

「惚気にしか聞こえねえよ、アホか。世の男が聞いたら、血の涙を流してお前に襲い掛かると思っぜ？」

「……恵まれてる、自覚はあるんだよ……でも、どうすればいいんだよ……」

運ばれてきたアッサムミルクティーで喉を潤し、時雨は溜息を吐きながら苦笑して見せる。

「若い内はそれでいいんだよ。こりゃ経験論だが、傷付けて、傷付けあって、痛みを知って人は成長していくのさ。一度痛い目見ないとわかんねえんだよ」

「知った風な口だな。同い年だろ、オレら」

「だから、経験論だつて言ってるだろ？ 悩めるうちに悩んどけよ

……時間切れになって、両方とも選ばない結末だけは迎えんな。行動起こして後悔しろ。目先の失敗を恐れていると、一生後悔する羽目になる。……俺が言えるのは、それだけだな」

そして、シャルロットの方を向く。

「ロットの馬鹿はお前に汚い世界を見せたくなくなつたんだろうがな……。でも、知らなくて良い事なんて一つもねえよ。いくら残酷な事実があるうが、要はそれを見て次にどう生かすか考えりゃいいのさ。その為に、親しい奴がいる。だから、これからはちよくちよく連れ出してやるよ」

「い、良いんですか!？」

驚いているシャルロットの頭を、くしゃりと撫でてやる。

「楽しかったか？」

「はい！ 人がたつくさんいて、クレープは美味しかったですし、お昼に食べたラーメンも初めてでビックリしました!」

好奇心に満ち溢れている瞳。星を散りばめたような輝きが眩しくて、思わず目を細める。

「んじゃ、今度は自然の多いところでもいくか！」

「やったあ！絶対ですよ、時雨さん！」

仲良さそうな二人を、ローランは苦笑して眺めていた。

数分後、身の丈ほどの巨大酒樽を担がされる事など、彼は夢にも思っていなかっただろう。

第六章 裏切りと空っぽの少女  
く前編く(前書き)

珍しくシリアス回。短めです。

## 第六章 裏切りと空っぽの少女 〈前編〉

### 第六章 裏切りと空っぽの少女

「あのね、お姉ちゃん……」

「ですから、乙女は高潔であるものなのです！ 一生を添い遂げると誓った相手にしか素顔を晒さず、ちゃ、ちゃんと貞操と節度を守り、淑女としてお嫁に行かなければならないのです！ 特に、グランドディアの姫である私や咲耶はもっと慎みを」

「いや、だから……はあ」

人の話を訊かず激昂し、マシンガンのように言葉の弾幕を展開している磐長姫を見、咲耶姫はこっそりと溜息を吐く。

土機 『西洋武者・鴉』に乗って出撃していたのだが、帰ってくるなりこうして説教を始めてしまっていた。正直、何で怒られているのか未だにハッキリしていない。ただ、ふしだらだと怒られているのは分かるのだが……そんな事をした覚えは無い。一切無い。なにせ、男日照りを通り越して男干ばつなのだから。

ここは男禁制の、『隔離世』と呼ぶ場所。グランディアの地下にあり、いずれ婿に行く日が来るまで、女を磨いたりゴロゴロしていたり、各々が思い思いに過ごしている。誰かは、『パンドラの匣』と呼んでいた。いや、別に開けてはいけなめいと言う事は無いが。

あ、そうだ。『パンドラの匣』と言うのは、アースガルドの神話の人間外内の『負』を内包する匣。神に遣わされた女性が持ち、それを女性の魅惑に落とされた男性が開けてしまったらしい。以降、開けちゃ駄目よとの慣用句で使われるようになった、と言う経緯がある。

けれどまあ、好奇心は猫をも殺すと言った諺があるのだ。人間は女性に関係なくとも、きつとそれを開けていただろう。

閑話休題。ごめん、横道それた。

で、武勇で名高い男性に求愛されたら断れないのがグランディアの風習。それを变えようとしている革新派に私達姉妹共に所属し、男と戦列に並び、戦っているのだ。ここがその隠れ蓑で、文字通り隔離されたような空間である。

場所が場所だけに、出会いも無ければ目新しい出来事も見当たらない。心当たりなど、どこにあると言つのだ。

なので、ひたすら聞き流す。

「そもそも、いくら相手がその……い、いけめん？ だからって、ホイホイについて行っちゃいけないんです！ そりゃあ確かに咲耶は蝶よ花よと育てられたかもしれませんが、とにかく駄目なんですよ！」

姉は横文字に弱い。彼女曰く、喋るのが難しいらしいのだが、そうは思わない。何か便利だし。

例えば、ゴキブリホイホイとか。そんな日常にまで浸透している言葉なら、姉でも発音は容易らしいのだが……何が違うのだろう。我が姉ながら、分からない。

「わ、私も出合いの一つや二つくらい望んでますけど！ そう言うのは私達はまだ早いんですよ！ そ、その……し、下着まで見せる間柄に……」

そろそろ、突っ込んでいいだろう。

「お姉ちゃん。私、別に誰かと交際してるわけじゃないわよ」

「嘘です！ 今、咲耶が嘔吐きました！ 敵の高宮時雨という人が、貴女の愛用している下着の色と形状をピンポイントで当てて見せたんですからね！」

それ、なんてエスパー？

とにかく、首を横に振って否定する。

「違うから。私達が外に出られないのは知ってるでしょ。それに、男なんて興味ないもの」

「……！？ ま、まさか……い、今流行のれ、ず……びあん？ な

の！？ そうなの咲耶！」

「何だよ！？」

発想が突拍子も無い。自分より耳年増である姉は、時々妄想の世界へ飛び立ち、幸せそうな顔をしている時がある。いくらここが俗世から隔離された場所だからとは言え、出て行けないわけではないのだから。

愕然としていた表情を戻して、姉は真剣な表情で姿勢を正す。

凜としたその雰囲気に触れ、自然と自分も姿勢が戻った。こんな時だけ、姉らしい風格が漂っている。他はお姉さん振ろうとして失敗しているが。

「……分かりました。高宮時雨殿とは交際関係にあらず、下着も見られていないと、そう言う事ね？」

「そうだけど……」

「なら、あれは時雨殿の勘でよろしかったのですか？」

「そうなんじゃない？ や、時雨って人は知らないんだけど。知り合い？」

「ああ、見せていませんでしたね。データベースにいつの間にか情報が流れていたのですよ。グランディア人なのに、技術協力顧問として軍に協力を乞われている人物がいる、と。これが、顔写真です」  
水色の着物。その裾から一枚の顔写真を取り出し、私の前に差し出してくる。

写真には 甘いが、どこか危険な表情を浮かべたグランディア人の顔があった。

いや、軽佻浮薄なその面構えがどこか胡散臭い。

何となく分かるのだが、彼には何か重いものが見える。  
自由そうで、少なくとも享楽主義を地で行くような性格ではないだろう。どこか、無理をしているような……何故だかは分からないが、そんな気がした。

「……彼」

「え？ ……や、やっぱり、イケメンですよ。いや、騙されちゃ

駄目ですよ、咲耶！ 男なんてみんな狼なんですから！ うら若い私達なんてきつと……ああ、恐ろしくてその先は言えません！ 何を言わせようとしているんですか！」

「理不尽が過ぎるんじゃない!? じゃなくて、他に知ってる事は？」

「そうですねえ。卓抜した技術と思考、行動力を備え、軍に飼われない人物であるらしいです。それと、王族の方とも交友関係を持つとか」

ここまで完璧だと、若干胡散臭いが。

何にせよ、そんな人物と敵対はしたくない。なら、どうやって味方に付ける？

普通は自分の武器を生かし、相手に取り入る。

では、私の武器は……？

「お姉ちゃん」

「何ですか、咲耶」

「化粧道具……どこだっけ？」

「へ……？」

その頃、アースガルド軍本部では……

「だーッ!! ざっけんなよクソ! こんなアホみたいな熱伝導率と硬さを持つ鉱石なんてあるわけ無いだろうが！」

時雨の私室。

ハイスペックディスプレイPCの画面から放たれる明かりが、整った顔を凶悪に変貌させている時雨の姿をより鬼氣的に照らしていた。キーボードを腹いせに殴ってみるも、募る苛々は払えない。舌を打

ち、噛んでいたガムを包み紙に吐き、それをゴミ箱へ放り投げた。時雨は刺激の強いブラックミントガムを噛みながら高速で数値を打ち込んでいたのだが、先程の言葉と共に作業を中断している。行っているのは、『アイギス』専用新武器の開発だ。

いつも、形状、素材質量入力、シユミレート、OS書き込みのフェイズで開発に着手している。

現段階で形状までは何とかなかった。今は素材質量入力で詰まっている。

そう、問題は素材だ。

鉄は脆過ぎる。かと言って、銅や銀は熱伝導率が安定しない上、手入れが大変なので却下。アルミは強度に問題が生じ、様々な合金パターンを錯誤してみたものの、無茶苦茶な数値を要求される始末。それが二日ほど続いている。

目の下にはうつすらと隈が出来ており、ストレスと疲労を見る者に印象付ける。徹夜には慣れてはいるのだが、それはストレス等のマイナス要因を感じなかった場合の話。今はかなりの眠気が群を成して襲ってきていた。

重い瞼をこじ開けながら、再度キーボードを打ち込んでいく。

「……そういや、ここの鉱石ってこれだけなのか？」  
「そうだ。まだ、全て可能性を試したわけではない。」

検索エンジンを立ち上げ、条件に合う金属を探っていく。

日本ではない。そもそも、世界が違う。世界が違うなら物も違う。なら……希望はある。

「エメラキスカ、ブルースフィア、シャルラツハ……ああ、この世界の宝石か。リアファールまであるし……ってことは」  
時雨の脳裏を掠めた二つの素材。

オリハルコン。それと、ダマスカス鋼。

オリハルコンは言わずもがな。誰もが知っている伝説の鉱石で、夏の夕焼けを映したかのような黄金色をしている。硬度に比肩する物無く、最高の金属と名高い代物だ。

ダマスカス鋼は、ファンタジーでよく登場する。木目の模様にも似た武器が出来る、強靱な鉱石として名高い。

「おっ……」

データを見つければ、流し読みをしていく。

加工すると、オリハルコンは蒼くなるようだ。別名、『蒼の現』あおのうつつとこの世界では呼ばれているらしい。数値をオリハルコンで打ち込んでみる。

が、いきなり駄目出しを喰らう。……どうやら、熱伝導率らしい。なるほど、強度だけなら最強らしい。しかし、熱で溶けるのに一ヶ月も掛かるのであれば、それはもう不要だ。

ダマスカス鋼も今ひとつ心許無い。計算上、一度しか使えなくなると出ている。これでは実用性に欠けるだろう。一撃専用のスポットアイテムにするにしても、コストが掛かり過ぎるのだ。

舌を打ち、更にデータベースを探っていく。と、そこへ誰かがやってくる。足音から察するに、フランだ。次いで、コーヒーの香ばしい匂いが鼻腔を撫でていく。

「順調ではなさそうだな。濃い目のコーヒーを淹れたが……」

「ああ、悪いな。机の横に置いてくれ」

「砂糖やミルクはいるか？」

「砂糖四個、ミルク三個。出来れば、混ぜといてくれ」  
「分かった」

陶器のコップと金属のスプーンが奏でる音を聞きながら、更に意識をモニターへ向け、調べていく。

「てつきり、ブラックコーヒーかと思ったのだがな」  
集中しようといまいと、会話は邪魔にならない。鬱屈したこの雰囲気と気分を払拭してくれるからだ。

無碍にしないよう、意識を少しだけ会話に向ける。

「いや、正直に疲れてるからな。コーヒーを嗜むならブラック、休憩時や作業続行にエネルギーが必要なら、砂糖でも何でも入れるぜ」  
会話中に置かれたコーヒーを一口啜る。

あれだけミルクや砂糖を入れてもまだ消えない苦味と甘さ、そしてミルクの濃厚さが体に染みていく。これなら、もう少しやれるだろう。エネルギーよりも、精神的な気力が沸いて来る。

固まりかけた体を伸ばしていると、フランが画面を覗き込んできた。画面には細々とした鉱物のラインナップがある。

「……何について悩んでいる？ 鉱物なら、割と詳しいぞ」

「そうさな……」

話しても良いのだが、彼女が知っているだろうか。と言うか、本当にあるのだろうか。

オリハルコンと同一視されていた、昔の日本文献に登場したもう一つの鋼。

「緋々色金。触ると冷たくて熱伝導率の高い鉱物だ。知らないか？」

「む……？ 赤い金属か？」

「外見じゃそうらしいんだが……実物なんか、見た事ねえし」

「そのヒビロカネは知らないが、『紅の虚』あかのうつろに特徴が酷似しているな」

「あ？」

キータイプして、情報を探ると、すぐに現れた。

すぐに数値を設定してシミュレート。滞りなくそれは進み、何の問題も生じさせずにテストを合格して見せた。

恐らく、強度と粘り、そして熱伝導率だ。熱すれば瞬時に熱さが行き渡り、無駄も少ない。また、超高温でも融けないので、素材としては優秀だ。

また、特筆すべきはその重さだ。銅と同等の重量は、中々便利である。押し合いにも有利に望む事ができ、またそれで殴っても良さそうだ。

しかし、落選した二素材と『紅の虚』は奇しくも三竦みのようなポジショニングだ。

軽量で熱伝導率が高く、粘りのある『紅の虚』。

かなりの重量で、熱伝導率の鈍い頑強な『蒼の現』。その狭間をい

くのがダマスカス鋼だ。

「っし。固まったな。後は、生産地……っ」と

検索結果、ゼロ件。

「……………」

再検索。

検索結果、ゼロ件。

「……………」

キーワードを変更し、検索。

検索結果、ゼロ件。

「………… オイオイ、ここまできてそりゃ無いだろ二日掛かってんだぞ！ ああッ！？ ぶっ壊されてえのかよ！！ キーボードクラッシュヤーばりにやってやんぞテムエコラ！！」

とうとうストレスが限界突破してしまう。それはそうだ。こんな状況が続けば、誰だって嫌になる。

フランが必死にこちらの体を掴み、止めさせようと椅子へと引っ張ってくる。

「お、落ち着け時雨！ そもそも、『紅の虚』はグランディア秘蔵の鉱物だぞ。アースガルドにあるのはダマスカス鋼と『蒼の現』だけだ！」

彼女の説得に絆されたわけではないが、椅子に座り直してみる。

熱っぽい頭で考えたところで、もうこれ以上はどうしようもない。

ならば、気晴らしでもしよう。

そうだ、言葉遊びでも。

「んじゃ、旋律と糸。類似する点を挙げてみるよ」

「は？」

「気晴らしだ。正解したら、いい物やるよ」

「……………わ、わからん」

「どちらも、『紡ぐ』ものであるってな。ああ、残念」

ベッドに身を投げ出し、その傍らをポンポンと叩く。

「罰ゲーム。ちよいと添い寝してくれ」

「うむ」

即答したフランだったが、徐々にこちらの言葉を飲み込んでいつているようで、次の瞬間には顔を真っ赤にしてこちらへ驚愕している顔を向けてきた。

「はあ！？ ちょ、ちょっと待て！ その前に、ほら！ 色々あるだろう！？ じゅ、順番を飛ばすのはよくなくて……ま、まずはその……き、ききききき」

「啄木鳥か？」

「何故そうなる！？」

「そりゃこつちの台詞だつつの」

苦笑し、体から力を抜いていく。

それは浮遊感にも似ている。しかし全身が安心し、弛緩していく感覚は、浮遊では味わえない。

まどろみの中、言葉を続ける。

「ちよいと、俺だつて……人肌、恋しくなる事あるんだぜ？ ま、どうでもいいがよ。……ヤベ、本格的に寝るわ。じゃな、フラン……」

「コーヒー、サンキュ……」

意識が続いたのはそこまで。

後はひたすら温かい泥濘に沈み込んでいく。

寝入ってしまった時雨に毛布を掛けながら、フランは微笑んでいた。あれだけこの軍や世界を嫌いながら、ここまで協力してくれる。そんな彼の律儀さと誠実さが、愛しい。

(……愛しい、か)

けれど、今は戦時中だ。いつ死ぬかも分からない状況で、そんな刹那的価値観で自分を見失ってはいけない。

この大型艦の船長であり、軍の総帥。それが、自分の肩書きだから。(けど、今くらいは……いいよね?)

毛布に潜り込み、背中合わせに布団へ入る。

彼の匂いと共に、人肌の温かさが何故か涙腺を緩ませた。

(……そっか。誰かと寝るのは、これが初めてだっけ)

幼少の頃から軍人のエリートとして育て上げられ、自分も軍人になる事を信じて疑わず、ただひたすらに己を磨いていた。

親は褒めるだけ、使用人は準備だけ、私もそれが当然だと日々訓練に励んだ。

だから、温かさをあまり知らなかった。

「……時雨」

呟いてみるものの、彼からの返事は無い。

すると、堰を切ったかのように言葉があふれ出す。

「私ね、ずっと女の子になりたかった。女の子になって、素敵な王子様と恋がしたいって思ってた。……今は、もう無理だから。ゴメンね、時雨……好きになって」

気付けば、頬に涙が伝っていた。

彼の背中から伝わる命の鼓動を確かめながら、声を押し殺して、泣いた。

泣きつかれて眠るまで、ずっと。

ずっと。

## 第六章 裏切りと空っぽの少女 〔後編〕

何でお前のようなヤツが……！ お前が生まれたから、私達の家がこじれたのだ！ この屑が！

違えだろ……。お前が、仕事しないせいだろ……。

私はあの人を愛していたのに！ 何でそんなに綺麗なのよ！ 馬鹿なくせに！

知るかよ、ヒス豚が……。劣等遺伝子を受け継がなかっただけの話だろうが。

そうよ！ 私達の息子は、普通でなきゃいけないはずだもの！  
こんな馬鹿に掛けている時間はないわ！

知るかよ……。勝手に、してくれ。

そうだわ！ 祖母が日舞の師匠だったわね。なら、そこに預けましよう。演技でも覚えれば、すぐに頭が良くなるわよ！

ああ、そりゃいいな。

時雨。お前さんは、馬鹿ではない。正直が過ぎるだけじゃ。

そうだったな、懐かしい。

でもな、現代は正直さが美德とは限らんのじゃよ。

あの頃は真っ直ぐな事に疑いがなかったからな。

お前は演技が異常に上手い。別の人格にすり代わっているかのようじゃ。

必死だったからな。その本質を見抜き、表面化させる事に。

だから、仮面を付けなさい。

そう、仮面だ。

天才を演じて、生きなさい。私には無理だったけどねえ、お前なら出来るはずじゃよ。

ああ、やってるよ。

何じゃ、格闘を教えて欲しい？ そうかそうか！ あんな着物を纏って踊るよりも、男なら力を求めるものじゃよな！

だからって、十歳のガキに五十キロの俵担がせて、道場内を三十周させるなよ。

お前はワシに似て呑み込みが早い！ ほれ、これが居合いじやよ！ 凄いじやろう？

平然とコンクリ真つ二つにしてるけど、それ異常だからな。

すまぬな、時雨。お前の両親がああなったのはワシの所為じや。

違えよ、爺さん。俺が……天才なら、良かったんだって。

ああ、果報者じやな。孫の隣で逝けるとは……。あやつらは見舞いにもこんのに。すまないのう。

俺が好きでしてんだよ。俺も、爺さんの孫でよかったさ。

『人生は誰にとっても幸せでないといけない』

こんな事を呟いた馬鹿野郎がいた。まあ、それが後の親友だが、でも、思ってたんだ。

『人の価値なんて平等なんかじゃない。今頃きつと、ナスダックだって驚きの変動値を見せてくれる』

これがいつしか、俺の持論になっていた。今もその固定概念は変わらず、価値観の中枢に居座っている。

だから、不都合な事を力で排除しようとした。

幸せを、勝ち取る為に。

穏やかな気分だ。

そう思いながら、時雨は瞳を開く。

夢は過去へ。両親祖父母の夢を見ていた。それは多分、久しぶりに深く寝たからだろう。

浅い眠りで夢を見るとは言うが、深く眠らないと睡眠の波と言うものは来ないものだ。一、二時間の睡眠で夢を見れるなら、それはきつと疲れていないから。

そんな事を思いながら、体中を包む倦怠感を振り払うべく、声を出してみる。

「あー……」

思いの他、体は疲れていたらしい。一度深く寝ると、体が疲労を思い出して重くなってしまう。

動きに支障はないものの、全身が以前のように軽くない。緊張が解けたのだろう。

そう思える頭は酷くクリアだ。なのに、心だけが凧いでいる。あまりにも静かで、あまりにも心地よい。けれども、それが不気味で仕方が無い。

ベッドから半分身を起こして、時雨は溜息を零す。幾分だが、気味悪さが失せた。

この安心感は、過去に数度味わった事がある。祖父母と一緒に暮らしていた日々だ。

人肌があつた事の幸せを噛み締めた、幼い頃の日々。

「……フラン」

悪夢でも見ていたのか、頬に涙の跡がある。

苦笑しながら頭を撫でてやると、彼女は笑ってくれた。穏やかに、笑ってくれたのだ。

「悪いな、フラン。ここじゃ、やっぱり狭いわ。俺に相応しくねえんだよ、こんな上等な役」

フランに布団を掛けてやり、時雨は手近な荷物を纏めて格納庫へと走った。

携帯はデータを抜いて、放り捨てる。こちらから、一方的に連絡出来るように。

(こいつらに何をしてやれるか。……全員に危機意識が無い上、三つ巴の混戦。なら、そこに強大な一勢力が現れれば……どうなる?) 全員が力を合わせ、立ち向かう。昔からよく言う、三本の矢と言うヤツだ。

それは希望的観測だが、前よりは折り合いが良くなるだろう。少なくとも、全部の国を戦争が出来ないレベルにまで疲弊させてやれば、それは叶わぬ事ではない。

そうする為には、他の勢力を見る必要がある。それに、興味もあつた。

この世界は、どうなっているのだろうか。

グランディア、シュバルツガルドはどんな国なのか。何で戦っているのか。

それをただ、知りたかつただけなのかもしれない。

「……またな」

さよならは言わないでおく。多分、また会える。

格納庫へ走り、白に塗りなおされたアイギスに搭乗。起動させ、カタパルトを外部クラッキングでこじ開けた。

ディスプレイを立ち上げ、そのブルーの輝きで人影に気付く。

座席に一人、見知った先客がいた。ロングヘアと、ワンピースの少女。

「いいよね? 時雨」

彼女 アイリスが、無垢な笑顔を向けてくる。信頼しきっている笑み。これからどこへ行くのかも言っていないのに、全面の信頼をくれている。

アイリスは多分だが、予知を使ったのだろう。なら、ここにいるのは不思議ではないし、そして来るものを拒む気はなかった。

「おうよ。お菓子は三百円までだけ?」

犬歯を剥きながら笑って、時雨はアクセルを踏んだ。

急加速する機体を見送るアリサの姿がモニターに映る。こちらへ、携帯から通信を行っているらしい。

画面から文字がポップアップする。

『帰宅キボンヌ』

彼女はあまり、変わってはいないようだ。

苦笑しながらも、キーボードを取り出して、手早く返事を打つ。

「悪いな。しばらく戻らねえ……またな」

『おー、jeezus。ふあつきんゆうー。早く帰って来るなう』

「さーな」

通信を切り、更に飛翔する。

次に大地が見えるまで、速く 速く。

相応しい役を見つけるまで、多分飛び続けるだろう。

暗い一室。

その中に、背の高い男性と背の低い少女の姿がある。

豪華な椅子に腰掛けている少女は、驚くほどに顔が整っていた。まるで、人外染みた まるで妖精のような可愛らしさと神秘的な雰囲気を用意、そして荘厳な老人よりも落ち着き払った態度で、恭しく頭を下げている男性を改めて見つめていた。

「何かしら、これは。これが貴方の認めた男なの？ 貴方、中々趣味がいいわね」

「だろ？ オレもビックリさ。何せ、あれを作れるネジの飛んだヤツがいるとは……」

喉の奥で笑うようにしながら、紳士服を纏う男性は立ち上がって、長い髪を後方へと撫で付ける。

少女が手に持つ写真には、時雨の顔が映っている。シャルロットの姿もあり、恐らくは一緒に外出した日の刹那を捉えたものだろう。

彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべると、指を一回鳴らす。それだけで、手に持っていた写真が一瞬で失せる。どんな芸当かは知らないが、人間の可能性を超越した絶技だ。

「それで、引き入れる算段はついたのかしら？」

「モチのロンさ。まあ、ほら……男は女性に弱いつて言うし、こんな感じに」

男は笑うと指を鳴らし、その姿を女性に変じさせた。これも人間技ではないのだが、見た目や雰囲気は紛う事無く人間の範囲内。それでも、男の姿は美形で、女性の姿は可愛らしい美人と、浮世離れはしているが。

先程まで男性だった女性が、花のように笑ってみせる。

「と、このようにでしてね。流石は私ですよね〜！」

キャピキャピと笑ってはいるが、かなり胡散臭い。

少女も呆れたか、眉根を寄せて苦笑し、投げやり気味に訊ねる。

「本質的には、どちらが貴方なの？」

「そりゃ女性の姿ですけどね。男なんて、野暮ったいし趣味じゃないんですって。でも、偵察は男じゃないと。優しい男を演じれば、大抵の女性は警戒を緩めますし」

そう言っ指を鳴らし、再び男性の姿に戻る女性。

男は更に、白い手袋に覆われた指を鳴らす。

すると、そこかしこがライトアップされ、大型の機体が姿を現す。三十メートル弱の人型兵器。黒いカラーリングが施されており、見る者に威圧と不気味さを印象付けるだろう間接部の赤が、まるで生き物のように炯々と輝いていた。

そう、あれに似ている。

まるで、アイギスの対になっているような　平たい大きな剣を持つ機体だ。

「これ、持って行っていいですか？」

「どうぞ？　バルザイの偃月刀を破壊しなければ。機体は修復出来ますしね」

少女の二つ返事の承諾に、満足気に男性は頷いて、機体を軽く撫でる。

頭部のセンサー&カメラアイが一瞬光り、コックピットが徐々に姿をみせ、遂には迎え入れるかのように腕が差し伸べられた。

慈しむように機体を眺めながら、男性は呟く。

「じゃ、行きますか 『輝・トラペゾヘドロン』よ」

そう言った彼の口元は、凶悪な笑みで彩られていた。

六章 裏切りと空っぽの少女 〱後編〱（後書き）

うわ、酷いな……寝ぼけてるな、自分。  
ってワケで、加筆しました。

## 七章 邂逅

### 七章 邂逅

舌を打ちながら、アクセルペダルを踏み込む。

急加速する機体を安定させ、フロートペダルから足を離す。徐々に落下していくのを感じながら、『アイギス』の盾から実弾銃を取り出した。これは、出発前に仕込んでおいた物の一つで、昔の兵器だ。今は対応している機体はないそうなのだが、汎用性の高い『アイギス』だからそれは関係ない。大抵は、どんな物でも扱える。

操縦桿を右斜め前に全力で倒し、敵の位置をモニターではなく、赤い点が敵を示しているレーダーで確認した。

急回転する機体の遠心力に吐き気を催しながらも、トリガーを確実に引き、弾丸を狙った位置にばら撒く。

「 堕ちろッてんだよ！」

苛立ちを吐き棄てるように舌を打ち、結果を見守る。しばらくして、消えていく赤い点に安堵の溜息を零した。

しかし、赤い点は次から次に飛来して、レーダーを埋め尽くしていく。これでは限がない。

「ダイジョブか、アイリス」

「はい、続けます」

「いい返事じゃん。ま、無理すんなよ」

声を掛けながら、ひたすらに殲滅していく。

苛立たしさは戦闘からではない。こんな連中相手に落とされるようなヘマはしないし、何人来ようが一緒だ。

そう、身体的にはなく、精神的に時雨は疲弊していた。

飛び出して一日目は海底を静かに進んで、二日目はアイリスの寝息

を聞きながら大気圏スレスレに行く。そして、今日　三日目によ  
うやくそれらしい反応が見られ、降りていこうとしたところを見つ  
かり、こうして終わらないドッグファイトに否応なく興じているわ  
けだ。

もう三時間近くになるのか。持ってきていた銃器はこれで最後にな  
りそうだ。残りの武装は、盾と……持ってきていた有線式の剣ぐら  
いか。

武装も限界だが、大丈夫だと答えたアイリスの精神もそろそろ限界  
だろう。

ビームビットには、一台だけだが偵察用のカメラが搭載されている。  
それを操って、先によい隠れ場所を見つけてもらっているのだ。

しかし、ビットを操るには精神を必要以上に使わなければならない  
し、おまけに『アイギス』は縦横無尽に駆け回っている。彼女はそ  
んな過酷な状況下で、よく頑張ってくれていた。

考えている間にも撃ち続け、何とか第一陣を退けたらしい。周囲に  
敵の反応はなくなった。

だが、多分増援が来るだろう。一刻も早く、何とかしなければ。  
実銃を破棄し、盾から剣を抜いてそれを構える。

不意に、レーダーからアラーム。遠くから熱源を感知するレーダー  
が、こちらへ高速で飛来してくる機体を知らせてくれていた。

と、不意にスピーカーからノイズが走り、画面には『Voice  
Only』の文字が映し出される。

『あー、アンタ、高宮時雨よね。こつちを攻撃すんじゃないわよ。  
さっさとこの回線を開きなさい』

『さ、咲耶！　そんな汚い言葉遣いは他所でしちや駄目でしょ！』  
聞き覚えのない声と、最近聞いた声が鼓膜を打つ。

送られてきた番号なんぼを打ち込むと、通信が繋がり画面がポップアップ  
する。

映し出された画面には、緑髪をしている仮面の少女と、桜色の髪を  
長くしている、圧倒的な美少女の姿がそこにあった。

いや、そもそも存在感から違う。緑髪の少女も可愛らしかったのだが、それとは別のベクトルで考えた方がいい。

強気な緑色の大きな瞳がこちらを見るだけで、思わず息を呑んでしまふ。まるでそうなるのが当然かのような、圧倒的で可愛い、純潔の高嶺の花。

誰もが魅力を感じるだろう容姿に舞い上がる気持ちをしばき倒して、時雨は冷静に考察していく。

このタイミングは意図的なものだろう。倒した敵の中には、アースガルドの追撃部隊の他によく分からない機体も混じっていた。つまりは、こちらの腕を試していたと見ていい。

そして、桜色の髪をしている少女には、ほんのりと化粧が施されている。昔、日舞をしていた祖母から聞いて覚えた化粧の知識が、ここで役に立つとは思わなかったが。

まあ、つまり。彼女達はこちらを是が非でも引き込みたいのだろう。なら、誘惑には極上の餌がいる。海老で鯛を釣るよりも割に合わない餌が。

不思議と醒め切った頭で考察が終了。

答えは一つ。こちらを、彼女で釣ろうと言う意図しか、残っていない。

「なるほど。悪いな、ビッチに興味ねえんだわ」

「なっ……!?!?」

一瞬目を見開き、真っ赤になって俯きながら震えている咲耶と呼ばれた少女と、

「びっ、ち？　ねえ、咲耶……それ、何？」

意味が分からなかったのか、首を傾げる警長姫。

咲耶は顔を上げると、相変わらず真っ赤な顔で捲くし立ててきた。

若干目が潤んでいるのが、また反則的に可愛い。

「う、うるさい！　アタシ、まだそんな経験ないわよ！　て言うか、興味ないし……」

「何だお前、レズビアンか」

『えっ!? さ、咲耶…… やっぱり、れず…… びあん? なの?  
ご、ゴメンね。お姉ちゃん、その……り、理解が追いつかないとい  
うか……その……え、えっち』

『だあああああああああああ つ!! 何なのアンタ、  
話しややこしくする天才!? て言うか、お姉ちゃんも違うから!  
何で耳まで真っ赤になつてんのよ! ただそう言う事は分からな  
いだけだから!』

そう、それだ。

「……お前、実際に体の関係つてのを知らねえからそうやってられ  
るんだ。テメエ、もし俺がそれで付いて行ったら、確実にやられて  
たぜ? ちよつと、想像してみるよ。どこのヤツかも知らねえヤツ  
に、ほぼ無理やりつてヤツ。俺なら絶対嫌だね」  
見る見るうちに、顔が青褪めていつている二人。分かりやすいつた  
らありやしない。

時雨はその態度を、鼻で笑ってやった。

「最初からそう言うのチラつかせてる女に、昔俺の親友が引つ掛か  
つてな。ありや俺とは違って女々しいがいいヤツだったからなあ。  
一夜の関係で過ぎさうとしていた女を未練タラタラに追い続けちま  
った。んで、結局、女の方が親友に惚れちまったのさ。難儀だわな  
あ、そういうの。顔だけはいいい女って、ホント面倒だろ。まあその  
女は結構な負債背負つてな。それを、一緒に返すって名目にして、  
親友が引き受けちまいさうになつたから、俺は事故を装ってそいつ  
を始末した」

『……身勝手ね。エゴよ、それ。その親友は幸せだったんでしょ?』  
意外に鋭い切り返した。しかし、それは自分でも分かっている。  
けれども、一方的な価値観の押し付け合い。それが人生である限り  
は、この顛末は正しかったといえる。まあ、正義である事がその時  
に正しいと呼べるわけでもないのだが。

他に適切な表情が分からなかったから、苦笑してみせ、感慨深く頷  
いた。

「そうさな。でも、人間は誰でも押し付けるだろ。だから、俺は俺の理屈で行動しただけで、んでアイツとはそれ以来だっけな。派手に喧嘩して、どっちもくたばる寸前だったし。んなワケで、教訓。あからさまな女は須く屑だつてな。他人に粘着しないと生きていけない、そう言う連中なのさ。お前はいい女になりそうだし、ホント……親友と会わせてやりてえよ」

時雨の言葉に、咲耶は微笑んだ。少し照れくさそうではあったが、真っ直ぐに瞳をこちらに向けてきた。それが多分、彼女の性格だろう。真っ直ぐで、一本気だ。

『……アンタ、悪いヤツじゃなさそうね。親友をそこまで思えるんでしょ』

「ま、俺は良いヤツでもねえけどな。そんなもって、交渉といこうぜ」

本題に入る。

別に前置きをせず、直接言っても良かったのだが、それでは交渉の余地が生まれぬ。

あくまでもこちらのほうが上だと言う事を認識させておかなければ、そもそも交渉は成り立たないのだ。

「俺のやる事なす事に絶対の強制をつけず、住居と個人ラボも提供してくれ。緋々色金 『紅の虚』も出してくれると助かるな。それ以外は、お前らを確実に守る事を約束するぜ」

『いいわよ』

サラリと頷いてみせる咲耶に、警長はあたふたしている。姉らしいのに、不憫なヤツだ。

『咲耶！ いいの、そんなにアツサリ決めちゃって!?!』

『別に。そこにいる子も特Aランクの重要人物だし、身の保障もしてくれるんらいいんじゃない? 交渉よ、交渉。誠意で応じないとね』

……ホント、いい性格をしている。

「話が早くて楽だわ、こりゃ。知ってるとは思うが、俺は高宮時雨。

「こっちはアイリスだ」

『アタシは咲耶、こっちが姉の警長よ。言っとくけど、アタシのお願いもちゃんと聞いてもらうから』

「オーケー。まあ仲良くやろうや」

笑みを浮かべると、向こうはぷいっと顔を逸らし、先導するように飛び立っていく。

が、時雨は動かずに、ふと脳裏を過ぎった勘を頼って、盾から剣を抜いた。

ずっと気になっていた。第一陣が退き、第二陣が来ても遅すぎるくらい時間のはずなのに、まだ偵察機の一機も来ていない。

恐らくはこちらを監視している者がいる。それも、第二陣や三陣を退け、監視する余力がある強い機体だ。

『なっ……！？　ちよ、ちよっとアンタ！　いきなり裏切る』

咲耶の甲高い声を聞きながら、有線式の剣を厚い雲間に向けて投擲する。

弾丸のように疾駆した剣に、手応えあり。弾かれたらしく、剣はそのまま巻き取られて戻ってきた。

その機体はゆっくりと降りてくる。黒い機影。シャープな外見に、巨大な剣が目を引きそのシルエット

は、良く見慣れた物であり、時雨が現在操作している機体となんら遜色ないものだった。

『シユバルツガルドの機体ね。あれも、アンタの作品？』

『ああ、大丈夫ですよ時雨さん。あれは友軍機ですし……』

彼女達の話を書く以前に、時雨は驚きを隠せずにいた。

『アイギス』を生み出す時に、偶然生まれた機体。『名無し』と呼ばれ、盾と矛の関係にあった試作機だ。

しかし、その機影はすぐに消えてしまう。まるで、煙のように一瞬で失せ、もう後には何も残っていない。

不気味さに思わず鳥肌が立ったが、『名無し』のスペックを思い出して、更に眉間へ皺が寄るのを感じていた。

あれは感情で動く兵器だ。『アイギス』とは真逆で、愛やら勇気やらの非科学的なパワーで動くようになっていて、云わば『感情兵器』。

嘲弄しながら作ったものなのだが、その実、『アイギス』よりも凄まじい拳動が可能。某シミュレーションゲームの言葉を借りれば、『アイギス』がリアル系で『名無し』がスーパーロボット系だ。何故、あれがあるのか。元の世界に戻る鍵が出来た。

「……なあ、後でシユバルツガルドとの面会。取り付けてもらえねえか？」

『えー。お姉ちゃん、どうする？』

『それはこれからの働き次第です。御願いますね、時雨さん』  
内心で舌を打ちながらも、表情だけは飄々と。

「はいよ。任せとけて」

アイリスにビット解除を通知しながら、ただ『名無し』とシユバルツガルドの関連性を考えていく。

結局、飛行時間内では、それは見つけれなかった。

## 七章 邂逅（後書き）

という訳で、次章からグランディア編です。

## 八章 武士道と思惑

### 八章 武士道と思惑

誰かに揺さぶられている。小さな揺れだが、何だかそれが心地よい。「起きて下さい、時雨様。朝餉の支度が出来ております故……」

朝食。

その言葉を聴いて、身を起こす。

朝は必ずコーンシリアルを食っていた時雨にとって、朝食は必ず摂るものとなっている。シリアルが切れた時は、以前ならコンビニで握り飯でも買い、こっちに来てからはローランやフランの朝食をかっぱらっていた。

エンジンを動かすには電気やガソリンが必要のように、食は体を動かす原動力。疎かに出来ないものの一つである。

まあそれも理由の一つなのだが、随分と久しぶりに味噌汁の匂いを嗅いでしまったのが一番の要因か。和風料理は無性に食べたくなる時があるので、厄介なのだ。

さておき、起こしてくれたその人物に目を向ける。

真っ直ぐで穏やかな瞳と小柄な体躯。整った顔立ちには微笑が浮かんでおり、頭の白いリボンが柔らかい印象をより強調している。

紅の袴と白い上着 俗に言う巫女装束を纏っている少女だ。確か、小間使いとして、世話になると聞いている者だろう。

「……おう、悪いな。誰だっけ、あんた」

身を起こしながら訊ねると、苦笑して三つ指を着き、頭を下げてる。

「昨日、自己紹介をしておりますでしたね。私は真田幸と申します」

「……丁寧にごーも。つか、ぶっちゃけそんな畏まんなよ。ざっくば

らんに行こうぜ？」

「ぎ、つく……？」

「……年下だろうが年上だろうが、尽す側だろうが尽される側だろうが、身分関係無しで大らかにつてヤツだ」

言うつと、淑やかな笑みは一瞬で失せ、元氣一杯の笑みが浮かんだ。

藪蛇だったかもしれないが、まあ元氣なのは良い事だ。別のベクトルに向かなければ、だが。

「素敵な考えですね！ ここでは縦社会なものですから、あまり話せるお友達もいなくて。なら、遠慮無しでいいですか？」

「そうしとけ。互いに何か抱えたままじゃ、信頼関係なんざ築けねえだろ？」

「なるほど、一理あります！ では、朝ごはんに行きましょう！」

今日は鮭の塩焼きに厚焼き玉子、お味噌汁にほうれん草の御浸しですよ！」

「おー。美味そうだな、おい」

昨日手渡された藍染の浴衣のまま、長い廊下を歩んでいく。

中世日本を思わせる造りの住まい。巨大な建造物で、地下一帯に広がる女性の隠れ家なのだそうだ。

陽光も天蓋の切れ目から注いでいるのだが、やはり地下ゆえに少し肌寒い。地下水脈で捕れる魚は、淡水や海水が入り混じった水場があり、かなり美味いらしい事を咲耶が言っていた。まだ、花より団子の年頃なのだろう。

また、一年中咲いている桜があるらしい。どこのギャルゲーの謳い文句だと思うのだが、これが中々美しい枝垂桜なのだそうだ。ちなみに、霊樹らしく、偶に精霊が遊びに来たりするらしい。説明したヤツは笑っていたが、軽くホラーだぞ、それ。

で、幸と他愛も無い話をしながら、長い廊下を歩いていく。

素でやっているのか、三步後ろを歩いている彼女へと、新たな話題を投げ掛けた。

「つか、この『隔離世』は男子禁制なんだろう？ 俺はいいのか？」

「さあ？ でも、私は嫌じゃないですよ！ これから、いっっぱいお話ししましょうね！」

勝手に完結してやがるし。

仕方が無いので、更に話題を変える。マイペースな持ち主には、ペースを持っていかれないように心掛けなければならない。こう言う場合、ヘタレ主人公はペースに呑まれ、結局流されていくだけなのだから。

「……つか、メシは当番制か？」

「いえ、各々が勝手に調理して食べてますよ？ 貴方の分は警長様が準備するって言って聞いて下さらないんです、迎えた側の責任とか言っていましたけど……愛されてますね！」

違うと思うが。

「で、メシ食い終わった後は何するんだ？」

「今日は道場で訓練です。刀や薙刀を使った戦い方を学ぶんですよ！ 巫女の職務よりも、そっちの方が私は得意です。時雨さんは武芸をされているんですか？」

「ん？ おう、古武術とカポエラとムエタイ。刀の方は……ちよいとコネがあって神刀流剣術免許皆伝だ。いや、ちゃんとした道場で習ったわけじゃないけどな」

「神刀流と言いますと……ああ、剣舞の方ですか？」

「どっちもな。居合いも、剣舞もだ。扇子持って踊れるぜ？」

その時は、祖父と祖母が言い争いをして大変だった。剣一筋にするか、舞踊を極めるかの二択があり、その折衷案として神刀流を学ばされたのだ。

中途半端に習ったお陰で、半ば我流。洗練はされていると思うのだが、本職と比べると見劣りするだろう。

と、ようやく到着したらしい。

襖を開くと、幸は敵かな雰囲気を醸しつつ正座。そして、ゆっくりと頭を下げる。

「警長様、時雨様をお連れ致しました」

「ご苦労様です、幸。さあ、貴女の分も朝食を用意してありますからね？ 席に御着きなさい。時雨様は、上座の方までお越しを……」  
見れば、部屋には既に咲耶と磐長が、自分の膳の前に座っていた。幸は下座に腰を降ろしていたので、さっさと時雨も座り、そして手を合わせた。

「頂きます」

それに続く彼女達の声聞きながら、まずは白米を箸で

「……おい」

「はい？」

「いや、何でスプーンなんだ？」

用意されていた道具は、箸ではなくフォークと先割れスプーンのセット。可愛いうさちゃん柄付きである。

時雨以外は全員黒塗りの箸を使っていると言うのに、この疎外感。言うまでも無いが。

「俺……箸、使えるぞ」

「え？ あなた、外国人じゃない」

「固定概念に囚われ過ぎだ。どっちも用意しておくのがここでの礼儀だろ？」

「はい、用意しておりますよ？」

「え！？ マジで!？」

咲耶と見事にハモリながら磐長を見ると、着物の胸元からスツと箸を取り出し、こちらへ差し出してきたのだ。何だそりゃ。

「どうぞ」

「お、おう……」

若干だが引き気味になってしまう。まあ、普通あんなところに箸なんか入れない。何か妙に生暖かいし。ああ、豊臣秀吉を思い出した。そんなサーブスシーンは無意識なのか、磐長はぼやぼやと笑った。まだ。チラリと見えた胸元は、結構豊かだった。ご馳走様です。

ジト目でこちらを睨む咲耶を無視し、その箸を使って焼かれた鮭の切り身をとるあえず一口。

「いかがですか？」

たおやかに微笑む磐長へ、ニイと笑って時雨は囁く。

「お前の味がする」

「こののっ、セクハラ男ッ！」

ナイフを投擲するように、添えられていた茗荷みょうがを放り投げってくる咲耶。

時雨は振り向き様にそれを口で受け止め、そのまま頂く。うん、香りと歯応えだけはいい。茗荷は薬味に良く使われるのだが、単体でも結構美味しいのだ。

それよりも、先程の鮭の焼き加減は見事だった。解れるような身と、嫌味にならない程度に効いた岩塩が柔らかい味を出している。

味噌汁は薄揚げとワカメ、それから玉ねぎ。シンプルながら、健康的な組み合わせの具に、昆布ベースの出汁が効いた汁が良く染みていた。

出し巻き卵に至っては、口の中に入れてから広がる鰹と昆布の出汁が、口の中を蕩けさせるようだ。隠し味の七味唐辛子が、馬鹿になりそうな舌の上で確かな旨みを思い出させてくれる。

そして、この真珠のような輝きをしている白米だ。

一粒一粒の甘さが分かる。少し硬めに炊かれた白米は、取り立てて食を味わおうとしていなかった時雨を完全に時雨を虜にしてしまう。

「お代わり、くれるか？」

「ふふっ、食べ盛りなんですわね」

「こんな美味いメシ、久しぶりだしな。懐かしいっいたらないぜ。：

…お、ほうれん草も美味しいな。醤油と茹で具合が俺好みだ」

「皆で頑張ってますから。勿論、時雨さんも働いてもらいますよ？」

「おう、何でも言うってくれ。こんなメシ食わせてもらっというて、何もしない方が罪ってモンだろ」

機嫌よく、時雨は返事をする。一家は食を担う人物が強いと聞くが、言い得て妙だ。事実、すっかり毒気を抜かれてしまっていた。

「では、釣りに向かって頂いても良いですか？ その間に、ここの

生活について簡単な掟をあなたにお伝えさせていただきますので」

「おう。んじゃ、早く喰つちまおうぜ、幸！」

「はい！」

早々と膳を平らげた後、素早く歩いていく。ここに長居するつもりはないが、もう一人の所在も気になる。

そう、アイリスだ。

彼女に関しては、女性であるが為、別の場所でルールを説明してもらっているらしい。許可がもらえれば、今日にでも会うつもりだ。

「竿はどこだよ」

「案内します！ いやあ、修練サボれてラッキーです。ありがとう

ございます、時雨さん！」

「おうよ、崇めろ」

「ははーっ！」

「いや、一々床に三つ指付かなくていいつつの。てか、急いでるんだろうが」

間抜けな会話を交わしながら、時雨はただ目の前を奔走するしかなかった。

その頃。

アースガルド帝国。アーサー城内部、謁見の間にて。

「……………どうなっているんだ！」

ロツテは白い頬に朱を散らせて激昂し、跪いている軍服の連中を怒鳴りつけた。

それが完全な八つ当たりだと分かっていたのだが、こうでもしないと落ち着いていられない。

信用していた人物が、堂々と裏切ってみせる。しかも、真意を問いただそうと向かわせた部隊もスクラップと化し、戦力が激減しただ

けと言う最悪な顛末を享受する羽目になったのだ。平静ではいられない。

と、艦長　フランクが、悔しそうに床を殴りつけた。

「私の……失態です。あの男を最後まで、理解できなかった……」

「いえ、艦長の所為じゃないです！　アイツが勝手にやってきて、勝手に出て行っただけの話ですつてば！」

軍エースパイロット　ローランが、そう若くも客観した見解を見せてくれる。

確かにその通りなのだが、協力すると彼は言ったのだ。いや、だが

……

「やはり……預言者が、彼を呼んだのでしょうか？」

「普通そうでしょ常考。時雨の来た日から寝落ち中。乙」

フランクの疑問を即答で肯定するオペレーター……アリス。

そう、時雨を呼んだ人物を、国民全員が知っていて、理解していない。

預言者は二人いる。アイリスには、生き別れた双子の姉がいるのだ。未だに軍に囚われ、祈り続け　時雨を呼んだ日に、力尽きて昏睡状態に陥っているが。

この事は、国を挙げての秘匿とし、軍一部情報管理者と国王、その側近しか事実は知らない。口封じに何人か暗殺した例もある。それ程の機密なのだ。時雨に明かさなくて、正解だったかもしれない。

宰相達は、時雨の奇行に対してだろう、溜息混じりにぼやいている。「やれやれ。あいつは普通じゃなかった。いい気味だよ、サルはサルらしく、あいつらのお仲間になつてればよかったのだよ」

「確かに。破天荒過ぎだぜ、ありゃ。おれら凡人とは、頭のベクトルが違うんだろ」

呟きを黙らせようとしたのだが、それは意外な人物に遮られる。

「普通じゃないけど、あなた達よりもずっと優しいもん！」

部屋で生活をさせていたシャルロットが、いつの間にかこの間にやってきていたのだ。

滅多に姿を見せない姫の登場に、全員が唾然としている。

構わず、姫は叫び続けた。

「人として、低俗な事はやってなかった！ 陰で悪口を言ったり、みんなを除け者にしたりしなかった！ 差別だっけしなかったもん！ 私がお姫様だっけ分かって、外の世界を見せてくれた！ 兄様の所為だと思っけど、あんなに優しくしてくれたのも時雨さんが初めてだった！ いっだっけ、まっすぐに……言いたい事を、言ってたもん！ 好きなものは好きっけ、嫌いなものは嫌いっけ……言ってた、もん……！」

最後になるにつれ、言葉に涙が滲んでいく。無理もない、多分シャルロットにとっけは初めての理解者だったのだ。

出たいと思っけていた外の、綺麗な部分も汚い部分も、差別せずに見せてくれた。だから、信用できている。

彼と関わった者ならば、今のシャルロットの声は全面肯定できるものである。

人をおちよくっけたりするものの、それは緊張や張り詰めた空気を解す為で、本当に必要な言葉をかけてくれる。優しさと甘さの違いを理解している人物だったのだ。

「……アーサー王。これからの方針を」

「ああ」

決めねばなるまい。

が、

「……明日、十二時に……宣言しよう」

やはり、自分も悲しかったのだと、そう逃げた瞬間にロツテは気付いたのだっけ。

## 八章 武士道と思惑（後書き）

第二次スパロボZ発売しましたね！

只今プレイ中なのですが、胸熱な展開がまた……！むせるな……。

プレイ中だろうが、更新速度は不定期です。

## 九章 信用と仮面

### 九章 信用と仮面

『隔離世』の大屋敷。その庭には、水が流れている。海水と真水が混じった 所謂、汽水と言う珍しいものだ。生活用水はこちらに流しておらず、その水は底が見えるほどに美しい。

その川上は、真水だ。『生命の泉』から湧き出した水が、途中で『死の泉』とされる海水を生む川と混じり、下流からが汽水となっている。

下流も綺麗なのだが、上流はより美しい。と、その上流に一匹の羽虫が飛んでいた。

同じ軌跡を描かず、川の下に何かある事を指し示すかのような、珍しい飛び方をしている。

その虫に、堪らず山女魚ヤマメが飛び出して、見事に捕食した。が、そのまま山女魚は外へと引き寄せられてしまう。

姿勢を低くしていた時雨は、竿だけを立てて山女魚を掴み、魚籠の中に落とした。

針が付いた虫 と見える物体は、フェルト等で虫のように偽装している、云わば疑似餌だ。俗に、フライ、もしくはフライフィッシングと呼ばれる漁法。

隣で仕掛けを作っていた幸が、驚きに目を見開いた。

「ほ、本当に釣れましたね！」

「そりゃそうだろ。釣れなきゃ、一々こんなまどろっこしい事やるかよ」

本当はガチンコ漁 大岩に大きな石を打ち込み、その衝撃で気絶し、浮かんできた魚を回収する漁 にしたかったのだが、幸に

止められた。何でも、危ないし風情がないとの事。

そのまま場所を移し、比較的穏やかな流れの場所で、もう一度フライを使って挑む。

リールは無い。扱いやすいように、川釣り用のロッドよりも随分と短めの竿を使っている。この虫の動きが難しく、初心者はご法度の漁法だったり。

時雨の手際は馴れたもので、本物の虫のような動きをしていた。先程見せた不自然な飛び方は、規則的に動くものが突発的に移動しようとする、本能的にそれを追いたくなる習性を利用している。人間でも、一人だけ違う動きをすれば、嫌でも目立つのと同じだ。

「時雨さん、いいですか？」

「おう、何だよ」

練り餌を付けた仕掛けを投げ込み、幸は声を少し大きくして話しかけてくる。地震動とは違い、空気振動は水中へは伝わりにくいので、魚が逃げると言う懸念は無いのだろう。

手はそのままに、顔と意識を幸の方へ向ける。

彼女の表情は真剣なものだった。邪気染みた気配さえ漂っているように感じる。幸がそこまで思いつめる事など、想像しがたいのだが。

「……アースガルドから来たんですね？」

「ああ」

「彼女達は、楽しそうに暮らしていますか？ 戦争の影に怯えず……笑って暮らしているんですか？ こちらの悲惨な状況を伝えず、ただ勝っているだけだと伝えられて、のうのうと暮らしているんですか？」

「……どう言う意味だ？」

その言葉を返すと、幸は俯いて黙り込んでしまふ。

時雨は推測を立てつつ、溜息を吐いてからそれを語りだした。

「あれか。グランディアはアースガルドの攻撃とやらを受けてボロボロなんだろう？ 向こうも、兵力が激減したとは言え、技術力に

開きがある。こっちが負けるのも時間の問題だ。そんな戦時中なのに、穏やかな生活をしているのが許せないわけだ」

「……男女の地位も平等で、私達みたいに……こんな地下で怯えて暮らす必要も無くて。それが……悔しいんです」

「へえ」

気のない時雨の返事に、幸が鋭い視線を向ける。が、その表情が凍り付いてしまった。

何故なら、時雨はいつもの軽薄な笑みを潜め、ただ残念な物を見るような冷たい瞳で幸を睥睨していたから。

「無いものねだりかよ。そりゃ向こうには最初から無いものがあるわな。羨ましがるとは言わねえよ、人間の自然な欲だからしゃあないだろうし。けど、お前は何をしている？ のうのうと釣りしてんじゃねえか。少しでも何とかしたいなら、何で戦わない？ 何でここそと逃げてるんだ？ 小さな戦力でもやれる事はあるよな。なら、何でそれをしようとしらない？ 抗うだけの牙は誰でも持つてる。いつまで口閉じてやがるんだ？」

「そ、それは……皆が、いないと……」

「ハッ！ 仲良しこよしかよ、この期に及んで。皆がいないと飯が食えない、皆がいないとトイレにも行けないのか？ 赤ん坊かテメエは。奴らを憎んでるなら、一人や二人、殺してみる。戦争なんだろうが」

「あ、貴方は、自分の手を汚してないでしょう！ 技術者が知った風な」

「最初は両親だ」

「……え？」

「次に親友の女、次に土機に乗った男達、次にシュバルツガルドの密偵、次にファヴオス基地にいた職員全員」

「な、何を……」

淡々と人物を述べていく時雨の表情から感情と呼べるものが消え失せていく。

その瞳が改めて幸に向けられた瞬間、彼女は心の底から恐怖し、今までの生温い恐怖と言う感情を忘れてしまう。

「テメエら、本当の恐怖を知らないだろ。死に掛けてないから臆病だ。死を体感するよりも恐い事なんて無いからな。それ以外なら何でもやってやる気になる。どんなに綺麗な言葉を飾ろうが、戦時中に殺したくないとかほざく奴は敵よりも性質が悪い疫病神だ。そのなあなあが伝播するからな。正直に言うとお前は間引かなきゃならねえヤツの一人なんだよ。……邪魔だ」

拳銃を早抜きし、幸へと向ける。

竿を放り出し、彼女はじりじりと後ろに下がり 樹に背が当たって、へたり込んでしまう。

時雨は冗談ではなく、殺気を込めている。だから、彼女も恐怖から歯の根を震わせ、涙を溢れさせていた。

もう一つ、時雨は小型の銃器を取り出して、彼女の足元に放る。

幸はそれと時雨の顔を交互に眺めていたが、やがてはそれを手に取った。

「そうだ、それでいいんだよ。考えても見ろ、殺されたら終わりだぜ？ なら、相手が死ぬ方がいいだろ。相手の抱えてるものの重みなんざ、知ったこつちや無いだろうが。死ぬ相手に容赦はいらねえ。纏めて吹き飛ばしちまえよ。……あるロボットのアニメがあるんだが、お前に送るわ。『ねだるな、勝ち取れ』ってな」

そう言い終えると、悪戯少年のように時雨は破顔して見せた。

「わ、私にも……出来ますか……？」

「出来る出来ないじゃねえ。やるか、やらないか……だろ？ ……俺と一緒に来い」

力強い時雨の言葉に、幸は胸が震えると同時に、体の芯に熱い物を打ち込まれたような滾りを感じていた。

彼と一緒になら、何でも出来そうな気がして。変わりたかった自分に、変われそうな気がして。

だから、涙を拭って歯を強く噛み、無理やり微笑んでみせる。

そう……恐怖なんて、噛み砕いてしまえばいい。私にはその為の、牙があるのだから。

「……はい！ それに、私は貴方のお世話係ですから！」  
強がったような笑みだが、それでいい。恐怖を忘れるなどは、誰も言っていないのだから。

と、竿が急に重くなり、川へと引きずり込まれそうになる。

「っと！？ さ、幸！ 手伝ってくれ！ こりゃ、ヤバイ……！」  
「はい、時雨さん！」

足早に彼の元へと駆けつけ、竿を一緒に引く。

だが、無茶な体勢だったので、それを立て直せず、力強い引きに吸い込まれていった。

咄嗟に幸を庇うように抱いて、そこそこ深い水の中へとダイブしてしまう。

冷たい水に驚いたが、早々と立ち上がって、一気に糸を手繰り寄せた。

と、掛かっていた獲物に、双方目を丸くしてしまう。

「わぁ……！」

「……そりゃ、重たいはずだ」

一メートル半を超える大魚 伊富魚イトウが、水の中で暴れている。

魚籠には収まらず、万一に持ってきていた大魚籠に入れて、一息吐く。

「濡れたな……」

「はい……」

下着までぐつしより濡れて、気持ち悪いつたらない。

幸は、と見て失敗を悟り、頬が高潮するのが分かった。

白い襦袢が透けて、肌色が覗いている。濡れる事によって、整ったプロポーションのラインがより一層鮮明になっていた。まあ、エロいの一言で済むのだが。

本人も時雨の視線を辿ってそれに気付き、顔を真っ赤にしながら反対方向を向いてしまう。

「……見ちゃいました？」

「セクハラされたな、見せ付けられちまったぜこの俺が……」

「ええっ!？ ひ、被害者はこっちですよ! 酷いです!」

「男女平等なんだろう? だったら、俺の裸見るか?」

「え……遠慮、しておきます」

「実は興味津々なんだろう? 遠慮すんな、ほら」

遅しい上半身だけ露出させてみたのだが、それだけで幸は茹った蛸のように赤くなり、そのまま気絶してしまった。

彼女を陸地に抱き上げて、くしゃみを一つ。

「……火でも起こすか」

どちらにせよ、乾かさなければならぬし、もう何匹かは釣らなければならぬ。

時雨は薪を拾いに、濡れた着物で森の中へと入っていった。

「どうする? そろそろ、あの少年とやりあって良いんじゃないかな?」

「いい考えじゃな。静観も飽いておつた。それに、あれは感情兵器のスーパーロボット。これをあの少年が作ったのかどうかも、聞かねばなるまい」

照明の光りに浮かぶ、黒い機械兵器 輝・トラペゾヘドロン。

人のような温かい輝き。まるで、生きているかのような輝きを示す、そのロボット。

「なあ……お主も、そう思うじゃろ?」

それに乗るのは 誰でもない。

投げ掛けられた視線は、その機体に向いている。

「お主の生みの親に会って来るがいい。名を付けて貰って来るのじゃ。仮の名前や『名無し』のままでは、面倒だからのつ……」

少女がそういい終わると、機体のモノアイが淡い緑色に輝き、そのままどこかへ消えてしまう。

「……？ この世界から消失したぞ。何なのだ、あの機体は」

「何かを感じたんじゃないんですか？ それか、恋でもしたのかも。感情兵器と言うのは、機体に生命が宿っている　つまりは、精神もあるの。人の形を取るって、開発者が設計図に書いてたわ」

メイド服の女性が二度頷き、更に指を鳴らす。

すると、奥に並んでいた直方体が駆動し、不恰好だが人型を成した。

「趣味も程ほどにするのじゃ。資材は有限じゃからな」

「まあまあ！ 他の星から集めた分もありますし、いいじゃないですか！」

生気の無い一人の人間が、その中へと転送され、その機体は脚部のブースターを使って発進していく。

少女は玉座にて、ただ経過をさも愉快そうに笑ってみせる。

「さて……白い盾はどうなるのかな？」

その視線は、暗闇の空間をただ眺めていたのだった。

魚を獲り終え、時雨は宛がわれた研究所にいた。

グランディアの女性用機体を作る。楽ではないが、難しくは無い。日本人女性の脳波と全く同じ。人数が少ないなら、個人の専用機に仕立ててもいい。

問題は、また素材か。

ここで採れる鉱物資源は限られている。『紅の虚』は時雨を信用していないのか、情報は流してもらえてはいない。

流石、警長は慎重だ。あそこを仕切っているだけの手腕は認めざるを得ないだろう。

いや……警長ではない気もする。幸や彼女以外、周りと視線が合

った試しがないのを、今思い出す。

ふと過ぎる、一抹の余勳。

「……俺を隔離し、殺そうとしてるのか？」

だとすれば、監視カメラはお決まりの位置にあるはずだ。ダミーも混ぜるとしたら、天井裏に五つ、PC下に一つ。更に俺ならヴォイスマイクも畳の下に配置する。音声は時として、重要な情報やそれに繋がる手がかりになるのだ。

銃弾を放ってそれらを破壊しつつ、残しておいた一台のカメラへと、笑顔を向ける。

「逃げねえけどよ、そりゃないぜ。俺は一応信用してるんだからさ、ちよいとは信用してくれよ。いや、お前じゃないのは分かっているぜ、警長。……おい、そこで見張ってるクソ女。次やってみるよ……消しちまうぞ、この地下空間ごとよ」

最後のカメラに一発打ち込み、作業を再開する。

（機体には思い入れがあったほうがいい。武器は和弓、刀、薙刀の三種。銃は経験の浅い者に、予測ロックオンシステムとオートマニューバースystemを。デザインは和甲冑……それか、可変式の戦闘機）

二種類を考案し、それぞれの骨格を3Dソフトで模り、駆動部を決めていく。

（いや……この地形を考えれば、水中からの攻撃が有効かねえ。レーザー系は極力抑えて、実弾やミサイルを。電磁加速砲も有効っぽいよな。装甲は厚めにし、尚且つ高機動。接近戦時に、脳波を感じて働く全身フィードバックシステムを）  
組み上げていく。ただ、淡々と。

徐々に思考が固まっていく。滾る感情を抑えつつ、それを画面内で結晶化させ、試す。失敗。では次だ。

ああ、しかし楽しい！

この時が堪らない。試行錯誤を繰り返し、工程を消化していく。ただそれだけの事が、楽し過ぎて止められない！

感情を表に出さず、制御する事を覚えたはずなのに、こつこつ時にはてんでダメになる。

(……出来た)

されど、没頭するとその時間はより短くなってしまふ。

「送信……つと」

その設計図を、警長へと飛ばした。

完成したのは陸戦に特化した、『玄武』、『白虎』。そして、副産物である、海戦仕様の『豊玉』。後継機の『鳳凰』と『青龍』、そして『伊邪那岐』も懸念したが、これは上質な鉱物なくては成立しない。なので、データはスティックに写しておいた。

一息吐いて、回転椅子の背に体重を預ける。

地面を蹴って椅子を回し、鋼鉄で仕切られたドアを正面に捉える。眺めつつ銃口を向けながら、その向こうへと声を掛けた。

「……居るんだろ？ 咲耶姫」

ドアが開くと、そこには確かに彼女の姿があった。手に刀を持って。

「流石。全部手のひらだつて？」

「浅慮過ぎるんだよ、アホクセえ」

「馬鹿にしないで欲しいわね。あんたみたいな男なんて、勝手に許せばきつと私達を襲うんでしょ！ その頭で言葉巧みに利用して強い体で物理的に逆らわせない！ 向こつこの兵器を作っていた裏切り者！ グランディアの民なのに、何故裏切つたの！」

間髪入れず、トリガーを引く。

銃弾を腹に受け、弾け飛ぶ刀。思わず目を覆つた咲耶を地面へと蹴倒して、拘束する。

「……俺にもあいて選ぶ権利があんだよ、思い込みだけの世間知らずが。それに、俺は異星人だ。ここに来て、ゼロの人間関係でやつてる。だから、俺は俺の認め、信じたヤツしか身内扱ひしない。それ以外は気持ち悪くて、抱けないね」

「嘘！ 男なんて、穴が開いてれば何でも良いんでしょ！」

「なら、これが証拠だ。俺は　　テメエらなんて、どうでもいいんだよ」

容赦なく、彼女が最も誇っている整った顔面を　　思いつきり地面へと叩き付けた。

くぐもった悲鳴を聞きつつ、その鼻血と涙で悲惨なことになっている顔面を、鏡で見せてやる。

「……不細工だな。キモ過ぎ、最悪。こんな事、言われたこと無いだろ？　生まれてからずっと、煽てられて育ったプライド自慢の無能野郎がな。その所為で、テメエの姉さんがどれだけ苦労してると思っただよ」

「か、関係ないでしょ！」

「そうやって逃げる気か？　その問題に直面するのが嫌だからって、事実から顔を背ける理由にはならんわな。アイツもアイツだ……一々構ってやるから、それが足枷になっちまう。お前、何も出来ないんだろ？　綺麗な手、綺麗な顔、綺麗な服。整えられて嬉しいかよ。贅沢な悩みばかり増えていくってのは、どんな気分だ？　雌犬が。庇護下で生活して、何も感じないのか？　好意に胡坐を掻くだけの生活ってのは、そんなに面白えのか？　ああ！？」

「だ、だって……私に、させてくれなくて……お姉ちゃんの方が、上手」

「彼女の手を見たかこの馬鹿野郎が！」

腕を折れる限界まで捻り上げ、込み上げて来た怒りを爆発させてしまった。感情制御が利かない。いや、利かせようともしない。思わな

い！  
「そうやって言い訳をするな！　最初から何でも出来る人間はいない。何で、磐長の手が傷だらけか、知ってて気付かない振りをするな！　彼女の才能は平凡だ、テメエよりもな！　だから、人一倍努力する！　頑張つて結果を残している！　ただか一度や二度の失敗じゃない、あれは何度だって、何時だって努力していた手だ！　苦労を知るヤツの手なんだよ！　じゃテメエは何だ、お飾りか？

だったらなあ、お飾りらしくしてろよ。不必要に口を利かず、自分の身形にだけ考えてる。それ以上に迷惑は掛けず、積極的に前に出て、交渉の道具になれ！そして、弄ばれてるよ！お飾りの仕事だ、冥利に尽きるだろ？無能なお前でも、それくらいなら出来るだろうしな。……ああ、その顔じゃ無理か。汚えし」

恐怖で引き攣っていた彼女の瞳が、確かな怒りを抱いた。同時に、抵抗が戻ってくる。

ビクともしなかつた腕。だが、少しずつ抜け道を探らんと、震わせることに成功していた。

「そうだ抵抗しろよ。何で出来るのにそうしない。甘いんだよ、全てにおいてな！最初からやってりゃ、拘束を解けたかも知れねえだろうが。後、刀を突き付けりゃ俺が手出しできないとでも思ったか？恐くねえんだよ、馬鹿が！殺すつもりなら、チャカ使つか爆弾特攻でもしてみろ！」

開いた片手で、押し折った刃を全力で握ってみせる。

鮮血が滴り落ち、すぐに赤い水溜りが生まれていた。痛いし酷い出血だが、死にはしない。この程度は、覚悟しておけばなんて事は無い。

「……変わるなら、今だ。何事にも転機がある。ここは、女性の権限を高める場所だったな。お前も、明日から全員に混じって訓練してみりゃいい。でなきゃ、仲間なんて言葉だけだ。お飾りでいたいなら、そうしてろよ。でもな、自分で動かない限り……周りが、変わらないんだよ。白馬の王子を求めてばかりじゃ、ダメなんだ……」

そこには、いつもの軽薄な時雨の姿はない。

いるのはただ……物憂げで、優しい雰囲気少年だけ。

「あなた……」

込み上げて来た涙を振り払い、彼女の拘束を解く。

瞬間、立ち上がりながら咲耶は詰め寄ってきた。敵意は無く、ただ純粹な好奇心だけが彼女にある。

「……お、教えて！ 何で、泣いてたのよ！？ それに、何で……叱ってくれたの？」

と、振り向いた顔は、酷く壊れていた。

いや、表情は凶暴そうな微笑なのだが、雰囲気は優しいままだ。感情の仮面すら付けねず、時雨も同様の渦中にいた。

「……踏み込んでくるなよ。甘えなくなる」

「え……」

一呼吸置いて、瞬きをした刹那に、時雨は元の雰囲気に戻っていた。

精神高揚の臨界点以内に、テンションが収まったから、コントロールできる。

「ってなワケよ。俺は逃げねえ……しばらくは、な。それに約束する。俺から一方的にお前らに踏み込んだりはしない。また、踏み込ませるつもりもねえよ」

「ちょよ、ちょつと！」

「いいから、顔拭いてこいや。血の化粧でアマゾネスに見えるぜ」

「……今度、続きを聞くからね」

「覚えてたらな。三秒で忘れる」

「あ、あんたねえ……！」

「……あれ、何でそんなに血塗れなんだよ！？ 誰にやられたんだ！？ は、早く医務室か自室に行つて、血を拭いた方がいいぞ！」

「本当に忘れてんじやないわよ！ お、覚えてなさい！」

捨て台詞が似合う小物つぶりも素敵だったりする。何でも絵になるな、コイツは。

苦笑しながらパソコンに向き直ると、速報の二文字が画面に表示されていた。

ブラウザを開くと、そこに映し出されたのは 巨大なロボット。

「あ？」

防衛しているのはアースガルドの精鋭。フラン達はまだ、現れてはいないらしいが。

それにしても、ロボデザインは酷い。  
全長六十メートル程か。装飾も何もない、鉄で出来た積み木を繋いだだけのように見える。

が、

「……なっ!？」

その腕が突然、砲弾の如く打ち出された。

目にも留まらぬ速さで駆け抜けた拳は、そのまま誘導線を辿って間接と再連結。

更に、その腕は変形し、ドリルに変わる。

「おおおおおおおっ!？」

倒されていく機体だが、コックピットまでは貫いていない。不殺主義者でも乗っているのだろう。

パイロットの考えは気に入らないが、スーパーロボット伝家の宝刀、ロケットパンチにドリルとは……。

「……ちよつと、俺も作ってみるか。王道ってヤツを、な」  
それに、見捨ててはいけないだろう。

欺いたとは言え、彼らは　フラン達はまだ死んでいいフェイズではない。アースガルドを代表とする戦力が消えてしまえば、グランディアがこれは好機と殲滅するだろう。

しかし、正体を知られたら、何かと面倒な事になる。

なら……別の存在に『成れば』いい。演じきるのだ。

「……これを使う日が来たな」

システムデスクの下。二重底の箱に隠している、その仮面。

「んじゃ……ここからは、人格と声音を変えよう。彼の先達者のように、別人へと。俺が私になり、技術者は預言者となる。私はそうだな、ゼ　は流石にオマージユとは言えない領域か。ならば、私は……ヴァルス・ルードニルとでも名乗ろうか。知恵は私より、優れた者がいるだろう……それに、私は死ななければならぬからね」

陶器のような質感の仮面を付け、その下で時雨　いや、ヴァフ

スは穏やかに微笑んだ。

「さあ……行くところか」  
戦場へ。

第一部 閉幕 終章 ギャラルホンの音が始まる（前書き）

第一部終章です。

時雨の物語はまだ続きますが、次章よりスポットが変わります。

## 第一部 閉幕 終章 ギャラルホンの音が始まる

### 第一部 終章

終章 ギャラルホンの音が始まる

「シャルロッテ様！ 次は――」

「貴様らの首から上は飾りか！ 次の行動くらい、察して動け！

――を聞いて十を分からずして、何の為の貴族だ！ 各班は砲撃準備、フラン、ローランは技術者と連携し、『カルブリヌス』を起動しろ！――」

「そ、それは国秘蔵の武器で――」

「王族専用。しかも、世界を滅ぼすかもしれない威力を秘めた超電磁レーザー砲だろう？ なら、今は危機だ！ それを使う事に引け目を感じるなら、己の力量の無さを責めている！――」

舌を打ち、ロッテは指揮の手を緩めることなく、指示を飛ばしている。

時雨とノストラダムスが居ないので、作戦系統が死滅している。指示を飛ばすだけなら、時雨の進めてくれていた通信制度による円滑化で何とかなっているのだが、長い間は持たない。

そんな中で、戦略等を練れるのが自分だけだとロッテは自負している。兵法を学び、帝王学を幼少から修めてきた自分なら、並みの司令官以上の働きは出来るはずだと。

「遊撃神機隊は各方位から単独攻撃、砲撃神機隊は間接部を狙え！

近接神機隊は弱点を探りつつ、情報をメカニックに送るんだ！――基本的に従順な指示を飛ばしながら、とりあえず玉座に座り直す。

（どうする……？ フランやローランに出撃してもらうか？ いや、

しかしオレの指示が通っているのはこの二人の圧力が場内にあるからだ。素人のオレを信じてくれる彼らを、軍部全員が信じているから成り立っている。……それに、二人が出たところで、敵うだろうか？)

と、  
『や、やりました！ 脚部を破壊しました！』

「映像を回せ！」

玉座のパネルを操作し、巨大なホログラムモニターを展開させる。確かに片足から黒煙を上げ、破壊されている。あのロボット 作戦時には『ゴレム』と呼んでいるが 強度はでたらめだが、隙があつたのだろう。

あれだけの巨体を動かすほどの動力源。一瞬だが、時雨の顔が脳裏を過ぎつたが、彼は造形美にも五月蠅い。不恰好な物は作らないだろう。

遠慮しようかとも思ったが、そうしてやる義理は欠片も無い。  
頷き、ロツテは声を張り上げた。

「よし、一気に畳み掛ける！」

『はい！』

それぞれの武器を持って、急行する神機隊。

しかし、次の瞬間 動きが、止まった。

それは自分や作業していたフラン達も同様で、その光景にただ目を奪われるしかない。

『な！？ あ、足が……』

足が 再構築されていく。

礫解しそうだった足は、今や元通りになっていた。表面にも先程の爆発痕は無く、同じようなフォルムが覗いている。

「動揺するな！ 脚部へ攻撃を集中し、足止めをしろ！ 『カルブリヌス』の使用は全ての民を逃がしてからだ！」

『は、はい……』

だが、所詮は一般兵。芳しくない状況が続く。

時雨に真意を問いたただす為、拘束を命じていた追撃部隊のスペシャルズは壊滅。どこへ行ったのやら、あの裏切り者は。フランは、と見れば、手が止まっていた。

何故なら……思い出していたからだ。

(……そう言えば、『紅の虚』が足りないと言っていた。……見捨てては、いないのか？ また、戻ってくるのか？ 携帯電話を捨てたのだから、きっと足をつかせまいと懸念して……)

彼は 帰りたいだけなのだ。

裏切っていたのは自分達で、彼を責めるのはお門違い。ノストラダムスの数奇な運命に取り込まれた、ただの青年だ。その鬼才を利用していたのは、自分達。

あんなに溶け込んでいる時点で、おかしかったのだ。本心を隠しているのは、誰だってそう。だから、絶対に彼は本心を見せなかった。彼もまた、一人ぼっちだったのだ。

甘えられる人もいない。馬鹿をやれる友人もない。心を許せる誰かだつて、いないのに。

(……時雨)

と、スカートポケットに入れていた携帯電話が震える。

それを取り、宛先を見て、首をかしげた。

「？」

知らないアドレスからのコール。

何故かは知らないが、その通信を繋げていた。

「……誰だ」

「初めましてになるだろうか。いやはや、表舞台には出まいと思っていたのだがね。君達があまりにも不甲斐無い故、私が遣わされたのだよ」

「何を言っている！」

『感情豊かなのは実に良いが、時と場合にもよるものだろう。一母艦を統括する司令官であれば、尚更それが要求されると思うのだが

ね。さて……」

「結局貴様は何だ。何がしたい！」

怒鳴っても、その男は穏やかに返してくる。

全てを見通して、その上でおちよくっているかのような不快感。老人のような落ち着いた いや、落ち着き過ぎた雰囲気、こちらの苛立たしさを助長してくる。

「先程の言葉から推察するといった行為はしないのかな。まあ、この状況で連絡してくる目的は元より絞られているがね」

「……助太刀か？」

「然り然り。おんぶに抱っこではないらしいね、失礼。だが、私は彼 ゴレムだったか。私はその弱点を知っているが」

「何っ!？」

「何故、再生するか。実に簡単だ、まさに稚戯にも等しい。焦りで観察眼が鈍っているのかも知れぬが、そんな時こそ落ち着かねばならないだろう。額を……」

見れば 何かの文字が刻まれている。

「読めるかな？」

「いや……」

見たことの無い字だ。何故、電話越しのヤツはこれを知っている？喉の奥で笑うような……そんな声が、受話器から聞こえて来て、フランは一瞬激昂しかけたが、また嘲弄されるのがオチだと、いきり立つ心を強引に落ち着ける。

しばらくし、彼は物語でも読んで聞かせるかのように語りだす。

「……エメト。真理と言う言葉。あれが発動言語になっている。その造形を崩さず、再構築出来ているのも、全てその言語が媒体になっているからだよ」

「emeth……」

「そして、頭文字を取り除けばmeth。その意味は 彼は死せり、となる」

「そ、そんな言葉遊び……!」

『確かに、暇潰しに過ぎない。しかして、納得しようとした自分がある。それを否定するのは簡単だが、小さなプライドを後生大事に抱えている事が、どうにも私には理解できないのだがね。一縷の可能性に縋りたい状況で、これとは。君を少々持ち上げすぎていたかもしれない』

正論だ。悔しいくらいに。

苦々しさを噛み潰し、深呼吸。

「……情報、感謝する」

『いやはや……大人びて見ても少女時代が無かった分、君は誰よりも少女らしい』

「っ！？ 何故、知って……！」

『ああ失礼。君はとても可愛らしい。少し、魔が差してしまっただ。では、非礼の侘びといつては何だが……あのゴーレムを止めて見せようか』

「何？ おい、貴様単機で何が……！」

『心配は不要だよ、お嬢さん いや、フラン・ド・アルテミス艦長。私はヴァルス・ルドニル。かつて、彼のオーディンと智恵を比べた者だ』

「なっ……！？」

その名を聞いて、愕然とする。

ヴァルスルドニル。

本人の言った通り、彼の英雄 オーディンと知恵比べをし、無理な質問を突きつけられて殺された人物だ。

この世界には様々な人種がいた。

巨人族は覇権を持つ一族であった。過去の災禍とも呼ばれる災戦  
ラグナロクによって、世界が一度、消失するまでは。

一度消失した世界を再構築したのは、勇者の魂の揺り籠 エイン  
ヘリヤルから飛び散っていった人間達。

過去の記憶を持つ者も、事実存在する。自分も、アルテミスの子孫だ。オリオンの子孫は、もう死んでしまったが。

「……本人なのか？」

『さて、どうだろうね』

「ふざけているのか！」

『何、見ているといい。一撃で下して見せよう。この……』ヘカト  
ンケイル』でね』

そうして通信が切れると同時に

「新しい敵が出現なう。……？ Non number、新型？ ヘカ

とん……けいる？」

「何っ！？」

その機影が　ディスプレイに現れたのだった。

『隔離世』からの許可を貰い、五十分の外出許可が下りた。

慈悲深い警長。いや、義理に厚いのか。恐らくは、機体が一つ多くなつた分の代金なのだろう。

ともあれ、アイギスを改造したこの『ヘカトンケイル』で戦えるか、実戦テスト。

カラーリングは深緑。コンセプトは敢えて鈍重重装甲、しかし機動力は損なわない、空での高機動を重視。

遠距離からの攻撃は長距離レーザー砲とオートマチックスナイプ。アイギスの盾を背中に取り付け、背後からの攻撃にも対応可能。

中距離からはブーストナックル、近距離ではステークがある。攻撃的に見えるが、ミサイル類は一切積んでおらず、活動時間もアイギスより大幅に短い。

流石に五十頭百手は無理だったが、それに近い物も用意してある。

今回は派手に見せるため、長距離レーザー砲をゼロ距離で発射する。「さて……長時間居ては、流石に警長も可哀想だ。一撃で沈めよう」

二発は陽動、最後の二発で仕留める。スナイパーは一射型と三射型

があるが、そのセオリーは関係ない。当てればいいのだから。五十メートル近いこの鋼鉄の巨人を自由に奔らせ、そのまま突っ込んでいく。ロケットパンチが飛来するのだが、無駄だ。

「なっ……!?!」

画面を見ていたロツテは、愕然とするしかなかった。次々と機体を壊されていったのを目の前で見ている彼は　その傷一つ負わない深緑の機体に、ただ瞠目するしかない。あれだけの強度。使われている素材は、限られてくる。

「『蒼の現』……だと!?　馬鹿な、在庫は損失していないのに……」

ロツテは舌打ちするが、フランは大して驚いてはいないようだった。それどころか、ある予感めいたものさえ覚えていた。

(あの動き……あの思考。声や雰囲気は別人だったが、まるで時雨の演技を見ているようだった。いや……だが、声が違いすぎる。あんなに落ち着いてなかった)

可能性を払うのに躍起になっていたフランは、画面を向き直った時に愕然とした。

一瞬でゴーレムに接近し、その頭文字『e』へと攻撃を放つ。

赤黒いレーザーはそのまま頭部を貫き、その文字を『meth』へと変えた。

瞬間、あれだけ動いていたゴーレムがピタリとその動きを止める。一同が息を呑む中、そのゴーレムは礫解し、もう元には戻らなかった。

通信が届き、ロツテは渋々とそれを繋ぐ。

そこには、長く美しい金髪を伸ばし、白い艶のある仮面をしている若い男の姿。

『どつも、ご機嫌麗しゅう。あの小僧の子孫か、いやいや。剣の才

は継がれなかったようで、些かつまらないな。アーサー王よ、私を覚えておいでかな？」

「……仮面を取ろうともしない無礼者など、最初から存じないが」  
『だろっね。いやはや、真面目に受け取ってくれるか。可愛いなあ、抱きしめてみたいよ』

「なっ……………!？」

肌が総毛立つのを感じ、ロツテは画面を睨みつける。

「貴様……愚弄しに来たのか？」

『いや、先人の智慧を与えようと思ってね。……王よ、何故　カ  
ルブリヌスを使わないのかな？　グランディアを殲滅するなら、必  
須だと思っただがね』

「……………」

その質問に、思わず頬が引き攣る。

見透かすようなその声に恐怖すら感じている自分がいて、叱咤し顔  
だけでも背けないようにする。

『人道的ではない？　いや、違っだろっ。臆病だね、そこが王とし  
てダメだ』

「お、オレは臆病ではない！　ただ、撃てば……………」

『そうだね、君の妹を傷つける。君は戦争と言っ事実すら、妹に隠  
していた。あの男と出会わせ無ければ、良かっただろっね』

「知っているのか？」

『私は世界の事象を知っているつもりだよ。特に、君達はね。ラゲ  
ナロクに立ち向かった同胞の子孫も居る。見届けたいのだよ、終わ  
つては困る。だから、老婆心と言っても差し支えなかるっ、その通  
りなのだからね』

「余計なお世話だ」

『だろっね。だから、今一度忠告しよう』

刹那

甲高い音が鳴る。

『ギヤラルホンの右端が、鳴った。七つのラツパが奏でるのは、ラグナロク開幕のオーヴェルテューレ。その一つが、鳴ったのだよ』

それは世界へ響き、果ては宇宙にまでも広がっていった。

『この星の問題ではなくなる。もっと大きなものが来るだろう。：だから、踊るがいい。まだ、音は六つある。もう終わりの始まりは到来したのだよ』

全宇宙上に広がり、

『さて、どう動くも君達の自由だ。しかし、復活するよ。あの醜き大狼がね』

呼び覚ましてはいけないものまでもを、起こしてしまう。

『君達が笑える日を、私は心から祈っているよ』

それに気付かぬまま、

『また、会おう』

時は進む。

望もつと、望むまいと。

ラグナロクへの到来まで、音は六つ。

ここからは、主演たる彼は姿を潜めてしまう。来るべき日を知って

しまった彼は、その準備をすべく、暗躍する。

だから、その間に始めよう。

——もう一人の、主演の話を。

第一部 閉幕 終章 ギャラルホンの音が始まる（後書き）

超展開過ぎか……？ いやいや、予定通り？（聞くな

次章からは、主人公が変わり、舞台も変わります。

ギャラルホンによって、世界は大きく動き出し、その展開を迎えま  
す。

時雨はやりたい放題だったのと対照的に、次の主人公は実に人間ら  
しいヤツになります……それでも見て下さる方は、温かく見守っ  
てやってください。

鋼鉄の揺り籠の中で、少女は眠る。

己の身を抱きながら……孤独に震えていた。

親から捨てられた。似たような状況をあげれば、それが適切かもしれない。

何故、私を作ったのだろう。

仕えるべき造物主はもう無く、私を組み上げた人は私を自由にくれた。縛ってくれた方が、良かったのに。

人間の親は、その子に道を作る。作られた道が嫌だと子どもは異を唱えるが、それはとても贅沢なことだ。死ねばいい。偉人が何故、偉人と呼ばれているのか。それと答えは同じだというのに。

誰もが道を開拓しようとする。道は未知であり、それを踏み越える事で道になっていく。誰かが通る度にそれは強固たる地盤になり、王道と呼べる道はもはや鉄板とも呼べる硬さだろう。

最初からある道と、その道から外れた、未知の場所。猛毒があるかもしれない。地雷があるかもしれない。ぬかるんでいるかも知れない。

様々な恐怖がある中で、最初にそこを道とした者の勇氣は、きっと計り知れないだろう。

だから、畏敬を込めて偉人や英雄と人は呼んだのだ。

そんな哲学的なことを考えながら、時空線と世界線の間をただただ漂っている。

どれだけの時間が経ったのか。

私は、その声を聞いた。

行ってあげて。

どこへですか？

あなたと同じ、青年のところへ。

何故、そうしなければいけないの？

それはあなたが一番良く分かっているわ。

知らない。と言うか、貴女誰よ。

私はただ、見守る事しか出来ないから。

無視ですか、死にますか？ て言うか、何悲劇のヒロインぶってんですか。悲劇的なアタシ可愛い的なアレですか？ あらー、痛い痛い。

五月蠅い、小娘。

あ、本性丸出しですね。黒くて恐ろしい。あー怖い。

話が進まないでしょう？ ……世界を、救って欲しいんです。

すみませんが、他の方にして頂けませんか？ 私、貴女みたいな何もしようとせず、他人を動かそうとする方って嫌いなんですよ。

ええ。ですが、私には何も出来ません。これは事実で、揺るぎません。どう罵られようとも、私はただ、伝える事しか出来ない。

……そうですか。で、私はどこに行けば？

知っているでしょう？

ええ、そうですね。最後に、貴女は何者？

私の名前はノストラダムス。預言者にして、世界の観測者でもあります。

そうですか。じゃあ、ノストラダムス。約束して下さい。その彼が、本気で必要とした時には 助けて欲しい。

分かりました。では、頼みます。

急に制御が利かなくなり、私は落ちていく。

青い星。どこかは分からないけれど、ただ落ちていく。

すれ違う宇宙生物達はその星へと移動しているのが見えたが、関係ない。

私もただ、運命に翻弄されるだけの 機械キョウキに過ぎないのだから。

第二部 機械録 〈The Artificial Life〉  
開幕

## 序章 崩壊と青年

未曾有の大災害 後に、教科書に大きく載るだろう、そんな事件の真つ只中に、その青年はいた。

災害の切っ掛けは、世界中に響き渡った甲高いラツパの音。

それは宇宙空間にも響いたらしく、次元振動が起きその多次元世界から宇宙生命体が出現した、とか、あれはその宇宙生命体のワープ音だ、とか。好き好きに解釈をされている。

太陽系第三惑星 地球。その日本は、先進諸国と連携し、この危機を撃退せんと、兵を募った。

何故なら、宇宙生命体は世界各国を無差別に攻撃し、五十ほどの国が消滅すると言つ異常事態に見舞われたからだ。被害が出ないと真剣に考えないところが、いかにも進歩が無い。

しかし、手立てはあった。

宇宙生命体だけがやってきたわけではなく、流れ着いてきた技術のロボットもまたそこにある。技術を流用し、軍部が開発している新たな兵器 『メタルアームズ』が、今戦場で主役を担っていた。

にしても、ド直球なネーミングだ。

が、空気の読めないテロリストが流れ着いたメタルアームズを発見し、ないし取り寄せ、国を好き放題に荒らしたりとかしているらしいが……今は、対応出来る余裕が無いのが現状。馬鹿は放って置く魂胆だろう、関わるだけ戦力が消費されるし、無駄と言えば無駄だ。特に日本では少子化が進み、人手不足がいよいよ深刻化。十八になつたばかりの少年が強制的に軍部へと入れられた珍事も露見し、無能な政治家が仕切る内政も意味を成さない、グダグダな状況が続いている。

東京だった場所。

大型のバイクは、人は愚か車だつて少ない街を弾丸のように駆け抜けていく。

軍都として、東京は軍によって押収された。人々は今、東北地方や福岡地方などで生活を営んでいると聞く。地方自治が推奨されている現状では、それすらも確認しようが無い。

以前は歩行者天国で有名だった秋葉原も、今や見る影も無い。ほとんどの店は閉め切られており、店は軍購買部署に集中している。農事や漁業までもが軍の担当になっているが、最近は何も出てきたらしく、外に頼るケースも増えてきた。喜ばしい事だ。

バイクはビル街の合間にある田園風景を通り過ぎ、廃墟同然の住宅街を進んでいく。

表札に、『高宮』とある一軒家。そこでバイクが止まった。

開けっ放しだったその家に、バイクを降りて青年が上がり込む。ブーツは履いたままだ。迷う事無く進むその様は、勝手を知つたる者の足取りに違いない。

階段を上がり、二階の一番奥で立ち止まり、扉を開ける。

そこには、当然ながら誰も居ない。

食べかけて放置されていたフライドチキンやフライドポテト。コールスローサラダにコーラなど、ここに住んでた大馬鹿野郎 高宮時雨が好んでいた物ばかりだった。今は腐臭が漂い、青年の整った表情を歪ませる。

この部屋の主があれだけ大切に使っていたハイスペックパソコンの液晶画面には、数発のBB弾が打ち込まれており、液が漏れていた。何故、このような暴挙に出たか、よく分からない。

青年は軍服の胸ポケットから、無骨なデザインの携帯電話を取り出して、メール履歴を表示させる。

少ないアドレス登録に記された、『馬鹿』の二文字。そいつから最後に送られてきたメールを開く。

『よう、親友。いや……まだそう思ってくれてたらでいいんだがよ。ちよいと話したい事があるから、家まで来てくれ。嫌ならいい』

閉じて携帯電話を元のポケットに収めると、腹いせ紛れにだろうか拳を壁へと叩きつけた。衝撃で、少し家が揺れる。

「……馬鹿野郎が。お前までいなくなつて、どうすんだよ……」  
軍帽を取ると、少し長めだった髪が零れる。

艶やかな髪に濡れたような瞳。背は高い方なのだが、表立って出ない筋肉の所為か華奢に見えていた。

顔立ちは綺麗な一言に尽き、女性のモデルと見紛うような美貌を持つている。もつとも、本人はこの顔を嫌っているが。

その長身を黒くデザインの良い軍服で包み、腰の兼帯には日本刀と十手がある。胸には小型の拳銃とナイフがあるものの、使った試しはない。

舌を打ち、青年は玄関口に向けて歩き出す。

と、大型バイクの傍らで、ニヒルな笑みを浮かべているスキンヘッドの外国人。屈強な筋肉を有しており、身長は二メートルを超えているだろう。大型バイクが小さく見えるのだから、その巨体は半端ではない。遮光グラスで瞳を隠しているが、その眼光は見るだけで鳥を射落とす鋭さだ。正直、常人が睨まれてもしたら、失禁か気絶は確実だろう。

そんな男へと、青年は片手を上げて応対する。

「何だよ、バーン。住宅街になんか用だったのか？」

「おう。……これだ」

バリトンヴォイスで返し、男は背中中のバックパックから雑誌を数冊取り出した。肌色の所有面積が多い、俗に言うエロ本である。

青年は思わずこけそうになり、半眼で男を睨み付けた。

「あのなあ……。あんた、奥さんと娘さんがいるだろ。それは裏切りなんじゃないのか？」

「それはそれ、これはこれって日本語がある。いい言葉だ。それに、秘密裏に売りさばけば結構な額になる。どうだ、お前も一冊」

「……遠慮しとくよ。それより ほらよ」

時雨の部屋から出てきた葉巻の煙草。いつだったか、不良から押収

してそのまま放置していたらしい代物だ。

あの時の喧嘩は一緒に行ったので、返してもらっただけだ。これでもう、遺恨は無い。

が、葉巻なんか吸わない。だから目の前の男に投げて寄越したのだ。

「……今、製造中止になってる銘柄だな。俺の好みだ。すまん」

「別にいいって。どうせ、吸わないし」

「なら、今日の昼飯と晩飯は俺が奢ってやる。昼……そうだな、ステーキでも食うか？」

「任せるよ。なんなら、コンバットレーションでもいい」

言うと、男は眉を顰めた。

「あんなクソ不味いやつを喰うなら、そこいらの野草でも貪る方がマシだ」

兵隊食は、昔と比べて保存期間と味が改良されたらしいのだが、まあ不味いものは不味いわけで。

ネチヨネチヨとした、まるで油粘土でも喰っているかのような食感が不快で仕方が無い。食に拘りの無かった者がこれを食し、ただの白米を感涙しながら食べるようになったと言う伝説まで残されている。まさに、レジエンド級の不味さ。

スティックの焼き菓子みたいなやつがあればいいのだが、それは大體上官に全て持っていかれる。

余った缶詰やレーションを出撃前に奪い合うのが、軍での日常光景。その時に少しはマシなものを奪うのがこの男で、それを食べるレベルにまで調理するのが青年だった。

青年がバイクに跨ると、男も後部座席に腰を降ろす。

「いつもの店か？」

「ああ。頼む、相棒」

「分かったよ」

エンジンを吹かし、急発進するバイク。

後部座席に重心が寄ったバイクを器用に操りながら、青年  
徒はこっそりと溜息を吐いた。

八哉（やい）

いつもの店、と言うのは、軍購買部の中でも店長がとりわけ頑固で性格が悪い事で知られる店 『フードショップ：アルグレイフ』の事。

店長のアルグレイフは、哉徒と男 ケヴィン・デユマを見、無言でカウンターを叩いた。来いという事らしい。

店には、三人だけしかない。このアルグレイフは、知り合いしか店に入れないのだ。儲かっているのかは、甚だ謎ではあるが。

席に腰を落ち着けると、アルグレイフは話しかけてくる。こちらもバリトンで、哉徒だけ場違いに感じた。

「今日はいい牛肉が入ったぜ。ソルト&ペッパーで食うだろ？」

「俺アグレイビーソースがいいんだがな、スモーク」

「黙れバーン、良いモンに華美な装飾はいらねえんだよ。おい、サムライ。テメエは分かるよな？」

「ああ。肉の旨みを感じるのに最小限の味付けで済ませるのは良いと思うよ。ま、そりゃ焼く本人の腕次第だけどさ」

「言っじゃねえか、最高だって言わせてやるぜ。その不届き野郎はソース作るから待ってる」

「おっ！ 言ってみるもんだな。どう言う風の吹き回しだ？」

「オレ様は実に機嫌がいいんだ。ま、詮索はしてくれるなよ」

軍部では、部隊に寄っては渾名を呼び合う習慣がある。

哉徒の部隊はその一つで、特徴や得意な武器で渾名は決まるのだ。

一時、哉徒は『ガール』やら『マドモワゼル』やら、女性関連の渾名が付けられていたが、呼ばれた瞬間に喧嘩が勃発し、現在では『サムライ』で落ち着いている。

ケヴィンはナパーム弾を良く使うので『バーン』、緊急出動で偶に引っ張り出される元軍人のアルグレイフは煙幕からの奇襲が得意だ

ったので『スモーク』と呼ばれていた。

柔らかい肉を切り、口へと運びながら、哉徒は話題を出してみる。

「そういや、新しいメタルアームがまた落ちてきたって話。知ってるか？ って、美味しいなこれ」

赤ワインで肉の臭みを飛ばしていたアルグレイフが、その話題に乗ってきた。

「だろ？ オレ様の腕は知ってるだろうが。……んで、サムライ。耳が早えな。どこで知ったんだ？」

「小耳に挟んだだけだよ。んで、どこに落ちたんだ？」

レアな肉を噛み、あふれ出る肉汁を堪能しながら、続けて白米を口に運ぶ。

その間に、ケヴィンはそれを思い出していたらしく、指を鳴らして二度頷いた。

「そう、そうだ。東京湾沿岸に落ちたって話を聞いたんだが、引き上げられたって情報は聞いてねえ」

「……ま、オレ様達に御鉢が回ってくる事はないと思うがな。何を隠そう、日本が誇る特務殲滅部隊だ。まあ回収部隊が先行して、軍上層部が使いもんになると判断すりゃ、こつちに回されるだろうな……おら、グレイビーソースのステーキ出来たぞ。崇めながら食え」

「仮に回ってくるとして、誰が乗る。俺アあの機体が入ってるから、パスだ。すまん、スモーク」

「オレ様もあれ以上は要らん。サムライが乗ればいい」

「って言ってもな。あれ以上大きくなられたら小回りが利き辛い」  
宇宙生命体は体長十メートルから、大きいもので五十メートルを確認している。

メタルアームズの平均的な大きさが二十メートルで、哉徒が使っているのは四十メートルの巨大な代物だ。接近戦仕様で、装甲が厚く防御力が高い。要は囷兼掃討役。

ナパーム弾でダメージを与えた後、哉徒の機体が突撃。場合によっては、哉徒を囷にスナイピングで一匹ずつ落とすしていくのが基本パ

ターン。

地上で休眠している時は、煙幕を張ってからナパーム弾。更に絨毯爆撃し、区画ごと焼き払う。消火は哉徒のメタルアームズによって行われたりする。

特務殲滅部隊は、命令が無い時は自由部隊。隊員が勝手に戦闘を行ってもいいし、加勢しに行くのも自由。強さ故の特権で、どの部隊よりも自由だが、実力と困難な課題が求められる。

「……ん？」

ケヴィンが携帯電話を取り出し、コールに応じる。

「はい」

どうやら、お偉いさんかららしい。

話を中断して、各々無言で過ごしていると、溜息を吐きながらケヴィンが通話を切った。

「どうした、バーン」

ステーキを豪快に貪り食ってから、バーンは油を指で拭いつつ、こちらへと向き直る。

「噂をすれば陰ってヤツだ。落ちてきたメタルアームズが暴れてるらしい。殲滅命令だ、派手にぶっ壊せ！……だよ」

「オレ様もか？」

「いや、何故かサムライだけだと。人が乗っている以上、通信が来るかも知れねえ。だから、サムライだけだ」

「まあお世辞にも優しい面とは言えねえからな、オレ様やテメエはいけるか、サムライ？」

「ああ。……ご馳走さん、スモーク。美味かったよ」

「そう言う素直なところが、テメエのいいところだ。さっさと行って来い。デザートがまだあるんだからな」

「分かった」

そう言う哉徒に、バーンは何か言いたそうだったが、結局は黙っていた。

哉徒が出て行って、パンとチーズを着に、ワインをやっていたバーンが呟いた。

「……何があったんだろうな」

「知らん。……ただ最初に会った時から、死にたがりの目をしていたな。今日は今までで二番目に酷かった」

「一番は？」

「最初に出会った時だ。誰もが臆する状況で単機突撃し、一命を取りとめた最初の出撃。これで特務殲滅部隊に配置が決まったのさ」

「あれか。ま、アイツは一番上手いからな。死ぬ事はないだろうよ」  
「……だといいがな」

グラスを拭く手を再開しながら、スモークは溜息を吐いたのだった。

第二部 機械録 〈The Artificial Life〉 開幕

ギャラルホンの影響を受けた日本が舞台です。

後、やっぱり更新は不定期です。早かったり遅かったりするので、ご了承ください。

## 一章 背反するマイロード

### 一章 背反するマイロード

『では、今回の特別任務についてももう一度確認します』  
少女の声がモニター越しに聞こえる。

解像度の高い巨大なモニターには、緩やかな淡い藤色のウェーブヘアを長くし、柔和な顔立ちはいつもと変わらない柔らかな雰囲気を感じている少女の姿を鮮明に映していた。彼女が身に纏う赤い軍服は高等軍人である証明でもあり、世襲が利かない軍部で実力を持つている事も同時に現しているのだ。だから、彼女にはほとんどの人物が逆らえない。

突撃部隊が藍、防衛部隊が深緑、偵察部隊が密林迷彩。その順で指揮官クラスになると、オレンジ、紫、都市街迷彩となり、それらを束ねるのが少将以上の上級軍人。総司令官は、歴代白と決まっている。

では、総司令直属でもある特務殲滅部隊は何色か。  
戦場の暗幕、命を刈る戦場の死神、黒い無の宣告。こんな蔑称が付ければ、色はもう分かるだろう。光沢の無い純黒だ。

やけに着心地の良い軍服に身を包んで、哉徒は今、専用のメタルアームズ 『黑夜叉』のコクピットで機体の調整をしていた。

動力炉や武器の適合を確認しながら、少女の声に意識を向ける。

『今回はターゲットを消耗させ、鹵獲、もしくは破壊を。その後、帰還して下さい。ターゲットは一機ですが、突撃部隊が二つ、それと指揮をしていたハワード中佐が撃墜されています。送られてきた情報から推測するに、搭乗しているのは熱源反応から人が擬似AI。出力的にもパイロットの腕にも、舌を巻くばかりです。倒せないと感じたら出来るだけ粘って 逃げて下さい』

「任務了解。これより、スタンバイフェイズに移行する」

ジエネレーターとOSスティックを差し込み、起動　失敗。

再起動し、何とか出力が上がる。安定域を揺らいでいるものの、その出力は極めて高い。水準を辛うじてクリア出来ていると言っただけで、いつ熱暴走<sup>オーバーロード</sup>してもおかしくないのだが、この出力には換えられない。それほどまでに信頼しているし、こいつなら棺桶になっても文句は無いのだ。

しかし、何度も言ってきたその言葉を、今一度口にする少女。

「……乗り換えて下さい。これが最終勧告です。それは出力こそ高いですが、この間も動作不良を起こしています。」  
咎めるようなトーンに、哉徒は苦笑する。

個人の解釈になるが、哉徒はこう思っていた。軍は組織であり、個々人の能力を尊重しつつも調和と統制が一番であり、私情を挟んではならないと。日本人特有のクソ真面目な価値観だと、ケヴィンなら鼻で笑うだろうが。

だから、敢えて訊ねてみる。

「それは、軍部総帥の娘としてのお言葉ですか？　それとも、特務殲滅部隊戦術司令官として？」

「ラヴィニア・ルー、一個人としてお願いします。貴方はわざわざ、死に行くような覚悟と装備で進んで囿を引き受けていますね。ですから、死なないで下さい。これは、命令でもあり、お願いです」

優しい。人を駒だと切り捨てられない、その純真さに心が救われる。涙さえ、出てきそうなほどに。

故に、彼女には上に居続けて欲しい。軍人としてはいけないのだから、うけれども、腐敗する世界の中で彼女の存在は　きっと、光になる。

そうだ、自分の命と彼女の昇進など天秤に掛けるまでも無い。自分の重さなんて、きつと羽よりも軽いのだから。

「……了解。この特務、『命を賭けて』遂行する」

「あ、哉徒さん！　戻りなさい、かな　」

さっさと通信を切り、ブリッジと新しく通信を繋ぐ。

オペレーターである日本人男性　天草吉良が半眼でこちらを睨みつけていた。

『お前……ラヴィニア少将に何言っただ？　回線繋げ、出撃を拒否しろってダイレクトコールが掛かってるんだけど。すっげえ怒ってる』

「さあ、生理なんじゃないか？　……スタンバイフェイズから緊急<sup>スクラ</sup>出動フェイズに移行する。応答を」

『OK。気をつけるよ？　日本人はもう僕らくらいしかないんだからな』

日本人の大半は、技術者や技術顧問といった、主に情報取り扱いの精密さを買われて海外に派遣されたり、出て行ったりした。

軍には数人の日本人がいるばかりで、後は各々の故郷で自治をしていると聞いたのだが……どうでもいいか。

大人数で組んでないと不安な者ばかりだ、日本人は。だからこうやって、特に親しくも無いこちらとコンタクトを取ろうとするのだから。

苦笑し、軽く敬礼して見せる。

「了解。宇宙生命体なんかにはやられるなんて、カッコ付かないしな」

『おう！　……ハッチ開放。機体、射出ゲートにリンク！　信号、どうぞ！』

「確認した。信号ブルー、異常無し。リンク確認、異常無し。至急、カタパルトスタンバイを請う」

『カタパルト、スタンバイOK。いつでも行けるぜ！　発進権限をそっちに回す！』

「了解」

そこで一呼吸置いて、深呼吸。気持ちを落ち着け、操縦桿を強く握った。

「特務殲滅部隊、NO.3『黒山羊<sup>くろやま</sup>』、『黒夜叉』　特務開始」

特務殲滅部隊は最大十二人の席が用意されている。

性格や生年月日で、部隊時の呼び名が決まるのだ。渾名ではなく、云わば二つ名。

一人を特定されない為の処置で、軍部にはそちらの名前で記帳されていると聞いている。名前を知っているのは、上官と仲間だけだ。他は渾名か二つ名しか知らないだろう。

ケヴィンはNo.1『スカーレットオリオン紅射手』、アルグレイフはNo.2『アッシュユスコピオ灰蠍』。

この二人は、イメージカラーと戦術から来ている。

それにしても、分からない。『黒山羊』と呼ばれているのは何でだろうか。何故、黒いのか。何故、山羊なのか。サツパリ分からないともあれ、機体は無事にカタパルトから高速で撃ち出された。そこからバーニアとブースターの炉を入れ、更に加速する。しばらく飛行していると、通信コールが響いた。

「こちら、『黒山羊』」

『哉徒さん！ いい加減にして下さい！』

ラヴィニアが真っ赤な顔をして怒鳴り散らしてくる。端正な顔は怒っているても可愛らしい。ちなみに、今年で三十歳になるそうだ。人間と言うものは良く分からない。

『哉徒さん……。私は貴方を信頼し、掛け替えの無い存在だと思っています』

「はっ、恐縮であります！」

『茶化さないで下さい！ ……わ、私は、貴方を大切に思っているんです！』

「はっ、恐縮であります！」

『……貴方、そう言っていればいいと思っただけでしょう？』

「はっ、恐縮であります！」

『ああもう！ 何で伝わらないのかしらこの気持ち！』

本当に逆上する一歩手前で、ラヴィニアが何とか踏みとどまる。伊達に精神制御の訓練をしていない、と言うわけか。

溜息を吐き、彼女はこちらへ向け、真摯な眼差しを向けてくる。

『あのね……。本当に、そう思ってるの。死んで欲しくない。貴方が』

死んだら、きつと皆悲しむ。誰よりも真面目で、傷付き易い貴方を……皆、大切に思ってるの」

「はっ、恐縮であります！」

『……生きて、帰ってきて下さい』

それだけ言つて、勝手に通信が切られる。

体重をコクピットに預け、苦笑してしまった。

「傷付き易い、ね。……顔だけじゃなく、女々しいのか。我ながら……」

顔の事で、あの馬鹿に散々からかわれた。何せ、ヤツは本気で女子だと思つていた事があつたらしい。まあ、中学生の時は髪を伸ばしていたし、見えなくも無かつたのか。

思い出したくも無いが、実際男に告白された事もある。問答無用で打ん殴つて、半殺しにしておいたが……ああ、今思い出しただけでも寒気がする！

「……マシになったと思うんだけどな」

中性的ではあるが、今ではちゃんと……うん、きつと、男に見える。青年に見えるはずなのだ。

「ま、関係ないか。どうせ……死ぬんだしな」

そう……もう、生きる理由なんて 根こそぎ無くなってしまつているのだから。

と、警戒区域に入つたらしく、アラームが鳴る。

目標は本当に一機しかない。しかし、あのフォルム 見覚えがある。

黒いカラーリング。大体、三十メートルか。薄い鉞のような刃を手にとっており、それはこちらを見た瞬間、刀へと変じた。

(……何だ、あの剣)

嫌な予感を覚えつつ、そのシルエットを確認していく。

スタイリッシュで、無駄はほとんど無い仕上がり。カーブを描いている装甲が多いのは、薄くてもダメージをいなせる工夫だろう。何にせよ、想像以上の いや、待て。やはり、何か覚えがある。

(どっかで見たぞ……何だっけな。てか、メカ好きはアイツ関連か……)  
舌を打ち、とりあえず接近して、声を掛けてみる。

「あー、その機体。擬似AIでも人が乗っててもどうでもいいから、さっさと投降してくれないか」

反応無し。

「……最終警告だ。頼むから投降してくれ。どうせ時雨関連の  
刹那、

「成る程、そうくるか」

鮮烈な火花を散らし、『黑夜叉』の非光化学斬艦刀ながみつと向こうの刀が衝突する。

急加速して切りつけられる寸前、こちらの抜き打ちが間に合っただけ。首の皮一枚、繋がったという事らしい。

今は罅迫り合いに持ち込まれ、何にせよ向こうの敵対性が明らかになってしまった。

なら、殲滅する。

と、

「なあッ!？」

押し合いの技術を向こうが使用し、そのまま機体は前へ加速してしまふ。更に、刃がこちらの腕を目掛けて振り下ろされた。

何だ、あの人間みたいな動きは！ あんな事が機械に出来るのか!？

舌を打ちながら、反射的に腕をパージして難を逃れ 再連結。が、コネクタに不具合があったらしく、指の拳動が鈍くなっている。ポンコツがと、内心で再び舌を打った。

と、ボイスだけの通信コール。差出人は 不明。

『実力はあるみたいですね』

第一声にそう言われ、面食らいつつも話を戻す。

「あの機体の搭乗者か。……投降するのか？」

『高宮時雨』

「……その大馬鹿野郎がどうした？」

聞きたくも無いその名に、思わず声が鋭くなる。

が、特に怯みもせず、淡々と　いや、少し毒々しげに少女は問い掛けてきた。

『貴方様も、彼を憎んでいらつしやるのですか？　あの身勝手、必要とあれば　その人の為だと自分のエゴを躊躇いも無く実行できる、あの人を』

言われ、胸を衝かれたような感情が浮かんでくる。

アイツは、俺の大切な人を手に掛けた。大切な友人が、大切な人を殺し　もう、何も信じたくなくなってしまうている。

軍部に志願したのも、人の役に立って死ねる最適な職場だと踏んだ為。もう大切な人なんて、いない。もう生きていく理由が無い。

全てを奪った時雨をオレが恨んでいないはずが無いだろう。でも……分かっていた。アイツは多分　恨みを糧に生きて行けと、そう願ったに違いない。

だから、ハッキリと言ってやった。

「次会ったら、問答無用でぶん殴ってやる。んで、一日中ヤツの裸を晒してパレードしてやるよ」

『いえ、その程度はご褒美に過ぎないでしょう。それと妙な性癖の女性が喜ぶだけです。やるなら、彼の作った機体を一つずつ目の前でプレス機に掛けると言うのは？』

「……あなた、アイツがキレそうな事よく知ってるな。恋人だったのか？　だったらご愁傷さん」

『そんなクソくだらない妄言を吐き散らさないで下さい、吐き氣がします』

口悪いな、物腰丁寧なクセして。

にしても、とても静かな声だ。落ち着き払っているとても言った方がいいのか、凄くクール。のくせに、感情は素直にぶつけてくるものだから、少し戸惑っているのが自分でも分かる。

やりにくい相手だと顔を顰め、会話を続ける。

「……んで？ 何でコンタクトを取った？」

『貴方をこの機体にスカウトする為です。そこその腕ですし、声から察するにむさ苦しくは無さそうですね。それに、あのクソ野郎へ恨みの感情を持っていらっしやるようですし、合格です』

「何でまたそんな面倒な事を？」

『報復してやります。私を……計画段階で捨てた、あの男へと』

「……へえ」

面白そうなヤツだ。しかも、あの時雨に報復したいと言っている。

どんなに異常なヤツか、彼女も分かっているだろうに。

しかし、少し無礼じゃないか？ そもそも、顔を見せない人物に対して信用云々を求めるのは馬鹿のする事。さっさと確認してしまおう。

「顔と名前、だせよ」

『そうですね。では』

次の瞬間に映し出されたのは、俗世からあまりにもかけ離れた美少女の姿。

しかしそれは、どこか見慣れた姿で。でも、思い出せない。

総じて、色素が薄い。髪の毛は緩いウェーブの艶やかな白髪をロングにし、肌は柔らかくも艶つばさに溢れた白色。

スタイルはバランス系で、背は……低目か。いや、通常の範囲内だが。

服装は給仕服 ああ、メイド服といった方が分かりやすいか。紫色で、フリルを多量にあしらったゴシック風の代物。中々どうしてよく似合っていた。

と、こちらの顔も見えたらしく、少女は驚きに目を見開いていた。……何だろうか。

『あら……声で男性かと思ったのですけれども』

「オレは男だ！」

ある意味予想通りだったが……まあ、何も言うまい。感嘆の声を漏らし、少女は改めて頷いて見せた。

『随分と御綺麗ですね。モデルになれるのでは?』

「やめてくれ、もう散々からかわれて来たんだ。お前、むさい男に迫られながら告白でもされてみる、失神しそうなほどショックだぞ」

『そ、それは……ご愁傷様です』

「ああ……」

それが引き金になったのか、トラウマが一気に甦ってくる。

迫りくる男達の幻影。その下種でいやらしい笑みが、まるで死神の列のように隙間無く、こちらへと近付いてくる。

「や……やめる……、頬を赤らめるんじゃない……。筋肉なんて好きじゃないから……、尻の穴とか……眩くな、嘔くな、汗臭い、止めてくれ、オレは男だ、そこがいつて何だよ、もう嫌だ、お前まで間違ってたのかよ、死にたいなああせまっつうわああああああああああああああ　　ッ!?!」

『っ!?!?』

あのむせ返るようなおぞましい記憶の蓋を大急ぎで閉め、息を荒げながら顔をモニターへと向ける。

「そ、そんなワケなんだ……もう、からかわないで欲しい」

『はい……すみませんでした』

気付けば、脂汗をじつとりと搔いてしまっていた。……もう、思い出さなくていい事を切に願う。いや、本当に。

咳払いを一つし、若干申し訳なさを引き摺っているような穏やかな声で、彼女は頭を下げてきた。

『……こちらの搭乗者になって頂く件ですが、どうかお引き受け下さい』

「ああ、そりゃいいけど……」

精神的疲労をひしひしと感じながら、それでも頭の回転を早くしていく。

「……いや、質問の一つが残ってたな」

『と、言いますと?』

「名前だよ、名前」

『ああ……。名無しです』

しばらく、その言葉を噛む砕くの時間を使った。

けれどもまあ……。結論は『なんだそりゃ』的なものしか出てこないワケで。

「……。なんだそりゃ」

思った事を口にしたのだが、やはり自分で言つてて馬鹿だと思う。

しかし、彼女は至極真面目に、言ってくるのだ。

『名無しです。……。私は人格AIであり、人を機体に閉じ込めたものです。名前がありません。そして……。この機体にも。計画段階で棄てられたんですよ。……。感情がロボットを動かすのは、馬鹿みだいだと言われて』

アイツらしい。

でも、知っている。俺よりも、アイツの方がずっと感情に突き動かされやすい事を。付けている非情と言う名の仮面の中では、様々な感情が渦巻いている事を。

物事を否定する際 哲学的な話になるのだが、それは好きとの背反ではなく、同一の感情としてみられている。

その概念において、『好き』と『嫌い』は対象を強く意識すると言う事にされている。つまり、好きの反対は無関心、と言うような構図だ。

だから、感情においては きっと誰よりも激しいはずなのだが、本人は簸た隠しにしようとしている。なので、敢えて触れてやら無い。

「名前ねえ……」

『貴方が付けてみますか？』

「……。ああ」

そう呟いて、五分は考えたか。

「フローレンス。君の名前は、フローレンスだ」

『フローレンス……』

「その機体はガウエイン。剣の名前は……。ガラティン」

『……剣にまで名前を?』

不思議そうに目を丸くしてそう訊ねてくる彼女に驚いたが、自分の常識になっていた事を今更ながらに理解し、苦笑する。

腰から刀を抜き、それを慈しむように撫でていく。

「物には魂が宿るんだ。だから、俺が今持っている刀やナイフにも、ちゃんと名前がある。オレなんかと違って、ものは生まれてきた意味があるから……オレは、そう思ってる」

これについては、あの馬鹿野郎も同意見だった。まあ、名前なんか付けはしなかったが。

惚けた表情をしている彼女へと、確認の言葉を送る。

「その名前、受け取ってくれるか?」

『……はい。私はこれより、貴方のものになります。いや、貴方のものにならせて下さい。よろしく御願ひ致します、御主人様』

そうやって表情を律し、こちらへと典雅な例をしてくる少女。フローレンスは、どこか嬉しそうに見えた。多分、錯覚だろうけれども。

この時、気付いていれば良かったのかもしれない。

もう一つの物語が　その暗い影を、落とし始めていた事を。

## 一章 背反するマイロード（後書き）

趣味全開でお送りする機械録。多分、この二部が一番趣味に近いと思います。

斜に構えた時雨の時は、燃え配分が少なめでしたが、今回は燃えが増えると思います。萌えも多分、濃くなるでしょう。

誤字などがあつたら、報告して下さいと助かります。  
では！

## 二章 死にたがりのワンデイ

### 二章 死にたがりのワンデイ

「　　と言う訳で、私は御主人様の物です。他のむさくるしい男やそのチビジャリとかは話しかけて来ないで下さい。心から拒絶します」

場が凍った。

フロールンスを紹介しようと、特務殲滅部隊会議での出来事。彼女はどうかやら擬似AIらしいのだが、実際に触れるし、真偽の程は定かではない。が、常人とは決定的に違う。放電するし。

その旨を話すと、もれなく哀れむような視線を頂いた。展開を予想していなかったわけじゃないが、精神的に迫るようなものがある。で、フロールンスに話の矛先がいき

「フロールンスです。私は哉徒様に付き従い、ここに存在します」色々問題はあったが、まあフォローできる範囲内である。

内心でホッとしているところに、先程の爆弾が投下されたのだった。……ほら、その爆発に触発されたラヴィニアが眉を吊り上げないように耐えている。

笑みを浮かべてはいるが、とても引き攣っていた。機嫌悪いのがよく分かる。

「あ、あのう……フロールンスさん？ 先程、私の事をなんと？」

「チビジャリです。身体的特徴からそう名付けました」

「私、三十過ぎなんですけど……」

「ああ、ババアでしたか。凹凸が辛うじて分かるような貧相な体型で良く分かりませんでした」

的確に地雷を踏み抜いていくフロールンス。

いつも会議中は静かにしているケヴィンが、流石に見かねたらしく耳打ちをしてくる。

「おい、ダイジョブなのか？　ありゃあ」

「……さあ？」

心労が押し掛かってくるものの、ここで口を挟んだらこちらに問題が飛び火しそうだ。……いや、もう遅いか。

そう割り切って、仲裁を試みる。

「フローレンス。彼女はオレの上司で、ウイステイリアメーデン『藤乙女』と呼ばれてるこの特務殲滅部隊の戦術司令官なんだ」

「この白痴そうな女にここまで瀟洒な二つ名とは……いえ、失礼」

「哉徒さん……この失礼極まりない方と、どこでお知り合いに？」

「ラヴィニア司令、落ち着いて下さい。フローレンスもこれ以上挑発すんな。敵じゃない」

「……はい、御主人様」

物言い足り無げなフローレンスだったが、これ以上彼女を野放しにしておく……色々ヤバイ。

ポンっ、と背中に手が当てられる。多分ラヴィニアだ。身長の関係上、背中にしかきつと手軽な位置にないのだろう。

恐る恐る振り返ると、満面の笑みでラヴィニアは待っていた。

青筋をひくつかせて。

「後で司令官室ね」

どうやら、手遅れだったらしい。

フローレンスは何故だか携帯電話を欲しがっていた。電話するわけでもメールを打つわけでも、その他の機能を使いたい訳でもないらしい。

『メタルアームズ』の技術はその他の物品にも影響している。携帯電話もその一つで、哉徒の携帯電話も立体映像式の合金仕様。カードのように柔軟性と硬度を取り揃えた、数年前の概念では有り得なかった技術を取り揃えたものが、今は当たり前のように普及している。

なのでそれを彼女に渡してやり、自分はラヴィニアの所へやってきていた。

やはりか、むすつとしていた彼女の元へ歩み寄り、敬礼。

「御呼びでしょうか、ラヴィニア司令」

「何か言う事はありませんか？」

鋭い切り替えしは想定していた。なので、礼を尽くして頭を下げる。「先程は自分の管理能力の甘さに苦渋と辛酸を舐めておりました。

この反省を糧にし、次へと生かす所存です。彼女にはもう少し我々の事情を理解してもらおうと、具体的にはそう考案しているのですが……」

「結構です。それと、その話し方も止めなさい。馬鹿にされてる気がします」

最初に出会ってタメ口を利いて以来、罰ゲームのようにそれが続いている。彼女の父親である総司令官に会った事も一度や二度ではなし、その度に睨まれているのだから、もう居心地悪いの何の。

仕方なく顔を上げて苦笑し、執務机に腰を掛ける。

「こら、そこに乗っちゃダメでしょ」

「いいだろソファアらないんだから。ならオレをアンタの上に乗せるよ」

「逆じゃない!? 普通逆じゃない!?」

「んで、フローレンスだ。アイツをどう思ってるんだ？」

去り際に提出した書類。それには目を通したらしく、そこら辺に散らばっていた。

既に承認された書類を纏めながら、哉徒はラヴィニアの声に耳を傾ける。

「まあ、擬似AIなのは認めます。確かに、彼女しかあの機体を起動できませんしね。貴方が『黒夜叉』から降りてくれますし、私としても軍部としても問題ないでしょう」

「そんなに降ろしたかったのか……」

あれはあれで、結構気に入っているんだが。

そう呟くと、下がっていた眉が再び吊り上る。頬を膨らませ、そばまで向いてしまった。

「当たり前です！　いくらハイスペックでも、壊れかけの『メタルアームズ』に乗って無事に生還できる確率は低いんですよ！？　私の部下は、絶対に死んではダメなんです！」

真っ直ぐな彼女の言葉。

それは、理想的な司令官。誰一人失わず、完全無欠の勝利を望む、その言葉。

失うのが怖い。それは、失わせた責任を自分が負う事を拒否しているだけ。上に立つものは、犠牲の上でふんぞり返りながら、ワインでも傾けていればいい。

そんな価値観が哉徒の中核。職業とはどうあるべきかを個人的に解釈し、それを人に押し付けている。なので、決して関わりを持たない人間からは好かれはしないタイプだ。

「……軍人つてのは死んで何ぼの職業だ。アンタが頭なら、オレをどうするべきか分かるはずだろ」

「黒山羊。さしずめ、スケープゴート。罪<sup>くろ</sup>負い山羊。表舞台上に堂々と出てきて、被害者の憎しみや対象の意識を向ける為の犠牲　いえ、**罠**」

「そう。ああいや、黒山羊にそんな意味があるなんて初めて知ったけどな。……だから、戦術としちゃあそつた方が楽なんだよ」

「確かにそうですね……」

いい終えると、ラヴィニアは小さな手でこちらの頬を思いつきり引っ叩いた。じん、と頬が熱くなる。

「何度も言いますが、いい加減にして下さい……！　そんなに死

にたいんですか！」

「ああ、死にたい。死にたいんだ……ラヴィニア司令。だから、任務をくれ。こんな命でも意味のある死に方がいいから、オレは軍人になった。こんな生殺しにされて、辛いんだよ！」  
つい本音が出てしまう。

しかし……もう生きていたくないのも事実だ。フローレンスにも、時雨が行方不明だと早く伝えてしまわなければならぬ。  
彼女まで、道連れにしても仕方がない。

「哉徒さん。……しばらく、頭を冷やさない」  
「司令！」

「私は、貴方に生きて欲しい。……死んでいい命なんか、ないの」  
それっきり、黙り込んで書類を片付けていくラヴィニア。  
身振り手振りでアピールしても、無視される始末。

「司令……」  
無視される。

「ラヴィニア……」

耳元でそう甘く囁くと、頬が赤くなった。けど無視される。

「ふーっ……」  
息を吹きかけると、身震いした。けど無視される。

この路線ではダメだと確信し、相手をより怒らせる方向へシフト。

「チビ」

一瞬、眉が持ち上がったが、平静を装う。

「貧乳」

青筋が立つ。しかし、平静を装う。

彼女が一番気にしている言葉は何か少し考え、口にする。

「……ババア」

「ば、ババアって言うなーっ！！」

キレた。

とりあえず、リアクションをしておく。

「きゃー喋ったー」

ぞんざいなリアクションにか、今までの展開についてか。今までの文句が堰を切ったように、ラヴィニアから放たれる。

「そりゃ喋りたくもありません！ 甘い言葉を囁かれて嬉しいな何て思えばいきなり身体的特徴を侮辱されて果てには結婚適齢期であるにも拘らずこの外見だから独身でいる私の心をまるで削岩機のようにがりがり削ってくるなんて少し酷すぎやしませんか!？」

凄まじい肺活量でそう捲くし立てた後、疲れたらしく執務椅子に体重を預けた。

ラヴィニアはマグから珈琲を一口飲むと、それを哉徒に差し出す。

湯気の立ってない、ぬるい珈琲を彼女は好んでいた。何でも、猫舌らしい。

受け取り、それを飲んでみる。

「甘ッ!？」

甘すぎて、逆に目が覚めそうだった。

確か、この手の甘い缶コーヒーは珈琲飲料ではなく乳飲料として販売していたような気もする。そんなものは珈琲じゃない。珈琲風味の何かだ。

何故だか得意げに、ラヴィニアが鼻を鳴らした。

「珈琲は甘いものですよ」

「何それ!？ 何の定義!？」

「苦い珈琲なんて美味しくないですし」

「いや、美味しいだろ！ シャープな苦味と舌で踊るコク。ローストした豆の香りが広がって、陶酔にも似た感覚までもを味わう事が出来るんだ。そんな素敵飲料をジュースみたいに飲むなんて、粋じゃないだろ!」

「それは貴方の見解。私の見解ではありません。ですから、貴方が自分で言ったこんな命も……私にとっては、私の命より大事なものです。覚えて置いて下さい」

その言葉が、何故だかスルリと胸の中に入り込み、熱を帯びる。

こんな命を、大切に思ってくれていた。

いや、棄てる。そんな感情、重荷だ。また……先立たれて、シヨックでも受けたら、今度こそ死に切れない。狂ってしまう。

誰かの為に死ぬ。それが最高の死に方だろうか？

言葉を反芻し、熱を冷ます。

深呼吸して、再び開いた瞳は 元の、冷めた瞳だった。

「では、次の任務まで待機します」

「……ええ。個人的な用件で連絡する事もあるでしょうし、携帯は持っていて下さいね」

「ああ」

悲しそくに目を伏せたラヴィニアに罪悪感を覚えながらも、表情だけは変えず哉徒は通路を歩いていく。

軍部の連中と擦れ違う度に、舌打ちが聞こえた。

特務殲滅部隊は能力主義。非人道的な行動もよく行っているし、仲間の粛清も仮面を付けた自分達がやっている。汚れ役はオレが進んで引き受けているから、ケヴィンやアルグレイフはあまり恨まれてはいないだろう。

何分、ケヴィン達にはオーラがある。威圧的でいて、必要な事をするのに躊躇いを持たない。

しかし、オレは違う。外見はこんなだし、迷ってばかりだ。

「……この先、どうなるんだろ」

呟いてみるが……それは結局、分からなかった。

自室に戻ると、携帯電話を残して、フロールレンスの姿が消えている。不審に思って電源を入れてみると、立体ホログラムに映る小さな人

フロールレンスだ！

『どうも、御主人様。これでいつでも一緒ですね。普段の姿でいると、かなり消耗するんです』

「……その中にいれば？」

『消耗しませんね。うふんあはんな事がしたいなら、いつでも仰つて下さいね。実体化しますから』

「もうオレの常識の概念がボロボロなんだけどさ……」

最近、頭痛が酷い。

片手で頭を押さえるこちらを一時心配したかのように見えたが、フローレンスは容赦なく続けてくる。

『常識は新たに作るものだとは考えています』

『改革派ね。オレは保守派なんだけどな』

『なら、私も保守派です。バリバリだぜ、いえーい』

『いや意味わかんないだろ』

『で、私を作ったあの大馬鹿野郎は、今異世界にいます』

『唐突にファンタジーに走るなよ』

『大マジです。私もそこから次元を超えてきました。まさに時を駆

ける擬似AI』

『語呂悪いな』

話半分に聞き流しながら、ベッドに寝転がる。

宿舎のベッドではない。特務殲滅部隊には、それぞれ個室が与えられているのだ。厳しい任務の裏には、こういった飴が存在する。

スプリングの良く効いた少し値が張りそうなベッドで、思う存分に体を伸ばす。

「……………なあ」

『はい』

「ここに宇宙生命体がやってきた時だ。その時に響いた喇叭ほっぴの音…

…あれ、何か知ってるか？」

『ああ、ギャラルホンかセヴンス・トランペッターじゃないんですか？』

さも当然のように答えてくれたが、鼻で笑って可能性を唾棄する。

そんなの神話で、作り話でしかない。そんなもの、存在するはずがないのだ。

『今、笑いましたね』

『馬鹿馬鹿しいんだよ。お前の言う事はあんまり真に受けられない事でした』

『そうですか。ですが、御主人様。私は嘘をつきません』

「そうかよ」

重くなってきた目蓋を閉じ、襲ってくる睡魔に身を任せる。

何か、温かいものが全身に触れていた気がしたが、それが心地よくて、追求する気も起きずにそのまま寝入ってしまう。

その横顔を見つめながら、実体化したフローレンスは微笑み、哉徒と寄り添うように寝転がったのだった。

### 三章 二重奏と虫食い穴 〔前編〕

『屠られた小羊よ』

そう、声が聞こえる。

語りかけてくる声に覚えはない。いや……夢か、これは。

明晰夢と呼ばれる、夢だと分かっている夢。こんな現象に出くわすのは、初めてだ。

その声はやまない。

それどころか、どんどん大きくなっていく。

『力、富、智恵、勢い、誉れ、栄光、賛美。君はそれらを得るに相応しい』

聖書……だったか。確か、黙示録の第五章。

昔、面白半分に時雨が読んでいた。無神論者が多い日本人の中、普及するほどの面白さがあるかといえば、そうじゃない。宗教なんて、無宗教者からすれば妄言に似ている。

事実無根な奇跡なんて、あるわけがない。信仰が足りないからと聖書を手渡した男が言っていたが、そんなもんで人が救えりや世話無い。もしそうなら、寝食忘れて祈ってやろうとも。

まあそれはともかく、何故聖書の内容が自分の中で語りかけてくるのだろうか。

『御座にいる私は、人間らしく迷い、憂う君に恋をした。だから、賛美、誉れ、栄光、権力。好きな物を一つあげよう』

ここから、聖書とは違ってきた。  
状況から鑑みるに、神様が好いてくれているらしいが、生憎そんなもの信じていない。  
信じていないものは存在しないし、存在しないものから何かを受け取るうとしても、前提条件で破綻する。

『私も君の死は望まない。小羊は黒山羊となり、牙折れた獅子はその牙を取り戻した。後は、再び出会うまで、私は君には会わないだろう。女神の加護を、君に』

眩い光の中　女性が、微笑んだ気がした。

頭に瘤をこさえたフローレンスは、涙目で恨みがましく哉徒を睨み付けている。

哉徒もまた憤然と、しかし顔を赤くして、照れ隠しでもするかのように大股で歩いていった。

「酷いです。実体化してまで、添い寝をして差し上げたのに……」

「……携帯に入っていたはずのお前が布団の中に潜り込むくらいなら許せたけどな、ベッドからオレを蹴落として、目を覚ました瞬間に肘から鳩尾に降って来るってのはどう言っ了見だ？　ああ？」

「寝相の悪さに定評のある私。素敵？」

「オレの表情から察しろこの馬鹿野郎が」と、携帯電話に通信コルが入る。

「こちら、『黒山羊』」

『紅射手』だ。『藤乙女』より通達。殲滅の特務が下った。俺とお前でやるぞ。詳細は行きながら話す』

「了解」

疑問に思いながらも、通話を切る。

頭を冷やせと言われた割には、かなり早く任務が降りた。どう言う心境の変化かは知らないが、仕事をしていると何も考えないでいい溜め息を吐いたこちらの顔を覗き見上げ、フローレンスは首を傾げた。表情がお世辞にもあるとは言えない顔だ。

「お仕事ですか？」

「そうだな。やれるか？」

「付き従うだけです」

「思うところとか無いのか？ 今から、俺は未確認生命体を殺す。

その片棒を担ぐんだぞ」

「私はずるい女ですから。生きている意味を……御主人様に一任しております」

「じゃあ、俺が死ねて言えば死ぬのか？」

こんな子供のような論争は嫌だったが、訊いておかなくてはならない。

彼女が命に対して、どう言う物であるか。本人を知ると言う事は、その本人の価値観を知ると言う事と同意義。彼女と言う人間は、これで想像がつく。

結果、

「はい」

躊躇もせず、そう頷いた。

リアクションに変化は無い。ただ波紋の無い湖面のような瞳で、こちらを淡々と見据えてくる。

何故だが、物凄く不愉快。そう、不愉快だ。

命を軽んじているから？ 否。そんな事で不愉快にはならない。

人の命令に躊躇も無く従うから？ 否。近いが、決定的ではない。

それが近いならば……

ああ、そうか。意味を求められるのが嫌なのだ。

「……オレは死にたがりの人間だ。お前に、生きてる意味を求めようとした」

「私は貴方と一緒にいたい。物を大切にしてくれます。私は、貴方に従いたい」

通常時なら赤面するような台詞を、彼女は堂々と言ってくれる。

けれど、恐ろしいまでに高揚感はない。ただ、疎ましい。

「とんだ誤算だったよ。オレはな……死にたいんだ」

「嘘ですね」

ピシヤリと、彼女はそう言い放つ。

「貴方は生きたい。生きたいから、意味を求めているのでしょうか。」

貴方は考える事を放棄しているだけ。……怖いんですか？」

そう言われ、体の中に何か電流のようなものが駆け巡る。

焦燥感が沸き、心が乱れていく。まるで子供のように制御が利かず、感情に振り回されていく。

「ち、違う……怖くない。死ぬ事なんて！」

「死ぬ事が怖いんじゃない。……親しくなった誰かが、死ぬのが怖いんでしょう？ ハッキリ言いますよ、馬鹿ですね」

「な、に……！？ テメエ、昨日今日会ったヤツが、何を！」

しかし、彼女は手でそれを制した。

静かな眼差しを哉徒に向け、ただ真っ直ぐに見つめている。その瞳には、ちゃんとした揺らぎがあった。

「……ずっと、見てきました。時空間と世界線……その狭間で」

「じゃあ、何があったか言ってみるよ！ そんな適当言っ、同情誘ってんじゃねえッ！！」

そう、ゴメンだ。

過去を知っているはずが無い。初対面だ。しかも機械の。

それに時空間だの世界線だの、与太話を前提とした会話でなんて……どこまで馬鹿なのだろう。

いや、違う。逆に本当なのかもしれない。そうでなければ、堂々とそんな事を言えるはずが無い。

嫌な予感へ拍車を掛けるように、フローレンスは呟いた。

「八哉徒<sup>こはらめなと</sup>。両親既に他界。義理の妹が存在しますが……ああ、新しい母親が嫌いでしたね。無視しています。過去、借金持ちの女性に恋をし、片を押し付けられようとした」

最初の方は調べれば出てくるかもしれない。けれども、借金の片なんて台詞は、あの状況を間近で見えていないと……絶対に言えない。分かりきっている事を否定したくて、首を横に振る。

「違う！ オレと彼女は……ちゃんと、二人で生きて行こうって……！」

「馬鹿みたいに啓蒙なんですね、素敵です。ですが、利口ではないですね。……その点で言えば、あのクソ野郎は法に背いてはいますが、正しい事をしました」

彼女を殺したのは、高宮時雨だ。それが……正しい？ 人を殺す事が、正しいだって？

「法に背くのが……殺すのが正しいってか!？」

「それなら軍人になる事を是とした御主人様に矛盾を問いたいところですが。まあここで哲学的な問いをしましょう。『正義』とは、何ですか？」

正義？

「個人によって異なるが……。自分の信念を貫き通す事。それを決めるのは自分であって、法じゃない。法は正義の基準を決める。法というのは、個人の越権を懲罰するもの。人を殺すのは、越権行為だ」

「それは貴方の見解。あのクソ野郎の見解は、こう。『人に権利なんてねえ。自分がしたいことをすりゃ良い。ただ、責任は伴う。法とは、公にその責任を決める一種の方法で、罰はそれが決めるものじゃない。世間一般の基準としては機能しているが、金を渡せば軽くなるなんてものに頼るのは罰とは言わないだろ。そもそも、善悪

の観念なんぞ知るか。俺がやった、事実としちゃそうだろ』です」

「いや、権利がある！」

「だから、貴方が最初に言った通りです。個人によって異なります。真理ですね、流石です」

「……何が言いたいんだよ」

「簡単です。全て、決めるのは貴方。そして私は、貴方の道具です」何を思ったか、早足に歩き出すフローレンス。

擦れ違い様に見た、揺れている瞳。波紋を作る感情は 分からない。でもそれは、彼女を今、強く揺り動かしている。

「上手く、私を使ってください。生きる理由でも何でも構いません。ただ私は、貴方を死なせない。それだけです」

先に格納庫へ行くフローレンスを哉徒は呆けて眺めていたが、ふと我に返り、彼女を追った。

『ガウエイン』の中は、暗かった。

フローレンスが飛び込んでいったのは見えたが、彼女の姿はどこにも見えない。

携帯電話を光源として探っていくと、そこに操縦桿が二つあった。それを握ると、突然指が固定され、楽な姿勢へと強制的に体が動く。頭にはヘッドギアのようなものが被さって、全身を突き抜ける一瞬の痛みを伴いディスプレイが起動。その後、自らの視点ではなく、ロボットのモノアイからだろう。その視線が何故だか見えている。

『御主人様。これは神経フィードバックシステムです。脳髄と視神経を機体にコネクトし、痛みを排除した形になっております。ただ、延長神経が切られた場合、凄まじい痛みが伴います。ですが、これの利点は人間の動きをほとんど行う事が出来ると言う点や、気配な

ども伝わってくる事です。これは便利。褒めて下さい』

「いや、作ったのお前じゃないだろ……」

『あんまり気にしていると、ハゲますよ。むしろハゲてください。いつそ夜にこっそり脱毛でもして見ましよう。そこで一言、ハゲても愛してます。ああ、なんて健気な私』

「ハゲねえよやらせるかよてか自作自演だろうがこの馬鹿」

ワケの分らないやり取りを交わしながら、感覚を確かめていく。

……コンマ程度のラグがあるものの、ほぼ思い通りに動く。ストレスも無い。これは……確かに凄いか。

だが、気になる点がある。

「飛ぶときはどうするんだよ」

そう、人間は翼を持たない。

跳ぶ事は出来ても、人単体では飛ぶことは不可能だろう。概念が無い以上、フィードバックでそれをするのは無謀に違いない。

しかし、そんな懸念はどこか自信たつぷりの鼻息で一蹴される。

『私はその為の擬似AIです。行きたい場所へ、脳波を通じてスラストーや各部機関、バーニア等を操り、命令頂ければ搭載しているビームビットを使つての援護も出来ます。私、カッコいい！』

「……ああそうかい」

テンションが高いのか低いのか……サッパリ分からない。

『ああ、通信です。紅射手より。開きますか？』

「頼む」

ふと、耳に直接声が届くような感覚。

「今回は楽しいぜ。新兵達の御守だだよ。陰から見守り、危機が発生した時にのみ、姿を現して敵を叩く。OK？」

「特務了解」

短くそう返して、ケヴィンに訊ね返す。

「ケヴィン。司令は何か言ってたか？」

「ああ……また何かしたろ、お前」

「……というと？」

「お前は前衛に出すなとさ」

近接戦闘メインのこの兵装で？

フローレンスも疑問らしく、そそくさと何か通信を繋げているようだった。すぐにラヴィニアのポップアップが浮かぶ。

フェイスチャットと似ているか。リアルタイムでその人の感情の動きを察知し、画像が変わる。今の画像は 青筋を立てた笑みだった。

「おや、何か質問ですか？」

「いや……この装備でバックアップを命じるなんて、その形でボケが始まつてるのかなあなんて心配を」

「誰がロリですか！」

「言っていない言っていない」

皮肉は通じず、何故か身体的特徴に怒るラヴィニアだった。

「暗にそう言ってたがな……んで、俺もそう思っわけさ。司令、今回は遠距離の兵装を持たせてやってくれ」

小声でこっそりと呟きながら、ケヴィンがそう提案してくれる。見たところ、ガウエインは何でも適応できそうだ。

「許可できません」

「なら、乗り換えは如何でしょうか？」

「……それぐらいなら」

提案はすんなり受け入れられ、気を利かせたフローレンスが神経フイードバックとやらを解除してくれる。その時も、一瞬だけ痛みが生じた。

頭を押さえながら、内部で痛む何かに舌打ちし、フローレンスを睨みつける。いや、どこに居るのか分からないので、気持ちだけ。

「この痛みは何だよ」

『神経接続の際に生じるものです。本当は自然にリンクするらしいのですが……試作機プロトタイプですので、私』

口に出すのを躊躇ったが、それは明らかに調整ミスだ。

何にせよ、『ガウエイン』では無く、別の機体を探す。

『ガウエイン』が来たのを良い事に、『黒夜叉』は廃棄処分。まあ『黒夜叉』も近接戦闘仕様だが。

きつとラヴィニアはそれを見越していた。だから、乗り換える事をよしとしたのだろう。

……それ以外に、操れる機体と言えば

「……やっぱ、こいつか」

格納庫の中でやはりと言うか、夜色の光沢を放つダークブルーメタル装甲の小型機。

世界共同軍オリジナルアームズのシリーズ。その第一企画、『可変型汎用兵器・End Of Arms Century』。通称、『EOAC』シリーズ。

これは、最新型でもあり、哉徒が軍部の機械操作実習の時、与えられた機体でもあった。

「久しぶりだな、メラフリノス」

正式名称、『EOAC1-17 Blacksmith』。メラフリノスはギリシアでの開発ネームだ。

コンセプトは『夜間、宇宙空間での暗躍。及び、接近、遠距離武器の光化学化』。特徴的なのは、メラフリノスを開発したギリシア側が日本刀のフォルムを取り入れ、近接戦闘が強化された点。他にも、針のような細さにも出来る収束ビームライフル等、様々な兵装がある。比重としては、遠距離武器の方が多いか。

概観は戦闘機にも似ているが、これは違う。可変式の物で、戦闘機、人型、ビット&ロケットの形態になる事が可能。

ビット&ロケットは、超高機動と装甲をパージし、有線式のレーザービットに変えて操る形態。

人型は高機動と特殊操作、それと工作操作。近接戦闘もこれでなければままならない。

戦闘機はもうそのままの使い方だ。ただ、小型の割にかなり頑丈なので、多少の無理は出来るのが大きいか。

携帯電話に移っていたらしく、フローレンスが不服そうな声を上げ

る。

『浮気ですか』

「小姑が五月蠅くてな」

適当に切り返して、コクピットに乗る。

慣れ親しんだ座席の感触に安堵感を覚えながら、機動準備を整えていく。

『そのスロットに携帯電話を差し込んでください』

携帯電話は緊急回線時に繋げる事も出来る。認識されたナンバーのみだが、哉徒のナンバーは登録済みなので、何の心配も要らない。

差し込むと、それだけで機動に必要な全工程をすっ飛ばし、OSが起動した。

『私はサブAIですので、どこでも一緒です。機体コンディションは私からお伝えします』

「頼む」

純粹に外を把握しないといけないので、機体ダメージは外部便りだった。自分で把握出来るなら、それに越したことは無い。

気持ちを落ち着けながら、操縦桿を強く握る。

「……こちら、特務殲滅部隊、No.3『黒山羊』、『EOAC1-17』Black Smith』で出る。信号ブルー、異常なし。

応答願う」

『はいよ。行って来い!』

吉良の明るい声に背中を押され、強張っていた緊張が少し解れる。

カタパルトへと移動され、機体は真っ直ぐ空のほうを向いた。

『カタパルトと連結確認。発進権限を委任するぜ』

「了解。特務殲滅部隊、No.3『黒山羊』、『黒夜叉』 特務開始」

ブーストペダルを踏み込むと同時に、カタパルトが熱によって連鎖反応。爆発的とも呼べる速さで、機体が文字通り撃ち出される。

体に掛かる負荷はレデューサーで軽減されているが、高速戦闘を連続で行うとかなりきつくなるのも事実。少し速度を落とした。

流れる風景を見ながら、哉徒は何もない空に不安を抱いていた。

「嫌な……感じだな」

その空は、清々しいまでに晴れ渡っていた。

### 三章 二重奏と虫食い穴 〔後編〕

東京湾から八キロほど行った所で、新兵達が『EOAC』第二企画、人型汎用兵器の最終テストをしていた。

正式名称は『EOAC2-1" Soul Linker』。開発されたばかりの試作機で、訓練で好成绩を叩き出した新兵にその任が課せられた。

その概要は、『人型に特化する事により、人に近い動きとメンタルコンディションの管理が可能に』。コクピットには第六感や精神状態を示すバロメーターが浮かび、それによって体調不良時の撤退などがスムーズに行え、撃墜される数が減るといった画期的なものだった。

兵装も二パックが完成しており、まさに汎用と呼ぶにふさわしい仕上がりとなっている。

遠距離武装は実弾の大口径滑空砲、対光化学盾、光化学準機関銃とシンプルに。その分、自動照準機能やジャマー等、システム面が優秀だ。

近距離では装甲付着タイプの対光化学被膜と光化学銃、光化学剣に非光化学大剣。剣同士を組み合わせれば、両手用光化学斬艦刀として運用が可能だ。システム面は普通の機体と変わらないものの、推進力と運動性が遠距離と比べて上昇するようになっていた。

それぞれが出現した未確認生命体を叩く様を、画面越しに哉徒は眺めていた。

「……暇だな」

そもそも、特務殲滅部隊が御守とはどういった見なのだろうか。

そんなものは別の部隊にさせれば良いものを。舌を打ちたくなるが、それは何となく抑えてしまった。

哉徒の心情を察したフローレンスが、こう推察する。

『イメージアップの一環では？ この特務殲滅部隊を目の敵にする人物も、少ないですが確かに存在しますし。第一、あの大年増は御主人様を心配していらっしやるようですしね』

「良い迷惑だな」

『まあ、悪意を一点に押し付けると言うこの部隊創設の裏事情に対しては、拙いものがありますが。でも、私は御主人様に対する危険が少なくなるので、ウェルカムです』

客観的に状況を見れるのは、フローレンスの良いところだ。そのくせ、私情もコミカルに混ぜてくる。それが独特の雰囲気醸して、哉徒をただ困惑させていた。

頭を掻きながら、クラツシュゼリーの栄養パツクを齧る。グレープフルーツ風味とか書かれているが、栄養を重視している所為だろうただ甘く、そのくせ、えぐみのある味だ。哉徒個人としては好みだったものの、ケヴィンやアルグレイフは飲んだ瞬間に吐き出していた。まあ、不味いのも客観的事実だが。

『お話をしましょう』

「唐突に何だよ」

もうすっかりフローレンスのペースだ。この雰囲気に加え、突拍子の無さまで加えられたら、流された方がずっと楽になってしまう。

現に耳と意識は、彼女の話の聞こえとスピーカーに向けられていた。

『異世界の話です』

「いきなりそれが……」

『あのどぶ川に突き落として窒息させたい男の居場所の話ですが……』

瞬間、頭が急速に冷えていく。体の芯は熱いが、心は恐ろしいほどに落ち着いていた。

『彼は今、別の宇宙にいます。銀河系ではない場所なのです』  
と言われても、イマイチ、ピンとこない。

この宇宙ではないのだろうか。いや、そもそも天体とか宇宙とかに

は明るくないのだ。理解が追いつかない。

「天体には詳しくないけどさ……。『系』って単位なのか？」

そんな質問をすると、フローレンスは呆れたように溜め息を吐く。何か知らんが、物凄くムカついた。

『まあ、簡単に説明しましょう。数億とか数千億の恒星集まりを銀河と呼びます。ほら、よく渦巻きのような星雲　まあ、白い塊のようなものが教本に載っているでしょう。アレです』

「んじゃあ銀河系ってのは？」

『ええ、そこでしたね。太陽も当然、何処かの銀河に含まれます。太陽を含む銀河を銀河系と呼びます。それ以外の銀河を、ぎんがけいがい銀河系外星雲と呼ぶのです』

ピンポイントな説明は哉徒にとって分かりやすいものであった。つまり、星の集団が他にも存在するという事。その中の一つに、あいつがいるという事だ。

『銀河系外星雲の一つ、恒星シャルオンを中心とするシャルオン系の第二惑星にいます。私は良く分からない……。ノストラダムスと言う女に示されて、偶然見ていた貴方の元へとやってきました』

「人を見るなよ。悪趣味な……」

『だってする事が無かつたんですもの』

拗ねたような口調に、哉徒は思わず苦笑していた。

人に見られて快い過去では、決して無いはずなのに。何故自分はこんな表情をしているのだろう。

考えても、その答えは出ない。いや、出そうとしていないのか。彼女なら良いと、そう思わせてくれる。

「……分かんないヤツだな、お前」

『む。ミステリアスな私……愛してます？』

「言ってる」

座席に寄りかかって、体を伸ばしながらそう言った。

刹那、緊急コールが飛び、すぐに繋がる。ラヴィニアだ。

『新兵達が押されています！ 未確認生命体が融合し、巨大化しま

した！ テストは中止です！ 『紅射手』、『黒山羊』は直ちに帰還して下さい！』

「はあっ!?!」

未確認生命体は黒色の羽虫を髣髴とさせる概観で、緑色の体液を持つ。現在確認されている大きさは二メートルから三十メートルで、角と羽を使って攻撃を繰り返してくるのだ。口から熱線を吐く個体も確認済みである。

融合し、巨大化したとされる羽虫を見れば

『おおー』

「…………マジか」

単純に巨大化していた。灰色に変色しているものの、それ以外はなんら変わらない。

ただ問題は、その大きさにある。

見上げるような 聳えると呼んだ方がしっくりくる大きさ。軽く五十メートルは超えているだろう。無茶苦茶だ。

しらず、舌打ちしていた。こんな時、『黒夜叉』や『ガウエイン』

であればこの窮地をも切り抜けられただろうに。これは装甲が薄く、相手の実力は未知数。接近したいところだが、何もせずにはやられる可能性が高過ぎる。

「…………今から中距離<sup>ミドルレンジ</sup>で攻撃する。接近戦を頼む！」

『あんま、近接は好きじゃないんだがな…………』

紅い装甲の機体 『EOAC1-22 Personal Custom』 Ecarlate』。ケヴィンの為に改造が施されたフランス開発のアームズで、開発ネームは『エカルラート』。その名の通り、緋色をした機体で、重装甲高火力、そして超高熱の油脂<sup>ナパーム</sup>焼夷弾の運用を主としたもの。一回りくらい、通常のアームズよりも大きい。

接近兵装は一本。超重量のハンマーで、微細の振動波をインパクト時に大放するもの。振動により大抵は崩れ、崩れなかったとしても衝撃で内部から粉碎。両方が効かずとも、脆くなっているので味

方の援護次第で戦いが容易になるのだ。

その大型ハンマーを取り出して、紅色の機体が未確認生命体へと突撃する。

哉徒は距離を取りながら、ビームライフル光化学遠距離長銃を展開。アンチマテリアルライフル対物遠距離長銃にも似たフォルムから、ウインチェスター騎兵長銃のようなフォルムにシフト。

いざとなった時に備えてある実弾パックから口径の大きなものを取り出し、装填。

『オートエイム自動照準を起動しますか？』

「要らん。その代わり、緊急時の操作を頼む」

『了解です』

『こら！ も、戻ってきなさい！ 早く』

ラヴィニアの通信は切っておく。あの声はキンキンと脳裏に響くのだ。

一呼吸置いて引き金を固定し、スラスタールペダルを強く踏む。飛び出し、右から左へとスライドしていく機体を制御しながら、照準を合わせていく。

サイドモニターでケヴィンを確認すると、ハンマーで丁度、未確認生命体を殴打した所。

しかし、強度も上がっているのか、鈍い音が響くものの壊れてはいなかった。

『堅えぞ！』

「らしいな。今から収束砲当ててみる。これでダメなら、ナパームで援護してくれ！」

『おう、考えるのは任せるぜ』

ケヴィンの信頼と返事を受け取り、先程インパクトした部分へと銃口を向ける。

先に行くレーザー光化学と、後続の実弾。このコンビネーションは、比較的安定していると言えるだろう。融解した表皮を貫く合金弾は、ほとんどの相手に有効だった。

「発射ッ！！」

飛んで行く夜色の輝き。口径と寸分も違わない光の本流は、ほぼ一瞬でその灰色の甲殻に到達する。

やはり先程の一撃が効いているらしく、光は体内に吸い込まれていく。  
好機だ！<sup>チャンス</sup>

実弾を放ち、更に腰の柄を引き抜いて 加速する。

『御主人様！ 右後方よりナパームが！』

「大丈夫だッ！」

強く言い返し、柄にある光化学機能を腕のリンクから起動させ、銀色の輝きは一瞬で瑠璃色に染まった。

ブリストを全力で踏み込み、眼前で炸裂するナパーム弾をも物怖じせず、剣を足に見立て、胴廻し回転蹴りの要領で勢いのまま

「乱旋風ッ！！！」<sup>みだれつむじ</sup>

切り伏せるッ！

切り裂く事に特化したその刃は、鮮烈且つ静謐に甲殻を断った。斬線は四つ。緑色の体液が噴出し、未確認生命体は海へと墮ちていく。断末魔が轟くが、もう動けまい。ナパーム弾は下方から上方へと切り上げられるように放たれたのだ。視界も目を焼き潰したはずなので、もう起き上がってもこれないだろう。

『……おい、ヘンじゃねえか？ こんなに断末魔が響くわけねえ』  
哉徒も知らず、操縦桿を強く握っていた。ついでにアクシヨンレバーを操作し、汎用が利く戦闘機へと戻しておく。

ハウリングする断末魔。それはコクピット内部でもかなり響く。外ならば、きつと鼓膜を劈ついているだろう。

それに 何かの音が重なった。同時に、ラヴィニアが強引に回線へ介入する。

『戻ってください！ よく分からないエネルギーが、そこに収束しています！ 早くッ！』

『御主人様。……あの憎い野郎を探したいなら、動かないで下さい』  
『なっ！？ 何をふざけた事を！』

それはそう思うが、フローレンスの声は至って真面目だ。

彼女は、何か知っている。そんな気がする。

「艦長。自分は探索の任務に行つて参ります。必ず帰りますので…

…」

気付けば、そう口にしていた。

案の定、ラヴィニアは矢継ぎ早に言葉を繰り返して来る。

『いけません！ 私のところに戻ってきてください！ 命令です！

司令権限でも何でも良いです、早く戻ってきなさい！ 哉徒

！』

プライベートの時の呼び名。彼女もオレも呼び捨てで、親子のような姉弟のような、何とも奇妙な関係。

恋人ではなく、親友と呼ぶには親し過ぎる。仲間と言つのもしっくりこなければ、もう形容の仕様が無いわけで。

「行かせてくれよ、ラヴィニア」

そんな彼女へと、懇願するように哉徒は言った。

ラヴィニアは嬉しいような悔しいような、微妙な声を上げて、結局は怒鳴りつけた。

『……！ ず、ずるいです！ どうしようもなくなった時だけ、そんな呼び方なんて！』

「自分の過去と決着付けて来るだけだつて。……でも、戻つてこれないかも知れない。だから、言わなきゃな。……今まで、有難う。

貴女がいてくれたから、オレは生きていけたんだ」

『……っ！ 『紅射手』！ 『黒山羊』を引き摺つてでも連れて帰りなさい！』

ケヴィンに命令を下すものの、

『あー、ノイズが酷くて聞こえねえなあ』

彼は何もかもわかったかのような態度で、そう応対する。

と、ディスプレイにポップアップが出る。文で、彼は言葉を送つただの。

『Hey Kanato, just be careful with ladies when you get there.

OK?』（おい、哉徒。向この女には気をつけるよ？ いいな？）  
彼らしい忠告に、哉徒は苦笑し、操縦桿を改めて握り直した。

「……行ってくるよ」

『では、御主人様。多少、重力が掛かると思いますので』  
歪んでいく空。その歪みが飽和し、収束していく。

引き寄せられる機体。危険だとする緊急音アラームが鳴り響く中、凄まじい  
衝撃に揺さ振られ、視界が黒くなっていく。

『二つ目の喇叭クラッパの音が鳴り、共鳴しました。その結果……こうなる  
わけです。何とかしないといけませんね』

そう呟くフローレンスの声を沈み行く意識の淵で聞きながら、あの  
悪友の顔を思い出していた。

二つ目の音が鳴った。

変容する世界。それは二つの舞台に影響を及ぼす。

灰色狼が目覚める前に 断たねばならない。

一人は牙を取り戻した獅子。一人は漆黒に身をやっ竄した山羊。

役者は出会おうとしている。運命的でありながらも、確率にすると  
陳腐な数字に置き換わる。二人の再会をそれで表すのは、無粋と言  
うものだ。

今はただ、一つの舞台に役者が二人立とうとする事だけを覚えてい

ると良い。傍観者はただ見守ろう。

世界は七本の喇叭と、彼らに掛かっているのだから。

三章 二重奏と虫食い穴 〵後編〵 (後書き)

ルビが多いです。ルビ祭りです。日本風にしようとしたらこれだよ……。

## 四章 武士の世界

ぼやける意識の中、甲高い声が耳朶を打つ。

『 て！ きて下さい！ 御主人様！ 』

明瞭になっていく声。それは必死そうで、だから応じないとならない。

「ん……」

微かに出る声は、そんなものではなかった。か細い声だ。聞こえていないのだろう、彼女は懸命に呼びかけてくれる。

『 起きて下さい！ 戦闘空域のど真ん中です！ 私の権限では、機密な動作が……！ 』

その一言で、一気に頭が覚醒する。

が、吐き気が急に襲う。気持ち悪さと物欲しさが体中を突き抜けるような、そんな感覚を伴って。

荒くなる呼吸を押さえようとせせず、収納してあったはずの栄養パックを手繰り寄せ、一口啜る。すると、徐々に体を纏っていた倦怠感が薄れ、体内の全てが整っていった。

「……すまん！ 状況は！？」

『 巨大なロボットと武者甲冑の争い、その真つ只中に落ちました！ 』

ここは異世界です、妙な先入観は棄てて、どちらに加担するかお決めください！ 』

「分かった、しばらく海中で様子を見る」

上方にあるアクションレバーを引いて、ビット&ロケットの形状へと変化させる。

水中に潜る衝撃に身を揺さ振られつつ、ビットを射出。ワイヤーを撓たわませ、海上に浮かんでいる残骸と見せかける。そんな小細工を仕掛けて、慎重に内臓カメラで様子を探っていく。

『 ……二勢力ですね、やはり 』

「ああ。巨大なロボットは十数機だが、個々の戦力が大きいな。対

し、武者甲冑の方は士気が高いみたいだが……キツそうだな」

額に何か英語が書かれてあるロボットは、かなり固い。しかも、先ほど斬られていた傷が塞がっていくのをモニターの端で捉えていた。もう、何でもありだな異世界。

しばらく観察を続けている内に、ある事に気づいた。

「動作に人間味がないな、あのデカブツ」

「ですね。石を適当に積み上げただけのフォームもアレですし、そもそも使い捨てのような気がします」  
となれば、話は早い。

「……武者甲冑に協力するぞ」

「と言うと思ひまして、早速相手のリーダーと思わしき人物と通信準備をしておきました。褒めて下さい。撫で撫でも一向に構いません」

「仕事が速いな、お前……」

ジエバ ニも真つ青だろう。と言うか、どこを撫でれば良いのだ。頬を掻きながら通信を繋げると、応答はすぐにきた。

「何だ、貴様は」

威圧感のある声だ。数々の修羅場を越えて来たことは、その静かなる鋭さから嫌でも伝わってくる。

少し緊張しながらも、自らを鼓舞する意味も込め、声を張り上げた。

「自分は八哉徒！ 僭越ながら、貴殿に協力を申し出たい！」

「……む。では、ワシの指示に従ってもらおう」

「失礼ながら、無茶な指示でなければ、如何様にも！」

「よし。ならば、あの岩石連中の破壊を命じる。貴殿の姿は？」

「変形する黒い機体です。今、海上からあのデカブツに奇襲を掛けます！」

「威勢が良いな。……弱点を探すだけで良い」

「特務 いや、任務了解」

通信を切り、近接戦闘用の演算データを設定。人型に変形し、連続で加速するブースターを起動させた。

「……ありがとな、フローレンス。一緒に行こう！」

「っ!? はいっ! 御主人様!」

飛ぶ。

海面を吹っ飛ばして、一気に天空へと駆け上がっていく。

緩慢な動作で拳を振り上げてくるデカブツの真横をすり抜け、額の文字へと肉薄した。

「そこがエネルギー循環のスイッチのような役割を果たしています! 一番右の文字を高密度の光化学刀ヒウムで!」

「ああ!」

光化学のスイッチを入れ、瑠璃色に染まる刀身。加速しながら中段に構えを取り、やや上でブースターの推進を変え、真正面に突っ込んだ。

「飛翔鴉とひからすツ!!」

振り下ろし、そして跳ね上げるように斬る。獲物を定めた鴉のように速く、この後、あらゆる攻撃に対応出来る狡猾さも含め付けられた技だ。

頭部をごっそり持って行き、言われた通り一番右の文字を飛び込み突きで貫いた。

岩の集合体はただの礫塊と化し、海へと沈んでいく。

迫っていた他のデカブツ拳を変形する事によって回避し、戦闘機状態となった機体でアクロバット飛行をしながら、通信を繋げる。

「デカブツの弱点は一番右の文字、あれがエネルギー循環のスイッチかと!」

「よし、よくやってくれた。……拘束という形を取るが、こちらへ来ては頂けないだろうか?」

「この機体と自分の所有物に、指一本触れないと約束頂けるなら了解した。ワシも誇りあるグランディアの男子だ、約束しよう。」

誘導信号をこの回線で送る」

「……ご理解、感謝します」

帰り道がソナーに映る。未だに剣戟が木霊する戦場を、夜色の機体

は弾丸のように駆けて行った。  
見るものが見れば、それはきつと大鳥に見えただろう。  
大空を高く飛んで……雲の上へと消えていった。

『大歓迎ですね。震えそうです』

「別の意味でな」

小声でそんなやり取りを交わす。

向けられているのは長銃の銃口。鉄が蠟燭の火に照らされ、艶やかに且つ鈍く輝いていた。

軍靴を脱いで、座敷に正座している哉徒とフローレンス。彼らの前には、簾越しに大男が座っている。

「楽にしてくれ。お前ら、銃を下げる。こいつらは武器を持っているが、ワシらの危機を救ってくれた恩人だ」

その低い声音によって、銃が全て下ろされる。内心でホッとしつつ、哉徒は切り出した。

「ありがとうございます。自分は八哉徒。日本と言う国の軍人であります」

「聞き覚えがないが……お主を見れば分かるものよ。ワシらと似通った和の武を備えた者であると。そのような洋服に身を包もうとも、心は和を忘れておらぬと」

「自分の国ではそう言った者は少ないですが……自分は、そうあるうと努力しております」

「誠に素晴らしい！ウチのチャラチャラとした若い衆にも見習って欲しいものだ。して、そちらの異人である女性は？」

「自分が所有する機体に魂が宿ったようなものです。擬似AIと申しましょうか……補助機関を運用してくれる、第二の搭乗者であります」

「うむ。……お主さえ良ければ、力添え頂きたい」

彼の一言に、周囲がざわつき始める。

耳を澄ませてみれば、否定的であることが良く分かった。

「將軍！ 何故、そのような怪しげな連中を！ 我らだけで、十分戦え」

流石に耐えかねたか、銃を構えていた一人がそう進言する。  
が、

「このド阿呆がアツ！」

彼の一喝によつて、空間が震え、静かになった。

「あのデカブツと渡り合い、落とされてきたのはどこのどいつだ！  
弱点を教わらなきゃ、どうなっていた？ 勝次郎、言ってみろ！」

「や、やられていました……」

悔しそうな中年男性の姿に、一同は俯いてしまう。言い返せはしないだろう。お世辞にも、優勢だとはいえない状況だったのだから。

「それにな、隔離世との会談もしたい。彼ほど紳士で中性的ならば、問題は無かるう」

パンツ、と扇子が一息に開かれる音。

「ワシが ひのえけんぶ 丙玄武が全責任を取ろう。お主、名は？」

「八哉徒、こはいつひなと 及びフローレンスであります」

「うむ。……お主らには、新設する隊の隊長と副隊長を任せたい。  
部下は……そうさなア」

「そんなヤツに隊長やらせる必要、あるんですかね？」

若い 自分よりも少しだけだが、若い長髪の少年が姿を現す。

美少年を絵に描いたような人物ではあるのだが、何と云うか敵意むき出した。

と、先程の勝次郎と言う人物が駆け寄り、少年を羽交い絞めしようとする。

「こ、こら！ 総司！ お前はまた……！」

「親父、ちよいと黙っててくれよ。次の隊長は、近藤さんで決まっ  
てたんだからさ。文句くらい、付けさせてくれよ」

「別にいいんだぜ、総司。俺は別に気にしちやいねえからよ！」

「近藤さんがそう言うんだ。引け、総司」

「近藤さん、土方さん……生憎ですが、自分にや無理な相談ですつて。……おい、その女男」

カチン、と何かスイッチが入った。急速に頭が冷え、哉徒は冷ややかな視線を睨む少年　総司へ向けた。

「なんだよ、苦勞もしてなさそうな童貞坊や。外は暗いんだ、子供はおねねの時間だぜ？　寂しかったら、自分の指でもしゃぶって寝てろ」

「へえ……！」

「それにしても、女男ねえ。鏡見てみるよ、笑えるから」

刹那

薄暗い空間の中、総司の抜いた刀と哉徒が抜いた軍刀とが衝突し、火花散らす。

「へえ、女男の癖に、やるじゃん」

「そつくり返すよ、坊や」

数度、刀を交え、互いに理解しあう。

この少年は紛れもない。天才だ。

それに甘えず、努力によって磨かれたのだろう鋭くも滑らかな一閃が、それを証明している。

気づけば、哉徒は敬意のようなものを彼に抱いていた。

沖田総司は得心が行かなかった。

なぜなら、この女男　八哉徒だっけ？　が、近藤さんや自分よ

りも、上手だとは思えなかったからだ。

幼少の頃から剣に携わり、機械知識も学んだ。自分が天才と呼称されている事も知っていたし、それを認めてくれる近藤と……土方はどうでもいいや。まあ、敬愛している。

今度、近藤さんを中心に隊を立てると聞いたときは、とても嬉しかったのだ。なのに、横槍が入ってしまったのだ。

この女男が全てを持っていけるような人物なのか、見極めたかったのだ。

だから 神速の抜刀を受け止め、弾いた時には、驚いた。

「へえ、女男の癖に、やるじゃん」

その一言は皮肉交じりだが、本心である。

妙な格好をした女男は、先程浮かべていた静かな表情を一変させ、凶悪な笑みを浮かべていた。

「そっくり返すよ、坊や」

子ども扱いされ、ムツと来る。

数段動きを早くしてみても、あの女男は的確に捌いてくる。刀を見れば分かるが、相当大事にしているようだ。輝きと曇りが違う。

弘法筆を選ばず、と言うが、それ程の達人ならば拘りが出てくるだろう。きつと彼は、その域に達している。

今度は純粹に、この女男 いや、男と戦いたくなった。

「ちえアツ!!」

「ラアツ!!」

短い咆哮と交わる金属音。

強い。

だが、分かる。彼は刀を習って、そう経ってない。

きつと、死ぬような思いをしなければ、この領域には到達できない。何度、死線を超えてきたのだろうか。何度、死ぬような思いをしたのだろうか。

そしてその時点で気づくべきだったのだ。

「がア !?」

鏢迫り合いから刀を強引に押し退けたかと思えば、顎へと凄まじい衝撃が走る。垂直に蹴り上げられたのだ!

「実践つてのは、刀だけじゃない。武術の方が、心得もあるしな」  
そいつが悠然と刀を納めるの姿を見届け、総司は気を失った。

「……皆の者、納得がいったかな？」

成る程、と哉徒は思う。実力を証明するのに、彼は申し分ない相手だった。

「にしても、哉徒殿。あの蹴りは見事でしたな」

「防がれてましたよ。彼、自分が刀を持って間もない事に気づいていたようですから」

「ふむ……。お主にも、天賦の才があるのか。何年になる？」

「幼少の頃、実家で一年。軍部で一年です。格闘技は、友人と一緒に我流で。軍部ではシステマ……。少し暴力的な合気道を習得しました」

「頼もしい。その分、実績も期待しても？」

「はい。粉骨碎身の覚悟で望みます」

敬礼してみせると、簾がサツと上に巻き取られていく。

荘厳な雰囲気かたぎめはんはかまの老人。肩衣半袴かたぎめはんはかまに身を包み、刀を携えて凜とするその様は、まさに人を束ねる風格に溢れていた。

「哉徒、お主には目的があるように思える。その答えを見つけたか、目的を遂げるまでは……。ここで働いてもらおう。よろしく頼むぞ？」

「はい！ 数々のご恩、誠に感謝します！」

敬礼する哉徒の横で、フローンレンスは欠伸を一つ。空気読んでくれ、お願いだから。

まあ、そんなこんなで……。

本物の異世界との取っ掛かりが、生まれたのだった。

## 五章 暗躍と友人（前書き）

短めのお話。バトル抜きで街並み、仲間紹介。

## 五章 暗躍と友人

シュバルツガルド王国は、その多勢を大陸ごと水中で待機させている。俗に『ムー大陸』と呼ばれていた場所は、他二国　アースガルド帝国とグランディア、シュバルツガルド王国連合との開戦と同時に姿を消していた。

しかし、もとより水中にあったその都市には、然程影響はなかった。水中都市・ルルイエ。絶海に沈む石の都市。息衝いている事が異常ではあるのだが、そこに人の姿があるのもまた信じられない出来事だった。

その一室は豪奢の一言に尽きる。全面に広がるブルーの絨毯、黒革のソファ、調度品は全て艶のある黒に統一され、唯一の光源であるオイルランプは、何故かオイル無しでも輝いていた。

柔らかそうなソファへ寝転がり、暇そうに欠伸をしている少女　フランソワ・プレラーティは、本を退屈そうに遊び、耐水圧アクリルの向こうに見える黒機　『ルルイエ・ア・スキアーヴォ』を眺めた。

細身のフォルムだが、頑丈さは他に類を見ない。ルルイエの奴隷と称された黒機は、本の持ち主に莫大な力を与える。彼女はそう考えていたし、事実そうであった。

精神と心が機体に移って、あたかもプログラムの一部となる。自分の分身、自分を機械に昇華したものだ。それが『黒機』の特徴だと、この世界に住んで黒機や神機について少しでも調べた人間なら知っていて当然だ。

語られていないのは、認証し搭乗すると、操縦者の精神は無事ではすまない事。SAN値を搭乗時に差し引かれ、乗る期間を数日開けなければその値は元に戻らない。そして、その値が残り少ない事に、彼女はまだ気付いていない。

ちなみに、SAN値は正気を測る度合いで、通常が百から七十五。

狂気の沙汰と呼ばれるのが二十五。十で精神崩壊が始まり、そうなるってしまえばノンストップでゼロに降下し、ゼロになると狂ってしまう。それを黒機搭乗時に、十ずつ引かれるのだ。しかし、それだけ強力なのは間違いない。

時に精神は、肉体を凌駕する。

丁度、少女が読んでいる本もそうだ。啓蒙的な宗教者が戦地へ赴いて戦い、胸をライフルで撃たれた。普通ならそこで倒れこむのだが、そいつは違った。神の私兵となった男は、血反吐を口の中に入れたまま、敵兵へと十歩も歩いたのだ。これが如何に驚異的であるかは、人が銃弾を受けて死に行く様を見なければ想像もつくまい。アニメや映画ならば、撃たれたって何とか立ち上がり、走れるだろうけれども。

そう、現実的ではないのだ。だからフィクションは面白い。人々がフィクションだと嘲笑うだろう精神を使って稼動する鋼鉄の体。こんな話を聞いても、きっと面白くもない。なぜなら、それはここに実在するのだから。

精神に左右される鋼鉄の奴隷戦士。それは不安定で、強いが同時に酷く脆い。精神を糧に動くのだから、コンディションでかなり左右されるだろう。

まあ、狂ってしまえば精神もクソもない。ただ過剰な精神バランスに耐え切れず、肉体にフィードバック。強く暴れまくるが、しばらくすると熱暴走を起こし、爆発する。

そんな条件爆弾の整備は自動。自動修復だそうなのだが、どう言うメカニズムなのかは知らない。そう言えば、ナイアの馬鹿野郎がナノマシンとか言っていたが……まあ、いいか。興味はない。要は使えれば良い。

少女は我知らず苛々していた。連日の出勤に、SAN値が削られているのに気付いてはいない証拠だ。

「ナイア。……ちょっと、ナイア!」

「呼びました?」

フランソワの呼びかけに、どこからともなくスーツ姿の女性が姿を現した。サイズの大きい男物のスーツに袖を通して、服の上からでも分かる女性らしい体のラインから、その性別は間違えようがない。

やけに機嫌が良い彼女へと、フランソワは眼光を飛ばした。皮肉気に、可愛らしい口元までゆがめてみせる。

「サボってばかりで良いご身分ね。アル・アジフはゴーレムを潰しに行ったわよ？ 貴女も働いたらどう？」

「いやあ、連日戦ってたら正気じゃいられませんって。それに、野蛮なのは他の連中に任せときます。ギャラルホンも鳴り始めましたし、それに共鳴してセヴンス・トランペッターまで鳴ったんですよ？ 少しは休ませてください。フランソワも、休んだ方が良いでしょうん」

欠伸を噛み殺す女性　ナイアへと、やはりフランソワは溜め息を吐き、本をちらつかせる。

「そう言えば、私以外にも後継者となる人物がいるの？ この『ルイ工異本』の後継者、フランソワ以外に」

「ええ。今までに、『ネクロノミコン』のアル・アジフ、『無名祭祀書』のオーガスト・ダーレス。他にも覚醒させた人は結構いますよ？ ……あ、『セラエノ断章』は作った機体の内部に入れたままだったんですよ……どうしょ」

「取って来なさいよ！？ 何やってんのよ！」

「いやあ、次元を超えるのってメンドいんですよ。それに、アザトウイス様とノーデンス野郎は何も言ってきましたんね。放置で良いんでしょう。それに、あのクソ憎たらしいヤツの召喚式まで載っていないやがりますし、いつそ燃えないですかねえ」

適当にそう答え、どこから出現させたのかワインボトルを直飲<sup>じかの</sup>みするナイア。彼女　いや、彼か？　は混沌の使者だと自称しているが、どこことなく胡散臭い。おまけに、こちらを馬鹿にしているよくな気がして、どうにも好きになれなかった。

自身も立ち上がって、冷蔵庫へと飲み物を取りに行こうと歩き出す。  
「そう言えば、この世界に一人、人がやってきたそうですね。」

ワインが美味かったのか、鼻歌まで歌いご機嫌なナイアの一言に興味が沸いた。当の本人は、ワインだけでは物足らなくなったらしく、同じく冷蔵庫を漁りにきている。

「あ、モツアレチーズ！ これとトマトでカプテーゼでも作ってくださいよ！」

「何で私が作るのよ！ 料理なんてやった事ないわよ！」

「好きな人に作ったとかは？ 人間同士の下らない情事には必要不可欠だと聞きましたけど」

「生憎、好きな男なんていないのよ」

「短命の癖に。生殖本能が薄いんじゃないんですか？ ……まあ、これくらいはちょちょいのちょいですけど」

溜め息を吐きながら、手を金属に変貌させるナイア。

文字通りの手刀で、トマトとチーズを輪切りに。斬ったそれを交互に挟み、塩、胡椒を混ぜたオリーブオイルをたっぷり。バジルの葉を少し散らせば、それは完成する。

「じゃーん！」

「やれるんなら最初から自分でやりなさいよ！」

「おやまあ、そんなに怒ると短い寿命が更に縮まりますよ？ 笑顔笑顔！」

ああ、腹が立つ。満足そうに笑っているその小綺麗な面に拳を打ち込みたい。

震える拳を収めつつ、フランソワはナイアに尋ねてみる。

「その人間って、どんな人？」

「さあ？ けど……十中八九、高宮時雨の関係者でしょうね。それと、私と同じ……外なる神の気配がするんですよ。誰の根回しなんでしょう」

「ノーデンスじゃないの？」

「それこそ、神のみぞ知る、ですよ。まあ、私も一概に言えば神な

んですけどね」

肩を竦めながら、ナイアはチーズとトマトを摘み、口へ運んで咀嚼する。苦笑が満面の笑みへと変わり、これ以上ないほどの多幸感に溢れていた。

「デリッシャス！ ワインもワインも……おっほう！ 最っ高ッ！」

「貴女、私より人生満喫してるわよね……」

そんな切ない突込みが、虚しく部屋の中で響いた。

「特務部隊・新撰組。構成員の点呼を行う。近藤勇！」

「オッス！」

厳しくも優しい眼差し。彫りの深い顔立ちは男性の渋さを良く現し  
ていて、どこか風格も漂っている。部下三人の中では一番体格が良  
く、何より逞しい。頼れる兄貴分と言った印象の青年。

「土方歳三！」

「……ッス」

無骨な返事を返したのは、刃のような鋭い雰囲気を持つ青年。総司  
に負けじとも劣らない美形で、バランスの良い肉付きとスラっとし  
た身長が特徴的だ。

「沖田総司」

「うー」

一度刃を交えた少年。まだ幼さを顔に残す、紅顔の美少年。背は一  
番低く、土方とは対照的な存在だろう。

「ん、全員だな。言っておく事は一つ。基本は近藤を中心に行動し、  
緊急時には俺の指示に従って欲しい。以上」

「……は？」

与えられた八畳一間の客室。全員、円陣を組むような形で正座して

いる。

厚手の着物に蒼の羽織。色は各隊によって違うらしい。腰には刀があり、正式な武装の際は拳銃も支給されるようだ。

で、將軍　玄武から受けた命令は、『特別な任務を内密に受け渡す。それまで自由に』との事。

正直な話、近藤を慕っている土方と沖田は、自分の下に付くのを嫌がるだろう。それを見越しての答えだったのだが……。

「隊長は八、あんたがやってくれ！　俺は認めてるからな！　アンタは信用できる！　指示に従うぜ、隊長！」

「……近藤さんが信じるなら、オレも信用する」「土方の陰険野郎に賛成」

とても良い笑顔でサムズアップする近藤と、頷き殴りあう子分が二人。つか、近藤が暑苦しい離れる。

溜め息を吐きながら、正座を崩す。

「……論拠は？」

「勘だ！」

真顔で言い切る近藤は、すげー男らしかった。……いや、それでいいのか？

もう問い質すのも無駄だろうし、一応、言っておく。

「オレは人を探しているだけだ。ここの隊長も、目途が立ったら辞める。何も言わずにいなくなる事もあるだろう。そんなヤツが隊長になるのは、筋が通らない」

「無理を通しゃあ道理が引つ込むんだぜ？　……けど、まあ分かつた。お前さんは一人で動く類の人間だろう？　なら、必要な時に俺

らを呼んでくれりゃあいぜ！」

一々ポーズを決めてくる近藤を半ば無視し、全員に問いかける。

「……いいのか？　そんな、使いつパシリのような関係　」

「別にいいっスよ？　おいら、特に気にしないんで。気楽にやりましょ」

そう笑う沖田。

「……その方が都合が良い」  
目を瞑って頷く土方。

そして、ウインクしながら親指を立てる近藤。

「構いやしないぜ！ 俺達……友達だろ？」

「早い早いオレらほとんど初対面！ そして上司と部下たる関係！？」

「初めは誰だつて初対面だぜ？ さあ、めくるめく男の園へようこそ！ 女顔だから、お前はきつと可愛がら げぶあ！？」

「死ね……！ オレを女と呼ぶヤツは死ねっ！」

そんな二人のじゃれあい（？）を、沖田と土方は見守る。

「土方さん、実際あんたはどう思うんですかい？」

沖田は伸びをしながら、隣に座っている土方を横目で見、答えを促した。

問われた土方は、首を絞められながら笑っている近藤を穏やかに眺めている。

「……まあ、近藤さんを惹き付ける人柄だ。悪い人物ではない」

「そっすね。それに、コンプレックスも戦いの手腕も、おいらより

一回り上だ。色々、教えてもらえそうっすね」

「ふむ」

その後も、挑発を続ける近藤と哉徒のじゃれあいには、哉徒が本気で腰の刀を抜くまで続けられた。

解散を告げた後、哉徒は天空城 『日之丸』を後にし、下に見える街まで降りていた。

『なるほど。これからの住まいを見学とは……建設的ですね』

「だろっ」

『……私は何故、携帯に入っているのですか？ 実体化させてくだ

さい。あんな事やこんな事もしちやいますよ？ 無論、御主人様にだけの特別サービスです」

「そのあんな事やこんな事をお前にしたそんな輩の対処に困るんだよ」

グランディアは現在、勢力が二分している。

一つはここ、『本土』。もう一つは女性ばかりの住まう地、『隔離世』。

『本土』では、あまり女性の権力が強くないらしい。性質の悪い男はどこにでもいるので、筋も通せないロクデナシが横行する様になつてしまつたのだろう。嘆かわしい。

その為、若い女性は『隔離世』に移り住んでいるらしい。流石に、玄武も説得しているみたいだが……芳しくないそうだ。まあ抜本的な改革をしなければ、説得も徒労に終わるだろう。

『……御主人様、そこまで私の事を……！ 愛してます、もう抱いてください！』

「うん、いいから黙れすぐに黙れ」

コンクリート舗装ではない、砂利の道を草履で進む。格好は若草色をした薄手の着物と草履だけ。枝垂れ柳の道の横には、大きな川が流れている。昔ながらの情緒漂う風景に、何となく哉徒は落ち着いていた。

「いいなあ、この感じ」

『土臭そうですね』

「バーカ。この情緒がいいんだよ。……おっ！ うどん屋だ！」

『うどん』の暖簾が哉徒を惹き寄せる。哉徒の少ない好物の一つで、軍に入つて定期的に、アルグレイフに無理を言つて作つてもらつたものだ。

懐かしい思い出を回想しながら店内に入る。質素だが、木製の仕切りから漂う出汁の香りは……堪えられないほどに食欲をそそらせてくれた。

結構な賑わいだが、カウンター席が空いていた。そこに座り、品書

きを見る。円相場で、金は支給済みだ。

「……野菜天うどん大盛りで！」

「あいよ！ 若いの、ちよいと待っとくれ！」

喧騒や雰囲気を楽しみながら、哉徒は待っている。鼻歌でも聞こえてきそうなほどに、機嫌が良い。

『珍しいですね。うどん、好きなんですか？』

「ああ。……まあ、好物じゃ一番かな」

出し巻き卵とか、他に好きな物もある。が、今はうどんだ。最高だよ、うどん。

「……ん？ 隊長」

隣に座っていた男がこちらに顔を向けてくる。土方だ。海老天蕎麦を啜っている。

「……よく知ってるな、この店」

「有名なのか？」

「大手よりも味が良い。……総司も、近藤さんもよく食べに来る」

「出汁が美味そう匂いしてたからな。うどん大好きなんだよ、オレ」

「……自分も」

「ん？」

「自分も、好き……っス。蕎麦の次に」

「ああ」

視線を逸らした後、土方は勘定分の硬貨を置いて、立ち去っていった。

「今度、全員で来ような？」

その後姿に声を掛けると、動きが少し止まり、顔の方で頷いてみせ、暖簾を潜っていった。

目の前に置かれるうどん。野菜天の他に、牛肉が乗っていた。

「あんた、土方と仲良よくしてくれて……ありがとよ」

厨房の女性から、ウインクを貰う。そんなつもりではなかったのだが、貰えるものは貰っておこう。それに、土方と仲良く出来れば良

いのは、事実だ。

「ありがとうございます」

「良いんだよ。……実はアタシ、あいつの近所に住んでたんだ。お姉さんって感じてね。ま、仲良くしてやってよ」

「ええ」

微笑みかけながら、うどんを啜る。コシは弱めだが、モチの様な弾力がある。出汁は鰹が少し強く、関西風なのかスープは黄金色で醤油はあまり感じられない。哉徒の好み、そのど真ん中をいつていた。味わいながらも、箸は休まず動き続けている。大盛りだった麺も、さくさくとした野菜の掻き揚げも、甘辛い味付けの薄切り肉も、どれもが胃袋に収まるまで、五分と少ししか掛からなかった。

「ご馳走様！」

「また来てね〜！」

勘定もキツチリ払い、外へ。少し熱を帯びた体に、路傍を吹き抜ける涼しい風が心地よい。目を閉じ耳を澄ませると、喧騒や柳の葉音、河の流れが目には浮かび上がって、癒される。

「マジで日本だなあ〜……でもタイムスリップしたみたいだ」

『まあ、あんな機械は飛んでいませんがね』

「何で街並みは時代逆行してるんだろうな」

『……それこそ、御主人様が仰る風流だと思えますけど』

「ああ……」

ここの住人は、とことん昔気質の日本人らしい。

苦笑しながらも、平和な街並みを哉徒は眺めていくのであった。

仮面を付けた女性が、彼を物陰から観察しているのにも気付かずじ。

## 五章 暗躍と友人（後書き）

シュバルツガルドがここから登場します。

活動報告などで、キャラクターやメカについてを稀に書いております。興味があれば、ご覧下さい。コメントの返事も、主にそちらで行わせていただきたいと思います。

六章 再会 ～前編～ (前書き)

コメディ回です。戦闘は次回に。

## 第六章 再会 ～前編～

『隔離世』。

相も変わらず暗い空間。少女や女性が気軽に行き来し、されど礼儀は忘れず、擦れ違う度に会釈会釈の繰り返し。見る人が見れば、鬱陶しい事この上ない。

気軽さが足りない和前々から思っていたのだが、

「鬱陶しいんだよボケ」

「す、すみません……」

「頭下げるのが鬱陶しいんだっつ。分かってくれや」

訂正させてもこの通り。もうお風呂のカビのようにしつこく染み付いているらしく、その習慣は表面活性剤でも使わなければ取れそうにもない。

まあ異端である自分の存在も認められつつある昨今、緩くなりつつはあるのだろうけれども。

廊下をゆっくりと歩いていると、今度は桜色をした髪の少女と出くわす。咲耶だ。

「時雨、アンタが出歩くなんて珍しいわね」

「人を引き籠もりみたいに言うんじゃないよ。それに、そろそろ出とかないと俺のチョーイケてる活躍をアホみたいに待ち望んでるファンがガッカリするだろ。な？」

「どこ向いて同意を求めてるのよ！」

「お前も、出番増やしたかったら媚び売っとけ。だろ？」

「だからどこ向いてるのよ！ そっち何も無いわよ！」

「待たせたな。主人公・高宮時雨。戻ってきたぜ！ 嬉しいだろ？」  
「いい加減に止めるって言ってんでしょ！？ 誰に話しかけてるのよ！？ 怖いじゃない！」

適当にあしらいながら、その横を通り抜けようとしたが……着物の裾を咲耶に掴まれる。

「どこ行く気よ」

「お前のいないト」

「ア・ン・タ・は・つ・く・づ・く……!!」

「い・い・お・と・こってか？」

「死ね！」

下段回し蹴りを跳躍して避け、大股で去っていく咲耶を見送る。訓練を受けるようになって、彼女は足癖が悪くなった。その足は細くて張りがあり、多分触ったら気持ち良さそう。いや、どうでも良いが。

そう言えば、変わらないのは彼女の反則的な可愛さもだ。並の男ならその姿を見ただけで惚れ、きっとゲイでも振り向かせるだろうその圧倒的存在感姫の風格に相応しい。

ジツと見ているのが分かったのだろう。咲耶は振り返って、こちらを睨みつけてくる。

「……何よ」

「いや、そうして不機嫌そうな顔してると……」

「……してると？」

「女の子みたいだな」

「アタシは女よ！ 何だと思ってたのよ!？」

「いやいや、別に食っちゃ寝してるふてぶてしさ溢れるシヨタっ子だなんざ思っちゃいねえけどよ……」

「とんでもない事思ってくれてたわねアンタ!？」

と、アホなじやれあいをしていると、携帯電話にコールが入る。磐長だ。

「おう、こちらイケメン」

『こちら、謎の仮面美少女、ロックです!』

「……」

『……』

「……は？」

『すみません、やって見たかったただけなんです。本当に申し訳御座

「いませんでした……冷たくしないで下さい」

「警長も随分と砕けてきた。うん、面白おかしくからかった成果だろうが、何となく綺麗なものを汚してしまった罪悪感がある。すまん、警長。」

「電波の向こうでは、風の音が聞こえる。多分、高いところから通話をしているのだろう。風切り音が並大抵ではない。それでも音声を拾ってくる携帯の技術的進歩にはホトホト呆れるしかないが。」

「で、その異世界の住人とやらは見つかったのか？」

「いえ……。ですが、綺麗な女の人を見つけたんです！ 遠目からでしたが、女の子に見えました！」

「へえ。どんな感じ？」

「背はそこそこ高いんですけど、佇まいと線の細さが目立つんです。うどん屋から出てきて、満足そうな顔をされている時は、もう……私よりも可愛かったです」

「胸は？」

「何聞いてんのよ、と咲耶が目を吊り上げているが、とりあえず胸は重要だ。」

「胸は……絶壁でしたけど」

「背は高い。線が細い。うどん好き。胸がない。」

「そんな女は知らない。が、男ならば話は全然違ってくる。」

「……名前、分かるか？」

「さあ……？ あ、何か絡まれていますね。……うわ！？」

「どしたよ」

「その女の人が物凄い形相で男六人をボコボコに……ああ、しかも柳に一人ずつ帯で縛り付けて……え、えげつない……。あ、何か絡んでた人が……うわあ！？」

「……どうしたんだ？」

「一人の肩の関節を外して、そのまま用水路に首だけを突っ込んで……ああ、また窒息するかしないかの瀬戸際で……何度も、それを繰り返しています。あ、蹴った」

水責めをしているらしい。鬼だ。

窒息死は中々苦しい死に方であり、溺死もあまり見栄えが宜しいとはいえない。それだけ苦しいのだ。そもそも、美しい死体なんてありはしないが。

でも、何となく誰かが分かった。と言うか、アイツしかいない。だが……それだけに分からない。

（アイリスは予知できてたのか？　もしも大きな変動があるなら、その兆候に感づかないワケがねえ……それに、あいつとコンタクトがとれりゃ、何でも出来る）

もしも　もしも、親友あいつだったら、心強い。味方になってくれれば、一騎当千だ。

問題があるとすれば……遭遇した瞬間に、血眼になってこちらへと殴り掛かってくる事か。多分、約束までしてそれをすっぽかした事になっているだろうから、筋が通らないとブチ切れるのも容易に想像がつく。

「警長、何とかコンタクトを取れねえか？　こっちまでそいつ、ちよつと連れて来いよ」

『……難しいですね。向ここの領地ですから、本土に連絡を取らなければ……』

「軽い交流って事で良いだろ。それと、こつ伝えさせれば……分かるはずだ」

時雨は歯を剥いて笑いながら、その言葉を携帯に囁いた。

「隊長、その手ぬぐい取ってくれよ」

「ほら」

手ぬぐいを沖田へと放り投げ、自身は鍬を握り直す。

農作業の手伝いや、網引き、交通の整備。軍……いや、警備隊の仕

事は多岐に渡っていた。

公的な組織にも関わらず、基本的には自給自足がメインらしい。ただ飯を食うつもりがなかった哉徒にとっては、何ともありがたい話である。

それ故に『本土』の住人からの信頼は厚い。女性も少なからず残っているのは、きっと彼らの働きかけによるものだ。昔とは違って、大分女性の尊厳も増したらしい。

畝を深く掘り、土をひっくり返す要領で進んでいく。沖田はそこに種を植え、柄杓で水をやっていった。近藤と土方も、自分たちと同じ要領で各々の作業に没頭している。

そんな作業をしていると、同じ畑を耕していた農家の住人が、等分に切られ真っ赤に色付いた実を天道様の下に晒しているスイカを持って、こちらに近寄ってきた。

「ご苦労さん。遊びたい盛りだろうに、偉いな。ほれ、食うか？」

「これも任務ですので。近藤、土方、西瓜を頂こう！ 沖田も、手を洗って来い」

「うーっす」

畦に腰掛けながら、その西瓜を一切れ受け取り、口に運んだ。

しゃりつとした歯応えに次いで、瑞々しい甘さが口いっぱい広がっていく。疲れて渴いた体には、最高のご馳走だ。

近藤も土方も、手ぬぐいで汗を拭きながらそれを齧り、満足そうに笑っていた。沖田も何だかんだ良いながら、一番早くに食べ終わってしまう。

しばらく休憩していると、沖田と近藤は差し入れをくれた人物と話し込んでいた。

「オレら、新しく新設された警備隊なんすよ」

「その名も新撰組！ 隊長が決めたんだけど、何か異様にしっくり来るんだよなあ」

まあ同姓同名の連中がいる部隊なら、そう付けるしかない。他に名前が浮かばなかったのもある。

まさかとは思うが、史実なのだろうか。……だとすれば、サインでも貰うか？ プレミアが付きそうだが……いや、証拠がないので止めておこう。

アホな事をグルグルと考えている内に、携帯電話に入っていたフロールレンズが声を出した。無論、スピーカー音声である。

『着信ですよ。玄武と登録されている方からです』

「ああ」

通話ボタンを押して、携帯電話を耳元に当てる。

「御用でしょうか？」

『うむ。ありのままに起こったことを話そう。君の恋人と名乗る人物が隔離世で待っているとの事だったのだ』

「は？」

『いや、ワシも何の事か分からなかったのだが……』

「そいつ、何か言ってますでした？」

『……サンドリヨン・カナちゃん、と』

プツン。

その場にいた全員が、その音を聞いていた。いや、雰囲気が一変して、そう聞こえただけなのかもしれない。

いずれにせよ、哉徒の整った顔立ちは、ある種 般若のように歪められ、どす黒いオーラまで見え始める始末。

「……何か、あったのか？」

意外にも土方が訊いてきたのだが、もう哉徒の頭には怒りと殺意しか存在していなかった。

『……哉徒、殿？』

「隔離世……」

『ぬ？』

「ぶっ潰してやるアツ！！ あんの引き籠もりのクソアマ巢窟なんぞ、破片が砂に変わるまでぶっ潰してやるッ！！」

全員がギョツとして哉徒を見る。

「お、おい！ おちつ」



『……凄い形相で、時雨様の事を叫ばれていますよ?』

「ああ、やつぱな」

思い出しただけでも笑ってしまう。ああ、確かこの世界に持ち込んだ携帯にはデータが入っていた。

一枚の画像を見つけ、それを隣にいた咲耶にみせてやる。

「ほれ」

「うわぁ……! 何この子、可愛いじゃない!」

蒼く儂げな瞳に、メルヒエンな金髪をなびかせている。華奢で背はあまり高くなく、線の細さがその人物の儂さを引き立てていた。ドレスを纏う姿は、戸惑いながらも夢見る少女のようで、その健気さに誰もが目を奪われるだろう。

咲耶とはまた違ったか弱さを、この少女は現している。

「アンタの親友って、女の子だったのね! あんたの話から、男だと思ってたんだけど……」

「ぶっ! ぐ、っはははははははははは! ! ! そ、そうだ!

女だぜ、良く覚えとけよ! 背も高くなって声も低くなったが、女だからな? 胸も無いが、女として扱ってやってくれ!」

「……や、それはいいけど。何で爆笑してるのよ」

「いやいや、会えるのが楽しみで爆笑しちゃったぜ」

「それあからさまに不自然じゃない!」

咲耶の追求をはぐらかしながら、時雨は安楽椅子に腰掛ける。

親友。本気で話せる、唯一の相手。

喧嘩していても、それは変わらない。ダチは……困っている時に、いつも欲しい答えをくれる。

だから、だろうか。

「……時雨、アンタ……笑ってるわよ?」

咲耶が目を見開いて、そう指摘する。

いつの間にか、凶悪な笑みではなく、本当に穏やかで、安心したような微笑を浮かべていた。

「……ああ」

そう頷いた時雨の表情を見て、咲耶もつられて微笑んでしまう。

あの時雨をここまで安心させる人物。

写真に映った金髪の少女を見て、何故だか苦笑してしまった。

「ちなみに、金髪はカツラだぞ？」

「ウソお!？」

格納庫。

日本基地に収納されているアームズは、数こそ少ないが精鋭ばかり揃っている。

世界中で起こっている混乱、それに乗じて国を支配しようと目論む者達を制圧する為に、国家連合軍はあるのだ。

その任務の中で、危険な特務のみを扱う『特務殲滅部隊』。肅清部隊も兼ねたスペシャリストの集団で、これに属する者は二つ名を頂く事が出来る。

ウイステイリアメーデン

『藤乙女』の名を持つ戦術司令官　ラヴィニア・ルーは、機体を

点検すべく、格納庫まで来ていた。

お目当ては、『ガウエイン』なる、小憎たらしいフロレンスという少女の機体。いや、だって……御主人様って。

(もう……色んな方法で慰めてた私が、馬鹿みたいじゃないですか)彼女の出現により、哉徒は死にたがりを一時的にだが取っ払ってしまったのだ。あちこち世話を焼いて、ようやく会話してくれる状態にまで持ち込んだというのに、その土台の上に土足で踏み込まれたような……そんな不快感。

溜め息を吐いて、そんな鬱屈した感情を吐露。気分を切り替え、深

呼吸を一つ。

「よしっ」

暗いコクピットを照明で明るくし、内部を点検していく。  
座席らしきものは特に見あたらない。何かを嵌める台座と、接続端子があるだけだ。

と……コンソールの隙間に、何かが挟まっている。

赤い装丁の本だ。古めかしく、中に書いてある字は……いや、読める。英語だ。

「せ、ら……えの？」

『セラエノ断章』とある。

聞き覚えのないタイトルに首を傾げつつ、更に読み進めていくと、こんな一行に出くわした。

『外なる神　クトウグア。汝、これを求めたくば正統なる呪文を唱えよ。さすれば、フォーマルハウトより来たれり火神は、汝を助けん』

その後には連なる、呪文。

何となく、ラヴィニアはそれを口にしていた。

「ふんぐるい、むぐるなふ、クトウグア、フォーマルハウト、んがあ・ぐあ、ナフルタグン、いあ！　クトウグア！」

しーん。

「い、良い発声練習になりましたね！　うん！」  
そう言う事にしておこう。

自分を納得させ、踵を返した　刹那。

赤い本が輝きを発し、コクピットやコンソールが全て起動していく。何か、良く分からない文字が本からあふれ出し、円陣を床に作った。輝きは本を離れ、幾何学模様と見慣れぬ文字が張り巡らされた円陣　いや、魔方陣の上に集まっていく。

収束していくその輝きは少女の形を成し、収束。輝きはそこで収まった。

魔方陣の上には、少女が立っていた。

燃えるような赤い髪。幻想のような熱くない炎に包まれた体は、未成熟ながらも女性らしさが現れ始めたばかり。

伏せられた瞳は長い睫毛に覆われている。非現実的な存在である事は目に見えて明らかで、ラヴィニアは目の前の光景を否定しようとする事に精一杯だった。

「……………」  
彼女の目が、開かれる。

真紅の瞳。双眸の色は炎のように揺らめき、美しい。吸い込まれそうな魅力がある。

感情らしい感情は無さそうだが、ラヴィニアを見、頭を下げた。

「ありがとう。あのクソ忌々しい封印の脱出口を作ってくれて」

「ああ、いいんですけど……………どなた？」

「クトウグア。フォーマルハウトから来たの。コルヴァズと言う星の近くに、フォーマルハウトの星があるから」

「?」  
言っている事が、サッパリ分からない。

「コルヴァズがあると、私達は外に出られない。あの黒いファラオの所為。……………ありがとう、おチビさん」

慈しむようにポンポンと頭を撫でられ、流石にラヴィニアは眉を吊り上げた。

「あのですねえ、私は結構良い年齢なんです！ お嬢ちゃんじゃないんですよ！」

そう言うと、クトウグアはしばらく考えた後、ゆっくりと頷いた。

「……………オバサン？」

「ブツよ？ ねえブツよ！？ 普通お姉さんでしょ！ 何ですつ飛ばすんですか！」

「……………わがまま」  
「そんなに我侭ですかねえ!？」

本当にこの少女が分からない。どうやら、召喚の呪文を唱えて、成功したらしいのだが……………クトウグア？ そんなの知らないし、聞いて

たこともない。

と、その少女は機体を見、顔をしかめた。何か気に入らなかったらしい。

「この機体……何？」

「さあ？ これ、確か……私の部下が『ガウエイン』と呼んでましたけど」

「あの混沌の臭いがする……」

「そんな浮気相手の臭いみたいな事言われても困るんですけど……混沌？ カオスですか？」

「何それ。這い寄る混沌、ナイアルラットホテプ。知らないの？」

「いえ、聞き覚えはないです」

「……そう」

それだけ言うと、彼女はまた黙ってしまふ。

痛いほどの沈黙の中、結局ラヴィニアはそれに耐え切れず、

「……何か、食べます？」

そう口にしていた。

## 第六章 再会 ～前編～（後書き）

ああ、コメディ調が戻ってきた。

時雨が戻ってきました。これでギャグパートも戦闘パートも熱くなる……はず。

ペースを早めに更新を心がけております。

六章 再会 〱後編〱 (前書き)

時間のある時に文を加えようかと。  
短いですが、これで。

## 第六章 再会 ～後編～

トップギア、アクセルベタ踏みでロケットスタートを決めた哉徒は、そのまま『隔離世』への道を全力で突き進んでいた。

あらゆる景色が線のように横を通過していく。早過ぎて常人なら目は利かないのだが、哉徒はそれを苦にせず、ただ黙って飛行している。

そんな主人の様子に、無論フローレンスは驚いていた。電話直後の激昂こそないものの、先ほどよりも確実に怒りが増している。そして、空気が冷たくなるのを感じていたからだ。

『ご、御主人様！？ 落ち着いてください！』

「オレは落ち着いているさ。……あの野郎、絶対に殺す」

フローレンスの言葉を叩き返し、哉徒は操縦桿を握る手の力を強めた。

機体は最高速度のまま、海の境界線を越え、レーダージャミング域通信が途絶える事から、そう呼ばれる『死海領域』に突入した。自機はおろか、敵ですら障害物などのデータ処理が利かない今、哉徒の取っているアクセル全開は有効的ではある。何せ、そんな領域を全速力でぶっ飛ばす機体を打ち落とす迎撃システムなんてほとんど存在していないからだ。

しかし、そうなれば機体が直接討ちに来るのは当然。

目の前に現れた薙刀持ちの日本甲冑。想像以上の急接近に、敵機と勘違いしたのか。それとも時雨が自分を試しているのか。おそらく後者だ。

なので怯む事無く、哉徒は突撃を敢行する。

『無茶です！ 死にますよ！』

「勝算しかないから問題ない。見てろ」

全速力を維持してきた機体の電源を、あろう事か哉徒は躊躇いもせず切った。そして、奴らの撃ってきた弾が左翼に直撃。ダメージは

無いが、煙を吹いた。

「ちよ!?!」

無論、推進力の電源も切っているので、急減速し、失墜していく黒の機体。

追撃しに来たのだろう、上空には甲冑が群れている。ここだ。マニユアルモードで急発進し、変形。出力最大にしておいたレーザーを抜き撃つ。ここまで、三秒もない。

機動性はあまり無かったらしく、纏めて撃墜できた。戦闘機の形になり、再び上昇してからアクセルを踏み入れる。

異常な行動であっただろう。何せ、フローレンスの電子頭脳が一瞬フリーズしたのだから。

しかし哉徒は顔色を一つも変えていない。出来て当然と言わんばかりの平静さでコンソールと景色を眺め続けていた。

「……信じられません。どうして、こんな事を……やはり、死ぬおつもりですか?」

「あいつをぶっ飛ばすまでは死なない。行くぞ」  
再加速していく機体。

死なない。そう哉徒が言ってくれたのは、フローレンスとしては最上の喜びだった。

けど、あの糞野郎に会って……そしたら、どうなるのだろう。彼を突き動かしている原動力は、あの糞野郎をぶん殴りたいが為。

この異世界に来たのも、ただそれだけの理由。それを失ってしまつたら、今度こそ……哉徒がどうなるかなんて、分からない。

そんな事を考えている間に、更に数体の機体が前に  
「実力が見て分からないらしいな」

哉徒が呟くと同時に、勢いはそのまま変形。レーザースイッチを入れていない刀で巻き打ちの如く回転しながら相手を切り伏せ、変形してから再びトップスピードに。通り魔も真つ青な瞬間芸だ。

そのスピードを保ったまま、『隔離世』の領域内に進入する。

『隔離世』は地下といていたが、場所までは分からない。しかし、

目を凝らせば、確実に出入り口の形跡は見つかるものだ。

海中を潜行するプランが浮かんだが、瞬時に破棄。敵機が潜んでいるだろうし、そもそもこの機体は水中戦を想定していない。よって、没。

ソナーで探するのが一番確実ではある。しかし、その場合は水面に接していなければならず、同じ理由で却下。

ここは発想を変え、水をどうやったら除けられるか。そこに着目する。

音速で飛行して水面を割るのもいいが、リスクが高い上に狙撃される可能性も飛躍的に上がってしまう。ミサイルでは爆破が波によって軽減されて意味はない。

選択したのは、高密度のレーザーで周囲の爆散を狙う事。同じ一点にレーザーが集中すれば、終着点以外にも余波が生まれ、一時的ではあるが波をも凌駕する。残存エネルギーが気に掛かるが、他に手段もない。

右のレバーを上、右上、上と操作し、左のコンソールを触る。エネルギーを銃口へ一点集中、余力なしで全力全開。

『チャージカウント開始。……五十、六十、七十四、八十二、九十五、百。エネルギー臨界点まで、残り十秒です』

「助かる」

臨界突破してエネルギーが逆流、もしくは放散する前に、撃たねば。

しかし唐突に、哉徒の目的はご破算となる。

だが、知っていた。

海面から出てくる、白い巨人。

身を隠すほどの純白の盾を持ち、曲線を描いたようなフォルムは洗練されていて、まるで機械の女神でも見ているかのような錯覚を目

にする者に覚えさせる。

奴は自分の行動くらい、読んでいると。長い付き合いだからこそ、こうなるだろう事を知っていたに違いない。

海水を弾いて煌く様は、まるで白光。ゆっくりと上昇してくるその様は、太陽のように。

そう確信を持てる。

位置を合わせるために降りてくる自分の機体は、さながら夜だ。

そして今

アイキス      メラフリノス  
陽光と夜闇が対峙する。

通信が強引につなげられ、髪を染め直していたのか、黒髪の少年が目の前で破顔した。

『よオ。相変わらず女々しい面してんな、お前』

それは、あの頃とあまりにも変わらなくて。

ム力つく言葉も、舐め腐った態度も。髪の色を除く全てが、あの頃のまま。

自分なんかよりもずっと頭がいくせに、それを悪ふざけと趣味にしか転用しない大馬鹿野郎      高宮時雨のままだったのだ。

だから、覚えた感情は怒りよりも懐かしさ。そんな自分が不甲斐無くて、知れず奥歯をかみ締める。

「テメエ……！ オレの女殺しとして、よくもそんな口が利けたな」  
憎しみを確認するように、自分に言い聞かせるように。その言葉は心の中で尾を引く。

忘れてはならない。オレの人生を玩んで、滅茶苦茶にしたこいつに……復讐する！

が、そんな哉徒の標的である当の本人は、清々しいくらいに飄々としていた。

『アホが。俺は健康優良児だぜ？　口くらい幾らでも利けるってんだよボケ』

「意味が分かってないなら、そのまま沈んでるよ」

銃口を吐き付け、そう脅す哉徒。

だが、それをせせら笑うかのように、おどける時雨。

『おいおい、怖いねえー。可愛い顔が台無しだ。久々に会ったんだし、積もる話でもしようや』

「オレはお前との関係にケリを付けたかっただけだ。それが嫌なら、命乞いでもして見せるよ」

本気の言葉にも時雨は肩を竦めるだけで、吐かれた溜息がどうでもいいと明言していた。

と、何か思い出したかのように時雨は呟く。

『ああそうだ。お前に言っただけだよ、俺……あの女、殺し損ねてんだ』

「……冗談は止せ」

葬式も執り行われた。彼女の友人しか集まらなかったが、それでもあの儀式に意味が無かったなんて、言わせない。

「死んだんだよ。お前が……嗚けた、大型ガス車の大爆発事故によつてな」

『だから、死体も見つかっていなければ、痕跡だって残っちゃいない。そりゃそうだ、生きてるんだからな。それに、そもそもあの女……人間じゃなかったんだぜ？』

「証拠はどこにある」

『お前、そいつの両親やら戸籍を調べたこと……あるか？　血の繋がり無し親でも、葬式くらい出るだろ』

「……きつと、冷たかったんだ。だから、オレが……！」

『ああ、はいはい。まあ疑問に思った優しい俺がわざわざ調べたんだって。……戸籍も親も無い、不気味なくらいに真っ白な過去が出



そこが怪しいと確信できた。

『アブねえな、そのマク スもどき。こっちの機体じゃなさそうだが、日本製か?』

「後で聞いてやる。とりあえず、このレーザーでテメエらのアジトを破壊されたくなきゃ……」

ビーム刀を抜き、正眼に構えさせる。

「白黒、ハッキリさせようぜ」

『ハッ、頭脳で俺に勝った事なんてあったか?』

「テメエこそ、オレに体を使った事で勝った事なんてあったかよ!」  
加速し、白い機影へと斬りかかる。

正面に振るい、首元まで剣先が下げられた瞬間に最大加速。恐ろしいスピードのコンビネーションで突きを繰り出す。

しかし、盾でその一撃を往なす時雨は上手くこちらの懐に潜り込み、蹴りを見舞う。小さいメラフリノスに、かなりの衝撃が走り抜けた。

「チィ……体格差は歴然か」

『おっと、もう降参か?』

「馬鹿扱け、次は……!」

栄養パックを収納ケースから取り出して、口に含みながら加速。

少し距離が開くが、時雨はすかさずそれを詰めて来る。だが、それが狙いでもあった。

格納されていた物質を宙へと放る。高い日に照らされ、乱反射するそれは 耐高熱の強化プリズム。

その意図に時雨も気づいただろうが、もう遅い。

「蜂の巣ッ!」

抜き撃たれたレーザー。

プリズムに届けば、もう逃れられない。多岐に反射を繰り返すプリズムによって、相手は傷を間逃れない。

だが、時雨は冷静だった。背後から攻撃を仕掛けるなら、陽動かピット、もしくは反射しないと最初から予測していたからだ。

(まあ確かに、高速回転してるあれの反射を避けるのはキツイけど

な……)

そのレーザーを、そもそもプリズムに当てなければいいだけの話だ。なら簡単で、方法もそれこそ多岐にわたる。

選んだ一つ。巨大な盾を即時展開させ、更にビーム障壁と振動波を起動。高圧縮されたビームは霧散していき、それを見て時雨は更にビットを飛ばしてみる。アイリスがいないので自分一人で複数の事を同時に進行せねばならないが、やってやれない事は無い。がしかし、精彩を欠くその動きを見切れない哉徒ではない。

「ケリを付けてやる……」

容赦なくミサイルを送る。実弾兵器はこれと実弾パックだけが、威力は申し分ない。

レーザーの放射を止め、懐からその実弾パックをセット。長銃ライフルの形態のまま、それを間髪入れずに放つ。

白い機体が避ける前に弾がぶち当たる。そう　哉徒自身が放ったミサイルに、だ。

「なっ!?!」

ヴィジョンカメラの前で炸裂させたので、これは目くらましになる。動けずにいる時雨だが、撃った瞬間に哉徒はすばやく別の行動に移っていた。銀色の刀身を取り出し、レーザーのスイッチを入れる。

瑠璃色に染まる刀を、哉徒は投げて　戦闘機の形態にシフト。

超高速で白い機体の背後へと旋回し、そのまま空中を駆け上がり、脳天で再び人型に変形。丁度、やってきた刀を掴んで、白い機体に刀を差し向ける。

その寸前で、刃が止められた。

「……オレの勝ち、だな」

『ああはいはい。カッコいいカッコいい』

投げやりなその態度に腹が立ったが、もうこいつは動かないだろう。白黒が着いた事で、何か……何かが、抜け落ちた気がした。ある種の清清しささえ、芽生えてしまう。

「んで、お前なんでこんなところに?」

『そこに話が戻るのかよ……。まあいいや、来いよ。隔離世に案内してやる』

「……向こうの連中に変なこと話してないだろうな」

『まあ信用しとけよ』

「今までの行いを鑑みて発言しろ」

激しい不安に襲われながらも、哉徒は先行する時雨に続いて海中へと沈んでいく。

哉徒は気づかなかつた。あれだけ憎んでいた時雨を前にして　フ  
ローレンスが、一言も喋らなかつた事を。

彼女がどんな気持ちでいたかも、気づけないまま……機体は進んでいった。

七章 『隔離世』と敵の存在（前編）（前書き）

前編はギャグパートで占められています。話はあまり動きません。シリアスと展望は後編になります。

## 七章 『隔離世』と敵の存在（前編）

### 七章 『隔離世』と敵の存在

地下にあるその空間。

空をと見上げれば海があり、横には川が流れている。摩訶不思議なその場所には、それこそ似合いだろつ竜宮城のような和風建築物があつた。

その建物をバツクに、時雨が振り向き、不敵に笑ってみせる。

「ここが隔離世だ。スゲえだろ？」

「さも自分が建設したように言うなよ。いいから、さっさと案内しろ」

「何だよ、相変わらずつれねえな。そりゃ、今のお前はぐるぐると感情が回ってんだろっけど？」

「気にすんなよ。よく調べもしなかつたオレの落ち度だ。けど、生きてるんなら……この世界にいるかもしれぬ。見かけたら包み隠さずオレに言えよ」

未練がましく、しかし希望的な意見を口にする哉徒に、時雨は呆れてみせる。

この生真面目な男は、女みたいな顔して中々に頑固。やる事に躊躇いがなく、やるべき事をやれる誠実さと思ひ切りのよさがある。多分、女顔のコンプレックスから、男らしくなろうとしたのだろう。性格が正反対な時雨が、哉徒と付き合えたのは、多分そう言つところか似ていたからだ。

哉徒も、一見ふざけた時雨の中にある優しさに気付いている。互いの奥底にある部分には、普段触れないのが暗黙の了解。

だから時雨がからかうのは、哉徒の外見だけだ。

「はあ……。テメエは夢見がちな乙女かよ。そんな面はしてるけどな」  
「死ねッ！」

「おっと」

風を切る哉徒の蹴りは、先程までであった時雨の顔面。その残像を蹴り抜いた。時雨は頭を少し屈めて、何とか避けている。

髪を撫で付ける風を感じながら、時雨は呆れ交じりの溜息を吐いた。  
「お前、ホントに強くなったな。あの頃と比べると、それこそ人類じゃねえぜ。その服装から言って軍属なんだろうが、どこの軍だ？」

「ああ……。今、世界が無秩序になっちまってな。日本とかデカい国が集まって、作ったのが国家連合軍。その日本基地に配属されている。特務部隊所属で、一応だが剣術と徒手格闘を習った。メタルアームズ……いや、ここじゃ土機だっけか。その操縦も習得済みだ」

「マジで！？　って事はあの機体、俺達の世界で作られてるヤツか！？」

「ああ。エンド・オブ・アームズ・センチュリー第一企画、EOA C1シリーズのメラフリノスだ」

「すっげえ……！　日本、帰ってきて……！　ヤッベ、何だか俺、わくわくして来たぞ！」

「また古いネタに走るのな、お前」

その屋敷の中に踏み入れる前、哉徒は立ち止まる。少し確認してきたことがあったのだ。

「ここで何かやらかすつもりなんだろ？　それにオレを加担させようとしてる。んで、差し詰め……。今から会いに行く連中が、お前の協力者なワケか」

「こりゃ説明の手間が省けるわ。知っての通り、ここは男子禁制の隔離世。良かったな！、きつとポロリもあるぜ？」

「お前そのうち後ろから刺されるぞ……」

聞くのが馬鹿馬鹿しくなって、哉徒はその中へと進んで行く。

玄関口でブーツを脱ぐと奥間から女性が現れ、靴を回収して行った。こちらを見て微笑んでいるその淑やかさは、まさに大和撫子の鏡だろ。

時雨は礼も言わず歩いて行くが、哉徒だけはキツチリ礼をし、微笑み返す。何故か走り去って行く女性達に首を傾げながら、こちらを呆れたように見ている時雨の隣に並んだ。

「何で逃げられたんだ？」

「……相変わらず、罪作りなヤツだよな」

「お前にだけは言われたくねえよ」

ムツとしてそう返すも、ひらひらと手を振ってどうでもよさそうにしている時雨。何なんだこいつは。

木製の廊下を歩いていると、ここの手入れが行き届いていることが良く分かる。塵一つ見当たらない、念入りを越したような気合の入りが方だ。どう掃除しているのか、少し気になる。

ただ無言で歩を進め、奥の大きな襖の前で時雨は立ち止まった。

「よお、俺だ。友人を連れてきた」

「いいわ、入って」

少し気の強そうな少女の声に促され、時雨は躊躇なく襖を開いた。

そこには、竜宮城の姫様がいた。

淡く、艶やかな桜色の髪。整い過ぎて上手い形容が見つからない造作。大きな翡翠色の瞳は少しつり目がちで、体の華奢さとのギャップで、儚ささえ哉徒は覚えていた。

こんな美少女を見たのは久しぶりで、しばらく呆けたまま動けなかった。

動き出す時雨を見て我に返り、慌てて時雨を追い、豪快に胡坐を掻く奴の隣に正座する。

「こいつが俺の親友、哉ちゃんだ」

ニヤついた笑みで哉徒の右ストレートを回避し、時雨は続ける。

「まあ、体を使った事で俺はこいつに勝った例がねえ。礼儀正しいし、いい奴だろうと思っぜ？ ほら、テメエも挨拶はいいのかよ」「ぐっ……！」

放とうとしていた左フックをとりあえず収め、咳払い。そう、ここで彼女に挨拶をしなければ、ここに上がり込ませてもらった筋が通せない。

床に手を着いて礼をしつつ、哉徒は自らを名乗った。

「自分は八哉徒と申します。本日は貴女様のご尊顔を拝し、恭悦至極に存じ上げ」

「硬っ!？」

「えっ?」

予想外のリアクションに哉徒は硬直する。

目の前の美少女は落ち着き払った微笑をかき消し、時雨へと血相を変えて捲くし立てた。

「し、時雨! この人、あんたと似ても似つかないじゃない! 誠実極まりないじゃないのよ!」

「そりゃそうだ。俺がアウトローなら、こいつは超優等生だからな。互いに天才って事で、仲良いんじゃないかねえの?」

合点がいったのか、彼女は可愛らしく咳払いをし、同じく頭を下げてきた。

「アタ……いえ、私は此花咲耶。此处……『隔離世』の代表役を担っております。本日はご足労頂き、誠に」

「あ! あんなどころにピンク色の下着が!」

「きゃあああああああああ つ!？」

時雨が指差した先には、確かに薄いピンク色の布があった。

大慌てでそれを取る咲耶には、もう先程の上品さは微塵も無く、ただ元気の良い少女の姿だけが残っている。

「アンタ……! そう言うのはせめて挨拶が終わった時に指摘しなさいよ!」

恨みがましい目で時雨を睨む咲耶だったが、その返事は不敵な笑み

だった。

「気にすんなよ。ただまあ、もう少し色気づいてもいいと俺は思っわけだが」

「くたばりなさいこのスケベっ!」

投げられた肘掛を時雨は軽く避け、襖にぶつかりそうなそれを哉徒は片手で受け止める。

「此花さん、こいつのアホな妄言に付き合っていると身が持ちませんよ」

「うっせえ女男」

「くたばりやがれこのクソ野郎っ!」

ブン投げられた肘掛は今度こそ時雨に直撃する。一瞬だが唸りを上げたそれは、弾丸のようだった。

鳩尾に喰らい、悶絶する時雨を背に、哉徒はやや引きつった笑みを浮かべた。

「自分みたいな事になりますので……。今まで時雨がご迷惑をお掛けしたと思いますが、これからも良くしてやって下さい」

「え、ええ……。哉徒、さん？ も、こちらに滞在なされては？」

「いつもの喋り方で構いませんよ。自分は困りませんし、貴女の高貴さはその程度では損なわれません」

「そ、そう？ じゃあ、普通にさせてもらっわね。アンタも普通に……しなよ」

「……いえ。ですが、少し碎けましょう。それじゃ、此花さん」

「咲耶でいいわ。その代わり、哉徒って……呼ぶわね」

「はい、よろしく願います。咲耶」  
そうはにかんで見ると、何故だか咲耶は顔を背けた。……あれ、何で!?

いつの間にやら復活していた時雨が、物憂げな表情で哉徒の肩を叩く。

「……ジゴロめ」

「ざっけんな! 何でそうなるんだよ!」

「……いけない。いけないのよ咲耶。禁断の恋に走っては！ ああ、でも！ 女の子だと思ってもドキドキする……っ！！」  
咲耶の独白で、全てを哉徒は悟った。

湧き上がる殺気を抑えながら、咲耶に話しかける。けれど滲み出ているのか、こちらの表情を見て咲耶は固まってしまった。

「……咲耶、あのクソ野郎は何て言っていました？」

「せ、背も高いし、声も低くなってるけど、女だって……」

「そうですね。改めて言いますが、オレは男ですよ。どれだけ女顔に見えたとしても、男なんです。レズビアンに付け狙われようともホモに追いかけれようとも金持ちから迫られようとも教員から性別疑われてプールの時になぜかオレだけ性別不明で陸上にさせられようとも……ッ！ オレは、男なんですよオオオオオオオオオ

ッ！！」

某ムーンレ スもかくやと言う叫びが、哀しく響く。

根付いたトラウマや中学時代の悲しみが、血の涙となって哉徒の瞳から零れ落ちて行く。

悔しさに肩を震わせていた哉徒だったものの、涙を軍服の袖で拭い、奥に逃げようとしていた時雨を睨みつける。

「畳、借ります！」

「えっ！？」

ダンッ、と強く床を踏み鳴らして、畳を僅かに浮かせる。

それを畳返しの要領で掴み、走り出そうとしていた時雨に向かって

「っけええええええええええ

ッ！！」

ブン投げた。

高速回転していく畳は速度を増し、空を切り裂きながら時雨へと飛来し、背中を打ち抜いて標的を沈黙させた。

咲耶は哉徒の拳動には然程驚いてはいない。男性なのかと言う驚きでいっぱいだったと言うのもあるが、それ以上に驚愕する事実があるのだ。

あの時雨が避けられなかった。

いつも不敵な笑みを浮かべて飄々としていた時雨は、その頭脳は言うに及ばず、身体能力だって天才的だった。

『隔離世』で一番強い剣士と剣対素手で戦った時、迫り来る神速の攻撃を軽く避け、回し蹴りの一撃で下してしまっただ。

その光景を目の当たりにしていた咲耶は、目の前で血の涙を流している哉徒の強さを考えて、少し怖くなる。

容姿は、本当に男性らしい女性にしか見えないと言うのに。

思案していた咲耶へと向き直った哉徒は、今度こそ笑って見せた。

「あのクソ野郎が粗相をしましたら、オレに言ってくださいね。：

…潰してやりますから」

ミシリ、とこれは哉徒の拳が軋む音だ。

満面の笑みでそう呟いた哉徒はただ恐ろしくて、咲耶は頷く事しか出来なかった。

と、そこへ襖が開き、磐長が入ってくる。

「どうしたの、咲耶？ …… あら、どうも！ 哉さんですね？ 男装していても、ちゃんと綺麗ですよ！」

磐長の柔和な表情で吐かれた言葉は、彼の心をズタズタに引き裂くには充分過ぎるほど鋭かった。

失意に崩れ落ち、歯を食いしばる哉徒。

血の涙を流しながら声を押し殺して泣く彼に、咲耶はどう声を掛けるか迷い、ただ立ち尽くすのだった。

七章 『隔離世』と敵の存在　く前編く（後書き）

忙しさが落ち着いてきたと思ったのに、夏も終わり掛けて……。  
更新のペースが元に戻りそうです。

七章 『隔離世』と敵の存在（後編）（前書き）

機械録の新録が始まりましたが、こっちがメインです。更新頻度も、こっちの方が高いでしょう。多分……

## 七章 『隔離世』と敵の存在（後編）

「　　と言つ訳で、オレの立場は比較的不安定なんですよ」  
哉徒はそう締め括り、敵ではない事、時雨を殴りに来ただけと言う事を伝え終える。

ついでに自身の立場も明言し、女性ではない事も強く言つて聞かせておいた。哉徒にとっては、それが最優先だったりする。

代わりに、磐長と咲耶に呼ばれていた女性が、この世界における戦争的状况を教えてくれる。

現在、国は三つ。ここ　グランディア王国、同盟関係にあると言うシユバルツガルド王国。そして、敵であるアースガルド帝国。

時雨はアースガルド帝国で技術者をやっていたが、今はこの『隔離世』で機械開発に携わっている。目的は不明だが、『紅の虚』と言う希少鉱石を時雨は欲しているようだ。

咲耶や磐長は、第三勢力であるゴーレム等を討伐する為、停戦協定について話し合っているらしい。

そこで、哉徒に疑問が生じる。

「そのゴーレムは、どこから来るのですか？」

問いは、首を横に振られて返される。

「分かりません。ただ、やって来てはエネルギー機関を破壊しようとしていますね。最近はゴーレムだけではなく、狼に似た何かが出て現して……」

「狼？」

哉徒がゴーレムと遭遇したのは一度だけ。フローレンスの指示で額の文字を破壊し、沈黙させたあの戦いだけだ。

時雨の事だ、弱点はとづくに知っているだろう。しかし、狼なんてどこにも見当たらなかったが。

磐長は長い緑色の髪を弄りながら、何か考える仕草をしている。癖なのだろうか、礼儀作法をそつなくこなしていた彼女には違和感の

ある挙動だ。

「んー……そうですね。宙を駆ける力を持った、二十メートル前後の狼です」

「や、やたら大きいですね……」

「んで、そいつが出現し始めたのが、大きな時空の歪みが出現した時からだ。お前、たぶんあれで飛ばされたんだろ？」

起きていたか、時雨が起き上がりながらそう言う。痛むのか、背中を摩りながら。

時雨の言う時空の歪み　あの空間転移の事を言っているのだろうか。だとしたら、妙な話だ。

「オレの国では、未確認生命体と呼ばれていたのは、巨大な黒い羽虫でした。大きな音が鳴った後、オレの故郷にも様々なものが出現するようになったんです。ここの『土機』、とか。狼とかゴレムとかは見たことが無いですね」

「……あー、なるほど。虫はこっちの世界でも見かけるようになった。あの音、多分だが時空の境界線を揺さぶる効果があるんだろうぜ。最近他の国で多いだろ？　偵察機が戻ってこないって事件。恐らく、地球むつちうに飛ばされてるぜ」

「そうなのか？」

「そうすりゃ、辻褄が合うわな。お前がどうしてここに来れたのかも、それで片がついちまう。とすりゃ、拙いな」

「何でだよ」

「時空が歪んで、地球とここが繋がって行く。頻発するほどに距離は近付き、規模も大きくなっちまう。って事は、だ」

顔に不敵な笑みを貼り付け、何でもなさそうに時雨は確信染みた推測を口にする。

「ぶつかるぜ？　ここと地球」

「……はあっ!?」

驚きに目を見開く三人に時雨は苦笑し、警長が淹れてくれていた哉徒の茶をひったくる。

「アホか。あれだけの距離を繋いじまうほどの虫食穴だ。フォームホール規模が音が鳴るたびにデカくなっているとすりゃ、ぶつかるのも時間の問題だろ」

「……打開策はあるのか？」

哉徒は他の二人に比べて、冷静だった。何か問題に直面した瞬間、時雨は何らかの答えを出している。

いつもそうだった。ぐだぐだ悩んでいる哉徒に発破をかけ、浮かぶ選択肢を全て提示してくれていた。だから哉徒も、飯を作ったりとサポートを繰り返している。

云わば司令塔。

そんな時雨は、いつもの不敵な笑みを浮かべなおし、更にそこへ悪戯っぽい笑みを重ねた。

「あるぜ。まず一つ、どつちかの星を木っ端微塵にしちまう事」

ぶーっ！

飲んでいた茶を噴出す哉徒。流石に咲耶と磐長はそうしなかったが、流石に驚いていたようだった。

咳き込み、哉徒は得意げな顔で笑っている時雨を睨んだ。

「何でいきなり究極的な破壊行為なんだよ！」

目から鱗どころの騒ぎではない。

しかし、考えれば……いい手段かもしれない。ぶつかる片方が無ければ、そもそもぶつかるなんて事は懸念しないでいいのだから。

冷静になったこちらの表情を見て、時雨は頷く。

「まあ、虫食穴が繋がったとしても、飛んできて残骸だ。この方法が確実っちゃ確実だわな。手順としては、親しい人物を戦艦に乗っけて、時空間で転送してもらおう。んで、次に出現した虫食穴へと核かマロス ヤノン並みの奴を投げ込めば、お終いだ。楽勝過ぎて吹くだろ？」

「だ、ダメに決まってるじゃない！」

けどまあ、咲耶達は黙っていないだろう。時雨や哉徒と違い、大勢も大切だと彼女達は思っているのだから。

時雨は頷き、続ける。

「んで、メンドクさいが……音の発信源を捉え、破壊する。これがまず挙がるわな」

「ふーん。どうやって探るの？」

「知るかよボケ。まあ最後に……某宇宙戦艦的なアレで新天地を求め、旅に出る」

「現実的じゃないな」

「ああ、絶対に御免だね」

鼻で笑い、時雨は鋭い瞳を磐長へと向ける。

「んで……だ。その虫はゴレムを攻撃しなかった。しかも、ありやあ……この世界のもんだらうな。哉徒、お前なら分かるだろ？」  
頷く。

磐長姫や此花咲耶、新撰組メンバーまで見てきた。日本での神話や幻想世界が混じり具現化した世界で、ゴレムは異端ではない。

狼もそうだろう。北欧神話だったか、災厄の狼は哉徒だって知ってる。虫は……なんだっけ。まあ時雨がいうなら、何かいるはずだ。「誰かが操ってるって事か？」

「しかも、明確な敵意を持って、だな。裏で糸引いてる奴がいるってこった」

この世界のブラックボックス。

時雨の話を加味して、出てくるのが一つの国名である。

「……シユバルツガルド」

そう、まだ見知らぬ地。

同盟相手にも姿を滅多に晒さないという、謎多き暗黒の王国。

「それだけ、哉徒。連中、アジトすら分かっちゃいねえし……何より、俺との接触をさけてる」

『それは、貴方が忌むべき存在だからですよ』

唐突に、今の今まで黙っていたフローレンスが電子音声を響かせる。哉徒の懐から響いたそれを取り出し、畳の上におく。すると、一人で女性の姿をとり、一礼した。

「どうも、貴方のようなクソ野郎は覚えていらつしやいせんよね。初めまして、『名無し』です。貴方が昔、計画書を破棄した、あの『名無し』に使われていた、サブユニットですよ。」

興奮気味にまくし立てるフロールレンスだが、意味は良く分からない。哉徒と他三人は首を傾げ、時雨のほうを見……目を見開いた。

口を開け、啞然としている。どんな事でも想定内のように、驚く事は決してしなかった。いや、その姿を人前で見せなかったのだ。すると、今度は哉徒の方を向き、フロールレンスは吼えた。

「御主人様、敵かたきですよ？ 貴方が殺したいと、ずっと願っていた野郎が目の前にいるんです！ 何でそんなに簡単に割り切れるんですか！？ 貴方の愛しい人がこの男によつて世界から弾き出されたのは事実なんですよ！？」

「そ、れは……」

「……貴方は、中途半端なんです。悲劇ぶりたいだけだったんでしよう！？ 誰かに優しくされて当たり前とか思ってたんでしよう！？ 自分が悲しいからって、全てを弾いていたんでしよう！？ どれなんですか！ 中途半端に人を遠ざけて、中途半端に優しさを待たせて！ 筋なんか通せてないじゃないですか！」

人間として、それは当然とも言える心理だ。

人に優しくされたい。誰だって、そう言う願望は心に秘めている。独りで生きていたいと願った人物でさえ、優しさにほだされるのだ。ある意味では人間らしい哉徒だ。時雨よりも、親しい人を大切にする反面、関係のない人物にはとことん冷酷である。

「この野郎を殺すのに貴方は覚悟ができていなかった！ これ以上失いたくなかったんでしょね！ 臆病者！ 昔の男に未練抱えてる甘え腐った女にそっくりですよ！」

その通りで、哉徒は動けなかった。

そうだ。口では殺すとのたまいながら、時雨を失う事が怖かった。親友、だったから。この手でなんか、殺せない。

が、次の瞬間、鈍い音が和室の中に響いた。

時雨が フローレンスの頬を容赦なく打ん殴ったのだ。

「痛……っ！？ な、何を……！」

「いきなり出てきて何をペラまわすかと思えば、そんな事かよ。そうか、あの機体があったのも思い出したぜ」

初めて隔離世に行く際、監視するように飛んでいた黒の機影。あれはコイツだろう、『名無し』のフォルムは『アイギス』に良く似ていた。

憤る彼女を目で諫め、時雨は続ける。

「哉徒を知ってんなら話が早いわな。俺やこいつは、子供の頃に一度、人から弾かれちまってんだ。生で経験しないとわかんねえんだよ。知った風な口利いてんじゃねえ！」

「あ、貴方は私を捨てよう……！」

「機械に感情なんざねえんだよ！ テメエはそう設定されただけの都合のいいキャラクターだ！ そう記憶と知能をインプットされただけの擬似的な知能が、この俺様の親友をけなしてんじゃねえッ！ 俺は機械が好きだ。けどな、素直じゃねえ機械なんざ真っ平御免なんだよッ！！」

「だ、から……私を、破棄……」

「当たり前だろうが。ありや、俺の最高傑作アイギスをより際立たせる為に作った、正反対の機体だ！ で、全部かよ。分からない事があるなら今聞け？ ねえなら……」

時雨は懐から銃を抜き、哉徒の携帯電話へ向けて銃口を向ける。オートマティックのそれは、かなりの口径だ。当たれば、木っ端微塵だろう。

「……後始末だ。ま、俺が企画したもんだしな」

安全装置を解除し、時雨は犬歯を剥いて笑い、その引き金を

「お約束だねえ、王子様よ」

苦笑しつつ、時雨は銃口を哉徒に向けた。携帯電話を、哉徒が庇っているのだ。

文句を言い掛けて、フローレンスの口が止まった。

哉徒の目が、あまりにも真剣だったから。そして、あまりにも……  
綺麗だったから。何も、言えなくなる。

溜息を吐きながら、時雨は鼻で笑い、哉徒の行動を一蹴する。

「退けよ。主人に楯突く機械なんざ笑いもんだ、作った俺が死にたくなる。こんな暴言吐くような奴、庇い立てすんな」

「……謎が分かった今、彼女は、生まれたんだよ」

「あー……いや、成る程。お前の言わんとしてる事は分かるぜ？」  
時雨との邂逅。それを済ませたフローレンスは、これから何をすべきかも定まっていけない。確かに、生まれのままの状態か。

けれども、だからと言って……

「テメエが庇い立てする義理はねえよな」

その言葉に、フローレンスは震えた。

今まで、死と言う概念をあまり重く捉えていなかった。機械である彼女なら、それは仕方ないかもしれない。

だが、触れてしまったのだ。殺す、と。もう触れ合えなくなり、何も話せなくなる。一人ぼっちに、また戻るかもしれないのだと。

今なら、哉徒がどんな気持ちで時雨と付き合っているのか分かる気がする。

きっとそれは複雑で、それこそ乙女心のような。けれども、それを表に出さず、堪えようとしても滲み出てしまう。苦惱を……確かに、人よりも多く抱え込んでいるから。親友にも話せていない事実も、まだ彼にはある。

それすらも包むように、哉徒はフローレンスを改めて抱き寄せた。

「……ご、御主人様？」

ワケが分からない。

あんな暴言まで吐いて、散々醜い行為を重ねたのに。何で……？  
目を白黒させるフローレンスに、大胆な行動に目を見開く磐長と咲耶。

時雨はただ一人、呆れたような笑いを浮かべていた。

「英雄様は気が多いってか？ おいおい、どうしたよ。男なら生涯、

一人の女性を愛しぬくとほざいていた哉徒御大はどこいったんだ？  
「馬鹿野郎、そりゃ男の甲斐性だよ。んで、お前がこいつの生みの親なんだろぅが……今は、オレの物だ」

抱き寄せられる手に力が込められる。その度に、思考回路が熱を帯びて行くのが分かった。

「あんまり物扱いしたくないけど、ああ確かに機械かもな。だって今はオレの物だ。勝手に壊そうとすんなよ、親友様の所有物だぞ？ オレは物を大切に करना、一生一緒だ。例え壊れてもな！ 熱烈なラブコール、もうそうとしか聞こえない。」

警長は顔を真っ赤にしながら聞いているし、咲耶にいたっては目をぐるぐると回して気絶してしまった。時雨はそう言う本が並べられていた事を知っているのだが、生で現場を見ると違うのだろう。

銃は収められる。嘆息を長々と吐き出し、時雨は哉徒に向け笑いかけた。

「んで、ミスター女たらし」

「違うけど、なんだよ」

「その女を落とす手腕を見込んで、ちょい行って来て欲しい所があんだよ」

哉徒の放った拳を弾いて、時雨は真剣な表情を作る。

「……シユバルツガルドか？」

「違えよ、アースガルドの方だ。動向がサツパリわからねえし、行って来てくれや」

「……ああ」

「その端末をこっちに置いてもらおう。ブラックボックスな部分がありそうだし？ ああ、別にとろぅとか思っちゃねえよ、んな顔すんな」

「で、一人でか？」

「そうさな……」

何か携帯電話を取り出し、操作を終えたと思ったら銃でそのシンプレな携帯をぶち抜いていた。発信記録を残さないためだろう。

「今から指定するポイントに行ってもらおう。期限は三日。もうそろそろ、周期的にゴーレムが現われっから、そいつらを救う形で頼むぜ？ 明日の明朝、出発な」

「ああ。……いいか、フローレンス？」

「はい。信じてます」

「任せとけよ」

笑う哉徒は相変わらず可愛らしかったが、何故だろうか。フローレンスは今、哉徒に頼もしさと……男性らしさを感じていた。

七章 『隔離世』と敵の存在（後編）（後書き）

フロレンスがメインヒロイン的な感じになっております。

が、ヒロインは未定なんですよねえ……。ぶっちゃけ、物ですし（  
オイ

あくまでも、哉徒視点が本筋です。

## 八章 それぞれの動向

哉徒が『隔離世』を出立した後、時雨は彼の携帯電話からフローレンスのデータへアクセスし、洗い浚い調べていた。

彼女を調べたのはやはり正解で、様々な事が分かる。

『名無し』 いや、ちゃんと開発ネームがある。

『<sup>シャイニング</sup>輝・トラペゾヘドロン』。今度はクトウルフときたものだ。

クトウルフ神話は、分類上、神話ではない。ハワード・フィリップス・ラヴクラフト 彼の小説世界を元に発展させた、云わば巨大な体系を持つ二次創作物。

ホラーな作風だったラヴクラフトの小説だけあって、その内容はえげつない物が多い。主に、旧支配者やら外なる神などの話が主だが、妖虫と言う虫も存在する。哉徒が見た虫は、恐らくそれだろう。

奴らは確か、地球の新たな支配者になろうとするものとして描かれていた。とすれば……拙いか。

「……何にせよ、シュバルツガルドってのは」

アースガルドが北欧やギリシア神話だったように。

グランディアが日本神話や勇士達の物語であったように。

シュバルツガルド。その黒は混沌で、そう……クトウルフ神話達だ。

そして、日本に潜入し、哉徒と接触した奴。『名無し』のデータを手に入れられる、哉徒と近かった人物。

『輝・トラペゾヘドロン』 それを作った奴は……

「……おいおい、冗談止せよ」

時雨はある可能性に思い至り、虚空を見上げる。

今は戦闘をこなしているだろう哉徒の安否を、不安がるように。

例の狼に追い縋られるメラフリノス。

分厚い体毛はビームを軽減するらしく、アースガルドの連中だろう  
機体が放ったビームを弾いて、戦っていた一機をその鋭い爪で以っ  
て切り裂いたのだ。

装甲を切り裂く爪、ビームを弾く体毛、そして何より、敵と認識し  
た相手を何処までも追いかける獰猛さ。これが群れでやってきた日  
には、国一つくらい簡単に消えるだろう。

哉徒は栄養パックを手繰り寄せ、一口。後に思考する。

自身の体が悲鳴を上げるほどの急加速を用いても、狼はその距離を  
徐々に詰めて来る。速度緩和も効いていないコクピットへの圧力は、  
もはや限界に達しようとしていた。

舌を打ち、哉徒は覚悟を決めてレバーを操作。ブーストを片側だけ  
入れたままで人型に変形し、刀を抜き払う。

結果、高速で回転し、独楽のようにして狼を両断する事に成功した。  
代わりに激しい嘔吐感と泥濘に沈んで行くような意識を錯覚したが、  
機体を止めてしばらくで治まった。

と、音声通信が繋がった。いや、繋がられたと言った方が正確か。  
こちらは何もしていない。

『良くやってくれた。あそこであの狼を止められなければ、我々が  
やられていたよ。礼を言う』

聞こえたのは女性の声か。無理やり声を低くしているところを見て  
少女かとも思ったが、落ち着きが少女のそれではない。ラヴィニア  
と同じタイプだろう。

何となく懐かしくなって、気づけば穏やかな声を出していた。

「……いえ。自分もただ……見過ごせませんでしたから」

『そうか。君は、正義感が強いのだな』

「そうかもしれませんね。そんなものがあれば」

こんな事はしていないだろう。

その言葉を飲み込み、哉徒は話題を切り替えた。

「すみません、燃料の補給を受けさせて頂けませんか？ 自分はフ  
リーランスの自由機で、燃料と食料と金を与えてくれれば三日間だ

け留まります」

『……受けよう。君の実力なら、申し分ない』

ポツと出た嘘も、我ながら良く出せたと感心していた。フリーランスの機械傭兵、あると思っただら本当にあつたようだ。

上手く三日と言うものも誤魔化せだし、進入できる手筈も整った。

『……そうだ。君は、ヴァルス・ルードニルと言う人物を知っているかな？』

「は？」

『いや、いい。知らなさそうだ、我ながら馬鹿な事を聞いたものだと思うよ。まあ、これも運命だろう。歓迎するよ。ええと……』

「……」

……名乗りたくない。

出来れば、哉徒と言う素性を隠せと言われているのだ。なので、潜入作用の特殊メイクを使って、今は女性としている。声音も変えていた。

完成したメイクを見て時雨は爆笑していたが、仕方があるまい。元の哉徒を知っているから。

けれども、何も知らない人物から見れば……金髪のウィッグを付け、蒼のカラーコンタクトを入れたその姿は、金髪の愛らしい美人にか見えない。

哉徒が動くたびに、その鏡に映った美女も同じように動くのだ。本当に死にたくなる。

その時、何故か落ち込んでいた警長に付けられた源氏名が

「……ジークリンデ・クラウゼヴィッツと言います」

『そうか、ジークリンデ。私はフラン・ド・アルテミスだ。付いてくるといい』

先に飛び立つ、ビームの矢を放っていた機体。

(源氏名まで考えて潜入する女装男って……)

メイクが崩れる　　と言ってもナチュラルメイクだが　　ので、泣く事も出来ない。

代わりに、心で盛大に涙を流しつつ、哉徒はアクセルペダルをゆくりと踏み込んだのだった。

格納庫に到着すると、見慣れぬ機体が入ってきた所為だろう、全員がこちらに近寄ってくる。

哉徒は笑みを浮かべる。これも鏡を見て練習した、自分でも惚れそうになるくらいに可愛いらしいスマイルである。……死にたい。

「どうも、皆さん初めまして！ ジークリンデ・クラウゼヴィッツと申します！ 三日間だけです、フリーランスの機体と言う訳で、お世話になるかと！ あ、この機体は触ったり弄ったりしちゃうダメですよ？」

ご丁寧にウィンクまで飛ばしてみると、全員が顔を紅くしたり呆然としたりして、好意的な反応をくれる。内心で、男だと言う事がバシなかった安心感とバレてほしかったと言う気持ちと背反しているが、気にしたらダメだ。気にしたら、もう立ち直れない。

と、白い軍服を纏う、鮮やかなオレンジ色をした髪を持つ少女が、こちらへと手を差し出してきた。

「私が艦長の、フラン・ド・アルテミスだ。よろしく頼む」

その低い身長と童顔を見て、ふとラヴィニアの事を思い出す。

「はい、よろしく願います！」

握手を交わしながら、彼女の事を懸念する。

軍人に不要な優しさを持つ彼女だが、有能さは世界各国に知れ渡っている。

無事だとは思っただが、どうなのだろう。

哉徒の懸念は、不要だったらしい。

「あのですねえ……っ！ 毎度毎度、爆発させないでください！ 貴重なサンプルなんですよ！？」

甲高い叫び声が、コクピット内に響く。

黒い機体 『ガウエイン』。それを操っているのは、ロセ・ラヴィニアとクトウグアだ。

頭脳や標準など、細かい部分を担うラヴィニア。機体操作と炎を操れる力でアタッカーを担うクトウグア。彼女等のコンビは相性が良い。

巨大な力を持っているが、クトウグアは自発的に行動はしない。が、その力の矛先を示し、誘導してくれるラヴィニアがいれば、彼女の戦闘力は飛躍的に上昇する。

目の前で巨大な虫が爆散する様は、何度見ても不愉快だ。そもそも、虫が気持ち悪いし、殺さない捕獲を優先しようとしていたのだ。

だと言うのに、目にも鮮やかな紅蓮の髪を掻き揚げながら、クトウグアは興味なさそうに呟く。

「虫、食べられないし」

「いやいやいやいや！ 何でそんな方向に！？ 食べるわけないじゃないですか気色悪い事言わないでください！」

「虫だつて生きてる。気持ち悪いは酷い」

「急に正論をつ！？ た、確かにそうですね……」

「でも、気持ちは分かる」

「貴女だつて気持ち悪いんじゃないの！ いいから、次は……」

「うん。ファイアーホイールを使って、視覚出来ないくらい派手に焼く」

「結局焼くの！？ それを止めるって言ってるんですよ！」

喧々囂々と続く会話に、突如入り込むノイズ。バーンからの通信だ。

「こちら、ウイステイリア・メーデン藤乙女スカーレット・オリオン」

「こちら、『紅射手』。メラフリノスの反応はありましたかね？」

「無しよ。……今日は戻って良いわ。特務終了」

『特務終了、了解。まあ、ゆっくり休んでください』

それはこのところ、ロクな休憩も取らず、ぶっ続けで哉徒を捜索していたラヴィニアへの勧告だろう。休まなければ、探す事すら覚

束無いぞ、と。

滲んでいる疲労も自覚しているのだが、その疲労に精神的なものが混じりだしていたらしい。

普段のラヴィニアならば、休憩は絶対に取る。

連日連夜、ぶっ続けで勉強に励む人物。適度な休憩を取り、要所要所に集中して勉強する人物。

散漫な注意力ではストレスも溜まる前者と違って、後者は快適且つ前者をも上回る知識を身につける事が出来るのだ。これは実証されているし、ラヴィニアの頭脳もこうやって培われてきたと言つ経験論でもある。

だが、正気ではなくなっていたのだ。普段ならば……哉徒を失ったとしても、彼が自分の身を案じてくれている事なんて、容易に想像できてしまうのに。だから、休憩をしてしまうのに。

この違和感は、何なのだ？

「ふう……」

ラヴィニアは、ただ哉徒を思う。

炯々とし、全てに絶望した濁る瞳。最初は憐れみからだったのに、どンドン彼に惹かれていつて。

お父様の操り人形だった私の為を開放してくれる為に、知らない場所おで総司令官おを怒鳴りつけてたあの勇氣。

深手を負ってまで、暗殺者から身を守ってくれたあの心。

そして、疲れたように笑い、頭を撫でてくれた……あの、優しさ。

今は全てが遠く、まるで喪失感にも似た感情を覚えていた。

「？ どうしたの、ラヴィ」

「いえ。……貴女、異世界に行けないのかしら？」

もう投げやりな質問だった。まさに、自暴自棄寸前だったとも言える。

が、炎の化身の返答は、至極あっさりとして、

「いけるよ。この機体ごと」

何でお前、最初から言わないんだよと丸一日かけて説教したい気分

に、ラヴェニアはなったのだった。

## 八章 それぞれの動向（後書き）

賞用に、少し別の作品を書いています。

魔法のランプ物がスチームパンク浪漫譚か、どちらにするか……。

九章 想い 〳前編〳 (前書き)

戦闘なし。

## 九章 想い く前編

フランの案内で、哉徒 いや、ジークリンデは街を見て回っていた。そして、その平和さに内心で苛立っている。歩きつつ、どこもかしこも賑わいを見せる街並み。

展望台に場所を移して、フランは人気の無いそこで手を大きく広げて見せた。

「どうだ？ 素晴らしいだろう」

言葉を返さず、しかしどうでも良かったのかフランは歩いて行く。望遠レンズを覗き込んで、ただ風景を見つめているようだった。

ジークリンデもそうする。解像度がやたら高く、視線を感知するのか、見たいところへと勝手に視界が変わる。

道を往く人はみんなが普通の顔をしていた。自分の生活が、ある程度自分で実現可能な平和。突発的な脅威に見舞われること無く、特に不幸そうな人物も見えない。

満ち足りて、それぞれの生活だけ案じていれば良くて。戦争という物に 真実に、目を向けていなくて。

それが、信じられなくて。

「田舎の方に住んでいたのだろうか？ こう言う都会は新鮮に映るのだろうか」

「ええ」

気の無い返事を返しながら、ジークリンデは嫌にでクールにならざるを得なくなつた。それだけ、苛立っていると言う事だ。

人間、怒れば激昂する者、無口になる者、皮肉を言う者、怒る自分に嫌気が差して逃げ出す者。様々がいる。それをザックリ分類するならば、頭が真っ白になって感情が爆発するタイプと、ボルテージが上がる度に頭が異様に冷えるタイプの二種だろう。哉徒は後者だった。

「目の前で人を銃撃したくなる程度には平和ですね」

「……何が言いたいんだ？」

「白雉ですか。クソ下らない事を言わせないで下さいよ、危機感が足りないんです」

言ってしまったか。まあいい、どうせ三日間だけだ。仮初的人格だからこそ、出来ることがある。もう、吐き出してしまえ。

フランはどこか懐かしむように目を閉じ、口元を皮肉気に歪めて見せた。

「どこのバカ男も言ってたな。私達だけが汚ればいい、こんな現実なんて知らないほうがいいんだ」

「あーあー、クソ喰らえですねその理念。貴女は何の為に軍へ志願したのですか？」

「軍人の家系だったからな。守りたいと願って、私はここにいる」

「そんなのは詭弁ですね。見知らぬ人を守りたいなんて、貴女は聖人ですか？ 君子様ですか？ ああ、見知らぬ人をも守って自己満足に浸りたいと？」

「違う。私が、私である為だ！ 他の理由は無い！」

「へえー」

その必死そうな顔、覚えがある。

大切な何かに裏切られ、都合のいい役割にしがみ付いている。 継  
つている顔だ。良く知っている、それはちょっと前の自分だ。かなと

だから、と言うべきなのか。男女のそれだと、気づいてしまう。哉  
徒は自分で思っているよりも、女性的であるから 知らずに、乙な  
女の気持ちかまを汲んでしまう。

「 フラれて、仕事に専念しようとするOLみたいですよ。すっごく見つとも無いです」

「っ！？」

目を見開き、銃でも抜かんばかりの殺気がジークリンデに叩きつけられる。

フランも怒っていた。同時に、酷く惑っている。彼女はまるで時雨の分身のようだ。

しかも、ようやく忘れられそうになった頃に　古傷を抉ってくる。  
的確に、自分の矜持が　逃避だと、突きつけられて。  
期待なんか、していなかったはずなのに。あの夜、気持ちに区切り  
をつけたのに。

「何が、分かると言うんだ……！」  
気づけば、頭が真っ白になっていて。

「ずっと、ずっとそうだったんだ！　軍人になる為に、武術に射撃、  
基礎教養に司令官育成の特別カリキュラム！　全て……全て、こな  
して来たんだ！」

吐露していた。これもまた、第三者だから無意識に口を滑らせたに  
他ならない。

「守れと言われた！　先祖はそうだったからと……！　私の恋人は  
もういないから、全てを救えと……！　人を……アルテミス如きが  
好きになるなど……！」

そうなる運命に逆らえないから。

「私が好きになったら……結ばれてしまったら、その人を殺してし  
まう！　この手で、殺めてしまおう！　だから、私は全てを守ること  
に一生を費やすと決めた！」

ノストラダムス  
歴史は繰り返されると、彼女が言ったから。

……分かって堪えるものか。

恋愛がしたい、好きなものを着たい、美味しいものを食べに行きた  
い、皆と笑っていたい。

ダメなのだ、好きになるから。そしたら、全部　自分で、壊  
してしまう。

が、ジークリンデの視線は　冷たい。全て見越した上で、だから  
何だと言う視線を向けている。

事実、ジークリンデも腹が立っていた。

彼女には好きな人が、どうやらいるらしい。

アルテミスはオリオンと知らず、彼を撃ち抜いてしまおう。神話の中  
でも割とメジャーなそれは、良く知っていた。悲恋やら儂い物は、

幼い頃はロマンチックに感じ、時が経つと共感して人気が出るジャンルだ。どちらかと言えば後者で、『ジジイかお前は』と時雨に呆れられたのは良く覚えている。

悲劇には、多少なりと経験がある。しかも主演で、だ。本当に堪らない。

けれど……彼女のそれは、逃げだ。

「負け犬ですね。『かもしれない』で逃げ出しますか？ 誰かに強くそう言われたくらいで止められるような賢い生物に、人間ってものは出来ていないんですよ。現に、貴女の頬には感情が伝わっている」

「え、あ……うそ、だ……！？」

大粒の涙。それは押し殺していた思いが、言葉に出来ない何かを為して零れているようで。

「まだ失ってすらない貴女が、恐いと泣くんですか？ しちゃいけないと、他人の言葉をバカ正直に鵜呑みにするだけの下らない子供染みた概念で逃げておいて、拳句は泣くんですか。大層ご立派な教育なんですねぇ、その年で心まで処女ですか。終わってるんですよ！」

「う、うう……！」

「あなたの思い人について、私は何か知っているかもしれませんが。知りたければ、今夜聞きましよう。部屋に来てくださいね。……：そうそう、貴女の考えですがね」

最後に、我ながら最悪な言葉を投げ掛ける。

「 軍人に向いてないですよ、破滅的に」

彼女のそれは軍人ではない 騎士道のそれだ。

それこそ、本当に平和ならば……彼女のよう軍人がトップに立つのが望ましい。

が、今は戦争だ。

ラヴィニアにもいえるが、人を駒にするような司令官で丁度いい。

軍人なんて所詮、『高価な備品』でしかないのだから。

展望台のエレベーターで一階へと降りる。

まあ……彼女の思い人が誰なのか。想像はつく。

「あのバカ……女泣かせてんじゃねえよ」

虚空にその呟きは吸い込まれ、到着音でかき消される。

自動ドアが開いて

「手を挙げるー」

実にやる気の無い声と共に、一つの銃口が向けられる。

小柄な少女　ブリーフィングルームで自己紹介もされた。確か、  
アリサ・ブリュンヒルデ。

にこやかな表情を即座に作り、右腕を後ろに隠した。

「おやおや、何ですか？　いきなり物々しいですねえ」

「恍けても無駄。というより、お前はもう死んでるからJK」

何だ、このネットスラング。こっちにもそう言う掲示板とかがあ  
るのだろうか。

そんなのはまあ、どうでもよくて。さっさと突破し、この少女を拘  
束する。話はそれからだ。

隠した右手を勢い良く挙げる。視線が思いっきりそちらにいったの  
で、勝利を確信する。素人が。相手を見るときは全体として捉え、  
過度に集中してはいけない。ここの軍人は基礎教練からやり直しを  
喰らうレベルだろう。

素早く後ろに回りこんで腕と足を取り、地面に叩きつけ銃を奪いな  
がら、そう思った。

「……早い。痛い。酷い」

「いきなり銃を向けてくる方が酷いですよ」

「男の癖に、酷い。女の子を組み敷くなんて」

「それこそ軍人なら性差なんて」

ん？

「お、男じゃないですよ！　この私が？　ナイスボディでフェロモ  
ン出しまくりなの私か！？」

言つてて死にたくなるが、カモフラージュだ。仕方が無い。

「……モッコリが当たってる」

「え、嘘おツ!？」

「……………」

「あ」

バレた。

小洒落たカフェで、アリサと向き合い、ジークリンデ いや、哉徒はコーヒーを飲んでいた。今は変装も解いて、素の状態で向き合っている。

話を聞きたいとアリサが言い、その代わりに女装は黙っていてくれるそう。それはもう望むべき理想な展開と相成ったワケで、ここにいる。

運ばれてきたホットミルクに口を付けているアリサに、こちらから話しかけてみた。

「どうして、男だつて分かったんだい？」

正直、自分で見ても女としか見えなかったのだが。

少し考えて、アリサは眠そうな瞳をこちらへと向けた。

「気配が、男だったから。それに、男らしい気もしたし……………って、わわ」

感動のあまりに、涙が瞳に浮かぶ。

彼女の白い手を握り、ぶんぶんと上下に動かした。

「ありがとう……………! 気づいてくれて、本当にありがとう! 嬉しいって言うか最高って言うかももう何だよ今日はお兄さんがここ奢っちゃうよ的なノリが今なら実現可能で快適無敵ってな感じだよ!」

「そ、そう……………意味わかんない」

面喰ったようにそう呟きながら、アリサは頬を紅くして目を逸らした。何故だ。

手を離して、コーヒーを一口。うん、感動した後は特に美味しく感じる。

「で、何で女装してたの? 趣味?」

「断じて趣味じゃないッ！」

店の中に轟く叫び。それは魂からの否定であり、肯定を　是と言  
う概念を今この時だけは絶対に許してはなるものかと、決意を秘め  
た言葉でもある。

要は滅茶苦茶力強い否定に、アリサは圧され、小さく頷いた。

「なら、なんで？」

「俺は異国の人間に見えるらしい。その領土で戦うなら、その領土  
にあった扮装をするのが常。で、女だと男受けは良いし、女ならす  
ぐに去るから差し障りなく仲良く出来るって寸法」

「全然そう見えない。異国の人って、良く見なきゃ分からないし。  
普通の男の娘」

「……イントネーションの違いには触れないでよくよ」  
「賢明」

その小奇麗な顔に拳でもぶち込んでやりたいが、自粛する。

呼気荒く、溜息を吐いてそれを整えてから、問い直す。

「んで、それだけか？」

「今からが本番。……ウチの艦長、虐めた」

アリサの瞳が細くなる。どうやら怒っているらしいが、いかんせん、  
殺気がないので滑稽だ。思わず苦笑してしまう。

「甘い観念で遊び半分には戦争やってるあんたらが信じられなくて、  
八つ当たりしちゃったかもね」

「……謝罪、なし？」

「何で？ 八つ当たりとは言え、彼女がただの臆病な少女だった事  
は事実。そんなことをしていたら、本当に守ろうとしたものを全部  
死なせてしまう」

「な、なんだってー」

「君もまたそんなノリなんだね……」

あのバカ面を思い出すから、止めてほしいのだが。

「ともあれ、バカな話だよ。誰かに言われたくらいで想いを諦める。  
そんな奴が、人を好きになるなんてちゃんちゃら可笑しい」

「……横から口を出すだけなら、簡単。あの人には、複雑な事情がある」

「誰でもあるよ、事情なんか。オレがムカつくのはね、それを疎みつつも縊っているところだ。悲劇のヒロイン気取って、何もかも事情という逃げで正当化している。自分のなり損ないを見てるみたいでね、反吐が出るよ」

「口だけなら何とでもいえる」

毅然とした口調に、何と言えいいのか迷ったが、ありのままを話すことにした。

「……両親は目の前で肉塊になった。トラックの正面衝突に挟まれてね、眼球が顔面にぶつかったよ」

「え？」

「引き取られた先の親も事故で死に、オレは忌み子として疎ましがられた。何をするにも一人で、石を投げられて。いい事しても、誰も褒めてくれない。だから、最低限の事を自分でするだけの生活だった」

純然たる過去。それを、彼女に伝えて行く。

悲劇自慢をしたいわけではないが、全てを明かさないと……言葉に説得力が足りないのだ。

「でもね、褒めてくれるんだ。同じアパートに暮らしてる黒髪の女の子だけが、オレに話しかけてくれた。眉を顰める人々の中で、あの人だけは……オレを見てくれた」

嬉しそうに、優しい目で語る哉徒は、どこか悟っていて。

「程なく、恋人になったよ。貧しかったけど、満たされてた。泥のような人生に、暖かな光を彼女はくれたんだ。抱きしめてくれて、好きだって言ってくれて。無条件の愛を、オレは知らなかったから」

「運が良いですね」

「その恋人も、死んだよ。ガス爆発でね」

「あ……」

「……大切なものは取りこぼしたくない。でも、零れてしまう。な

らいつそ、関わらなければいいんじゃないかって……」  
そう、同じなのだ。

大切だから、近づけない。失いたくないから。失う辛さを、知っているから。

「でもね、そんなオレに……もう一度、光をくれた人がいるんだ」  
「え……」

「口うるさくて、チビで、年だけは食ってて、でも可愛くて、優しい人。志向性を失ったオレを、導いてくれた人。そして、守りたいと……心から願った人だよ。その人のためなら、影で何だってしたさ。人殺しも、実験体にも、何でも……ね。言わないけど、感謝してる」

すっかり冷めたコーヒーを啜り、哉徒は さびしそうに笑った。

「……だから、彼女が羨ましかったんだよ。失う恐さを知らない、それこそ……処女のような心が、ね」

アリサは 俯いていた。

温いミルクに、水滴が落ちてている。カップを持つ手が震え、もう……何も見えないでいた。

彼女には、人一倍強い感応がある。人の感情が良く分かり、最悪は考えている事や回想している事が頭に流れ込んでくるのだ。

電子世界はそんな彼女が気兼ねなく行ける、唯一の逃げ場だった。

そこには思念も何もないし、落ち着いていられる。時雨も読み取れなかったので、おなじく取っ付き易かったのだ。いなくなつて、少しさびしい。

でも、思いは恐いから。

昔……優秀な成績を確保していた自分に対する、謂れのない誹謗中傷。それを聞くのが、恐かったのだ。今でも、街に行くときは遮音のヘッドホンをおかさない。

けれども彼女は今、それをバカだと思った。

「こんなの、何でもない。これを苦勞？ ふざけるな、こんなもの……彼の前では、瑣末にもならない事だ。」

永劫にさまよい続ける黒い空間。救い出してくれたのに、親友にそれを奪われて……誰にも、頼れない。誰も、信用できる人がいない。ずっと、一人ぼっち。

心でなっている彼に、人は冷たい。もう死のうとする気力さえ奪われてしまう、そんな絶望の世界。

「……オレはね、アリサさん。オレが関わった人に、幸せになつてほしいと願っているんだ。だから、有象無象はどうでもいい。彼女の為に怒ったり、オレの為に泣いてくれる君は、きつと優しい人だから。幸せになつて欲しいんだ。勿論……フランさんも、ね」

「ご、めん、な……さい……！」

しゃくりを堪える彼女を、哉徒は優しく撫でる。

愛しそつに、ただ……泣き止むまで、ずっと。

## 九章 想い 後編

人を動かすエネルギーと言うものは、何も食事だけではない。

確かに、食事は大事だ。体の調子を整え、存命する気力を生み出すには、物を食べなければならぬだろう。

けれども、感情と言うものが、人を動かすエネルギーとしては優秀だ。

限界が差し迫った時。何が物を言うかと考えた時、真つ先に挙がるのが信念。信念を貫き通すべく、感情が強く働き、糧となる。

心臓に銃弾を受けた宗教者が、血反吐を地面へと流しつつ、十数歩だけだが歩いて見せたという。これは肉体的観念での限界をとうに超えた行動であり、ハッキリ言えば異常だ。

そもそも、物を食べようと思わなければ食指すら動かない。人を掌握するには、変幻自在に移ろう感情を制しなければならぬ。

その術を、時雨は理解していた。

他人を使う時、尤もらしい言葉と甘い言葉を。責任が自分へと向かうのを防ぐための布石を敷きつつ、決して自分の地位を貶めない。

そんな言葉を、今の今まで紡ぎ続けてきた。

が、違和感がある。

それは、この世界に来てから。

何もかもが、何か別の方向に誘導されているような。そんな気がしてやまなかった。

宛がわれた個人ラボ。ハイスペックPCと座椅子、冷蔵庫があるだけの部屋で、時雨は思考する。

そもそも、高宮時雨はどのような人間だったか。

客観的に見れば、排他的だった。日本にいた頃は、それこそ哉徒くらいしか親しい人物がおらず、かといって敵もいない。係わりがなかったのだ。そもそも、関わろうとしなかったと言っている。

が、現在置かれている状況を見れば、その人物は凄まじくブレてい

る。

人を信用し、拳句、人の為に行動しようとしていたのだ。利用する側の人間だったのが、いつの間にか 所謂、主人公的な役割を果たそうとしている。

主役にはパターンがあり、本来自分は、それを逆行するような生活を送っていた。

熱血系主人公のパターンは、ヒロインと衝撃的な出会いを果たし、降りかかる運命を打ち破っていく。

頭脳系主人公のパターンは、仲間と協力、ないし利用し、ヒロインを守る為に運命と対峙する。

天才系主人公のパターンは、組織に属している事が大半で、かつての仲間と協力または敵対して、同じ天才か天才になった者を屈服させる。

凡才系主人公のパターンは、魅力的なヒロインや仲間の危機を救うべく、天に与えられた力とか何とかいって、その超常的な力に振り回される。

分かっているのは、熱血系、頭脳系、天才系に、今自分が片足を突っ込んでいるという事。

本来なら自分は、サブキャラにいて魅力を発揮する系統だ。何でも出来て、主役に手を貸す最高の相棒。物語の幅を広げる、見識深いトリックスター。

所謂、永遠の二番手。人間的な迷いなんてもう捨て去った自分は、そのポジションが似合いなのだ。

主役は 哉徒。人間らしく惑い、悩んでいる悲劇のヒーロー。天性の強さを持ち、かつての恋人を失ったという過去もある。顔立ちも良く、主人公には最高の逸材だ。十人が十人、彼のような主人公を描くだろう。

「……何だ？」

シユバルツガルド。そこにいる彼女の名前を、時雨は知っている。ただの勘だが、これほど頼りになるリーダーは存在しない。推理小

説でも何でも、『こいつが犯人だ』、『こいつは殺される』なんて当たり前だったし、今までの人生経験でも、『こいつはどうしようもない』、『あいつは人を不幸にする』とか、嫌になるくらいに当たっていた。あまりにも御都合な現実を、今まで何の疑いもなく使っていたのだろう。

けれども、事実を認めたメール一通。それが、送れない。

「…………へえ」

指が、動かないのだ。

脳が警鐘を鳴らしている。止める、それを送るな。取り返しのつかないことになるぞ、と。

「誰だよ、テメエツ!!!」

こめかみに拳銃の銃口を押し当て、容赦なくトリガーを引く。

奇跡的に、銃からは弾が出なかった。込めていた弾が、動作不良で撃ち出されない。

舌を打ち、今度は鞘付きのナイフを抜き放つ。それは、何故か根元から折れていた。まるで、自殺なぞ、陳腐な真似はさせやしないよと、囁かれるように。

「…………あー、そうかよ。だからどうした」

今度は意思諸共をねじ伏せて、送信ボタンに手を掛ける。それだけで、凄まじいまでの倦怠感が身を包んだが、確かにそれを押せた。

ほくそえみながら画面を見守ると、そこには通信エラーの文字。

そして、受信するメール。

差出人のアドレスはない。ある種、予感めいたものを覚えつつ、その文面を開いた。

件名はない。無骨な、本文だけの文章。

『君は、私の玩具だ』

ドクン、と何か血液が沸騰するような。

『この戦いは…………』

続きの文面を見た瞬間 携帯電話を、思いつきりぶん殴っていた。衝動のままに殴り、手を傷めるかとも思ったが、それすらもない。

派手に火花が散ったというのに、火傷さえ。

そもそも、俺は怪我なんてしたか？

何で、演じる事に長けているんだ？

俺は　本当に、主役じゃないのか？

「……………あー。あー。あー。そう言う事か」

室内に入ってきた少女へと、時雨は銃口を向ける。

「案内してもらっただけ。お前の　姉さんのこと」

その笑みは諧謔的な表面とは裏腹に、破裂しそうなほどの怒りを内包していた。

金髪のウィッグを付け直した哉徒は、来訪者と対峙していた。

と言うのも、かなり面倒な話であり、語りたくもないものでしかない。こんなの、あいつが見たら抱腹絶倒どころか腹筋が物質崩壊するだろう珍事に他ならないのだから。

つまり、なんだ。傍から見れば、八哉徒ではなくジークリンデという人間で、その女性はとても可愛く綺麗だと言う。

三日間しかない。その限定されたシチュエーションに浮き足立ち、間違いを犯す人間が後を立たないのである。

ハッキリ言えば、告白ラッシュ。哉徒目線からすれば、男対男なので、正直気色悪い。

「　一目惚れです！　オレと、ひと時のアヴァンチュールを過ごしませんか！」

「あははー、お断りします。正直、顔がまず好みのタイプじゃないんですよねー」

「お、俺は！　俺はどうだ！　この中でもイケメンだし、頭もいいんだぜ！」

「あらら、その程度でイケメンですかあ。可哀想に、鏡をもう一度良く見直してくださいね？」

「ぼ、僕……」

「あー、ウジウジ君嫌いなんですよ。つか、邪魔ですよこの野郎！  
これ以上は　ッ！」

時雨に持たされたブロードソードを抜き放ち、備品の鋼鉄デスクを真つ二つにしてみせる。日本刀だと、バレル可能性があるのだそうだ。

とまあ、人外染みたパフォーマンスは効果的だったらしく、全員が室内から消え去った。ああ、悪夢だ。

「……で、別に斬りはしませんよ」  
扉の前に佇む気配。それは、彼女のものだ。

バツの悪そうな顔で、視線を逸らしながら入室するフラン。何と云うか、毅然としてた人物がしおらしくなっていると、どうにもやり難い。

「笑え、とは私が言うなって感じですけどね。もう少し、和やかな感じでーっ」

「……あ、ああ」

とは言え難しいか。己の生き方に、真つ向から反抗されて叩き潰されたのだ。正気ではいられなくなるし、今彼女には様々な思惑が脳裏に散っているはずだ。迂闊な事は言わない方がいい。

お湯が沸いたので、紅茶でも入れる。そんな瀟洒な趣味はないのだが、ラヴィニアに付き合わされて手習い程度の腕なら持っていた。ほんのりとバニラが香る琥珀色の液体を蒸らし、ティーカップがなかったので手近なマグに注ぐ。

「どうぞ」

「む……すまない」

差し出されたそれを、フランは特に何も考えず受け取った。

そして、ロクに頭が回らない状態で一口飲み　目を見張る。甘いのだ。甘く、微かに温い。

紅茶はいい具合だ。香りといい、円やかな舌触りといい、総じてそこそこ飲めるレベル。けれども、甘く温いのは、何故だろう。答えは、彼女の表情ですぐ分かる。そう言う訓練をしてきたのだ、分からないはずがない。

気遣ってくれている。嗚呼、染みるのはそう言う事で。彼女は本質的に優しいのだと、この時にフランは悟っていた。

「……………」ありがとう

言うと、目を丸くし、ジークリンデは柔らかく微笑んだ。

「知りたいんでしょ……………」時雨の事

「なあっ!？」

危うく、マグを取りこぼしかけた。何で知っているんだ、この女。そんな反応が愛らしく、哉徒は苦笑する。

「あのねえ…………」。アイツ追っかけてると、泣きますよ? やる事為す事突発的で、しかも人嚇けて大笑いしてるヤツ。普段は気味が悪いほど聡いくせに、その手のことは朴念仁…………いや、あれは故意なのかな? ってな感じで、性格最悪です

「……………」詳しいな。も、もしかして……………」

「はい?」

「恋人、なのか?」

「あはっ」

哉徒の手中にあった陶器のマグが、一瞬にして握りつぶされる。笑みを あまりにも凄惨な笑みを浮かべ、ニッコリと続けた。

「あれと恋人なんて真っ平ごめんって言うか腐れ縁って言うか最大の理由がいえないのがもどかしいと言うか……………」まあ、腐れ縁なんですよ。それ以上の邪推は、止めてくださいね

「そ、そうか。分かった」

鬼気迫る雰囲気、フランも圧されたか、頷いたようだ。

座りなおし、哉徒は改めて訊いてみる。

「で?」

「……………」そう、だな。会いたいよ。私は、あいつを憎からず思ってい

る。馬鹿げた願いを持って、彼と一緒にいた時は、時よ止まれ……  
なんて、思っていた」

悔しいが、止められない。

自分なんかでは、役不足だと自覚している。身を引こうともした。けれども、想いは溢れるのだ。どうしようもなく、彼に引き寄せられている。彼が好きだと、体が叫んでいる。

「私は、彼に追いつけない。だったら、先回りすればいい。そして……ぶん殴ってやるのさ」

そう悪戯っぽく笑ったフランは、改めて哉徒を見た。真っ直ぐな、良い瞳で。

「……あいつは今、どこにいる？」

刹那

『エマーゼンシー！』『カルブリヌス』使用スイッチが押されたなう。各住人は速やかに非難なう。軍人はブリッジに！』

紅い警告灯が輝き、それと共に響くサイレン。

フランは馬鹿など一瞬首を振った。魔物が出るペースではない。グランディアが攻めてくる兆候もなかった。では、一体なんだ！立ち上がり、走るフランを見送る哉徒。

「……何だ？」

ざわつく胸を押さえ、哉徒は格納庫へと走る。

その嫌な予感が、現実になるものとも知らずに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6678n/>

---

機械録 ~ The Legend of Factors ~

2011年10月13日05時50分発行